

一夏の友人は常識人の夢を見る

hggj

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二人目の男性操縦者になってしまった主人公が、一夏君と仲良くスクールライフを送る話

注意事項

原作未読

原作乖離

キャラ崩壊

誤字脱字

オリジナル設定アリ

目次

プロローグ

1

第一話

3

第二話

11

第三話

16

第四話

25

第五話

33

第六話

44

第七話

53

第八話

61

第九話

71

第十話

77

第十一話

85

第十二話

94

第十三話

101

第十四話

111

第十五話

119

第十六話

129

第十七話

142

第十八話

159

第十九話

171

第二十話

181

第二十一話

191

第二十二話

199

第二十三話

208

第二十四話	217
第二十五話	225
第二十六話	233
第二十七話	243
第二十八話	250
第二十九話	259
第三十話	272
第三十一話	279
第三十二話	287
第三十三話	294
第三十四話	302
第三十五話	310
第三十六話	322
第三十七話	335
第三十八話	348
第三十九話	356
第四十話	368
第四十一話	378

プロローグ

その日、世界中を震撼させるニュースが極東の島国から飛び出して行き、各国の新聞の一面を飾った。

このニュースに世界中の女性達が驚き、世界中の男性達が震え、日本政府が頭を抱える事態となってしまった。

世界初の男性IS操縦者、織斑一夏がその存在を世に顕した事で、一度180度引つ繰り返った世界は、再び掻き回されて1度ほど戻ったのだ。

その後、彼の意志を完全に無視して進路が決定され、行き先のIS学園が上へ下への大騒ぎと相成って、要約の事で落ち着きを取り戻し掛けた頃、もう一人の男性適合者が現れると、学園関係者達は再び狂乱の中へと叩き落とされ、漸く終わった追加の受け入れ準備や諸々の手続きが終わったのが入学式前日の事だった。

この二人目の男性適合者出現の報は、どう言う分けか、その扱いのそれは一夏少年の時とは打って変わって、世間では全く騒がれはせず、その報道の様子にある一人の教師は違和感を覚える。

奇しくもその二人目に男子生徒の副担任となった教師は後の世で、当時の事を振り返りつつ語った。

曰く彼は、ありとあらゆる意味で一人目に男子生徒の織斑一夏少年を凌駕し、誰よりも常識的で、学園に置いては誰よりも異常な存在だったと。

不甲斐ない自己紹介を満足げにおえた織斑一夏は、自信満々に着席しようとするが、それは突如姿を現した姉によって阻まれてしまった。

「お前は自己紹介も満足にできんのか」

この言葉と共に、新学期早々の教室で織斑一夏少年の頭が姉の手に持つファイルによって叩かれたその時、先程まで自身にそそがれてい

た全員の視線が注がれている方に、痛みに呻きながら見た。

「ち、千冬ねえ!？」

「織斑先生だ馬鹿者め」

本日二度目の打撃を受けた一夏が机に伏して呻くのを尻目に、騒ぎ出す生徒を静まらせた織斑千冬が話し始めた。

「まず最初に、お前達に伝える事がある」

そう前置きした織斑千冬は、猶も頭を抑えている弟の方を一瞥すると続く言葉を吐き出した。

「このクラスにもう一人、追加の生徒が入ることになった。それも男子生徒だ」

千冬の言葉に教室内が色めき立ち、生徒達の私語で騒がしくなる。

「静かにしろ馬鹿者ども」

そう言った織斑千冬は、猶も騒ぎ出しそうな生徒に虎の様な視線でにらみ付けて生徒達を静まらせると、今度は自身の入ってきた教室のドアの方に視線を移して言った。

「入ってこい」

シンプルな千冬の一言の後、教室内の全員の視線が扉に注がれると、タツプリと間を置いてから、ゆっくりと扉がスライドして開け放たれた。

奇妙な緊張感が走り、一夏が喉の渇きのような物を感じる中、開け放たれた扉の向こうから一人の男が入ってきて教室を見回しながら言った。

「デュフフフｗｗｗｗ皆様ｗｗｗｗ宜しくで御座るｗｗｗｗ」

その瞬間、教室の空気が凍り付き、ただ一人、織斑少年の表情だけが明るくなったのは言うまでも無い事だった。

第一話

それは人というにはあまりにも醜すぎた。
大きく。

分厚く。

重く。

そして脂ぎりすぎた。

それはまさに肉塊だった。

「どうもwww拙者www二人目の男性IS操縦者(笑)になったで御座るwww」

織斑一夏は、友人に教えられていたコピペの改変を頭に浮かべながら、草を生やす男の言葉に耳を傾ける。

低いのか高いのか判断に苦しむ声で話し、自分と同じデザインの箆の、今にも弾け飛びそうな制服に身を包んだ男は汗の滲んだバンドナを頭に巻いて冷たい視線に晒され続けていた。

「おっふwww予想通りの冷たい視線wwwありがとうございますwww」

「え〜・・・」

童顔の副担任の戸惑った声に反応したのか、一人の女生徒が右手を挙手して発言した。

「あ〜・・・名前は、何ですか?」

「おっふwww拙者とした事が名乗るのを忘れていたで御座るwww」

男は尚も草を生やしながら自身が自己紹介を終えていない事に気が付いて口を開いた。

「お控えなすつて」

いきなり草を生やすのを止めたかと思えば、男は中腰になって左手を腰に当て、右手の平を見える様子上に向けながら差し出して仁義を切り始めた。

「手前、生まれも育ちも東北が岩手県南、北上川が辺で産湯を浸かり、故郷の温もりに育てられて十五年、数奇な運命に導かれながら流れ流

れて、この地に参上仕り候。姓は小田、名は宅。人呼んでオタクと申します」

再び空気が凍り付いた。

今の盛岡の気温よりも低いのでは無いかと思われるほどの雰囲気の中、小田宅は教室を見回して口を開いた。

「エターナルwwwフォーwwwブリザードwww」

「お前が死ぬ!!」

「ザオリクツ!?!」

小田宅、省略してオタクの言葉の直ぐ後、織斑千冬の出席簿が振られて、オタクの後頭部を捉えた。

「うぐおおお・・・!」

余りの痛みのためか、草を生やす余裕すら無く蹲って後頭部を抑えるオタクに、四十余りの冷たい視線と、ただ一つの同情の視線が向けられた。

「・・・と言うわけだ。このクラスには二人の男子生徒が編入される事になった」

この後、千冬の強引なまとめでHRが締めくくられると、一夏は蹲るオタクの下へと足を向けた。

「あゝ・・・大丈夫か?」

「デュフフwwwありがとうで御座るwww」

手を差し伸べる一夏に礼を言いながら、立ち上がるオタクは、並んでみると随分大きな身体をしており、背丈だけでも見上げる様な長身だった。

ただ、横幅も一夏の倍はあろうかと言うもので、厚みに至っては三倍はありそうな程だ。

一体体重は幾らほどあるのだろうか、等と疑問に思いつつ、一夏は唯一の同性の生徒に向かって言葉を続ける。

「アニメとか好きなのか?」

明らかに偏見だった。

ここに来てから、オタクがアニメに関する発言はしてはいなかったのだが、思わず尋ねた言葉は明らかかな偏見と言える物になってしまっ

た。

言ってみてから、一夏は己の言葉の至らなさを恥じるが、オタクは全く気にした風も無く答えた。

「デュフフwww勿の論で御座るよ織斑氏www」

明らかな偏見であった一夏の発言だが、同時に事実でもあったらしく、オタクは笑いながら一夏の言葉を肯定した。

「何だよその呼び方は」

「コレは失礼wwwお気に召しませんでしたかな？」

オタクの一夏に対する呼び方に、不満を覚えたのかと、心配になるオタクだが、その心配が杞憂であると直ぐに証される。

「俺の事は名前で呼んでくれ」

「・・・分かったで御座る。一夏氏www」

この短いやり取りの間、一夏はこの男の事が妙に気に入っていて、オタクと一緒にならばコレからの学園生活にも希望が持てると確信した。

一方のオタクの方は、今までに無いタイプの人種である一夏に対して少し困惑しつつも、悪い人間では無いと判断を下し、一夏と同じく友人関係を築く事が出来ると確かに思っていた。

「一夏」

そんな二人の間に割って入るように、ポニーテールの少女が現れて、一夏に声を掛けた。

「おお箒か」

「ちよつと来い」

目の前で青春的一幕の様な光景を見せられながら、オタクは少女に腕を引かれて行く一夏を見送り、それから自身の席を探して着席する。

周りのクラスメイト達の視線は、あからさまには向けられてはいない物の、時折、怪訝そうにオタクの方に幾人かの視線が向けられた。

そんな状況下に在るにも関わらず、オタクは一向に気にした様子無く、何処から取りだしたのか分からない、ライトノベルを取りだして読み耽った。

「もし、よろしくて？」

オタクがライトノベルを読み始めて、数分か十数分かが経過した頃、一人の女生徒がオタクに近づいて声を掛けた。

金髪の日本人離れした顔立ちをした少女は、気位の高そうな風にオタクに呼び掛けた。

「オッフｗｗｗｗ拙者にもフラグがｗｗｗｗ」

「フ、フラグ？・・・何を仰っているか分かりませんが・・・まあ、良いですわ。貴方、今のご自分の状況を理解しておいでして？」

聞き慣れない喋り方と言葉に面食らいながらも、金髪の少女はオタクに向けて続けて言葉を投げ掛けた。

しかし、オタクが少女の方を向く事は無く、尚も手元の文字列と行間に眼を走らせる。

その、自身を全く省みないオタクの態度に金髪の少女は強く怒りを感じて声を荒げてしまった。

「なんて無礼な方なんでしょう！この、わたくしが声を掛けて差し上げていると言うのに、顔を上げる事もしないなんて！」

何処か態とらしい様な言葉遣いでオタクを批難する声を上げる少女に、周りからの視線が集まり、それがやがてオタクに対しての不快感や嫌悪感を示した物に変わって行く。

その状況に気分を良くした少女は、更にオタクに言葉を続けた。

「全く、この国の殿方は礼儀という物がなっておりますわ！普通は人が声を掛けたなら応じると言うのが礼儀では御座いません事？」

そこまで言って、漸くオタクは本から眼を離して少女の方を向いた。

常人の数倍は脂肪の着いた脂ぎった顔を少女に向けると、オタクは開口一番に言った。

「今は拙者は読書をしているので御座るよｗｗｗｗテッサさんは、それも分からないので御座るか？ｗｗｗｗ」

相も変わらず、草を生やしながら応じたオタクの言葉は少女の神経を余計に逆撫でた。

「二体、何を仰っているのですか貴方は！それにわたくしはテッサな

どどと言う名前では御座いません！」

「と言われましてもwww拙者、貴女のお名前を存じ上げない物でww」

「まあ！わたくしの名前も知らないなんて、なんて残念な方なのでしょう！」

大仰に驚いた風にオタクに向かって言った少女は、それから続けて自身の名を名乗る。

「わたくしの名はセシリア・オルコットですわ。そう言えば貴方の様な方でも、お分かりになるでしょう？」

ドヤ顔の見本の様な表情で言ってみせる、セシリア・オルコットであったが、そんな事は知らんとオタクが言葉を返す。

「ぶつぶーwww自分の名前が常識みたいに言うなんてwww自尊心高過ぎワロタwww」

思わずと言った風に、オタクの言葉を聞いた教室内の幾人かが嘖き出すように笑いを堪え、至極尤もな正論を返されたセシリアは、実に理不尽にオタクに怒りを向けた。

「あ、貴方、これ程わたくしを虚仮にして、只で済むと思っておいでして?。」

「www」

「何がおかしいんですの！」

「可笑しくもなるで御座るwwwそんな、テンプレな台詞を恥ずかしげも無く言う人がいるなんてwww」

最早、今にも燃え上がるのでは無いかと言うほどに顔を赤くして怒りを顕わにするセシリアだったが、予鈴に反応して仕方ないと自身の席に戻って行った。

「ふう・・・ヤレヤレだぜwww」

そんな風にオタクが呟くと同時に、教室に一夏と少女が入ってきて席に着き、それに続いて織斑千冬が教壇に立った。

入学初日から授業があるらしく、オタクは分厚い辞典の様な教科書を取りだして授業を受ける姿勢を整えるが、暫くして一夏が教科書を持っておらず、間違つて捨ててしまった事を白状すると、姉による体

罰が一夏の身を襲う。

授業中は特にオタクも何かをするわけでも無く、大人しく授業を聞き、板書された事をノートに取りながら過ごしていたのだが、事は授業後のHRで起こってしまった。

「このクラスの代表を決めなければならん」

と織斑千冬が言うのと、ノリの良い幾人かの生徒が織斑一夏を推薦すると発言し、一夏の抗議に耳を貸さない姉に向かって、今度は一夏がオタクを推薦すると言いだした。

「ふひっwwwコレwはw予想外で御座るwww」

いきなりの事に草を生やすオタクが発言しようと挙手をした瞬間、窓際近くの席に座っていたセシリアから声が上がった。

「納得いきませんわ!」

この言葉の後、暫くセシリアによる不満の言葉が熟々と述べられ、それが日本に関する事にまで発展すると一夏が反論した。

「イギリスだって飯が不味い国、何年連続一位だよ!」

自分の先程までの発言を棚に上げる様に、一夏の発言に怒りを露わにして噛み付くセシリアは、遂に一夏に対して決闘を申し出るまでに発展してしまう。

当然の様に承諾する一夏であったのだが、その一夏に対する周囲の反応というのは、実に不愉快極まる物だった。

「織斑君、男が女に敵うはず無いじゃん」

「男と女が戦争したら男は三日も持たないって言うよ?」

「止めた方が良いよ、相手はイギリスの代表候補生だよ? 敵うはず無いじゃん」

この時、一夏は周囲の嘲笑に対して不満を覚えるよりも悲しみを覚え、何よりも情け無い気持ちで一杯だった。

自身の生まれた国を馬鹿にされていながら、女だからと言う理由だけでセシリアに味方するような事を言うクラスメイト達に、同国の人間として恥ずかしいとすら感じたのだ。

「実に滑稽で御座るなwww」

そんな中で、ただ一人の同性のオタクの言葉を聞いた一夏は、更に

悲しくなつて鬱無意つてしまった。

しかし、その次の瞬間、オタクが続けて発した言葉に顔を上げて喜んだ。

「このクラスには日本人は拙者と一夏氏しか居ないようで御座るなww」

「っ・・・小田」

それから、オタクは続けた。

「そもそもの話し、三日で男が負けるだの、男は女には勝てないだのと言うのは有り得ない話しですなww」

「なっ！」

「諸君等は兵器という物を良く理解していない上に、過小に評価しすぎで御座るよww」

オタクは笑つて言いながら立ち上がると、言葉を続ける。

「この中にMBTの正面装甲厚を知っている人はいるで御座るかなww」

オタクの発した言葉に、教室の女生徒達は互いに顔を見合わせて見るが、誰も答える事が出来ずにいる。

そんな、クラスメイト達をオタクは嘲笑つて言った。

「具体的な数字は公表されていないで御座るが、凡そ200mm以上、対徹甲弾RHA換算で600mm程度と言われているで御座るwwこの世に20cmの厚さの鉄板を両断出来る刃物が有るのなら見てみたい物で御座るなww」

そう言われれば、何も言い返せなくなったクラスメイト達を一瞥して、オタクは更に言葉を重ねた。

「まあwwそんな事は今は置いておくとして・・・祖国を馬鹿にされて言い返すどころか、声を上げた一夏氏を笑うなんて、到底、同国の生まれの者とは思えないで御座るなww流星の拙者も草も生えないで御座るww」

「・・・いや、生えてる生えてる」

「フヒヒwwサーセンww」

一夏の突っ込みに、頭を掻きながら笑つて返すと、オタクはセシリ

アの方を向いた。

「良くも拙者の生まれた国を馬鹿にしてくれたで御座るなwww拙者、割と怒っているで御座るwww」

やはり笑いながら言うオタクだが、その言葉には言い知れぬ迫力が有り、思わずセシリアは気圧される様に後退ってしまう。

「そこまでにしろ馬鹿者」

「フヒヒwwwサーセンwww」

ここに来て、漸く口を挟んだ千冬に返すと、顔面に出席簿を喰らってオタクが床に沈んだ。

そして、オタクがのたうち回っている内に話しが纏められてしまい、オタクと一夏とセシリアの三人で模擬戦を行い決着を付ける事になった。

「オツフwww何というテンプレ展開www」

第二話

「俺と小田は同じ部屋じゃないんだな」

「その様で御座るなwww」

真耶から部屋鍵を受け取った二人は、揃って夕食を取った後に寮の自室へと向かう。

一夏もオタクも同じ部屋になるものだとばかり思って居たのだが、用意された鍵には違う番号の書かれた札が付いており、一夏は不満そうな様子で鍵の札を見た。

「男二人なら同室にすれば良かったのにな」

「デュフフwww一夏氏はそんなに拙者と相部屋が良かったで御座るかwww薄い本が厚くなりそうで御座るwww」

「んっ？どう言う意味だ？」

「知らないなら気にしなくて良いで御座るwww」

そうして暫く廊下を歩いた後、互いの部屋の分岐点へと到達する。

「じゃあ、俺コッチだから」

「お休みで御座る一夏氏www」

この後、一夏は部屋で鉢合わせた幼馴染みと騒ぎを起こすのだが、そんな事は知らぬオタクは、用意されていた部屋の前へと来ると、扉を開けて中へと入って行った。

「ノックして、もしもーしwww」

一声掛けて中に入るオタクは、ベッドの側まで近寄ると、倒れ込む様にうつ伏せで寝転がった。

「・・・疲れた・・・」

打って変わった様な低い声で呟くオタクは、ノソリと状態を持ち上げると上着を脱いでベッドの側に放り投げる。

「なんでこんな事になったんだ・・・俺が何をしたって言うんだ・・・」

憂鬱そうにベッドの上で胡座を掻くオタクは、暫くの間、呆然と虚空を見詰め続けていたが、扉が開かれる音に気が付いて意識を変えた。

「デュフフwwwお先に入らせてもらっているで御座るよwww」

「えっ？・・・あ、はい・・・」

部屋に入って来たのは当然の如く女生徒で、小柄なメガネを掛けた少女だった。

「拙者、小田宅と言うで御座るwww宜しくで御座るwww」

「更識簪です」

軽い自己紹介を済ませると、オタクは脱ぎ捨てた上着を持ってベッドから立ち上がり、扉の方へと向かった。

「・・・」

無言のままの少女と擦れ違うオタクは、ぶつからない様に気を付けながら扉の前に立つと、振り向かずに少女に言って扉を開けた。

「拙者は少し出てくるで御座るから鍵は掛けておいて構わないで御座るwww」

そう言っつて部屋の外へ出ると、オタクは直ぐさま部屋から離れて暫く放浪し、人目に付かない階段下に潜り込んだ。

「・・・ここは地獄だ・・・」

その一言と共に横になつて上着を羽織ると、瞼を閉じたオタクは意識を手放して眠りに着いた。

「・・・頼むから夢で有つて欲しかった」

意識を取り戻すと同時に現実を否定する事から始めたオタクは、携帯の時刻表示から丁度良く朝食の時間である事を知り、階段下から這い出て背筋を伸ばした。

「何処かに水道は無いか・・・」

そう言っつて寮の外に出ると、発見した水道に近づいて水浴びを始めた。

「後で買い物に行かないとな・・・」

水の滴る髪をハンドタオルで拭い、朝食を取るために食堂へと足を向けた。

「よおーおはよう小田ー！」

道中で出会った一夏が元気良く挨拶をすると、オタクは鬱蒼とした気分を取り払って応じた。

「オッフwwおはようで御座るwww一夏氏www」

「小田の方の部屋はどうだ？相部屋の人はどんな感じだ？」

昨夜の幼馴染みとのやり取りの説明から今後の生活の不安を吐き出す一夏は、オタクの方の様子を尋ねた。

「デュフフフww拙者の相部屋のおにゃのこ様は可愛らしい大人しい方で御座ったwww」

「えく、いいなあく」

「一夏氏の方は大変のご様子www拙者、一夏氏の境遇に涙を禁じ得ませんぞwww」

「笑つてるじゃねえか」

話しながら歩く内に食堂に辿り着いた二人は、早速朝食の注文を行う。

一夏は和風の焼き魚定食を頼み、受け取り口に向かうが、オタクは注文に少しの時間を要した。

「デュフフフww拙者はカツ丼大盛りを頼むで御座るwww後、コロッケとサンマと焼きそばとホイコーロー、味噌汁の変わりにラーメンを・・・それと牛乳も付けて下されwww」

周りを存分に引かせる注文に、幾人かの女生徒は食欲が失せたと言わんばかりに列から離れ、漸く食事が届いたオタクは、両手に御盆を乗せて一夏の下へと向かう。

「どこの桜木だよ」

「フヒヒwwwサーセンwww」

一夏の突っ込みを受けつつ、オタクは用意した食事を勢い良く胃の中へと流し込み始めた。

「うわく・・・豚みたい・・・」

「千と千尋・・・」

「あたし・・・もう良いや・・・」

この後、千冬によってオタクが後頭部を殴られつつ、叱責された生徒達が朝食を済ませて、一斉に教室へと向かった。

「ま、前が見えねえwww」

「顔は殴られて無いだろ・・・」

オタクもまた、一夏と共に教室へと向かう道中、好奇の視線に晒される中で普段通りに振る舞うが、若干足取りが重かった。

そんな生活を一週間続けている内に、とうとう決闘の日がやって来た。

「手抜き乙で御座るwww」

「誰に言ってるんだ？」

「オッフwww拙者とした事がwww第三の壁を突き抜けてしまつていたで御座るwww」

「お前、時々分かんない事言うよな」

ここ最近でスツカリお馴染みになった二人の遣り取りは、一つ普段との違いを挙げるとすれば、それは、一夏が灰色のISを纏って居る事だろう。

「ご都合主義展開で御座るなwww」

オタクが笑いながら言う横で、若干のシリアスな雰囲気の一夏と幼馴染みの篠ノ之箒が出撃前に二三言葉を交わし、一夏が外へと飛び出して行った。

「それで、拙者は如何すれば良いので御座るか？」

「直ぐに出られる様に準備をしておけ。・・・お前は既に専用機を持っているだろう」

「了解で御座るwww」

そして、オタク以外の全員が去り、残されたオタクは一人になるなり、大きく溜息を付いて座り込んだ。

「ああ・・・一夏君は大丈夫だろうか・・・怪我などしなければ良いが・・・」
ここに来て出来た友人の身を案じるオタクは、普段の人前の態度とは打って変わった素の言葉で独りごちる。

大きな身体を縮こませて己の身の境遇を呪い、この後に始める英国

の少女との果たし合いに思いを巡らせた。

「なんで俺がこんな事を・・・なんで誰も常識人がいないんだ・・・本当にここは日本なのか？」

法律上、IS学園では日本国憲法が及ばないとされている物の殆どの生徒が日本人であるのなら日本は日本の常識が通用する筈なのだ。

しかし、いざ来てみれば、全く常識が通用せず、到底日本人の物とは思えない様な、文明人らしからぬ言動ばかりで、オタクは心身共に疲弊していた。

「はあ・・・」

「小田」

項垂れるオタクに不意に声が掛けられる。

「オッフｗｗｗｗ織斑女史ｗｗｗｗどうしたで御座るかｗｗｗｗ？」

「次はお前の番だ。オルコットは連戦で構わないと言っているから早く行け」

「ｗｗｗｗ了解したで御座るｗｗｗｗ」

何事も無かった様に振る舞うオタクは、アリーナの方へと向かって歩き出す。

そんな、オタクに千冬が更に声を掛けた。

「精々、励め。私もオルコットの物言いには思うところがある」

「・・・織斑女史も苦勞をされている様で御座るな」

「若造が知った口を利くな」

「拙者、女史とは同い年で御座るよｗｗｗｗ夜間高校を受けたら検査を受けさせられたので御座るｗｗｗｗ」

珍しく、千冬は驚きを隠せずに口を開け、去って行くオタクの背を見送ってからも、暫くの間凍り付いたままだった。

第三話

「あら・・・逃げずに来ましたのね」

「デュフフフwww吐いた唾は飲み込めませぬからなwww」

歩いてアリーナの中央まで出て来たオタクに対して、セシリアは本当に来たのかと言う風に反応し、それからオタクの格好を見て眉をひそめた。

「所で貴方・・・まさか生身で戦う等と仰るおつもりですか？」

「wwwそんな訳無いで御座るwww常識的に考えて欲しいで御座るwww」

相も変わらず相手を煽っていくスタイルを崩さないオタクだったが、セシリアの反応というのは、オタクの予期していた物よりも幾分マイルドな物で、憑きものの晴れた様な表情をしている様に見受けられた。

「一夏氏と何か有った様で御座るなwwwチヨロイン乙で御座るwww」

「良いから早く準備をして下さいませ」

「オッフwww無視はひどいで御座るwww」

仕方が無いと言うように、オタクはセシリアに促されて自身のISを纏うための準備に入る。

足を肩幅に開いて胸を張ると、何時になく真面目な表情をして、セシリアを見据える。

「行くで御座るよ」

「っ・・・！」

「・・・ファイナルフュージョン!!」

「真面目にやれええええ!!」

最早何処で見ているのかと言うほか無い一夏の突っ込みが響く中、オタクは眩い光に包まれながら僅かに中に浮遊した。

途中回転しつつ、何処からか新幹線と飛行機のエンジン音が聞こえてくる気がしつつ、光が治まると同時にオタクが遂にその姿を現し、そして叫んだ。

「それはw最強の破壊神wwそれはw勇気の究極なる姿www我々が辿り着いたw大いなる遺産wwその名はwww勇者王wwwジエネシツクwwwガオガイガーwww」

全体的に角張った四角い機体は安っぽい茶色に塗られており、肩や足などには何処かで見た事のある通販サイトのロゴマークが描かれている。

まさに夏休みの工作クオリティーな見た目の胸に描かれた六文字のアルファベットが眼を引く。

その姿を見た瞬間に、見ていた全ての人間が絶句し啞然とし、観客席に出て来た一夏が叫ぶ。

「ガオガイガーじゃねえ!!段ボールじゃねえか!!」

この瞬間、善くぞ言ってくれたとばかりにクラスメイト達の視線を一身に浴びる一夏は、突っ込みが終わると友人の戦いを見るために席に着いた。

「な・・・何なんですの!その巫山戯た姿は!」

「デュフフww拙者の専用機で御座るwwその名もダンボールで御座るww」

余りにあんまりな姿に言葉を失うセシリアを余所に、オタクは自身の言葉が本当である事を証明するために中に浮いて見せた。

「この通り飛べるで御座るww」

「・・・本当にIS でしたのね・・・と言うか飛べるんですのね・・・まあ、良いですわ」

疲れた様に言うセシリアは、一つ溜息を吐いてから表情を引き締めオタクに言った。

「降参するのなら今ですわよ?」

「ww拙者にも意地はあるで御座るww」

「そうですか・・・それならば踊りなさい!わたくしのブルー・ティアーズとロンドを!!」

「拙者、ロックの方が好きで御座るww」

互いの宣言が放たれるとほぼ同時に、セシリアがライフルを撃ちながら右方向へと飛び去った。

それに対して、オタクは後に仰け反ってバク転の要領で地面へと下降していく。

「ブルー・ティアーズ！」

最初から本気とばかりにセシリアが四機のビットを放つと、地上スレスレのオタクに対して集中砲火を掛ける。

「当たらなければwww如何と言う事は無いwww」

ここで、オタクはまさかの回避能力をセシリアに見せ付ける。

連続で放たれた八本の光線をスケートの様に地上を滑走しながら躲すオタクは、途中で明らかに必要の無い回転を交えて笑った。

「トリプルアクセルで御座るwww」

「っ！この豚あ!!」

オタクの煽りに耐えられなくなったのか、セシリアは顔を真っ赤にして激昂しながら更に攻撃を集中させた。

「オッフwww最近の若者はキレ易いで御座るwww」

猶も余裕を見せて笑いながら地上を滑走するオタクは、セシリアの攻撃の合間を縫ってセシリアの方を向く様にバックの姿勢になると、武器を取り出した。

「シャキーンで御座るwww」

全長約3m程のライフルは、ややクラシカルなライフルグリップにバットストックとハンドガードが一体になった物で、本体の右側に手動作用のボルトとエジェクションポートが備わっている。

「反撃の時間で御座るwww」

引き金を引く度に撃発するセミオートマチックのライフルから吐き出された三発の20mmの砲弾は、秒速1200mの高初速で上空のセシリアに向かって飛翔した。

「っ！」

オタクがライフルを取りだしたと同時に、セシリアは即座に回避行動を取る。

それまで滞空しながらビットの操作に集中していたのだが、手に持ったライフルの射撃に切り換えて、オタクを中心にして右に水平移動し始めた。

「デュフフフwwww少し掴めたで御座るwww」

「何をっ!!」

オタクは小さな回転半径でセシリアに向かい続け、それに対してセシリアは高速で大きく回転半径を取りながら飛ぶ。

高低差は在る物の、まるでボクシングのアウトボクサーとインフアイターのジャブの差し合いの様相を呈して来た二人の戦闘は、開始から五分経っても尚、互いにノーダメージのまま推移して行く。

連射能力と言う点に置いてはオタクの持つライフルの方が勝る物の、二十発の弾倉で在るが故にリロードと言う弱点が在った。

それに対して、セシリアの持つスターライトは一撃の破壊力でオタクを圧倒し、また、リロード不要と言う利点を生かして連続して射撃を浴びせ続ける。

傍から見れば高高度を維持して射撃を続けられるセシリアの方が有利で在るように見えるのだが、常に高速で飛行を続ける為に狙いの正確性が低下してしまい、少ない動きで安定した射撃姿勢を取り続けられるオタクは高度的な有利を持つセシリアにも対抗する事が出来ていた。

「くっ…しびといですわね!!」

現状に焦り、思わずじれったい思いを口にした瞬間、オタクが動いた。

「ミッソー!ミッソー!」

セシリアの射撃の隙を突いて急激に方向を転換して右に一瞬スライドすると、背中から二発のミサイルを発射した。

「なっ!」

「デュフフフwwww武器はライフルだけでは無いで御座るwww」

高速で飛翔するミサイルに驚きつつ、セシリアは直ぐに回避行動に移る。

射撃を止めて姿勢を水平にして高速飛行に入り、アリーナの内壁スレスレを飛びながら背後に迫るミサイルを目視で確認した。

「は、早いですわ…!」

振り切る事が出来ないと判断したセシリアは、隠して置いたミサイ

ルを使って迎撃する事を決める。

セシリアの目論見通り迎撃に成功するが、合計四発のミサイルが空中で爆発すると、直ぐ近くで爆風と破片の直撃を受けたセシリアは、僅かにダメージを受けながら弾き飛ばされ、地面にぶつかる寸前で体勢を立て直して着地した。

「何処に・・・っ！」

ミサイルを放った張本人は何処かと、本能的に首を降って確認しようとしてしまうが、その動きは明らかな無駄だった。

ハイパーセンサーで360度を確認できる以上、その動きは僅かな隙を作るだけでしか無く、敵が居ない方にも向いてしまうのは次の行動へのタイムラグとなってしまう。

そして、セシリアはもう一つのミスを犯してしまっていた。

「っ!!？」

敵を見失った状態で動きを止めた上に、上方への警戒を最後に回してしまったセシリアは、上空からの射撃をもろに受けて左側のアンロックユニットを喪失してしまう失態を犯した。

「デユフフフｗｗｗｗ」

オタクの笑い声を耳に聞きながら、セシリアは唇を噛んで悔しさに顔を渗ませて、右方向へと水平移動を開始した。

「ブルー・ティアーズ！」

二機減ったしまったビームビットを放ってオタクに牽制しながら、セシリアは機体の高度を上げてオタクを見据える。

「最早、容赦はしませんわ!!」

今度は、オタクの方がビットに追われながら回避飛行を取る番になり、本気で落としに掛かったセシリアの攻撃に、数発の被弾を許してしまった。

「オッフｗｗｗｗ拙者、そろそろ不味いで御座るｗｗｗｗ」

折角のダメージアドバンテージを直ぐに覆された挙げ句に、状況としても完全に劣勢に立たされたオタクに、見ている全員が勝負は決まったと確信した。

「そこですわー！」

オタクが寸での所でビットから放たれた光線を回避した所に、一瞬だけビットの制御を手放してスターライトを構えて引き金を引くと、オタクは、全く対応できずに強力な一撃の直撃を受けた。

「ぐうっ!!」

巫山戯る余裕すら無く撃たれたオタクは、直撃の反動でアリーナの障壁に高速でぶつかり、激しくクラッシュしながら地面へと叩きつけられた。

「オッフwww・・・ミンチになるところで御座ったwww」

「コレでチェックメイトですわ」

辛う自でシールドエネルギーが残ったオタクが土煙の中で立ち上がると、直ぐ後にセシリアがスターライトを構えて降り立った。

「降伏なさい」

冷たく言い放つセシリアは、油断無くライフルを構えて銃口を後頭部に向ける。

そんなセシリアに、オタクは動かずに言った。

「セシリア氏」

「?何ですか?」

『獲物の前で舌舐めずりは三流のする事だぞMissオルコット』
「なっ!?!」

いきなり流暢な英語で言ったかと思えば、オタクの機体からスモークが撃ち出されて、煙に包まれてしまう。

驚きながら留めを刺すためにスターライトの引き金を引いたセシリアだったが、手応えは無く。

仕留め損ねたセシリアがスラストを噴かして右にスライドして煙から出た瞬間、目の前にライフルを構えたオタクが現れた。

「この距離なら外さんで御座るよwww」

迎撃にしようとするセシリアに、無情にも20mmの徹甲弾が続けて撃ち込まれ、その内の一発がセシリアの手に握られていたスターライトの銃身を撃ち抜いて破壊した。

「インターセプター!!」

銃を失ったセシリアは近接用の武装の名を叫んで展開し、不得意な

がらも接近戦に持ち込もうとした。

しかし、それと同時にオタクが銃口をセシリアに向けながら叫ぶ。

「着剣！」

長銃身のオタクのライフルの銃口の下に刃渡り50cm程度の片刃が現れ、それと同時に槍の様に突き出した。

「大和魂を見せてやるwww」

片や短剣を持って向かうセシリア、片や銃剣を突き出して迎えるオタク。

オタクのダンボールのシールドエネルギーは既に雀の涙と言う所に達しており、オタクに取ってはコレが最後の攻撃のチャンスだった。

「っ！」

オタクの繰り出した銃剣は、ブルー・ティアーズの残っていた右側のアンロックユニットに突き刺さり、大きくシールドエネルギーを削るが、留めを刺す程には至らなかった。

「ブルー・ティアーズ!!」

セシリアが叫ぶと、二機のビットがオタクのライフルに向かって体当たりして、銃を弾き飛ばすと、そのままセシリアは無防備のオタクに肉迫して短剣を振るった。

「試合終了！勝者セシリア・オルコット!!」

戦いの終わりを告げる千冬の声アリーナに響き、模擬戦の様子を見ていたクラスメイトから歓声が上がる。

「デュフフフwwwこんなに激しくおにゃのこ様からアタックされたのは初めてで御座るwww」

「貴方・・・もう少し真面目に出来ないんですの？」

「サーセンwww」

終わってみれば、セシリアのシールドエネルギーは20パーセント程を残しており、序盤から中盤に掛けて余力を残しながら戦っていた事や、最後の降伏勧告の事なども考えれば明らかなセシリアの圧勝と言えた。

しかし、オタクが全く初心者らしからぬ戦闘能力を見せた所も事実

であり、担任の千冬としては非常に実りの多い模擬戦であった。

試合終了後、控え室に戻ったオタクはベンチに腰掛けると独り溜息を吐いて頂垂れた。

「ああ・・・疲れた・・・」

汗の染みこんだバンドナを取り、用意されていたタオルで滴る汗を拭くオタクは、全身を包み込む倦怠感に身を委ねてベンチに寝そべろうとするが、近付いてくる足音に気付くと、直ぐにバンドナを巻いて何時もの様に振る舞う用意をした。

「小田く!!」

オタクの名を呼びながら入ってきた一夏は、オタクの姿を認めるなり勢い良く飛び付いた。

「オッフwwww一夏氏w熱いハグで薄い本が厚くなるで御座るww」

「小田!お前凄えよ!セシリアとあんなに戦えるなんて凄えよ!」

自身よりも白熱した戦いを繰り広げた友人に称賛の言葉を浴びせる一夏は、興奮して彼に抱き付いたまま飛び跳ねた。

「い、一夏!何をやっているんだ!」

開け放たれた扉から二人を見た一夏の幼馴染みの箒は、声を荒げて一夏につめよった。

「男か!?男が良いのか!?!」

箒の叫んだ言葉を聞いて興味を持ったらしい女生徒の幾人かが部屋の中を覗くと、イケメン少年が汗だくの大男に抱き付いて興奮し、その様子に怒りと共に抗議を上げる女生徒と言う何とも言えない光景が繰り広げられていた。

「わ、私そう言うの嫌いじゃ無いから!」

誰が叫んだか、一人の女生徒の叫び声が廊下に木霊し、騒ぎを聞きつけた女生徒達が顔を覆う振りをして指の間から様子を覗き、黄色い声を上げながら鼻血を拭った。

「オッフｗｗｗｗ凄いい勘違いをされている予感ｗｗｗｗ」

騒ぎを聞きつけた千冬が女生徒を解散させ、一夏×オタクかオタク×一夏か等と考えていたオタクの頭に出席簿が叩き込まれるまでの三分間、この狂乱は続いた。

第四話

「それではコレよりISを使用した実習を始める」

クラス代表決定戦から数日後の事、グラウンドに集合した一組の生徒達は初のIS実習を受ける。

授業の教材として一機の撃鉄が用意されていたが、まずは専用機を持つている三人による手本から始まった。

「では、まずは展開から行う。オルコット先ずはお前がやってみろ」

千冬の指示に従って、セシリアが模範的なISの展開を披露して見せた。

それに続いて、今度は一夏が白式を展開しようとするが、中々上手く行かない。

千冬の叱責とセシリアのアドバイスによって漸く白式を纏った一夏は、千冬の小言に唇を尖らせてつつ肩を落とした。

「次はお前だ小田」

「アイアイマムｗｗｗｗ」

千冬に命じられたオタクは、敬礼と共に返事を返すと、息を大きく吸って肩幅に足を開き、ポーズを決めながら言った。

「変っ！身っ!!」

「真面目にやらんか!!」

エフェクトが掛けられながらダンボールを身に纏ったオタクは、光が治まると共に出席簿の殴打を喰らい、地面にうつ伏せに沈んだ。

「次は武装の展開だ。オルコットやってみろ」

当たり障り無くスターライトを展開して見せたセシリアがドヤ顔を披露すると、千冬は更なる注文を付ける。

「近接武器を出してみろ」

「えっ・・・」

あからさまに表情を歪めるセシリアは、世界最強の担任の言葉に逆らう訳にも行かず、最終的に端を忍んで武器名を叫んでインターセプターを展開する。

「近接武器ももっとスムーズに取り出せる様にしろ。この前、豚にし

てやられたばかりだろう」

「・・・はい」

「次は織斑」

一夏もまた雪片二型を展開して千冬の小言を貰い、それが済むと千冬の視線は倒れているオタクの方へと向けられた。

「お前もやれ小田」

「おk」

千冬に言われて、オタクは起き上がると息を整えて口を開いた。

「ハンマアアアアコネク 「巫山戯ないでやれ」 はい・・・」

途中まで言った所で千冬に留められた、オタクは意気消沈して肩を落とし、大人しく言う事に従った。

言われるがままにライフルを取り出したオタクに対して、指摘する所も無いために千冬は何も言わず、何だか妙な空気が流れてしまった。

「小田！助けてくれ！」

一日の授業終了後、午前中のIS実習の最後に一夏が作ったクレターを埋める手伝いを終えたオタクは、食堂で食事を取っていたのだが、そこへ助けを求める一夏が駆け寄ってきた。

「如何したんだい一夏くん？またジャイアンにいじめられたのかい？」

「違う！て言うか俺は、のび太じゃない！」

オタクのノリにも乗ってこない程、切羽詰まっているらしい一夏は、オタクに詰め寄って言った。

「大変なんだ！」

「取り敢えずもちつけwww」

慌てる一夏を宥めつつ話を聞いてみると、中国人の一夏の幼馴染みが転入してきた為、懐かしく思っただけで暫く旧交を温めていた所、急に怒りだして決闘を申し込まれたと言う事だった。

「また決闘wwwここは西部で御座るかwww」

「笑い事じゃない・・・鈴の奴、何でイキなり・・・」

「何か心辺りは無いので御座るか？」

「いや？直前に話してたのは鈴の親父さんの酔豚の話だったか？」

「酔豚で御座るか・・・まさかパイナップルを入れるか入れないかと言う事は」

「それだ！」

オタクとの話で酔豚のパイナップルが原因ではと思いついたらしい一夏は、手を叩いて声を上げるなり、何処へやらと走り去ってしまった。

「ヤレヤレ一夏氏は騒がしいで御座るなwww」

そうして、オタクは再び食事に戻り、デザートのレストランデーを食べ終えた頃、一夏が再びオタクの前へと現れた。

「オッフwww一夏氏www今はまだ春で御座るwww」

オタクの前に現れた一夏の頬には、見事なまでの紅葉が描かれており、あの子の幼馴染みとの話が決裂に終わった事は言うまでも無かった。

「・・・何が行けなかったんだ？」

「拙者には分からない話で御座るwww」

自然と一夏はオタクの隣の席に腰掛けると、テーブルに突っ伏してぼやいた。

「時に一夏氏」

「何だ？」

「一夏氏はパイナップルを入れる派で御座るか？」

「俺は入れる派だな。小田は？」

「拙者もで御座る」

その瞬間、一夏の脳髓に電撃が走り、勢い良く立ち上がった。

「そうだ！そう言う事だったんだ！」

「もちつけ一夏氏wwwどう言う事で御座るか？」

「つまり、鈴は自分と好みが違う事に怒っていたんだよ！」

「な、何だってーwww」

「そう言う事なら早速行ってくる！」

再び、一夏は幼馴染みと仲直りする為に走り去り、後に残されたオタクは独りごちる。

「イヤ、その理屈はおかしいwww」

尚、この数分後に、紅葉を増やした一夏が戻ってきてオタクに笑われたのは、やはり言うまでも無い事だった。

季節外れの紅葉を見た食堂での遣り取りから少しばかり時は流れ、オタクは学園の外へと足を向けて買い物に出掛け様としていた。

そろそろ、下着などの着替えが無くなってきたているのと、諸々の最低限の必需品を揃えようとしての事だったのだが、それは突然現れた少女の手によって阻まれてしまう。

「ちよつと！あんたがオタクって奴ね！」

「オッフwww拙者、突然現れたおにやのこ様に呼び止められたで御座るwwwまさかコレはフラグで御座ろうかwww」

「はあ？何気持ち悪いこと言ってるの？」

「デュフフフwww辛辣で御座るwwwありがとうございますwww御座いますwww」

小柄な身体に茶色いツインテールの勝ち気そうな少女は、オタクに對しても全く物怖じせず言葉を投稿掛ける。

「それよりもあんたがオタクで言いわけ？」

「デュフフフwww確かに拙者はオタクで御座るwww本名は小田宅と申すで御座るwwwして、お手前はw何方様で御座いましょうかwww」

「・・・取り敢えず、その気持ち悪い笑いを止めて」

「オッフwwwサーセンwww」

「まあ、良いわ。ちよつと着いてきなさい」

一体少女が誰なのか、何が目的なのかも分からないままに、オタクは目的を果たす事も出来ないで学園内に戻る事になってしまう。

そうして有無を言わさぬ少女に連れられてオタクが辿り着いたのはアリーナだった。

「コレから何が始まるんですか？」

「第三次大・・・アンタ、あたしと勝負しなさい！」

某動画サイト界限で通じる遣り取りに引き込まれそうになる辺り、少女も中々如何して染まっている物だが、傍と思いつた少女がオタクに勝負を申し込んだ。

「www」

最早訳が分からなすぎて笑うしか無いオタクだったが、次の瞬間、少女がISを展開して攻撃を仕掛けてきた。

「ふぁーwww拙者、ピンチで御座るwww」

寸での所でダンボールを展開して回避できたから良い物の、先程までオタクが立っていた辺りの地面が大きく抉れ、もしも直撃していたら惨事は免れなかった。

「さあ、勝負よ!!」

そう、宣言した少女はオタクに対して不可視の攻撃を繰り出してくる。

恐らくアンロックユニットから何らかの射撃攻撃を出しているのだろうと辺りを付けるオタクだが、だからと言って直ぐに対応策が浮かぶ訳でも無く、数発の被弾の後に、高速で飛び回って当たらない事を祈るという消極策しか取れなかった。

「この学校のおにゃのこ様は激しすぎて御座るwww」

「こつのおお!!落ちなさい!!」

少女は、オタクに対して追走する形で飛行しながら不可視の攻撃を続ける。

ある程度の威力は分かっていたのだが、射程も弾道予想も発射速度も何も分からず、オタクは内心で舌打ちしながら、この厄介な攻撃に対する対抗策を考えた。

「コレ無理ゲーじゃね? www」

しかし、現実是非情である。

結局の所、何の打開策も考えられないまま、オタクのシールドエネ

ルギーは徐々に削られて行き、あつと言う間に窮地に追い込まれてしまふ。

「一か八か・・・とおくwwww」

せめて一太刀と思い、オタクは行動に出た。

急激に体勢を変更して両脚をアリーナ内の障壁にぶつけると、そのまま障壁の内側を滑るようにスライドしながらブレーキを掛け、後続の少女をオーバーシュートさせる。

「っ！」

オタクを追い抜いてしまった少女は、直ぐさま反転してオタクの方を向こうとするが、オタクは既に次の手を撃っていた。

「フッフーwwww」

少女が後を振り返るとほぼ同時に、オタクが少女を再び追い抜いて一気に突き放したのだ。

「このおお!!」

苦し紛れに少女がオタクに向かって不可視の攻撃を連続して撃ち出すが、一撃たりとも当たる事は無く、この攻撃の際に、少女がオタクの方を常に向きながら機体の正面を向くように動き続けた事で、ある程度の攻撃の予想を可能とした。

「コツチも撃たせて貰うで御座るwwww」

漸く反撃の糸口を掴むことが出来たオタクは、ライフルを取り出すと直ぐに少女に射撃を浴びせる。

IS用の銃器としては非常に強力な威力の20mm砲弾は、セミオートの射撃でも十分に相手の行動を牽制し、撃破出来るポテンシャルがあった。

「っ！豚のくせにヤルじゃ無い！」

もしかしたら、学園に来て一夏以外で初めてオタクの事を認める発言だったかも知れない少女の発言だが、オタク本人としては別の時に言っただけだったと思わずにはいられない。

「ミッソー！ミッソー！」

ライフルの射撃の大きな隙となるリロードの瞬間に、オタクは四発のミサイルを放ってカバーしつつ、格納領域から自動でマガジン内に

給弾された砲弾を手動でチャンバーに押し込んだ。

「はあっ!!」

その間、少女は迫るミサイルを不可視の攻撃で迎撃しながらオタクに接近し巨大な偃月刀を構える。

「覚悟しなさい!!」

オタクに向かって言いながら偃月刀を振るう少女に対し、オタクは冷静さを失わずに対抗措置を取る。

「指向性散弾発射!!」

オタクが叫ぶと同時に、両の太腿の側面のカバーが開くと少女に向かって無数の鉄の玉が飛散した。

「はあっ!?!」

直径凡そ2cmの鉄の玉は嵐の様に少女に殺到して弾き飛ばし、少女を地面に叩き落とした。

「つぐう!!」

「ミッソー!」

土煙の中で起き上がる少女に向けて、更に二発のミサイルが接近するが、少女は回避行動を取る間も無く直撃を受けた。

吹き飛ばされて地面を転がりながら壁際まで追い詰められた少女が、瞼を開いて正面を見ると。そこには何も居なかった。

「アイツはっ!?!」

まず少女は空を見上げてオタクの姿を探すが見当たらず、続いて左右に眼をやってもオタクは居ない。

では、何処にと言う疑問が浮かぶと同時に、通信が入った。

『拙者、用事があるのでコレにて失礼仕るで御座るwwwでは、アデューwww』

完全に逃げられた。

後半最後の逆襲までの間の優勢状態から、随分と押し返された上に、更なる追撃と留めのチャンスを前にして何もせずに去る事を選んだオタクに少女は理不尽な怒りを覚えながら、何となくオタクの為人を理解した。

「やってくれるじゃ無い・・・あの豚あ・・・!」

この瞬間、オタクの存在は少女にとって倒すべき相手ランキングの上位に掻き込まれる事となってしまい、以降、事ある毎にオタクは少女による襲撃を受ける事になった。

「不幸だー！wwww」

第五話

「前回から時は流れてクラスマッチ当日、一夏氏とリンチャンの勝負が始まるうとしている中で、拙者は一人海辺で黄昏れているのであつた」

一夏がここに居れば誰に言っているのかと言う言葉が掛けられただろうが、オタクの言う通り、一夏はアリーナで幼馴染みの鳳鈴音と対峙しており、潮風に晒されているオタクは、一人で海辺の広場に來ていた。

「・・・一人で何やってんだ俺は・・・本当にアホになっちゃったか？」
普段のおちやらけた態度が板に付きすぎてしまった事に、自分で突っ込みを入れつつ、オタクは素の姿勢で海を眺めながら、懐に手を入れた。

「やっぱ、学校じゃ吸いづらいいな・・・」

そう言つてオタクが取り出したのはくしゃくしゃの包み紙に入つたラッキーストライクと、鈍く鉛色に輝くジッポークだった。

「・・・ふう・・・」

慣れた手付きでタバコの先端に火を付け、肺一杯に汚染空気を吸い込むと、ゆつくりと紫煙を吐き出す。

「あくあ、後二本しかねえよ。雪の進軍じゃねえんだぞ・・・」

頼み少なや煙草が二本と口ずさみ、親指と人差し指で摘まんだタバコを再び吸おうと口に近づける。

そんな、オタクの背後に独りの男が現れると、男はオタクの隣に立ち、同じ様に海を眺めながら赤マルを取り出して啜えた。

「・・・ん」

オタクは隣に立つた男に腕を伸ばしてジッポークを近付けてやると、水平線に視線をやりながら火を付けた。

「すまない」

黒い背広姿の男は一言断つて、啜えたタバコに点火して一息吸い、人差し指と中指でタバコを挟んで口から離してから吐き出した。

「遅刻だぞ・・・」

「すまないと言っただろ・・・お前と違って暇じゃ無いんだ」

「へっ、どうせ霞ヶ関でデスクワークだろ」

「それが、そうでも無くてな・・・最近専ら宇都宮にいる事の方が多い」

「良いじゃねえか・・・お偉方の顰めっ面見るよか増しだろ?」

「たまに戻ると、あの顔が的に見えてくる」

互いに顔を見る事も無いまま話す二人は、啜えたタバコを吸い終わると吸い殻を海に投げ棄てて、漸く向き合った。

「久しぶりだな小田」

「お前こそ元氣そうだ・・・人首」

ニコリとも為ずに挨拶を交わした二人は、近くのベンチに座ると話を始めた。

「で?」

「何だ?」

「焦らすんじゃねえよ・・・頼んでおいたのは持ってきたか?」って聞いてんだよ」

人首と呼ばれた男に短く声を掛けるが、惚けた様に聞き返され、オタクはイラだちながら更に尋ねた。

「安心しろ。駐車場の3トン半に積んである」

「なら、始めからそう言えよ・・・」

漸く真面な答えを聞いたオタクは、溜息交じりに小さく言い返す。そのオタクの言葉に小さく笑いながら、今度は人首が言った。

「お前の方はどうだ? JKに囲まれて問題は起こして無いだろうな」

「巫山戯んな、犯罪じゃねえか」

「ならいい・・・話を聞いた時は思わず笑っちゃったよ」

「覚えてろよ」

冗談交じりの人首の言葉に淡々と返すオタクは、内心ストレスをぶつける様に怒気を言葉に怒気を混ぜ込む。

「そう怒るな・・・実際、皆心配してたんだ」

懐かしむような人首の言葉に、オタクも眼を細めて水平線の彼方を見詰めた。

「中卒って言うのは思った以上にキツかったんじゃ無いか？」

「まあ、刺激的だったのは確かだな」

人首の心配する言葉に、オタクは静かに返して、懐のタバコを探る。そんな、オタクに人首はタバコの箱を差し出して言った。

「やるよ・・・ここじや苦勞してるだろ？」

「ありがとよ」

札を言っつて、オタクは人首の差し出した赤いマルボロの箱を受け取って一本啜えた。

そして、再びジツポーを使って火を付けると、味わうようにゆつくりと吸う。

「何が有ったんだ？」

人首が尋ねると、オタクは一度だけ横目に男に視線を向けてから、煙を吐き出すと同時に前wお向いたまま話した。

「夜間の高校を受けたら序でに検査も受けさせられたんだ」

「それで反応したって？」

「最初は何かの冗談かドツキリかと思ったんだが・・・その後は・・・まあ、役人が来たり市民団体の代表だのNGOだかNPOだか国連だか、いろんな奴が来て面倒になってな」

「だからウチに来たのか」

「そう言うこつた。どうせ飼われるなら古巣の方が良いと思つてな」

そこまで話して、オタクは人首に顔を向けると、抗議の言葉を発する。

「つて言うか、何なんだ？あの機体は」

「気に入つたか？」

「冗談だろ？嫌がらせかと思つたぞ」

オタクの専用機として用意されたダンボールの事を抗議すると、人首は笑いながらジョークで返すと、一転して真面目な表情で言つた。

「まあ、お前には悪いと思うが、アレしか無かつたんだ。勘弁してくれ」

「つたく・・・まさか第一世代を渡されるとは思つても見なかつた」
「倉庫で埃を被つてたんだが、どう言う訳か誰も手を付けなくてな」

「つまり不良債権を掴まされたって事でFA?」

「ウチじゃ何時もの事だろ?」

「切ねえな・・・」

静かに言葉を交わし、しみじみとしたオタクの言葉を最後に互いに黙り込むと、人首が立ち上がった。

「もう、行かなきゃならん」

「忙しい奴だな」

「まあ、エリートだからな」

冗談めかした風に人首が言うと、オタクも顔に笑みを浮かべて立ち上がるが、その瞬間に地面が揺れて爆音が轟いた。

「っ!」

「地震か!?!」

「バツカ! どう考えても違うだろ!」

オタクは咄嗟に学園の方を向くと、丁度、アリーナの在る辺りから黒煙が巻き上がっているのが見えた。

「コチラ人首だ! 状況を・・・何っ!?!」

「何が在った!」

人首が携帯を取りだして状況を確認すると、驚きの声上がり、オタクは人首に詰め寄って尋ねる。

「小田っ! 学園が攻撃を受けた! 勢力は不明! 百里と小松からFが急行中だ!」

「っち! 何処の馬鹿だこん畜生!」

「小田! この際だ幌位なら多めに見てやる!」

「恩に着るぞ!」

人首の言葉に、オタクは弾かれた様に走り出すとダンボールを展開して駐車場に向かい、そこに止まっていた迷彩色のトラックに近づいて荷台の幌を破って捨てた。

「始末書は人首に送れよ・・・!」

そう言いながら、幌の取られたトラックの荷台を見て、オタクはそこに置いて鎮座する物に手を伸ばした。

「良いセンスだ」

そうやって掴んだのは、新たな装備として申請していた新型のアサルトライフルとショットガンだ。

これまでのライフルと同じ20mm砲弾を使用するが、全長は1.8mと大幅にサイズを短縮し、マガジンも50連発のマガジンを使用する。

ストックを廃し、ピストルグリップの平面的な見た目をしており、アイアンサイトと小型の光学サイトを備えているが、照準はHUDにレティクルを表示する戦闘機のような方式になった。

ショットガンの方は全長1.5mで、口径50mmと言う巨大なシエルを使う20連発のオートマチック方式で、見た目はP90の銃身を延ばしてハンドガードを取り付けた様な物になっている。

「流石にコッチは着けてる暇は無いか」

もう一つ、荷台には一際大きな装備も載せられていたのだが、時間的余裕が無いと判断して格納領域に仕舞い込み、オタクはアサルトライフルを右手に、ショットガンを左手に持つて黒煙の巻き上がる学園の方を見据えた。

学友達がどんな眼に在っているのかと思ひ、また、年下の友人である一夏の事が気に掛かって急行しようとしたオタクは、しかし、その行く手を阻まれてしまう。

「っ!!」

突如、上空から光線が降り注いでアスファルトの足下を破壊して破片を巻き上げると、立ちこめる土煙の中から巨大な人型の機械が姿を現した。

「おいおい・・・何だこりやあ・・・」

『やっほー!!初めましてだねオタクくん!!』

スピーカーを通して、甲高い女性の声が響いてオタクに呼び掛けられると、それが目の前のISから発せられている物だと気が付くのに、時間は掛からなかった。

「何処の何奴だ!」

『それはコッチの台詞だよオタクくん、如何して君はISを動かせるのか、お姉さんは興味があるんだー』

「んな事俺が知るか！」

『つれないなく・・・まあ、いいや、取り敢えずこのゴーレムⅡで君の事を攫って解剖すればそれで良いよね！』

と、スピーカーの向こうの女性がとんでもない事を言い出すと同時に、眼の前のⅠSが動き出した。

大きく前へと突き出た胴体に短く小さな腕、全高の三分の二を占める長い足、全体的に平面を組み合わせた角張ったフォルムは何処かダンボールと通じる物が有るが、大きさは目測で3.5m程と一般的なⅠSよりも一回り大きな機体は、2.3mしかない小柄なダンボールと比べると、その差は歴然だった。

大ききの割に動きは素早く、ゴーレムⅡは一気にオタクに肉迫すると、右手にチェーンソーを展開して襲い掛かる。

「マジかよっ!!」

寸での所、高速で駆動するチェーンソーがダンボールの装甲を両断する寸前で、オタクは屈むようにして攻撃を擦り抜けつつゴーレムⅡの背後に抜けた。

オタクの躲したチェーンソーが、3トン半のキャabinを破壊するが、ゴーレムⅡはそんな事は興味が無いと言わんばかりにオタクを追尾して振り向くと、今度は左手にグレネードランチャーを展開してオタクに向けた。

「だあ！貴重な装備が!!」

そう叫びながらオタクは即座に回避行動を取る。

地面を滑るようにS字にバックして敵から離れ様とすると、ゴーレムⅡはグレネードを連射して追撃した。

「あつぶね!!無茶苦茶しすぎだろ!!」

思わずと言う風に叫びながら回避を続けるオタクは、小さな破片を喰らう事はあれど直撃は受けないままで 何とかやり過ごす。

そして、逃げ切る事も援軍も無いと判断して反撃に出る決意を固めた。

「シチューにカツをつけてね・・・」

眩きつつ、両手の銃を構え直すオタクは、それまでの逃走から一転

して敵機に向き合ってアサルトライフルを連射しながら右にスライドした。

毎分300発の低レートの発射速度のアサルトライフルの銃口から20mmの砲弾が連続して吐き出されて敵機に向かうが、ゴーレムIIは回避行動は取らずに直撃を受ける。

「・・・」

硝煙と土煙の中でゴーレムIIの機体には僅かな傷が残るだけで大したダメージは無く、反撃とばかりにグレネードをオタクに向けて放った。

「まあ、そうだよな」

独り言ちて回避するオタクは、砲弾片が掠める度に目減りしていくシールドエネルギーの残量に辟易として、絶望感に苛まれた。

しかし、簡単に諦める訳にもいかない立場として、オタクは現状維持を諦めて駐車場から飛び出し、広い道路を疾走しながら追走するゴーレムIIにアサルトライフルの射撃を浴びせる。

「固いなあ・・・」

20mmと言う口径は決して非力な物では無い筈なのだ。

他のISが使用するライフル等と比べても口径も弾頭重量も装薬量も何もかもが圧倒的に強力な筈なのだが、相対する敵機には全く効果が無いように思えてならなかった。

「20mmが利かないって・・・そんなのアリかよ・・・!」

一々ぼやきながらも、オタクはグレネードの直撃は貰うまいと必死で回避し続け、隙を縫って応射した。

マガジン内の50発を撃ちきると、自動的に格納領域から給弾が行われる方式は変わり無く、リロードの最中に必死で打開策を考える。

「っ!!」

そうしている内に、ゴーレムIIは巨体に似合わない機動力を発揮してオタクに近付いてくるとチェインソーで攻撃を仕掛けてくる。

唸り声を上げるチェインソーを必死で躲して距離を取ろうとするが、ゴーレムIIはそれを許してはくれず、更に接近して武器を振るっ

た。

「ツぬおあ!!」

一瞬、ほんの一瞬だけ、道路の凹凸に機体が詰まってしまった瞬間、チェーンソーの先端部分がダンボールの右肩に掠めて装甲を剥ぎ取り、甚大なダメージを与えた。

「クッソ!!」

オタクは悪態を吐きながらショットガンを腰だめい構え、フルオートでバツクショットを撃ち込んで反撃する。

凄まじい勢いで吐き出された鉛球の嵐がゴーレムIIを襲い、左上半身の装甲と塗装を抉り取って大きく弾き飛ばした。

「っらあ!!」

更にオタクはアサルトライフルを構えて引き金を引き、マガジン一本分の20mm砲弾をゴーレムIIに喰らわせると、少し距離を取って様子見の為に立ち止まった。

「・・・やったか?」

お約束通り、言葉の直ぐ後にゴーレムが反撃にグレネードを撃ち、更には両肩から拡散ビームまで放ちながらオタクに接近してきた。

「お約束やってんじゃねえよ!!」

悪態を吐いて、オタクは再びショットガンを連射しながら下がるが、今度の攻撃は先程とは違って効果は無かった。

「一体、どうなってんだ?」

利いたり利かなかったりと、どう言う基準で攻撃が通用するのか分からず、オタクはぼやきながら回避に専念した。

両肩から放たれる拡散ビームは、一撃事の重さは大した事は無いが、完璧な回避が叶わない異常、確実にダメージを入れてくる。

相も変わらずグレネードの射撃も続いており、そろそろ限界が見えてきていた。

「・・・」

ビーム散弾である程度、動きを制限しながら、グレネードで距離を取るのを阻止しつつ、隙を見てチェーンソーで接近戦に持ち込んでくる。

意味の分からない事にコチラの攻撃が殆ど通用為ず回避行動も取らないために、牽制も何も意味が無い。

「本当に厭らしい」

最早オタクは、お手上げも同然の状態だった。

自身の攻撃の悉くが通用せず、敵の攻撃は一撃一撃が必殺となり得ると言う、理不尽極まりない状況に湧き上がる無力感が身体を包み込んで離さなくなった。

『どうやら観念したみたいだね』

再びスピーカーから女の声が響き、勝ち誇った様にオタクを嘲笑った。

ゴーレムⅡも全ての攻撃を止めて、ゆっくりと焦らす様にオタクに近付くと、手を伸ばしてオタクを確保しようとする。

両手に持った銃を構える事すらしなくなったオタクは、銃を格納領域内に仕舞い込んで無抵抗に、ゴーレムⅡの左手に掴まれた。

『じゃあ、コレで終わりだね』

勝利を確信した女の言葉に、オタクが言葉を返す。

「ああ、コレで終わりだ」

次の瞬間、オタクがニヤリと嗤ってダンボールのスラスターを噴出し、ゴーレムⅡの懐に飛び込んだ。

「リアッ!!」

右腕を掴むゴーレムⅡの左腕を逆に右腕を絡ませる様にして取って、カ一杯に引っ張って体勢を崩させるとスラスターの噴射の勢いで右のボディーに鉄拳を叩き込んだ。

『ええっ!?!』

殴られたゴーレムⅡの機体から金属の拉げる嫌な音が響いて胴体が軋む。

驚きの声を上げる女を余所に、オタクは更なる追撃を掛ける為に、ゴーレムⅡの右膝を蹴って関節部分を破壊した。

機械的な無防備を晒す事になったゴーレムⅡには、その後のオタクの攻撃を避ける事は出来ず、更に苛烈な攻撃を甘んじて受ける事しか出来なかった。

「っしや!!」

右膝を地面に着いて上体をくの字に曲げるゴーレムに、オタクは追撃のボディを二回連続で叩き込んで破損を拡大させ、右手で掴んだままのゴーレムの左腕を僅かに上げさせると、その隙間に入り込んで一本背負いで地面に叩きつけた。

これで終わりに思えたオタクの攻撃は、しかし、終わりにはならず。

立ち上がって反撃しようとするゴーレムⅡの背後に回ると、その両腕を掴んで捻り上げ、そこから右の前蹴りを背中に浴びせながら両腕を捻り取って捨てた。

「良くも!!今まで!!やって!!くれた!!な!!」

両腕を失っても、尚、立ち上がって反撃しようとするゴーレムⅡに對して、オタクは罵声を投げ掛けながら両の拳を叩き着け、膝を折って崩れ落ちた所を更に顔面に蹴りを入れて頭をもぎ取った。

「しんぐい・・・」

驚異的な事に、ゴーレムⅡはここまでやられても尚、活動が停止しておらず。

息を荒げたオタクは悪態を吐いて留めを刺しに掛かる。

両肩の拡散ビームを放とうとしたゴーレムⅡは、最後の一太刀を浴びせる事が適う前にオタクの接近を許し、スラスターの噴射と共に繰り出されたミドルキックで後に吹き飛ばされ、衝立に囲まれた工事現場の中に転がり込むとオタクに左足を掴まれて引き摺られる。

「おら、コレで留めだクソ野郎」

冷淡なオタクの声が響いたかと思うと、オタクは工事現場に設置されていた基礎工用の杭打ち機で胴体を貫いて留めを刺した。

鋼製の基礎杭を打ち込まれた胴体は、完全に撃ち貫かれた上で、破片を四方へと散乱させており、腰と左脚くらいしか原形を留めた物は残っていない様な状態だ。

「どうだ、この程度で最強の兵器なんておこがましい話だ」

誰に言うでも無く呟いたオタクは、格納していたアサルトライフルを再び取り出すと、興味が失せたゴーレムⅡの残骸に背を向けて、学

園へと向かった。

第六話

「それで、結局一夏氏が主人公的な感じで終わらせたで御座るかww
w」
「笑い事じゃねえよ・・・ほんとに死ぬかと思っただぞ？箒も変な時
に出てくるし・・・」

「www」

「草生やしてんじゃねえよ」

オタクがアリーナに着いた時には、全ては終わっていた。

一夏と鈴の二人が共闘する事で、アリーナに現れた不明ISを撃破
する事に成功し、閉じ込められた生徒達も解放された。

ただ、一夏だけは最後の一撃とばかりに放たれたレーザーの直撃を
受けてしまい、今は医務室のベッドに寝ていた。

「何か入学してからこんななばつかだ俺って」

「それが一夏氏の運命で御座るwww」

「こんな運命冗談じゃ無いよ」

幸いにも、一夏の怪我はそれ程酷いものでは無く、一晩安静にすれ
ば大丈夫だとの事で、周囲の人間は皆胸を撫で下ろした。

「それで、幼馴染みのおにゃのこ様とは仲直りは出来たで御座るか？」

「ああ、まあ、何とか」

「それは良かったで御座る」

「ただな・・・」

オタクの言葉に続いて、一夏は何か腑に落ちない様に言う。

「どうしたで御座るか？」

「いや・・・結局、鈴が酢豚にパイナップルを入れる派か入れない派か
は分からなかったんだ」

「オッフwそこは重要で御座るなwww」

「だろ？なのに、鈴の奴聞いても答えなかったんだぜ？」

間違いなくそこは重要じゃ無いと言う部分で無駄に盛り上がる二
人は、暫くの間、酢豚談義に花を咲かせるが、徐にオタクが座ってい
た椅子から立って一夏に別れを告げた。

「では一夏氏、また明日で御座るw w w」

「おう、また明日」

医務室を出たオタクは、扉を閉めて周囲に誰も居ない事を確認すると、廊下を歩いて学園の外を目指した。

「・・・」

シリアスな表情で歩くオタクは、もしも知り合いが見れば二度見して驚いた後に、人違いかと思う程に、普段とは異なる雰囲気をしており、何も言わずに駅に向かった。

誰も居ないモノレールの中で、独り黄昏れた様に窓の外を眺めながら到着を待ち、それから駅に着くなりオタクはモノレールを降りて真っ直ぐに目的地へと足を向ける。

既に、太陽は稜線の向こう側へと沈み、駅前では人が足早に行き交って、様々な人間模様を生み出している。

そんな中をオタクは、迷う事無く歩を進めて繁華街のネオンへと入り込んでいった。

特に入る店と言うのは決めていなかったオタクは、暫く歩いた末に一軒の居酒屋にの暖簾を潜ると、空いていたカウンターに腰を下ろした。

「いらっしやいませー！ご注文はお決まりでしょうか！」

「生大一つと唐揚げ、馬刺し、砂肝」

「はい喜んで！」

威勢の良い店員に注文を頼むと、直ぐに出されたビールのジョッキを掴むと、オタクは豪快に喉を鳴らして煽った。

「っつー・・・！」

ジョッキの半分ほどを一気に呑んで、口を離すと、思わずと言う風にオタクは越えに成らない叫びを上げて久し振りのビールの味に酔った。

「お待たせいたしました！ご注文は以上でよろしかったですでしょうか！」

オタクが、ビールを呑み終えた頃に注文していた料理が届き、店員が確認をすると、オタクはビールの追加とレンモンサワーを追加し

て、唐揚げにかぶりつく。

ニンニクとショウガの利いた醤油味の唐揚げは、噛めば油の滴る柔らかくジューシーな味わいで、そこに届いたビールを再び煽れば、全ての疲れから解放されたかの様な気分になる。

「・・・俺は今、生きています」

訳の分からない事を呟くオタクだが、そんなオタクを気に掛ける様な人物は誰一人おらず、オタクは次に砂肝に手を出した。

串に刺さった二本の砂肝は、シンプルに塩胡椒のみの味付けで、噛めばコリコリとした食感と、ジワリと染み出してくる鶏の味がビールを誘う。

「すいません」

「はい何ででしょうか！」

「ビールおかわりで」

「はい喜んで！」

本日三杯目の生大を待ちつつ、砂肝を食べつつレモンサワーで口を直すと、今度は馬刺しに眼を向けた。

濃い赤色のソレを一切れ箸でつまみ上げると、ニンニクを溶いた醤油につけて口に運ぶ、ガツンとしたニンニクの香りと肉本来の淡泊な味が口に広がり、思わず辛めの芋を頼みたくなるが、それは堪えてレモンサワーで我慢する。

それからオタクはビールを更に二杯追加しつつ、頼んだ料理を平らげると、さっさと会計を済ませて店を後にした。

このまま帰るのかと思うと、オタクは学園とは反対方向の繁華街の奥へと進み、一軒のBARの前で立ち止まる。

「ここか」

誰に言うでも無く呟いたオタクは、ベルを鳴らしながら扉を開けて店内へと入った。

「いらっしや・・・」

「来たで御座るよwww」

「ああ・・・良く来たな」

マスターと一言交わしたオタクは、カウンター席に着くが、そんな

オタクに声が掛けられる。

「お、小田君!？」

自身の名を呼ばれて左側の端の席を見ると、そこには副担任の山田真耶と担任の織斑千冬の二人が、座っていた。

「・・・真耶氏ではござらんかwww奇遇で御座るなwww」

「えっ!?!いや、小田君は・・・」

「拙者25歳で御座るwww」

「私より年上ですか!？」

「www」

「真耶、少し落ち着け」

千冬に窘められた真耶は少し落ち着きを取り戻して、オタクの年齢に改めて驚く。

「はく先輩と同じ歳だったんですね」

「私も聞いた時には驚いたがな」

二人は場所を移動して、オタクの隣の席に移り、オタクと千冬が隣り合って座る。

「注文は？」

マスターが三人に注文を尋ねると、三者三様の答えが返った。

「では、私はモスコミュールで」

「私はジンライムを貰おう」

「オタクは?？」

二人の注文を聞いたマスターは、親しげにオタクに顔を向けて注文を尋ねた。

「マスター・・・ジョン・ダニエルズを頼む・・・」

と、ハードボイルドを気取って頼んだオタクに、真耶からの突っ込みが入る。

「ジョン? ジャック・ダニエルズじゃ?」

「いえ、ジョンで良いんで御座るよ。拙者と彼は付き合いが長居で御座るからw」

オタクがそう言うのと千冬は口許を歪ませて笑い、マスターも笑顔でグラスにジャックダニエルズのモノグラムを注いだ。

「？拙者が頼んだのはオールドの方で御座るが？」

「良いんだよ・・・俺の奢りだ」

そう言ってマスターは、店の奥に行ってしまった。

「お知り合いなんですか？」

真耶がオタクに尋ねると、オタクはストレートのソレを一口煽って答えた。

「まあ、昔行っていた学校の友達ですか・・・」

「学校ですか？高校には・・・」

「卒業してないだけで御座る」

オタクがそう言うと、千冬は少し考えてから静かに言った。

「まさか高等工科学校か？」

「デュフフフwww当時は少年工科学校と言う名前で御座った」

陸上自衛隊少年工科学校、簡単に言えば自衛官をやりながら高校生もやると言った感じだが、未来の陸上自衛隊の中核となるべき人材を育成するために存在していた機関であり、現在は高等工科学校に改編されている。

オタクは嘗て、その少年工科学校に通い、自衛官として訓練をしながら高等教育を受けていた。

「wwwまあ、拙者は途中で落伍した半端物で御座るがwww」

「と言うことはマスターさんも？」

真耶が言うと、丁度、奥から戻ってきたマスターが言った。

「学校に三年、その後は習志野に五年居ました」

「知り合いに、この店を出したと聞いたので来たので御座る」

「・・・気になっていたが、その気持ち悪い話し方は如何したんだ？」

マスターがオタクに言うと、オタクは少し黙り込んで、それから一口グラスのダニエルズを煽ってから静かに口を開いた。

「・・・まあ、生徒はいないし、織斑先生にはバレているから良いか」

「・・・普通に喋ってる・・・」

「あんなキャラが素の奴が居るわけ無いでしょう・・・」

意外そうに呟いた真耶に、静かに突っ込むオタクは、再びグラスに口を着けて飲み干すと、マスターに空のグラスを差し出した。

「次はオールドで良い。ダブルだ」

「・・・あいよ」

モノグラムを注ごうとするマスターに言い含めて、ブラックラベルのストレートをダブルで頼むと、少し不満そうな、少し嬉しそうな複雑な表情でマスターが黒いラベルのジャックダニエルズを注いだ。

グラスの中の琥珀色の液体を見て、オタクは一つ溜息を吐くと一口口に含んで味わう様にして呑み込み、熱い息を吐いた。

「良い飲みっぷりですね」

「まあ、昔から呑んでるしな」

真耶の言葉に答えながら、オタクは懐から銀色のつつを取り出すとマスターに尋ねた。

「ここは禁煙か？」

そうするとマスターは口許を歪ませて笑って言った。

「冗談だろ？禁煙にしたら俺が吸えないじゃねえか」

「だろろうな・・・」

「ただ、今日は隣にレディが居るんだ。この店が禁煙かどうかは二人に聞くんだな」

冗談めかして言ったマスターの言葉に、オタクは笑いながら、千冬と真耶の方を向いた。

「許可を頂けますかな？先生？」

「・・・まあ、良いだろう」

千冬が答える背後で真耶も笑顔で頷くと、マスターが灰皿とシガーレストを差し出して、オタクに聞いた。

「マツチはいるか？」

「いや、此奴がある」

そう言っただけでオタクが懐から取り出したのは、鈍く輝くジツポード。それをみて、マスターが一言苦言を呈す。

「優雅さと気品に欠けるな・・・素人か？」

「へっ・・・中身はガスユニットが組み込んである」

そう言うなり、オタクはチューブの中から一本の葉巻を取り出すと、慣れた手付きで吸い口をフラットにカットして遠火で炙るように

葉巻に火を着けた。

「・・・ふう」

ゆっくりと深く煙を吸い込むと、肺に流さない様に鼻から抜ける様に吐き出してシガーレストに葉巻を置く。

そして、その余韻が残る内に、グラスを手に取って琥珀の液体を煽る。

「コレが生きてるって事だな・・・」

実に堂に入った仕草に、真耶は少しだけ憧れる様な視線を送りながらカクテルを傾ける。

それに対して、千冬は自身も懐に手を伸ばしてシガレットケースから一本取り出して口に咥えた。

「使うかい？」

「・・・助かる」

千冬はタバコを咥えたのは良いが、ライターを忘れたらしく、ポケットの中を探っていたが、見かねたオタクがジッポーを差し出すと札を述べて火を着けた。

「織斑先生もタバコを吸うんだな」

「たまにな・・・普段は一夏が五月蠅いから余り機会が無い」

愚痴る様に言う千冬はカクテルを飲み干すと、からのグラスをマスターに渡した。

「次は何になさいますか？」

グラスを受け取ったマスターは笑顔で千冬に次の注文を尋ねた。

「隣の馬鹿者と同じ物を・・・オンザロックで頼む」

「あ、じゃあ、私はソルティドッグを御願いします」

二人の注文を聞いたマスターは、千冬の前にオンザロックのジャックダニエルズを出し、真耶に出すソルティドッグを作り始めた。

「その葉巻は・・・」

「ホヤ・デ・ニカラグアだ。ゲームが好きなんだよ」

「オタクと言うのも、あながちキャラ作りだけでは無いようだな」

「まあ、サブカルチャーは大好物だ」

静かに語りながら、オタクと千冬はグラスの中身を煽る。

ペースの速いオタクが直ぐに飲み干してしまうと、次を頼む前にマスターが瓶を差し出して来た。

「奢りだっって言っただろ？」

「・・・生意気な」

そう言いながらも、オタクは遠慮無くグラスにジャックダニエルズを半分程度まで注いだ。

同じく、中身が無くなって氷りだけになったグラスを見詰めていた千冬のグラスにも注ぐと、千冬はオタクに向いて礼を言う。

「すまん」

礼を言っただ冬は酒の注がれたグラスを持ってオタクに向けた。

その意図を察したオタクもグラスを持って千冬に向くと、軽くグラスをぶつけて、気障な風に顔をキメて言う。

「君の瞳に乾杯」

「・・・小僧がボガートの真似など十年早い」

「同じ歳だっつての」

そんな二人の遣り取りをソルティドッグをちびちびと舐めながら見ていた真耶が言う。

「ボガートって？」

その言葉を聞いたオタクは、信じられないと言った風に真耶を見詰めて言葉を返した。

「ボガートって言うのは、往年の名優、ハンフリー・ボガートの事で、さっきの言葉は名作カサブランカの中の台詞の一つだ」

「はあ・・・あの言葉って元ネタが在ったんですね」

「俺はあの映画のボガートに憧れて、同じタバコの摘み方をしたり、トレンチコート買ったりしたもんだ」

「そうですね・・・映画が好きなんですね」

少し引き気味の真耶が言うのと、オタクが食いついて話を始める。

「ええ、映画は俺の人生の半分と言っても良い。基本的にはアクションや戦争映画が多いが、ロマンスやドラマも素晴らしい作品がある。特にカサブランカは・・・」

等とクドクドと話が続き、気が付けばオタクはジャックダニエルズ

の瓶を一瓶丸々空けてしまっていた。

そして、それに付き合わされた千冬と真耶の二人も随分と呑んだ物
で、好い加減にしろと店を追い出された頃には、三人ともグダグダに
酔っ払って三人四脚の様相を呈しているながらも、ネオンの中へと消え
て行ってしまった。

第七話

「うん・・・ああ・・・っああ・・・」

動き回る死者の如き呻き声を出しながら、オタクは、ゆっくりと横たえていた身体を起こして周囲を見回した。

「何処だ・・・？」

妙に清潔な室内には、小さなテーブルや大型の薄型テレビなどが備え付けられており、間違つても、普段自分が寝起きしている階段下では無いと分かった。

「ベッドなんて久し振りだ・・・」

妙に良く弾むベッドの感触を楽しむ様に、真っ白なシーツを叩くオタクは、不意に訪れる頭の痛みと自身の様に視界が揺れる感覚に嗚咽を漏らした。

「・・・酷え有様だ・・・神様にも祈りたく成ってくる・・・」

吐き捨てるように呟いたオタクは、改めて室内を見回して、自分がどこのホテルに入ったのだと思いつくと、何となくタバコが吸いたくなってテーブルの上に置いてあるソレに手を伸ばした。

「・・・」

二日酔いの頭痛とニコチンを身体に取り入れた事で襲い掛かる視界の揺れに、頭を抑えて堪えるオタクは、一瞬、信じられない物を見て固まった。

「・・・マジか？」

今、自分が乗っているキングサイズのベッドに、もう一人の人物が寝ている事を現す膨らみがある事に気が付くと、次の瞬間に膨らみが起き上がってシーツを払い除けた。

「ん、んん・・・ここは何所だ？」

ボサボサに変なクセの着いてしまった長い黒髪にハスキーな声、一糸纏わぬ白い肌を露出して、その人物は眩き、ソレから隣のオタクを見付けると、珍しく惚けた様な表情でオタクの頬を撫でる。

「・・・気のせいか・・・豚が目の前に居る様な気がするが・・・」

「気のせいならどれだけ良かったか・・・」

思わず眩いたオタクの言葉に、目の前に居る裸体の千冬が眼を見開いて驚き、頬を撫でていた右腕を撓らせてフリツカー気味の拳を顎に叩き込んだ。

「……何故、貴様が居る」

「……つつあゝ……んな事、俺に言われてもしらねえよ……」

殴られた顎を擦りながら答えるオタクに対して、千冬は絶対零度の視線を向けながら身体にシーツを巻き付けた。

「勘弁してくれよ……二日酔いの頭にジューは利く……」

「この状況の方が、遥かに頭に響く……」

そう言いながら、千冬はオタクと同じ様にタバコを啜えて火を着けると、一度深呼吸する様に一服すると、オタクに尋ねた。

「貴様……昨日の事は何処まで覚えている」

「ああ？……あゝ……三軒目の店でテキーラを一気した辺りだ……ソツチは？」

「貴様に続いてラムの瓶を掴んだ所までだ」

互いの言葉を聞いて、どうやら相当に無茶な事をやらかしたと言う事だけは分かった二人は、同時に啜えたタバコを灰皿に押し付けて頭を抱えた。

「夢なら覚めてくれ……」

「貴様を殴った拳が痛む……夢では無い様だな……」

暫くの間、二人揃って項垂れたかと思うと、不意に千冬がベッドから降りて歩き出した。

「如何した？」

「シャワーを浴びてくる……少しは気分が良くなるだろう……」

そう言っつてバスルームに向かう千冬だったが、少し歩いた所で何かに躓いて床に手を突いた。

「一体なん……」

「如何した？」

躓いた物に文句を言おうとした千冬が言葉に詰まり、ソレを怪訝に思ったオタクが尋ねると、千冬とは別の声が上がった。

「アレゝ……先輩……？」

「なん・・・だと・・・?」

間延びした真耶の声が、千冬の下から聞こえてくると、オタクは再び頭を抱えた。

「真耶・・・」

「先輩?・・・ここは・・・」

寝惚け眼で上体を起こす真耶は、目の前の千冬しか眼に入っていない様子で、オタクの存在に気が付かないまま立ち上がって周囲を見回すと、酔いが残っていたらしく足を纏れさせてベッドに倒れ込んだ。

「ううく・・・頭が割れる・・・」

そう言いながら顔を上げると、丁度オタクの姿が真耶の眼に入り、暫しフリーズしてから真耶は叫んだ。

「な、なななななな!!なんで小田君が!!」

慌てて立ち上がる真耶は、自分の姿に気が付いていないらしく、あたふたとするばかりでキリキリ舞いする。

「山田先生」

「は、はい!」

オタクに声を掛けられた真耶は、オタクの方を向いて動きを止めると、オタクの言葉を待った。

「取り敢えず身体を隠したらどうですか?」

「へっ?・・・ええええええ!!」

オタクに言われて、漸く自身が裸体を晒した状態だと気が付き、慌ててシーツを引っ張って被ると、その場に蹲って頭を抱えてしまった。

そんな二人の遣り取りを尻目に、千冬はさっさとバスルームに引っ込んでしまい、千冬のシャワーが終わるまでの間、オタクは気まずい思いで明後日の方向を向き続けた。

「上がったぞ」

そう言ってバスローブ姿の千冬がシャワーから上がって来た頃、オタクは取り敢えずパンツとシャツを身に着けてベッドに座り、真耶はシーツを被って膝を抱えていた。

「それで・・・何か思い出したか?」

手近な椅子に腰掛けた千冬は、足を組んでオタクと真耶に尋ねるが、オタクは首を振って答え、真耶も何も覚えていないと否定した。

「貴様等もか・・・」

千冬自身も明確な事は思い出せず、三人は仲良く途方に暮れた。

「一つ、確認なんだが・・・」

とオタクは前置きをして二人に尋ねる。

「俺達は・・・ヤツちまったのか？」

真耶も千冬も、その事は考えていた。

酔っ払った男女がホテルの一室に一緒に入り、共に朝を迎えて裸体を晒していた。

そんな状況でナニが在ったのか等と言うのは、余程の朴念仁か幼子で無ければ想像が着く事であり、記憶の無い空白の時間に在った出来事は今後の事に大きく影響を及ぼす事だ。

非常に大切な事では在ったのだが、三人は真実を知るのが非常に恐ろしく感じていた。

「私は未経験だが・・・学生時代に破れている」

「男の俺は確かめる術は無いな・・・」

そう言いあつた千冬とオタクは、後は真耶だけだと言う風に視線を向けると、真耶は顔を真っ赤にして顔を埋めて黙り込んだ。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

室内に沈黙が訪れた。

一分か一時間か知れない居たたまれない空気の中、意を決したオタクは二人に向かって口を開いて言った。

「・・・ナニがと言うわけじゃ無いが、取り敢えず済まなかった」

とオタクが言うのと、千冬は深く溜息を吐いて、言葉を返す。

「まあ・・・ナニかが在ったと決定した訳じゃ無いが・・・気にするな。私にも非は在る」

その千冬の言葉に続いて、真耶も顔を上げて言った。

「えくと、私も気にしませんから・・・その・・・気にしないで下さい」

三者三様に言い合って、それから各々、部屋に散らばった自身の服を拾って身に着けると、部屋を後にした。

駅の直ぐ側のホテルだったらしく、千冬が代表でチェックアウトを済ませると、無言でモノレールに乗り込んで学園へと向かい、三人は無言で解散して各自の部屋へと向かう。

時刻は朝の八時、もう暫くすれば朝礼の時間と言う頃で、オタクは珍しく朝食を食べずに教室へと向かった。

「デユフフフｗｗｗｗおはようで御座るｗｗｗｗ」

教室前で意識を切り換えたオタクは、何時もの様に挨拶をしながら教室に入るが、その日ばかりは何時も通りとは行かず、クラスメイト達の視線がオタクに集中して、思わず怯んでしまった。

「な、なんで御座るか？」

戸惑いを隠すことの出来ないオタクに対して、クラスメイトの少女達の間には奇妙な空気が流れ、それから意を決した様にセシリアが前に出てオタクに尋ねた。

「ちよつとよろしくて？」

「オッフｗｗ如何したで御座るか？セシリア氏ｗｗｗｗ」

「この写真は本物でしょ？」

草を生やしながら応じたオタクだったが、セシリアが尋ねながら提示した写真を見ると、オタクは跳び上がりばかりに驚いて、キヤラも忘れて言った。

「こ、コレは！出所は何処だ!？」

セシリアから引つたかった写真には、丁度ホテルから出てくる千冬と真耶とオタクの三人が収められており、完全に週刊誌にスッパ抜かれた様な状態だった。

「もう、学園中に広がってましてよ？」

「マジか・・・マジでか・・・」

がくりと項垂れるオタクは、手近な席に腰を掛けると、写真を見詰めたながら今後の事に思いを巡らせる。

そこへ丁度、渦中の一人で在る真耶が入ってくる。

「おはようございます」

何時も通りに挨拶をしながら入って来た真耶は、直ぐさま少女達に取り囲まれてしまい、眼を回しながら質問攻めに遭い、手渡された写真を見て驚き声を上げた。

「こっつ、コレは!!ええ!!」

完全に混乱する真耶と、項垂れるオタク、そして興味津々でゴシツプに食いつく少女達。

狂乱の教室内に、最後の一人が入ってくる。

「だからどう言う事なんだよ!千冬ねえ!!」

「織斑先生と呼べ!貴様には関係の無いことだ!!」

どうやら千冬も弟に問いたただかれているらしく、珍しく慌てた様子で教室に入ると、真耶とオタクの様子を見て状況を理解した。

「織斑先生!如何なんですか!?!」

「あの豚と付き合っているんですか!?!」

「・・・」

さしものブリュンヒルデも興奮してゴシツプネタに食いつく少女達の力には圧倒されてしまったらしく、千冬は諦めた様に無言で上を向いて現実逃避する。

「あっ!小田!!千冬ねえとはどう言う関係なんだ!!」

自身の愛する姉と関係を疑われている友人に、一夏は剣幕で迫って問いただした。

「お、おとおおおお落ち着くで御座る一夏氏。まだ、慌てる様な時間じゃ無い」

「コレが落ち着いていられるか!!」

アレから暫く経って狂乱の教室は少しだけ静けさを取り戻し、千冬、真耶、オタクの三人はクラスの全員の前で並んで椅子に座って視線に晒されていた。

「小田・・・正直に答えてくれ・・・黒か?白か?」

「・・・お」

「お？」

「オフホワイト・・・」

思わずオタクの口を吐いてでた言葉がそれだった。

「巫山戯ないでくれ・・・重要な事なんだ。お前が俺の兄に成るか成らないかの問題なんだ」

そう言われてしまうと、オタクは巫山戯る事は出来ず、真面目に一夏と向き合った。

「・・・正直な所、分からん」

「分からないって・・・」

「しょうが無いんだ・・・三人とも酔っていて、誰も覚えていないんだ」

「酔っ払ってって・・・お前・・・」

「俺二十五だから・・・」

「そうか・・・じゃあ、大丈夫だな」

「・・・」

「・・・」

「千冬ねえの下着の色は？」

「黒の下とグレーのスポブラ」

「ギルティ!!」

「ちよつま！今のは反則だろ!!」

息を荒げる一夏を宥めながら、オタクは誰か助けはと見回すが、少女達の好奇の視線を集める千冬は腕を組んで黙り、質問の嵐を受ける真耶は俯いて震えるばかり、誰も助けには成りそうにならなかった。

「小田・・・」

「何だよ」

「お前は、責任を取るつもりは在るのか？」

一夏が言った瞬間、教室は静まり返り、全員の視線がオタクに集中した。

「答えてくれ・・・！お前は、姉さんを幸せにしてくれるのか・・・！」

「・・・確かな事は言えん・・・」

オタクのあやふやな答えに対して、一夏は珍しく怒りを滲ませた声でオタクを睨む。

「小田・・・!!」

今にも殴り掛かりそうな雰囲気の一夏に、周囲が固唾を呑む中、オタクは更に続けて言った。

「だが、もしも責任を取らなければいけないければ、俺は自分に出来る最大限の事をするつもりだ」

「と、言う・・・」

「必要ならば人生と命を賭けよう」

「・・・」

「・・・」

オタクの静かな宣言に、一夏は黙ってオタクの眼を見据え、オタクもまた一夏の眼を見詰め返した。

「分かった。小田を信じよう・・・姉さんを頼んだ」

凄くいい顔で言う一夏だが、その直後に頭上から拳が降って来て、頭を抱えて床に転がった。

「勝手に決めるな馬鹿者・・・!」

「うおお・・・!」

「貴様等もそろそろ巫山戯るのは止めて席に着け」

千冬の一喝で事態は収束し、30分遅れで授業を開始する事が出来た。

「因みに小田」

「如何したで御座るか?一夏氏w」

「山田先生の下着は?」

「オッフw一夏氏も男の子で御座るなw w w」

「如何だったんだ?」

「それは勿論w」

「何だ?」

「オフホワイトで御座るw w w」

授業中にそんな話をしていた二人に、千冬と真耶からの鉄拳制裁が下されたのは言うまでも無い事だった。

第八話

「一夏氏、一夏氏」

授業が終わった放課後、オタクが一夏に声を掛ける。

「何だ？」

「一夏氏、拙者と付き合って頂け無いで御座るか？」

オタクが言葉を発した瞬間、教室の中の幾人かがガタリと音を立てて二人の話に耳を傾けた。

「おお、良いぞ」

と言う一夏の返事の次の瞬間、反応を示していた幾人かが立ち上がり、或いは拳を握りしめて歓喜に震えた。

「・・・っ!!」

そんな教室の異様な雰囲気、一夏は怪訝そうに眉をひそめた。

「何なんだ？一体」

「デュフフフwwww一夏氏は知らないなら知らないまま良かった方が良いで御座るw」

一夏の質問に返して、オタクは立ち上がると一夏と共に教室を後にした。

二人が去った教室は暫し、静かにしていた化と思うと、突然一人の女生徒が立ち上がって叫んだ。

「キマシタワー!!」

「キタコレ!!コレで勝つる!!」

「灰色の頭脳が震える!!」

「光が逆流して・・・!!」

それぞれ思い思いに喜びを表す言葉を上げて、一気に騒がしくなる教室の中で、二人の少女だけは違った反応を見せた。

「・・・あの豚あ・・・!!」

「やってくれますわね・・・」

地を這うが如き声を口から漏らしたポニーテールが特徴的な篠ノ之箒と、静かに呟きながら冷たい瞳をした金髪のセシリア・オルコツトの二人は、図らずも同じタイミングで立ち上がると、別々の扉から

教室の外に出て廊下を逆方向へと歩き出した。

しかし、そんな二人の向かう先は同じ場所であり、最終的には対面する様に目的地に到着するのだった。

そんな事を露とも知らない一夏と、何となく察していながらも気にしないオタクの二人はと言えば、アリーナの中央で二人向き合っ互いの愛機を展開する。

「小田とやるのは初めてだな」

「それで御座ったな w w w 出来れば手加減して欲しいで御座る w w w」

「手加減なんてするわけ無いだろ」

「オッフwコレは手厳しいw w w」

少し軽口を叩いて、それから二人の間に言葉が無くなると、どちらからと言う事も無く動きだした。

「ラァッ!!」

互いに向き合ったままで円を描く様に飛ぶと、オタクはショットガンとアサルトライフルを取り出し、一夏は雪片二型を取り出した。

それから、一夏が声を上げてオタクに一気に肉迫して斬り掛かると、オタクは後退しながら左右に細かく動いて攻撃を躲し、腰だめにショットガンを連射した。

「うおっ!?!」

持ち前の反射神経で大きく右斜め後に下がって回避行動を取る一夏だったが、完全な回避には至らず、散弾の一部を左脚に受けて僅かにバランスを崩した。

「狙い撃ちで御座る w w w」

そこへ容赦なくアサルトライフルの20mmを撃ち込むオタクは、一夏を中心にして円を描きながら左に動く。

「クッソ!!」

対する一夏も、何とか攻撃に対応しようとスラスターを噴かして右に旋回するが数発の被弾で、シールドエネルギーを幾分削られてしまい、苦い表情をした。

「まだまだ行くで御座る w w w」

余裕綽々に笑いながらアサルトライフルの引き金を引くオタクだが、消して無駄撃ちは為さず、確りと指切り5点バーストで射撃を行う。機動力が持ち味の白式を纏う一夏は、アリーナの壁際を高速で飛翔してオタクの射撃から逃れようとするが、オタクは無理に追い付こうとは為さずに程々に距離を保って小回りにアリーナ内を飛びながら射撃を続けた。

「オッフｗｗｗｗコレでは弱いもの虐めで御座るｗｗｗｗ」
「何をっ!?!」

オタクの煽りに一夏は過敏に反応してしまい、急激に進路を変えてオタクに向かって行った。

頭に血を上らせたとは言え、一夏も無策に突っ込んだ訳では無く、確りとオタクのアサルトライフルがリロードに入った瞬間を狙って攻撃に出た。

「Sweet Baby ｗｗｗｗ」

しかし、来ると分かっている攻撃を躲すのならば、オタクにも出来ない事では無く、寧ろそれを狙っていたとばかりにショットガンの銃口を向けて引き金を引き、突進してくる一夏に鉛球の雨を浴びせた。

「ぐあぁっ!!」

他のIS様のショットガンとは一線を画する強力な火力の前に、一夏の攻撃は敢えなく失敗して、エネルギーを大きく損失させてしまう。

「まだだっ!!」

だが、一夏は止まらなかつた。

オタクは無駄弾を嫌って五発のバーストで引き金から指を離すが、一夏は止まらずにオタクに向かってきていた。

「フアッ!?!」

驚きに声を上げるオタクに、零落白夜を発動させた一夏が迫り、唯一の武器である雪片を一閃させる。

コレで勝負あったと一夏が思った瞬間、オタクは僅かに後に下がる動きを見せた。

今から回避しても間に合わないと内心ほくそ笑みながら、一夏が雪

片を刀身をオタクのダンボールに叩きつける瞬間、一夏の眼に口角を上げて嗤うオタクの顔が写った。

「奥の手は取って置く物で御座るwww」

その瞬間、ダンボールの胸部の側面のカバーが勢い良く解放されて三本の銃身が姿を現した。

「なっ!？」

両側合わせて六本の銃身から勢い良く撃ち出されたのは長さ15cmの巨大な針で、それが一夏の白式に命中すると強烈な勢いで吹き飛ばされて、白式のエネルギーが尽きた。

「マダマダだねwww」

上空で言い放つオタクに軽い殺意を抱きつつ、一夏は自身の敗北を認めて悔しさに唇を噛んだ。

「あくあ・・・行けると思ったんだけどなあ」

戦いの後、項垂れながら言う一夏に、オタクはスポーツドリンクを差し出して言った。

「一夏氏は少し、思い込みが激しい時があるので御座るwww」

「思い込み?」

「今なら行ける。必ず当たる。その様に思い込み過ぎるから咄嗟の時、予想外の事が起きた時に対応できないので御座る。反射神経が良いからそれに頼るのもいいで御座るが、それでは人間の限界を超えた攻撃には対応できないので御座る」

「じゃあ、如何すれば良いんだ?」

「常に考えるで御座るwww常に最悪の状況を想定して、次の次を考え続けるので御座るwww」

「次の次・・・か」

オタクの言葉に何やら考え込む様子の一夏だったが、暫くすると頭を掻いて声を上げながら地面に寝転がった。

「ダメだ!全然分からねえ!!」

「デユフフフwwwそう簡単に来たら苦労はしないで御座るwww」

頭を悩ませて唸る一夏と嗤いながらスポーツドリンクに口を着け

るオタク、青春の一コマと言った様な二人に背後から声が掛けられた。

「アンタ！この前は良くも!!」

「オツフｗｗｗｗもちつけｗｗｗｗ」

「五月蠅い！このクソネラー！」

乱入して来た鈴に胸座を掴まれて揺さ振られるオタクは、相も変わらず草を生やし続ける。

そんな二人を見詰める一夏は、微笑ましい物を見るかの様に眼を細めて笑う。

「お前ら仲良いな」

「オツフｗｗ一夏氏、まさかの発言に流石の拙者も草も生えないｗｗｗｗ」

「嘘吐け！思いつ切り草生やしてるじゃ無いの！」

普段、一夏が突っ込む筈のオタクのボケに鈴が先んじて突っ込みを入れると、一夏は少し寂しそうにして眉を下げる。

「何か・・・本当に仲良いな」

「・・・もう良いわ・・・何か疲れたし・・・」

「ｗｗｗｗ」

一夏とオタクの二人との遣り取りに、鈴は疲れた様に呟いて一夏の隣に座る。

「喉渴いちゃった。一夏、それ私にも寄越しなさいよ」

「ええく俺も喉渴いてるんだよ。自分で買えば良いだろ？」

「何よ、良いじゃ無い。アンタが買ってきなさいよ」

「まあまあ、落ち着くで御座る・・・こんな事もあるうかとｗｗｗｗもう一本用意して置いたで御座るｗｗｗｗ」

スポーツドリンクを巡って言い合いを始めそうに成る二人に、オタクは何処からともなくスポーツドリンクを取り出して鈴に渡した。

「気が利くじゃ無い」

オタクから渡されたそれを受け取った鈴は、早速という風に蓋を開けて飲み始める。

「デュフフｗｗｗｗ拙者の温もり付で御座るｗｗｗｗ」

「ブフツ!!」

オタクが余計な一言を言った瞬間、鈴はスポーツドリンクを吹き出して咽せながら言う。

「あ、アンタ・・・なんて物を・・・」

「冗談で御座るww冷たいのに温もり付な分けないで御座るww」

「クツソ！後で又焼にしてやる・・・！」

「オッフw鈴ちゃんの冷たい視線にゾクゾクするで御座るwwwありがとう御座いますwww」

鈴の力強い宣言にも何処吹く風で、余裕を見せるオタクに、鈴は内心で本当に実行しようと固く誓った。

「それで、アンタ達何やってたの？」

少し落ち着きを取り戻して鈴が二人に尋ねた。

鈴の問い掛けに、スポーツドリンクを飲んでいた一夏は、ボトルから口を離して説明する。

「いや、ただ模擬戦をしてただけだけど・・・」

「拙者が一夏氏に圧勝して終わったで御座るwww」

「あつそ・・・まあ、アンタの実力なら一夏に勝ち目は無いか」

「鈴は小田の強さを知ってたのか？」

「まあね・・・前に戦ったしね・・・途中で逃げられたけど」

「中々に激しいアタックだったで御座るwww」

「変な言い方すんじゃないわよ！」

若干、置いてかれ気味になった一夏は、再び疎外感を感じるが、オタクに対して思っていた事を聞く。

「そう言えば、小田の機体ってどんな機体なんだ？」

「そう言えば、私も気になってたのよね」

一夏の質問に、話題はオタクの愛機、ダンボールの事に推移し、オタクは二人の視線を受けながら隠さずにダンボールの説明をする。

「大した機体では御座らんよwダンボールは第一世代の純国産ISで御座るw」

「第一世代？」

「デュフフwwコレしか余って居ないと言われて埃を被っていた

のを押し付けられたで御座るwww」

「ISが埃を被ってたって、一体何が在ったのよ」

怪訝そうに尋ねる鈴の言葉は最もな事で、世界に467機しか存在しない貴重なISを死蔵していたと言うのは、恐ろしく無駄な事であり、普通では考えられない事だった。

「まあ、政治的なアレコレが混じるので御座るが、防衛省が初期に手に入れたコアで造ったのがダンボールで造った物の誰も使わなかったので御座る」

技術実証や性能試験の意味で防衛省が一つだけ獲得したコアで造られたのがダンボールであり、目的が終わった後は、装備としての価値は薄いと言う事で死蔵された。

第二世代機がロールアウトする直前位に造られた第一世代機と言う事で国家代表や代表候補は使いたがらず、かと言って多額の予算が投じられて制作された物である為に、そう簡単に解体する事は出来ず、また他の省庁や団体に渡す訳にも行かず、使い道が無かったのだ。

実に日本らしい事情で埃を被る事になったダンボールは、オタクが防衛省に駆け込んで来た事で日の目を浴びる事になった。

「何で解体できないんだ？」

「予算の問題で御座るw防衛予算で造った物である故、解体するにも理由が必要な上に、解体すると財務省に突っつかれて防衛予算が削減されるので御座るwww」

「・・・何か、世知辛いな」

「で、基本的な性能はどんな感じなのよ」

「第一世代で御座るよ？お察しで御座るwww」

第二世代のラファール・リバイブと比較すると、シールドエネルギーは凡そ半分、スラスタ出力は三分の一、推進力は七割、格納領域は六割、基本的な数値は第二世代の量産機に劣る物である。

「それで、あんなに強いのかよ・・・」

「デュフフwww拙者が強いのでは無くて、一夏氏が弱いので御座るwww」

「言い返せねえ」

「まあ、ダンボールにも強みはあるで御座る」

「強み？どんな強みよ」

「構造的、物理的、機械的な強度と重量推力比に信頼性、それとパワーで御座る」

ダンボールは非常に簡素な箱を組み合わせただけの様な構造をしており、露出部分の顔部分だけで、それ故に非常に頑強に出来ている。構成する材料も、チタンとモリブデンの合金と一部タングステンの他、高高度セラミックスやチタン・アルミ合金を使っており、内部の装甲構造もハニカム構造になっている。

防衛省と防衛企業が協力して造り上げたダンボールは、単純な強度や装甲防御だけを取ってみればあらゆるISとは比べ物に成らない程強固であり、また、日本製製品に在りがちな大きく取られた助長性も手伝って、多少の無茶は問題にならない様になっている。

「単純にサイズが小さいで御座るからラファールと比べて推力が低くても、パワーウェイトレシオは圧倒的に勝っているので御座る」

「それは分かったけど、パワーってどう言う事よ」

「いや、そこら辺は詳しくは分からないで御座るが、動力から伝わるパワーのロスが少ないのと、機体強度が高いから高負荷に耐えられると言うことで御座る」

「成る程」

「あく良く分かんないけど、古いけど凄いつて事で良いか？」

「大体、ゲームボーイみたいな物と思えば、おk御座る」

「理解した」

「鈴ちゃんよ」

オタクのダンボールの説明が終わった所で、オタクは鈴に向けて言った。

「なによ？」

「一つ頼みたい事があるで御座る」

「・・・まあ、機体の説明もしてくれた事だし、聞いてあげない事も無いわよ？」

「ありがとうで御座る」

鈴に礼を言ったオタクは、制服の懐から一枚の紙を取り出して鈴に差し出す。

「なによコレ・・・私のサインでも貰おうって言うの?」

「違うで御座る。中を開いて書いてある文字を読ん欲しいで御座る」

何時になく真剣な様子のオタクに言われて、鈴は少し緊張しながら折ってある紙を開いて、そこに書いてある事を眼にした。

「えくと?・・・ほんのう、うずまく・・・こころの・・・」

「違うで御座る!もつと感情を込めて歌う様に!」

「・・・とかしつくして・・・」

「恥ずかしくないで!もつと大きな声で!舌足らずな感じで!でも、少し意地悪な感じで!」

「とかちつくちて?」

「オッフwキタコレー!wwwキタで御座るwww」

テンションを上げて叫び声を上げるオタクに、一夏は訳も分からずオタクを見詰めるだけだが、何かに気が付いた鈴は、肩を戦慄かせてオタクに掴み掛かった。

「あ、アンタねえ・・・これ、完全にア○マスじゃないの!!歌は不味いつて常識よ!!」

「オッフw衝動を抑えきれなかったwww後悔はしていないwww」

「死ぬ!!」

顔面に甲龍の衝撃砲を喰らったオタクは、ピクピクと痙攣しながら地面に沈み、鈴は腕を組んで怒りを顕わにしながらアリーナから出ていった。

「うう・・・死ぬかと思ったで御座る」

「いや、アレで死んでない方がおかしいぞ?」

一夏のしみじみとした突っ込みを受けつつ、オタクは立ち上がって制服に付いた土を払う。

「やはり、怒られたで御座るか・・・しかし、鈴ちゃんも第三の壁を越えられる素質を持っていようとは・・・恐ろしい娘!!」

「だから、第三の壁って何なんだよ・・・」

「それにしても凄い怒り様で御座ったな・・・今井の方の麻美が良かった

ただ御座るかな？鈴ちゃんも72っぽい御座るし」

「72?・・・胸か？」

「オツフw拙者が折角濁した事をwww」

「でも、鈴って72有るか？」

「いや分からないで御座るが72も71訳では御座らんw」

「これ以上、この話は74にしよう」

そう言っただけで締めくくった一夏だが、その直後、一夏の肩が背後から掴まれた。

「誰が72も無いですって？」

「・・・」

「・・・」

「アンタ等、覚悟は出来てるんでしょうねえ？」

「鈴」

「なあに？一夏あ」

「そんな72重要な事か？偉い人は言ってたぞ？貧乳はステータスだ希少価値だって」

「一夏」

「鈴？」

「死になさい」

「www」

「アンタは惨たらしく死になさい」

この日、二人は固く誓った。

もう二度と、72も言わないと。

第九話

「ラーメンが食いたい」

授業終了後、軽く自主練をしていた一夏は、唐突に呟いた。

「ラーメンだど?」

「学食で食べれば良いじゃ無いの」

一緒に自主練をしていた鈴と箒が揃って言うが、一夏は首を振って、その意見を却下する。

「違うんだ」

「何が違うのよ」

「いや、学食のラーメンも確かに美味しいんだが、そうじゃ無いんだ。もつとこう・・・コツテリしたガツツリした奴が食いたいんだよ!」

力強く自分の気持ち宣言する一夏に対して、二人は今一気持ちは理解できずに首を傾げるが、一夏の下に見方が現れる。

「話は聞いたで御座る!!」

「小田!」

どこからともなく湧いて出て来たオタクは、一夏の言葉に同意して言った。

「拙者も常々思っていたで御座る・・・この学園のラーメンはアツサリした物ばかりだと・・・濃厚コツテリ系のラーメンが無いと・・・醬油と塩と味噌しか無いと・・・!」

「ああ、そうだとも! そうであろう! もつとニンニクの利いた。背脂がタツプリ入ったジャンキーな味が欲しいんだ!」

互いの意見に共鳴して、がっちりとした熱い握手を交わす二人を、鈴と箒は冷めた目で見ながら全く理解出来ないと言を振った。

「夢に見ていたんだ・・・分厚いバラチャーシューと濃厚な豚骨系のコツテリスープ、セルフサービスで入れ放題の摺り下ろしニンニクに、しつこい程に存在を主張する真っ白な背脂・・・一度食べれば最早離れる事は出来ない強力な中毒性」

「間違いなく身体に悪いと分かりつつも、それでも、スープの最後の一滴まで楽しみたいと思う暴力的な旨味、免罪符の様に堆く積まれた大

量のもやし、そこに存在するのは偉大なる先人達の残してきた足跡……！」

詰まる所、要約すれば二人とも魚介豚骨濃厚スープか、背脂チャツチャ系のガッツリした奴が食いたいと言う、ただそれだけの話である。

そんな二人の意見に同意できる女子が、この学園にどれだけ居るだろうか、いや一人も居ないはずだ。

どこぞのアイドルと小泉さん以外の女の子は、アツサリ醤油か塩ラーメンしか食べないと言う作者の偏見と共に話は進み、一夏とオタクは共に校外へとラーメンを食べに行くと言う事で話がまとまった。

どう言う訳か、鈴と箒も連れて行けと言う主張を聞き流す事が出来なかった一夏とオタクは、渋々ながら同行を許し、妙に時間の掛かる二人の準備が終わるのを校門で待つ。

「なんでシャワー浴びて制服着るだけなのに、こんなに時間掛かるんだ？」

「デュフフフww古来よりおにやのこ様には金と時間が掛かると相場が決まっているので御座るwww」

「そうなのか？千冬姉は早いぞ？シャツとGパン着て財布と携帯持っただけだったからな」

「オッフw担任の女子力の低さに拙者、どんな顔をすれば良いか分からないで御座るwww」

「笑えば良いんじゃないか？」

等と言う遣り取りをして更に十分ばかりが経過した頃、漸く二人が姿を現した。

「お待たせー！」

「遅えよ。どんだけ時間かかってんだよ」

「女の支度には時間が掛かる物なのだ！」

「デュフフフwwでは、早速向かうで御座るwww」

オタクの言葉を合図に四人は駅に向かい、そこからモノレールで暫く揺られて、本土に渡った。

「で、何処に行くんだ？」

行き先を尋ねる一夏に、オタクが答える。

「デュフフフwwwこんな事も有ろうかと！リサーチは終わっているで御座るwww」

高らかに宣言したオタクは、淀みない足取りで歩き始め、目的の店へと向かう。

「あの店で御座る」

そう言って指差したのは、赤い看板に大きく白い文字で書かれたシンプルな店名、L字型のカウンター席と二つのテーブル席の然程大きくない店内は、掃除はされているが、少し見窄らしい印象を受ける。

「地元に住った頃から良く食べていたで御座るwww」

「この店か・・・岩手にもあるんだな」

何やら懐かしそうに感慨深く言う男子二人と、無言の女子二人の四人は、スライド式の扉を開けて店内に入り、迷う事無くカウンター席に着いたオタクに続いて他の三人も席に着いた。

「チャーシュー大で」

「ネギ味噌の中」

「早!」

「ちよつと待て・・・えくと、味噌ラーメンの中を御願います」

「鈴はまだか?」

「ちよつと待ちなさいよ!・・・えくと、えくと・・・醤油ラーメン小!」

注文を終えた4人に、威勢の良い返事を返した店主が麺を鍋に投入して器の準備を始め、ラーメンが出来上がるまでの間、オタクと一夏は黙って待った。

「何だかシンプルな店だな」

「本当ね〜何か実家の店があった頃を思い出しちゃうわ」

二人の話す声を耳にしながら、ラーメンを待つ一夏とオタクだったが、不意に一夏がオタクに尋ねた。

「そう言えばネギ丼とかチャーシュー丼は頼まないのか?」

「今日はラーメンだけの気分で御座るwww」

「そうか・・・しつかし、本当に久し振りだ。何だか入学式の時よりも

緊張してきたな」

「デユフフフｗｗｗｗ拙者も丸一年ぶりくらいで御座るなｗｗｗｗ」

そして、二人の待ちかねていた品が、店主の手によって渡された。
「お待ちー！」

今や遅しとラーメンの入った器を受け取った一夏とオタクは、挨拶をして一口目のスープを啜る。

それから備え付けの摺り下ろしニンニクを隣の女子二人が引くほどに入れて、思い思いの順番で食べ始めた。

「美味過ぎる!!」

小田は、まずはスープに浸ったノリを食べ、次に厚く切られたチャーシューに箸を延ばす。

対する一夏は、ニンニクを良くを絡ませてネギと一緒に麺を一気に吸い込む。

「・・・」

「・・・」

暫しの間、無言でラーメンを食べるだけの機械になつてしまった二人に対して、女子二人もそれぞれ思い思いにラーメンを食べる。

「出来た・・・!」

「ん、んん!ううんっ!」

鈴は大きなレンジにスープと麺とチャーシュー等を盛ったミニラーメンを作つて笑みを浮かべ、箸は豪快に麺を頬張りながらもスープが飛び散るのに気を付けて食べる。

何だかんだ言いながらも、女子二人もラーメンに夢中になつて食べ進め、程なくして全員が完食すると代金を支払つて店を出た。

「ああ・・・美味かった・・・!」

「いやはや・・・このジャンキーな味はクセになるで御座るなｗｗｗｗ」

「だな・・・二人は如何だった?」

互いに感想を言つて、一夏は鈴と箸にも話を振つた。

「まあ・・・アレだ・・・美味しかったな」

「そうね。たまになら良いわね」

「そうだろう!」

自分と同じ意見だと言う事が余程嬉しかったのか、一夏は満面の笑みを浮かべて二人に近づくが、それと同時に鈴と箒の二人が後退った。

「？如何したんだ？」

「うむ・・・一夏・・・それと豚」

「アンタ達ニンニク臭いから近寄らないで」

この後、男子と女子の間に大きな溝がある事を再確認したオタクと一夏は、学校に着くなりシャワーを浴びる様に命じられ、オタクは何時もの手洗い場で水浴びをして歯を磨いた。

「ふう・・・」

さっぱりしすぎる程さっぱりしたオタクは、適当なベンチに腰掛けると、懐からマルボロを取り出して口にくわえた。

「校内は禁煙だぞ」

「固い事言いなさんな・・・それに、女史も吸う気満々じゃ無いですか」
そう言つて、オタクは愛用のジツポで火を着けると、隣に座った千冬に火を着けたまま差し出した。

「ん・・・」

オタクの手にあるジツポでタバコに着火した千冬は、同じタイミングで煙を吐いた。

「・・・ん？」

「如何しました？」

「貴様・・・ラーメン屋に入ったな？」

「分かりますか？」

驚異的な嗅覚でオタクがラーメンを食べた事を看破した千冬は更に臭いを感じ取つて、店と種類まで当てて見せた。

「・・・この臭いは・・・醤油豚骨だな。摺り下ろしたニンニクの臭いと、チャーシューの脂の香り・・・あの店か」

「良く分かるな」

「まあ、私も餓えていると言う事だ」

大凡、年頃の女性の言う事では無い気がするのだが、オタクは何も言わずにフィルターを口に付けて深く息を吸う。

「この学園のラーメンも美味しいが、少しアツサリしすぎだ」

「女史以外は不満は無いのでは？」

「・・・癩に障るな・・・真耶を誘っても言葉を濁されるし、一人で行っても良いが・・・帰ってくると怪訝な顔をされる」

「女史は、そんな事は気にしないと思っていたが？」

「私も人間だぞ？それに女だ」

「・・・」

「何か言え・・・まあ、女一人でラーメン屋に居ると、何かと五月蠅い輩がいる。その程度でどうにか成る訳では無いが・・・態々、小蠅に集られに行くのも何だ」

憂鬱そうに言う千冬は、少しだけ寂しそうに見えた。

「拙者で良ければ、付き合いますぞ？」

「・・・考えて置くが、その気持ち悪い喋り方は私の前では止めろ」

「サーセンw」

「・・・つち・・・豚」

「・・・何ですか？」

「今夜付き合え・・・私も久し振りにラーメンが食いたくなつた」

「前回の様なのは御免ですよ？」

「アレは、男のお前の責任だ・・・それに、私の身体が見られたのだから役得だろう」

「程々ですよ・・・真耶先生は？」

「真耶は今夜は仕事だ」

「では、1900に駅で」

「ああ・・・」

そう言葉を交わしてオタクと千冬は一端別れ、その夜に居酒屋で軽く飲んでから屋台のラーメンで締めて学園に帰った。

それを目撃した真耶によって二人は追求を受け、そこから話が漏れて一夏の中でオタクが義兄に成ると言う話が現実味を帯びてきたと言う考えが浮上するが、それは別の話で有る。

第十話

「ゲリラスリラ連れてってマニラ、口当たりが良いのはバナラ……」
月曜日の朝、学園の廊下に妙に良い声の歌声が響く。

最早、校内の誰もが見慣れた存在のオタクが、大きな身体を揺らしながら上機嫌に歌って廊下を進む。

「アレ、コレ、ソレ、そう、だからCIAに言えよ！さっさと出てけつてな！」

上機嫌で廊下を歩くオタクは、授業後の日課となっている自主練のためにアリーナへと向かう。

何時もは一夏も一緒なのだが、今日は一夏は幼馴染みの箒に拉致されてしまったために一人だ。

「www」

特に理由無く笑うオタクを、通り掛かった女生徒達は一瞥して直ぐに視線を元に戻す。

最早オタクの存在は、学園に取ってはありふれた日常の一部となっており、その奇行に態々注目する様な生徒も大分少なくなっている。

「デュフフフwww」

それにしても異常に上機嫌なオタクであるが、更衣室に入った瞬間、目の前に顔を俯かせるセシリアが現れて、思わず悲鳴を上げそうになる。

「静かに……」

セシリアは、素早く動いてオタクの口を封じ、更に薄暗い更衣室に引き込んで扉を閉めた。

この間、僅か1秒に満たない内に行われた早業である。

「……」

「い、一体何で御座るか？セシリア氏」

オタクは、室内に引き込まれた勢いで尻餅を着いてしまい、自身を見下ろす小柄な少女に、訳を尋ねる。

しかし、セシリアからの返事は無く、穏やかである筈なのに何処か鬼気迫る雰囲気の彼女に見下ろされるだけだった。

「・・・」
「・・・」

そうして暫く経って、好い加減に立ち上がろうとオタクが動いた瞬間、セシリアが口を開いた。

『貴方は・・・』

「なんで御座るか？」

『貴方は一夏さんの事をどう思っているのですか？』

非常に聞き取りやすいクイーンズイングリツシユで尋ねるセシリアに、オタクはその言葉の意味を少しだけ考えてから、言葉を返した。

『・・・何を仰っているのか理解が及ばない・・・』

『惚けないで下さい！・・・私は分かっているですよ！』

『一体何かね』

『貴方が一夏さんの事を想っている事です！』

いきなりとんでもない事を母国語で口走るセシリアに、オタクは一瞬、思考がショートして絶句する。

『ニッポンにはDOUJINと言う文化があると聞いています。そして、そのDOUJINの中では、貴方の様な汚らしい大男が度々登場してきて悪事を働くと聞き及んでいます！』

セシリアは、オタクが何も言わないのを良い事に更に言葉を重ねてオタクを糺弾する。

『更に！貴方の様な男は、あろう事か思い人の居る相手を無理矢理に手込めにして、あまつさえ！その様子を見せ付ける事に快感を覚える倒錯者とも聞き及んでいますわ！』

『待って待って！ちよつと待て！』

『待ちません!!』

漸く思考が回復したオタクが声を上げるが、セシリアに一喝されて出鼻を挫かれてしまい、そこにセシリアが更に言葉を続ける。

『他にも！最近では女性の様な男性を手込めにするだけで無く、敢えて！敢えて！普通の男性を自分好みに調教してしまう恐ろしい殿方もいると聞き及んでいます!!』

「それは創作の話だ！」

『嘘を仰い！わたくしは全て存じておりますわ！貴方が、このDOU JINの中に出てくる様なNTR魔と呼ばれる人物だと！そして、貴方が一夏さんと織斑先生の二人で姉弟丼をしようとしていると!!』
興奮したセシリアは、何処からか数冊の同人誌を取り出して手で叩きながら、オタクに突き付ける。

『一端落ち着こう』

『いいえ！落ち着いてなどいられません！一夏さんの危機に落ち着ける筈など無いですわ!!』

全く話を聞こうとしないセシリアにオタクも如何して良いか分からなくなつて、段々と泣きたい気持ちになつた。

そんなオタクの内心などお構いなしと言うように、背柄シリアは尚も話を続ける。

『例えば！このDOUJIN、メ○ボ○茶○臭○ぎの本によれば！金髪的女性や茶髪の大和撫子の様な女性を始めとして、様々な女性をありとあらゆる方法で手込めしています!!』

「いや・・・」

「此方のカ○ナ○スの本によると、細身の女性の様な男性を、薬物や腕力に任せて陵辱し！更に巧みな話術と心理的な圧力を持って洗脳まですしています!!』

「あのな・・・だから・・・」

『それに、此方！サ○ク○ンの本では幼気な少女の弱味に付け込む様な卑劣な・・・』

突然、激しく言葉を吐き出していたセシリアの口が閉じられ、明らかに動揺した様に息を呑んだ。

一体如何したのかとオタクがセシリアを見ると、一冊の同人誌を見て震えているのが分かった。

『コレは・・・』

眩きながらマジマジとその同人誌を見るセシリアは、徐々に頬を朱に染めながらオタクを見やり、今度は真っ青に顔色を悪くする。

そして、手に持っていた同人誌を取り落として震えながら自分の両肩を抱く様にして身を縮こませる。

「おい、どうし・・・」

様子がおかしいセシリアにオタクが声を掛けると、セシリアはビクリと身体を跳ねさせて、後退る。

『ち、近づかないで下さいー!』

「ハア?」

『だ、ダメですわ!』

「何がだ!」

『今のこの状況!、貴方、わたくしに乱暴するつもりですわね!そのD O U J I N みたいに!』

「ちよっ・・・おまつ!」

意気なりとんでもない事を口走ったセシリアに、オタクが踏み出して抗議しようとすると、セシリアは有らん限りの声で悲鳴を上げた。

「う、うるせえ!」

『や、止めて下さい・・・!わたくしには一夏さんと言う、心に決めた方が・・・』

完全に立場が逆転して、まるで本当に同人誌の中の様な光景になってしまった事で、セシリアは更に被害妄想を膨らませて、自身の貞操の危機に恐怖した。

「コレ・・・俺、悪くないよね・・・」

誰も答えないにもかかわらず、確認するように呟くオタク。

今この場に誰かが入ってきて、この光景を見れば、間違いなく誤解されそうな見た目ではあったが、それでもオタクは無実である。

『ああ・・・お母様・・・わたくしはこのまま、獣の様に猛り狂う殿方に、純血を散らされてしまいます・・・』

「妄想が激しすぎるだろ」

『きつと、途轍もない眼に遭わされるに違いありません・・・わたくしの手を掴んで組み敷いて、獣欲のままに処女を奪い、子供を孕むまで犯されるに違いありません・・・』

「嫌に具体的だな」

『ああ・・・天国のお母様・・・序でにお父様も・・・申し訳御座いません・・・オルコツト家の血を汚してしまうセシリアをどうぞお叱り

下さい・・・』

「俺と父親に失礼だと思わないのか？」

段々コント染みた遣り取りは、互いに独り言を言い合っているだけであり、既に亡き両親に懺悔の言葉を呟いたセシリアは、先程までと打って変わって眼を見開き、決意に満ちた表情で言い放つ。

『さあ！来なさい！決してわたくしの心は折れませんわ！例え、この身体をどれ程汚されようとも、心までは好きには出来はしませんわ！』

「勘弁してくれ・・・」

本格的に疲れた様子のおたくは、力無く呟いた。

その次の瞬間、ゆつくりと更衣室の扉が開け放たれ、薄暗い室内に光が差し込む。

「・・・」

「な、なな、何をしているんですか？」

『ああ・・・やりましたわ！助けが来ました!!』

扉を開けて二人を見た真耶は、顔を真っ赤にして尋ね、それからセシリアの声を聞いた瞬間に、頭から煙を吹き出して叫んだ。

「は、は、破廉恥です!!」

「誤解だああ!!」

「全く・・・貴様は一々面倒事を起こさなければ気が済まないのか」

「俺は無実だ」

「・・・まあ、今回に関しては貴様に非が無いのは分かった」

アレから、騒ぎを聞いて駆けつけた千冬によっておたくは意識を刈り取られ、その後事情聴取と監視カメラの映像を確認した事で無実が証明された。

「・・・オルコット」

「・・・はい」

「あまり面倒を起こすな」

「・・・申し訳御座いません」

オタクに非が無い事が分かり、両者の間で交わされた会話の内容からセシリアに非がある事が分かると、セシリアは千冬によってコツテリと絞られた。

「真耶」

「はい・・・」

「お前ももう少し冷静に行動しろ」

「はい・・・」

また、騒ぎを大きくした一助を担う真耶も千冬によって絞られ、始末書の提出が学年主任によって命じられた。

「まったく・・・それにしても、この大量の同人誌は何だ？」

「それは・・・」

「取り敢えずこの本は全て没収だ。それとオルコットは反省文の追加だ」

「はい・・・」

「拙者・・・悪くないのに」

拗ねたように呟くオタクの言葉に、千冬が言葉を返した。

「あんな疑われる様な状況を作ったお前にも責任は有る。それに密室に男女二人つきりと言う状況は客観的に見て誤解されても仕方が無い上に、監視カメラが無ければ、完全にアウトだ。コレからは気を付けろ馬鹿者」

「・・・」

千冬の言葉を最後に、オタクとセシリアは職員室を出て、暫くの間無言で佇んだ。

「その・・・」

「・・・」

「申し訳御座いませんでした・・・」

改めて、謝罪の言葉を述べるセシリアに対して、オタクは暫く黙ったままで何も返さなかったが、一つ息を吐くとセシリアに言葉を掛ける。

『以後は慎みを持って気を付けなさい。お嬢さん』

『はい・・・気を付けます』

偉く丁寧で古風な言い回しをしたオタクに、セシリアは神妙な面持ちで返した。

『うむ、であるならば、この話はここまでにしよう。』

そう締めくくったオタクは、廊下を歩き出して寮へと向かうが、その後をセシリアが続いて声を掛けてきた。

『所で貴方、随分と変な喋り方をしますわね』

『そうであろうか？私自身としては、実に平素で平常の言葉を述べているつもりであるが？』

『一々時代がかっていて古臭い言い回しや単語が多くて・・・何だが、御爺様かひい御爺様よりも昔の方と話しているみたいですよ』

そう告げられて、オタクはたと気付いて理由を言った。

『それは恐らく、私が英語を学ぶに当たって、模範として選択した本が古く格式高い物であるからに違いない』

『何を讀んだのです？』

『ウィリアム・シェイクスピア、ジョン・ミルトン、オスカー・ワイルド、名著と呼ぶに相違ない文芸を用いた』

『ああ〜』

納得したように声を漏らすセシリアは、こんな人間も居るのだと思いい、オタクに対しての謎を深めたのだった。

「一応、他の喋り方も出来るで御座るwww」
「？」

オタクが前置きして少し黙ると、疑問符を浮かべるセシリアに言葉を投げ掛けた。

『おう。この腐れマ○コの阿婆擦れアマ。なに上の穴を開けてやがるんだ。口に突っ込んで欲しいのか。』

『もう良いですわ・・・』

『なに生意気に口でクソ垂れやがって。巫山戯た事抜かすと、そのデカケツをファックして垂れ流しになるまで使い倒すぞ！クソ娼婦の娘の淫売女』

英語で話すオタクは古風な言い回しの紳士風の話しか、海兵隊仕

込みのキタナイスラングしか喋られず、余計にオタクに対するナゾガ
深まるだけだった。

「この方は普通に喋る事が出来ないのでしょうか・・・」

第十一話

土日を挟んだ月曜日、新たな1週間の始まりに真耶の驚くべき言葉が放たれた。

「転校生のシャルル・デュノアさんです」

色白に金髪の華奢な身体の転校生は、一夏と同じく良く似合う男性用の制服を身に纏っていた。

「フランスから来ました。シャルル・デュノアです。よろしく御願います」

その後起こった事は想像に難くなく、窓硝子が割れんばかりの黄色い悲鳴が響き、戸惑うような転校生と驚いて眼を見開くオタク、喜色満面の一夏と、三者三様の男子の顔が見ることが出来た。

「俺、織斑一夏って言うんだ。よろしくな」

「うん、知ってるよ」

転校生シャルルの世話係に任命された一夏は、早速と声を掛けて三人目の同胞を歓迎する。

世界的な有名人でもある一夏に自己紹介をされて、シャルルは笑いながら応じる。

「僕の事はシャルルって呼んでよ」

「ああ！じゃあ、俺の事も一夏って呼んでくれ」

見目麗しい二人の遣り取りを、教室の女生徒達は、眩しい物を見る様に眺める。

「いいわ〜滾るわ〜」

「夏×シャル・・・いや、ここは敢えてのシャル×夏か・・・」

「一夏さんのヘタレ攻めも良いですね」

「いや、先生、ここは王道に一夏さんの強気攻めも良いでしょう」

大分、教室内の腐界化が進んでいる様子で、ここに千冬が居れば間違いなく出席簿が飛んできた事だろう。

だが、残念ながら千冬は今ここには居らず、教室の中はカオス化する一方だった。

「・・・」

誰も彼もが浮かれ騒ぐ教室内に在って、ただ一人だけ異様なほどに静かで平静を保つ人物が居た。

ソレこそが我らがオタクその人であり、転校生に対しても一切興味を持たずにスマホの画面に集中している。

「ああ、そうだ紹介するよ。もう一人の男子の小田だ」

一夏がシャルルにオタクの事を紹介するが、オタクはやはり顔を上げずにスマホに集中する。

「あゝ・・・小田?」

反応の返ってこないオタクを訝しんで再び声を掛けると、突然オタクが声を上げて立ち上がった。

「フゝ!!ハハハッ!!」

「!!」

「!!」

余りの事に一夏とシャルルが驚くが、そんな事は全く気にしないオタクは、更にヒートアップして叫び声を上げた。

「キタコレ!!キタコレで御座るゝ!!」

「お、小田っ!?」

「コイコイコイコイコイコイコイ!!」

見れば、オタクは奇声を上げながらもスマホを両手で確りと握り、親指を忙しなく動かして何かのゲームをしている様だった。

そして、遂にオタクは右手でスマホを握ってガッツポーズを決めて一際大きな声で叫んだ。

「ウイー!!!」

「テキサスロングホーン!?!」

随分懐かしい言葉を思わず叫ぶ真耶、何が何やらと着いていけないシャルル、頭を抱えてグツタリとする一夏、狂乱の教室に乱入者が現れるのはこの僅か2秒後の事で、その乱入者とは、隣の教室の鈴の事だった。

「ちよつとアンタ!!チート使ったでしょうチート!!」

「デュフフフフフフ言いがかりは止して頂きたいw w w 実力で御座るよw w w じw つw りよw くw w w」

「？」

気になったシャルルがオタクの持っていた手まほの画面を覗くと、そこには大きく描かれたWINの文字と、ゲームの画面だった。

「可笑しいわよ!!なんであの距離で当てられるのよ!!絶対にチートよ!!」

「伊達にFPS歴長くないで御座るwwwこんな楽勝で御座るwww」

「あ、コレ今人気のヤツだ」

「・・・まったく・・・千冬ねえが居たら怒るぞ・・・」

目を覆った一夏が呟いた瞬間、ぞくりと冷たい殺気のような物を感じ、ゆっくりと後を振り向いた。

「安心しろ。もう怒っている」

「げえ!千冬ねえ!!」

言うが早いか、千冬の出席簿が一夏の脳天に突き刺さり、序で鈴の側頭部に叩きつけられた。

「つ~~~~~!」

「ぬああああ・・・!」

千冬が存在に気が付いたオタクは、ゆっくり千冬に向いて口を開く。

「ジャーンwジャーンwジャーンwww」

「誰が関羽だ」

こんな時でも煽りを忘れなかったオタクは、千冬の素手の拳骨を顎に受けて床に仰向けに倒れた。

「貴様等何時まで巫山戯ている。さっさと授業の準備をしろ。一時限目はIS実習だ」

「え〜と・・・僕は如何したら・・・」

「笑えば良いと思うで御座るよ・・・」

「あつ、それも知ってる」

シャルルの呟きを最後に全員が移動を開始した物の、結局五分ほど授業の開始時間が遅れつつ、一時限目がグラウンドで始まった。

千冬の言うとおおりIS実習が一時限目なのだが、今回は二組との合

同授業となり、普段の倍の人数が集まっている。

この時、漸く正気に戻ったオタクは、転校生に自己紹介のために声を掛けた。

「www申し遅れたで御座るwww拙者の名は」

「知ってるよ?」

「おほっ?」

「オダ君って言うんでしょ?」

「オッフwwwデユノア氏www」

「何?」

シャルルがオタクの名前を言うと、オタクは嗤いながら言葉を返す。

「拙者の名前を間違っているで御座るwww」

「ええっ!?! そうなの!?!」

「www拙者の名前はオダでは無くオタと言うので御座るwww」

衝撃の事実、オダでは無くオタだったオタク、フルネームだとオタクで有り、名前からして生まれつきのオタクだった。

「ご、ゴメンね」

「いいで御座るwww間違いは誰にでもあるで御座るwww」

「ありがとう」

間違いを笑って許したオタクに対して、シャルルが輝く笑顔で礼を言うと、オタクは発作の様に心臓を抑えてしゃがみ込んだ。

「オッフwwwデユノア氏の笑顔に浄化される所で御座ったwww」

「・・・オタ×シャル・・・シャル×オタか・・・?」

「あのオタク、割と受けが多い希ガス」

何処にでも湧くホモオの恐怖に身の毛がよだつ感覚に襲われる男子三人だが、一夏に関しては別の衝撃を受ける。

「退いて下さ〜い!!」

「上から来るぞ!!」

「っ!!」

オタクが警告を発し、一夏が空を見上げると目の前にはISを纏った真耶が迫っており、誰もが予想したとおりに押し潰されて羨ましい

事になる。

「デュフフｗｗｗｗ一夏氏ｗｗｗｗ何と裏山けしからんｗｗｗｗ」

「一夏あああ!!」

「一夏さん!!」

「ちよつと待てええ!!俺は悪くない!!」

理不尽な怒りを一夏に対してぶつけるセシリアと鈴は、それぞれが専用機を展開して一夏に向かう。

「これどうしたら良いのかな」

如何すれば良いのか分からずシャルルは、一夏の事を心配する様に呟いて、隣のオタクに眼を向ける。

しかし、オタクから返ってきた言葉は一夏の助けになるような物では無かった。

「大丈夫で御座るデユノア氏ｗｗｗｗアレがジャパニーズハーレムラブコメと言うもので御座るｗｗｗｗ一夏氏に取っては日常茶飯事だから気にしなくても大丈夫で御座るｗｗｗｗ」

「そうなんだ・・・アレがジャパニーズラブコメ・・・」

この後、真耶がその実力の一端を見せ付けて鈴とセシリアの二人を相手に完封勝利して見せて、千冬の言葉で締めくくられると、1年初の実機を使った実習が始まる。

「各専用機持ち各班に分かれて実習を始めろ。先ずは歩行からだ」

千冬が言うなり、生徒達は二つに分かれると一夏とシャルルの元に殺到した。

「うゝむw清々しいほどに誰も来ないで御座るｗｗｗｗ」

「見てないで手伝え!小田!」

「ｗｗｗｗ無理で御座るｗｗｗｗ」

「オタクくん!助けてよ!」

「オッフwただ今ｗｗｗｗ」

「おいっ!!」

オタクは一夏の助けを求める言葉を一蹴し、その次に掛けられたシャルルの言葉に直ぐさま反応して駆けつけた。

一夏の抗議の言葉も何のその、オタクはシャルルの元に駆けつける

なり、身体をくの字に曲げて右手を差し出した。

「拙者も第一印象で決めていたで御座るwww」

「え、ええっ!？」

「コイツ・・・平然と裏切りやがった・・・」

「やはりオタク×シヤル」

戸惑いの声を上げるシヤルと、焦り叫ぶ一夏、やはり辺りが混沌としてくると、千冬が声を上げて生徒達を律する。

「貴様等好い加減にしろ！」

この千冬 of 言葉によって初めて二人に殺到していた女生徒は解散し、専用機持ちの生徒の元に分散して集まる。

「デュフフwwwやはり拙者は一人で御座るwww」

ソレでもオタクの元に来る生徒は居らず、コレに関しては千冬も予想が着いていたのか、何も言わずに見ない振りをする。

「真耶てんてー」

「な、何ですか？」

「拙者暇で御座るwww」

「そうみたいですな・・・」

オタクに声を掛けられた真耶も如何反応して良いのか分からず、苦笑いしてみるしか無い。

真耶からも芳しい反応を得られなかったオタクは、余りにも暇すぎるが為に、用意されていた打鉄に乗り込んでみた。

「オッフwwwダンボールより動きやすいで御座るwww」

普段よりも動きやすく、また視界の位置が高い事に新鮮な驚きを観じつつ、暫く歩いてみた後、何を思ったのかオタクは打鉄を纏ったまままで踊り出した。

「フォー!!」

某キングオブポップスの様な無駄にキレッキレのダンスを見て、千冬は溜息を吐いて額を抑え、真耶は如何して良いか分からず戸惑うばかりだ。

「無駄に上手い・・・」

何時の間にか、オタクに視線が集中し始めて、ソレを感じ取ったオ

タクは動きを止めて直立不動の姿勢を取る。

そこから、首を上下させてリズムを取り始めると、軽くジャンプして着地と同時に激しく踊り出した。

「ハアWドッコイショーWドッコイショーWWWソーランWソーランWWW」

「ぶふっ!!」

「な、なんでソーラン節・・・!」

余りにも予想外過ぎるオタクの行動に、見ていた生徒の何人かが堪えきれずに笑い出してしまった。

「ヤッレンWソーランWソーランWソーランWWWハイハイWWW」

「クツソ!こんな事でクツソっ!」

「無駄にキレが・・・!」

このオタクの奇行は千冬の拳骨で留められるまで続き、合同授業を狂乱の渦へと陥れた。

「千冬ねえ、凄い怒ってたぞ」

午前の授業が終了し、一夏とオタクが何時も通り昼食を取ろうとすると、シャルルもソレに着いて行こうと動く。

「僕も連れてって貰っても良いかな?」

「いいとも〜WWW」

「懐かしいな・・・」

男子三人、仲良く食堂へと向かおうとするが、そこに箒が一夏を連れて行こうとして、一悶着起こり、最終的には何時ものメンバーと一緒に食事を取る事になる。

「こう言う時に空気を読めないのが一夏氏の一夏氏たる所以ですなWWW」

「まあ、普通はあそこで一緒に食べ様なんていわ無いよね・・・」

オタクとシャルルは隣り合って座って購買で買ったパンを食べながら、目の前で繰り広げられている一夏を中心とした弁当の食べ

させ会いを眺める。

「しかし、オタクくんはよく食べるね」

「wwwコレでも少ない方で御座るwww」

紙袋一杯に入った大量の惣菜パンを、掃除機のように次々と口の中に放り込むオタクに対して、シャルルはナポリタンドッグをゆつくりと食べる。

実に対照的な二人の姿は、容姿以外を見れば親子の様につも見えるかも知れない。

「デュノア氏は何故、今まで表に出てこなかったの御座るか？」

「えっ!?!え、えくと・・・何でだろうね？」

「・・・何故で御座ろうかwwwまあ、大して重要な事では無いで御座るなwww」

「と、ところで、オタクくんはアニメが好きなの？」

「デュフフwww拙者のライフワークで御座るwww」

あからさまに話題を逸らそうとオタクに尋ねるシャルルに対して、オタクは嬉々として自身の趣味について語り出す。

「実は僕もアニメが好きなんだ」

「オッフwwwこんな所に同志がwww」

あからさまにテンションの上がったオタクは、自分の見てきた様々な作品について語りだし、シャルルも黙って話を聞いた。

つつい好きな事に着いて饒舌になりすぎるオタクの気持ち悪い習性を遺憾なく発揮するオタク。

そんなオタクに対してもイヤな顔一つしないシャルル。

オタクは内心で、シャルルの事を天使か何かでは無いかと思いついていた。

「小さい頃はどんなアニメを見ていたの？」

「色々で御座るが、再放送のキテレツ大百科はよく見ていたで御座るwww分かるで御座るか？」

「え〜キテレツ大百科か〜・・・」

「分からないなら大丈夫で御座るwww」

「・・・そんなの全然分からないなり〜」

「オツフｗｗｗｗ知ってるｗｗｗｗ知っているで御座るｗｗｗｗ」
「えへへ」

「何か、二人で盛り上がってるな・・・」

怨めしそうに、一夏がオタクとシャルルに話し掛けると、オタクは何時を通りに噛いながら返す。

「ｗｗｗｗ拙者、デユノア氏が気に入ったで御座るｗｗｗｗ」

「お、俺の事は遊びだったのか!？」

「勘違いしないでくれｗｗｗｗ一夏氏も大事で御座るｗｗｗｗ」

「小田!!」

「一夏氏ｗｗｗｗ」

突然始まった謎の寸劇、箒セシリア鈴の三人の冷たい視線が二人に突き刺さり、慌てふためくシャルル可愛い。

「まあ、オタクとシャルルの仲が良いなら良い事だな」

「拙者、たまに恋に落ちそうになるで御座るｗｗｗｗ」

「うえええ!？」

「だが男だ」

「ソレが良いｗｗｗｗ」

「えええええ!？」

「シャルルは一々反応が面白いな」

「一夏氏、ここで謎のサドツ気を発揮ｗｗｗｗ」

「も、もう!からかわないでよ!」

一夏とオタクによって弄られるシャルルは、怒った様に頬を膨らませて顔を背けるが、ソレがまた一夏の嗜虐心をくすぐる。

オタクとの付き合いいで、段々と一夏も悪い方向に染まりつつある事が判明した箒達三人は、早急にオタクをどうにかするべきだと改めて確信し、不本意ながらも共同戦線を張る事になる。

騒がしい昼休みを過ぎしつ、オタクと一夏は学生生活を謳歌するのだった。

第十二話

「イクで御座るよ……」

「だ、ダメだよ……」

息を荒げ、汗を滲ませたオタクとシャルルは互いに向き合って言葉を掛け合う。

緊張した面持ちのオタクに対して、シャルルは少し余裕を持った様子で微笑みを浮かべるが、その額には玉の様な汗が浮かんでおり、少しだけ疲れた様子が見て取れた。

「……っ！」

動き出したのはオタクからだった。

オタクは強張らせた身体を無理矢理に動かしてシャルルを攻める。

「ひゃっ……！」

そんな、オタクの突然の動きに、シャルルは驚きに悲鳴を上げて、逃げる様な仕草を見せるが、オタクがそれを許さない。

まるで猛進する猪の様にシャルルに迫り、逃げようとしたシャルルを後から激しく責め立てた。

「逃が……さない……で……御座る……よ！」

「あ、ああ……!!」

抵抗する手を失い、最早蹂躪されるのみと言う風なシャルルは、それでも懸命に身を振ってオタクの魔の手から逃れようとする。

しかし、既に主導権はオタクにあり、シャルルは徐々に削られていく自身の護りを、ただただ声を上げながらオタクのするに任せるしか無かった。

「ああああ……だ、ダメっ！」

「ダメじゃないで御座るよ」

オタクは嫌らしくネチこつい声を上げながらシャルルを攻め続け、シャルルの願いを無下に否定して更に攻め手を強めた。

「だ、ダメえ！……これ以上は……！」

「さあ、これからがお楽しみで御座るよ……拙者の手でヒイヒイ言うが良いで御座る」

シャルルには最早手は残されてはいなかった。

無垢な蕾を力づくに手折られるが如く、オタクの手に掛かって蹂躪されて無惨な姿を晒すしか無かった。

「デュフフフ。コレで終わりで御座る」

最後の瞬間、オタクが特徴的な笑い声を上げながらトドメとばかりに身を一瞬引いて舌舐めずりをする。

「ハア・・・ハア・・・っ！絶対に負けない・・・！」

ここまで来て、それでも尚、心を折られずに強い意志の宿った瞳をオタクに向ける事が出来るのは、真に心の強い証拠であったが、口で言うのとは逆に身体には力が入っておらず、ビクビクと痙攣しているのが見て取れる。

「その口も今の内で御座る」

そして、オタクの最後の攻撃が始まった。

「ひゃっ！あああああ!!ダメエエ!!」

「デュフフフ口で如何言おうと、身体は正直で御座るなあ？」

「ああああああああ！」

激しいオタクの攻めに、とうとうシャルルの視界がぼやけ、全くの無抵抗になってその巨体を寄せるオタクの為すがままになってしまった。

「コレで・・・！フィニッシュで御座る!!」

最後の一撃、オタクの一撃がまさにシャルルを貫かんとした瞬間、シャルルの瞳に意志が宿り、最後の力を振り絞って声を上げた。

「グレー・スケイル!!」

「ふあっ!？」

その瞬間、パイルバンカーの強力な衝撃がオタクとダンボールを突き抜け、アリーナの端から端まで吹き飛ばされた。

「www模擬戦ですが何か？www」

余りの衝撃にオタクの頭が可笑しくなってしまったのか、訳の分からない事をほざいて立ち上がる。

「大丈夫？オタク君」

「デュフフフwww大丈夫で御座るwww」

第二世代機最強の威力の兵装を喰らって尚、無事であると言う、装甲だけは本当に凄まじいと言わざるを得ないダンボールのお陰で、幸いと言うべきか、オタクにも特に怪我らしい物は無く、その様子にシャルルは胸を撫で下ろす。

「良かった。オタクが余りにも強いものだから、つい使っちゃったけど、無事で良かったよ」

「デュフフフフフフワマン兵器を装備するとは、デュノア氏も中々鬼畜で御座るwww」

この前、無人機に工業用の杭打ち機で留めを差した癖に、どの口が言うのかと言う突っ込みは、流石の一夏も出来ず、オタクとシャルルは互いにISを解除して汗をタオルで拭った。

「はあ・・・流石に五回連続で模擬戦はキツかったかな?」

「拙者、このままでは痩せてしまっで御座るwww」

「それは良い事なんじゃ無いか?」

「オッフwww一本取られたで御座るwww」

笑い合いながら模擬戦の感想を伝え合う二人の下に、一夏が白式を纏って降り立った。

「何か、凄かったな・・・」

「デュフフフフフフ一夏氏も何れは出来るようになるで御座るよwww」

「イヤ、そう言う意味じゃ無くて・・・」

若干前屈みの様な気がする一夏が言い淀み、一体何のことか分からないシャルルが首を傾げ、ただオタクだけが笑う。

「でも、確かにオタク君は凄いやね」

「それで御座るか?」

「そうだよ。操縦時間だっつて、そんなに多くは無いですだよね?」

入学から約二ヶ月、授業以外でのISの操縦時間は一日に平均一時間ほどと計算して週七時間、行事や時間の都合により訓練出来ない日なども考慮すれば、どんなに多くても三十時間を超える事は無い。

代表候補生と比べて十分の一以下の操縦時間で有るにもかかわらず、オタクの操縦技術の向上速度は確かに速く、それに加えて機体の

基本スペックも考えれば異常なほどの戦闘能力を持っていると言える。

「デュフフフww飛べねえ豚は只の豚で御座るwwまあ、マジレスすれば、人生経験と昔取った杵柄と言うやつで御座るww」

射撃は特級クラスの腕前を持ち、嘗て受けた訓練の賜と言うべき戦闘に関する知識を武器に戦術を組み立て、更に貴重な実戦経験も糧にして現在の戦法を確立している。

何気に操縦時間に対しての模擬戦回数が多い事と、只の訓練生や代表候補生では経験していない本物の戦闘を経験している事が非常に大きかった。

「まあ、一夏氏の白式よりも融通の利く戦い方が出来るのが大きいで御座るww」

「それだよー」

「オッフwwどうしたで御座る」

オタクの話を聞いて、一夏が声を上げる。

何事かと思つてオタクが尋ねると、一夏が常々疑問に思つていた事を尋ねた。

「いや、千冬ねえに銃は使えないのかつて頼んだら、何か小難しい事を言われて無理だつて言われたんだ。何か、アブソリュートターンがどうのこうのつて」

一夏が千冬から言われた事は、要するに偏差射撃の難しさや、携行弾数の計算、コリオリ力、重力、湿度、温度、風向等の干渉による射弾のズレの修正の難しさの事である。

その事に付いて尋ねられると、オタクは嗤いながら答えた。

「デュフフフww拙者そんな難しい事は考えていないで御座るww」

「ええっ!?!」

オタクの言葉に驚いた一夏に、シャルルが説明を付け加える。

「そう言う難しい計算が必要なのは超長距離の狙撃の時とか、曲射弾道の砲撃とかの時で、普段の戦いの時はあんまり考えないかな?」

「wwアリーナで戦うだけならサイトに入れて引き金を引けば当た

るで御座るよwww」

更に付け加えるのならば、偏差射撃に関してもFCSのサポートを受ければ問題なく修正可能であるし、何なら他の面倒な計算もコンピュータで十分である。

ここに来て千冬の射撃素人疑惑浮上である。

「そんな・・・そんな事って・・・」

「ま、まあ、織斑先生にも何か考えがあるんだよ・・・きつと」

「www織斑女史は割と適当な所があるで御座るからなあwww案内、面倒だったと言う線も棄てきれないで御座るがwwwコレもマジレスすると、単に白式の容量不足が理由だと思おうで御座るwww」
「そう言えば・・・」

オタクの言葉を受けて、一夏は自身の愛機の空容量の少なさに思い至り、結局は銃は装備できないと言う事に思い至った。

「あくあ、結局銃は使えないのか・・・」

「あははは・・・残念だったね・・・」

「いや、いいさ・・・もう、諦め掛けてたし」

既に時刻は良い頃合い、三人はそろそろ夕食にしようと言う事で訓練を終える事にして、アリーナから立ち去り食堂へと向かった。

食堂では、相も変わらずオタクが山のような食事を抱え、一夏とシャルルの二人が周りからの注目を受ける。

「凄い量だね・・・」

「ああ、何時もこんなんだ」

オタクの食事の量に圧倒されるシャルルに、見慣れたと言わんばかりの一夏、しかし、ここで一夏がシャルルの食事を見て尋ねる。

「・・・シャルルは随分少ないんだな」

「えっ!?そ、そうかな・・・ハハハ！僕、小食なんだ」

「?まあ、身体も小さいしな・・・そんなもんか?」

焼き魚定食の一夏に対して、シャルルの夕食はシーザーサラダとポタージュ、バターロールが二つと食べ盛りの男子にしては明らかに少なく、少し変に思った一夏だが、人それぞれかと思って直ぐに興味が無くした。

この後、三人には特に何事も起こらず、シャルルと一夏は同室のため、一緒に部屋に戻り、オタクは何時も通りの階段下の寝床へと向かった。

「はあ・・・シャルル、良い子だったな・・・もしも息子を持つとしたらあんな感じが良いな・・・まあ、結婚も無理だろうが」

言っていて切なくなつたオタクは、少し気分転換をしようと外に出て、何時もの人気無いベンチに向かうが、そこには先客が居た。

「どうも」

「・・・消灯近くだぞ」

「固いこと言いなさんな。アンタだって学園は禁煙だろ？」

軽く言葉を交わして、オタクはベンチのそばに立ってマルボロを取り出す。

友人の人首から貰つたマルボロは既に残りが少なくなつており、それが余計に切なさを増した。

「・・・ふう」

ゆつくりと煙を吸い込んだオタクは、紫煙を吐き出しながら溜息を吐き、初夏の夜空を見上げる。

「デュノアの事だが・・・」

「あ？」

「気を付けた方が良くかも知れんぞ」

「一体何の事で？」

不意に千冬がオタクに言葉を掛けるが、オタクには何の事か分からず聞き返す。

「・・・貴様」

「ん？」

「いや・・・気付いていないなら別に構わん」

「何の事だよ」

意味深な事を言う千冬を怪訝そうに見詰めるオタクだが、千冬からの答えは何も無く。

その直ぐ後に千冬は吸いかけのタバコを携帯灰皿に落として去つて行った。

「・・・何なんだ？更年期か？」

大分失礼な事を言いつつ、去って行く背中を見送ったオタクは、フィルターのギリギリ迄少ないタバコを堪能して寢床に戻る。

翌日の朝、オタクはHRの時間中に予期せぬ衝撃を受ける事になるのだが、そんな事は今の段階では想像も着かない事だった。

第十三話

「おい、起きろ」

「んむ？」

朝、HR中にもかかわらず惰眠を貪っていたオタクは、聞き慣れない少女の声によって起こされ、ゆっくりと瞼を開いて前を見れば、銀髪の謎の少女が片目で睨んでいる事に気が付いた。

「……誰で御座ろうか」

思わず尋ねるオタクだったが、次の瞬間に左の頬に鋭い痛みが走り、それが目の前の少女に平手打ちされた事に依る物だと気が付くと、立ち上がって少女に向かった。

「ぶ、ぶったね……！」

まさか自分がこの台詞を言う事になるうとは思いつかないオタクだったが、次の言葉が続けることが出来ない。

「……」

「……」

二人の身長差は、正に大人と子供ほどもあり、如何して良いかわからない二人が無言でにらみ合うと、少女がオタクに告げる。

「……しゃがめ」

「……」

オタクは、若干期待しつつも言われたとおりに膝を曲げて屈み、少女の身長に合わせてやる。

そして、その次の瞬間に、オタクが期待していたもう一撃の張り手がオタクの右の頬を捉えた。

「……二度もぶった……親父にもぶたれた事無いのに！」

「……あ、甘ったれるな軟弱者！」

「イヤそれ違うで御座る！」

一体、何を見せられているのだろうかと言う気持ちになるクラスメイト、名作のワンシーンの再現をしようとした友人に頭痛がしてきた一夏、何となく元ネタは分かるが詳しくは見えないシャルル、多様な反応が教室内で見受けられて、カオス化するが、そんな事を気にせ

ずに渦中の二人は言葉を交わした。

「・・・もしや、貴様は織斑一夏では無いのか？」

「www違うで御座るwww一夏氏は隣の人物で御座るwww」

まさかの人違いであると言う事実には気が付いた少女は、気まずそうにオタクを見上げて言った。

「・・・その・・・すまない」

「デュフフwww気にしないで御座るwww拙者の方こそ、お陰であのシーンが再現出来たで御座るwww」

「ああ・・・そうか・・・所で、あの続きはどう言う・・・」

少女が言い掛けたところで、この教室の主と言うべき教師が扉を開け、ナチュラルにオタクの後頭部を叩いて座らせてHRをさっさと終わらせてしまう。

件の少女は、千冬によって職員室まで引き摺られて行ってしまい、オタクは少女の名前も知ることは出来なかった。

「大丈夫？タク」

「大丈夫だ。問題ない」

シャルルに声を掛けられたオタクは、直ぐに顔を上げて無事である事を伝える。

普段よりも後頭部が盛り上がっている様な気がしたシャルルだが、それは取り敢えず気にしないことにして、オタクと話を続ける。

「あの子とは知り合いなの？」

「www拙者にあんな美少女の知り合いはいないで御座るwww冗談キツイで御座るwww」

「初対面であの対応かよ・・・」

自分の身代わりで叩かれる事になった友人を労り礼を述べなければと思う一方で、何処までもフリーダムな友人の姿に、やるせなささえも感じる一夏は、思わず目を覆って呟いた。

「www所で、あのロリツ子は誰で御座るか？」

オタクが疑問に思った少女の名を尋ねると、一夏がそれに答える。

「確か・・・ラウラ・ボーデヴィツヒって言ってたな」

「ラウラ氏で御座るか・・・名前から察するにドイツ人で御座るな」

「うん、ドイツの代表候補生だつて」

「好い加減、このクラスもお代表候補が集中しすぎて御座るなwww」
それは確かにと周りも心中でオタクの言葉に同意しつつ、口には出さなかつた。

「所で、シャルルはオタクの事を名前で呼ぶようになったのか？」

「うん、僕から名前で呼びたいって言ったんだ」

「www別に許可を求める程の事でも無かつたで御座るwww」

「・・・そうか」

シャルルとオタクの二人が仲良くなる事に、謎のジェラシーを感じる一夏は、自身の思いに戸惑いつつ笑い合う二人を眺めた。

「いいわく尊いわく」

「まさかの三角関係キタコレ！」

「授業を始めるぞ。席に着け」

一夏を眺めながらクラスの女子達が妄想力を高める中、千冬が声を掛けながら教室に入り、教壇に着く。

「・・・」

最近、胃痛に悩まされる様になってきた千冬は、弟と仲良くしろとオタクに言うべきか、女子達を取り締まるべきか、それとも弟の思考を正すべきか、密かに思い悩むのは誰にも知られる事は無かつた。

その後の授業自体はつつがなく進み、昼休みに入つて、午後も何事も無ければと思ひながら内心嘆息する千冬を余所に、オタクは教室を出てトイレへと向かう。

しかし、それを呼び止める者が現れた。

「おい」

「オッフwww雉も撃ちに行けないとはwww」

「?・・・何を言っているのか分からんが・・・まあ、良い」

本人の意志など知った事かと言わんばかりの態度で、オタクを引き留めるのは、件の転校生ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

彼女は、オタクを引き留めて振り向かせると勝手に話を始めてしまう。

「先程はすまなかつた」

案外、律儀にオタクに頭を下げ、謝罪するラウラに、オタクは軽く手を振って謝罪を受ける

「気にしなくても良いで御座るよ。誰しも間違いは有るで御座るwwww」

至極大人な対応をするオタクに、ラウラは息を吐いて顔を上げ、少し安心したような表情を見せる。

「余り上位者に頭を下げられると居心地が悪いで御座るwwww少佐殿」

「・・・貴様も軍人か？」

「今は陸曹長で御座るwwww」

今のオタクは陸上自衛隊陸曹長として任官している事に成っており、所属は中央即応集団隷下である。

「陸曹長・・・Sergeant Majorか」

自衛隊の曹長は、諸外国軍に置ける上級曹長相当の階級で、自衛隊内で最上級の下士官階級で、オタクは、このIS学園卒業後には部内選抜として陸上自衛隊幹部候補生学校に進む事が決定しており、それまでは陸曹長の階級を名乗る事に成っている。

ダンボールが陸上自衛隊の装備品であり、武装も基本的に陸上自衛隊の物や試験装備を使う事、一応元自衛官である事等から、今のオタクの身分が決定したわけだが、本人の希望は完全に無視した形である。

「貴様も苦勞しているようだな・・・」

「デュフフフwwwwそれなりに楽しんでるで御座るwwww」

「フンツ・・・この連中と来たら、ISを玩具かアクセサリーかと勘違いしている様なやつばかりだ。全く嘆かわしい」

ラウラは、ISの扱いについてかなり不満を持っているらしく、どう言う訳か初対面のオタクに愚痴をこぼした。

「拙者はどうとも言えないで御座るなwwww、ISが玩具扱いならそれに越した事もないで御座るし、かと言って安易に扱うべきでも無いと思っで御座るwwww」

「・・・どう言う事だ？」

「一応、アラスカ条約で兵器として扱わないと言う建前もあるで御座るし、兵器というのは使われていない時にこそ真の価値が有るので御座るwwwそれは国が平和だという証拠で御座るwww」

「・・・それもそうだな・・・私は軍人として少し軽率だったかも知れん・・・」

「少佐殿はマダマダ若いで御座るwwwコレからで御座るよwww」

「そう言ってくれるか・・・」

通り過ぎる女生徒の多くが事案、援交、(21)、等という単語を思い受けべている事など露とも知らず、傍から見ると非常に怪しい関係に見える二人は、同じ様な歴史を持つ二つの国の軍人と国防組織の一員としての身分を持つ物同士だからなのか、妙に打ち解けて意気投合していた。

「そう言えば・・・」

「如何してで御座るか？少佐殿」

ふと思いつ出した様に、ラウラがオタクに尋ねる。

「曹長はやはりガ○ダムが好きなのか？」

「ガン○ムは好きで御座るよwwwまあ、俄で御座るがwwwそう言う少佐殿もしているので御座るなwww」

「ああ、私の副官がニッポンのアニメーションを好んでいてな」

と言う、ラウラの言葉を聞いて、オタクは遠くドイツに居ると言うラウラの副官に勝手なシンパシーを感じ、何れ相まみえたい物だと心中で思う。

「そう言えば、その副官のクラリツサが妙な事を言っていたな・・・」

「なんで御座るか？」

「私の事を希に代行殿とか、大隊指揮官殿とか妙な呼び方をしてくるのだ」

「・・・」

その言葉を聞いて、オタクの中の副官のイメージがオリジナルな笑顔で固定されてしまう。

「・・・やはり、会わない方が良さそうだな」

「？何か言ったか？」

「www何でもなくて御座るwww」

そろそろ我慢していた尿意が限界を迎えそうになり、オタクはラウラの前を辞して遠く離れた唯一の男子トイレへと向かう。

校舎内の男子トイレは職員用トイレの一つを使う事に成っている為、三人の男子生徒は一々職員室近くの職員用トイレまで移動せねばならず、元々男子トイレなど存在しないから仕方が無いと思いつつも、不満には感じている。

「オツホwシャルル氏では御座らんかwww」

「えっ！た、タク？如何したの？」

「wwwトイレで御座るwwwシャルル氏もそう御座ろう？」

「う、うん・・・そうなんだけど」

「ならば一緒に参ろうwww連れションで御座るwww」

「そ、そうだね・・・」

トイレの前でシャルルに会ったオタクは、そのままシャルルも一緒に連れて男子トイレへと入る。

オタクは僅かにシャルルの言葉の歯切れが悪い事に気が付きつつも、特に気には止め無かった。

男所帯での生活が長く、同性での遠慮という物が無いオタクに取って、馴れない事に戸惑っている位にしか思わなかったのだ。

「しかし、元は女子トイレだと思うとwww少し興奮してくる御座るなwww」

「え!?そ、そうだね・・・」

トイレの中は元女子トイレと言うだけあって、男性用小便器など存在せず、大きめの手洗い場と四つ並んだ個室だけが存在する薄ピンク色の空間である。

実は、一夏とオタクが初めてこのトイレを使った時は甘い花の香りの芳香剤に少し戸惑い、未だに些か馴れないのは、二人だけの秘密で有る。

「では、拙者はコッチへ」

オタクは、シャルルに一言言つて一番手前の個室に入り、後に残されたシャルルは、暫し戸惑いながら一番奥の個室に入る。

シャルルが個室に入って暫くすると、水を流す音がトイレ内に響き、オタクがシャルルに声を掛けた。

「シャルル氏は流しながらするタイプで御座るかw w w」

「え!?!う、うん、そうだよ!」

「珍しいで御座るなw w w」

「そ、そうかなフランスでは皆こうするよ?」

「そうなので御座るかw w w」

何故、声が上がっているのだろうと疑問に思うオタク、そして妙に水を流すのが長く、それがずつと水洗のスイッチを押し続けているからだと思に至ると、オタクはシャルルに声を掛けた。

「シャルル氏」

「何かな?」

「人それぞれだとは思って御座るが、余り流しすぎるのは少し問題な気がするで御座るよ?」

「あ、あははは・・・そうだね、気を付けるよ」

それから、用を足し終えたオタクは水で流して個室から出るが、シャルルはまだ出てくる気配が無い。

別に待っている必要は無いのだが、一緒に入っておきながら、置いて出ると言うのも変な気がしたオタクは、シャルルが出るのを待つ事にする。

しかし、それにしてもシャルルの用を足す時間というのは妙に長い気がしてもいた。

すると、シャルルの入って居る個室からまたもや奇妙な音が聞こえる。

「・・・シャルル氏」

「もう、なに?オタク」

「シャルル氏は小の方でもトイレトペーパーを使うので御座るか?」

「え!?!」

シャルルが大便をしていた様子は無く、ならば小便をしていると言るのが普通の考えだが、それにしてもトイレトペーパーを巻き取る

音が聞こえてきたのは奇妙過ぎる。

一体、何に使うのかと思つてシャルルにな尋ねれば、シャルルもあからさまに動揺して言葉に詰まり、コレは何か怪しいとオタクは感じる。

「シャルル氏？」

「え、えくと……その……」

やはり言葉に詰まって真面な返答は返つて来ない。

が、その瞬間、オタクはたと一つの可能性に気が付いた。

その思いついた可能性が事実ならば、確かに辻褄が合う。

「シャルル氏」

「えくとえくと……その……」

「いや、すまなかつたで御座るシャルル氏」

「え!?!」

「拙者、デリカシーに欠けていたで御座る……シャルル氏の置かれて
いる状況に思い至らず申し訳ない」

「え、くと、もしかして気付かれちゃつた?」

「……この事は内緒にしておくで御座る」

「……」

重い沈黙が個室の扉を隔てた二人の間に落ちて、暫くの間の無言が
二人を支配する。

「その……僕……僕は……!」

「言わなくて良い!」

シャルルが何かを言おうとした瞬間、オタクが珍しく声を荒げて制
止した。

「良いんだ……言わなくて良いんだ」

「タク……」

「大丈夫だ。俺達は友達じゃあないか……それに俺はお前よりも年上
で人生経験は豊富かつもりだ……流石にこんな経験は初めてだが」

「……騙すつもりは無かつたんだ」

「分かつてる。お前がそう言う奴じゃ無いって言う事は分かつてる」

「……」

「我慢・・・出来なかったんだろ？」

「うん・・・うん？」

優しい声色のオタクの言葉に、シャルルが頷きながら肯定の言葉を発するが、その直ぐ後にシャルルは違和感に気が付く。

「タク？我慢って？」

「分かっている・・・そりゃ・・・初めての女子トイレ・・・もとい元女子トイレだ・・・思春期男子なら我慢できなくて当然だ・・・恥じる事は無い」

オタクは思い至つたのだ、シャルルがナニをしていたのか、興奮した思春期男子がトイレの個室に入って用を足す以外で紙を使う事など、一つしか無い。

オタクは、無遠慮で無神経な己を恥、そして、恥を搔かせてしまった友人に対して申し訳ない気持ちで一杯になった。

「その・・・すまなかったな・・・俺も考えが足りなかった・・・」

「え」と・・・

「本当に申し訳ないと思っている・・・その・・・先に出るな・・・お前はゆつくりとすると良い」

そう言い残してオタクはトイレから出ると、一度後を振り向いて再び前を向く。

そこへ、丁度一夏がやって来て声を掛けた。

「よう、今出た所か？」

「それで御座るwww」

「そうか・・・じゃあ、俺も・・・」

そう言つてトイレの中へ入ろうとする一夏を、オタクは前に割り込んで止める。

「何だよ」

「・・・今は・・・今は、中には入らないで欲しいで御座る」

「何でだ？」

「今、中にはシャルル氏がいるので御座る」

「それで？」

「・・・察してくれ」

「・・・あ、ああ・・・そう言う・・・」

「事で御座る・・・くれぐれも」

「分かっているよ。知らない振りをすれば良いんだろ」

男同士、同じ境遇の者同士で通じ合った二人は、未だシャルルが中に残る男子トイレに背を向け、そつと離れていった。

一夏は仕方が無いと、急いで寮まで走って用を足し、オタクは昼食を取ろうと食堂へ向かい、その後三人が集まった時は、オタクと一夏はシャルルには何も言わず、しかし、温かい眼差しで迎えた。

第十四話

ラウラが転入してきた二日後、オタクが二日休みを取った次の日の事だった。

久しぶりに学園外で羽を伸ばし、憂鬱な気分を引き摺って登校したオタクは、教室に近づく度に奇妙な違和感を覚えていた。

「・・・」

学園全体が妙に浮き足立ち、同学年の女生徒達が時折、黄色い声を上げて身悶え、何やら妄想にふける生徒も見受けられた。

「コレは・・・一夏君が何かしたか？」

この異常事態に際してオタクが一番始めに思いついたのが、年の離れた友人が何らかの問題を起こしたと言う事であり、奇しくもその予想は正しい物だった。

「オープンセサミー」

そう言いながら扉を開けるオタクは、気分はどこぞの吸血鬼だが、見た目的には寧ろウォーモンガールのSSで、密かに誰かが突っ込みを入れる事を期待していたが、その期待に答える者は無く、教室の中はここまでの廊下よりも奇怪な雰囲気が充満していた。

「コレは・・・」

まず目に付いたのが一夏である。

普段ならば声を上げてオタクに挨拶をしてくる筈の彼は、かなり集中した様子で机に向かい、ISに関するテキストやマニュアルを読み耽っている。

次に目が行くのが一夏の幼馴染みの篠ノ之箒だ。

彼女も自分の席に着いて机に向かうのは一夏と同じだったが、一夏とは違い、何やら苦悩した様子で頭を抱え、しかし、時折頭を掻いてみたり髪を弄ってみたりと、随分忙しそうに青春の熱いパトスを現している。

「やあ、おはようタク」

「オッフwおはようで御座るシャルル氏www」

「昨日は如何したの？」

「ちよつと野暮用がありましたwwww」

オタクはシャルルは何時も通りの雰囲気である事に密かに安心し、気になる事を尋ねる。

「シャルル氏」

「ん？何？」

「色々尋ねたい事はあるで御座るが、何があったので御座るか？」

「ああ、それは・・・」

シャルルは、オタクに昨日起こった出来事を話す。

曰く、放課後にラウラが鈴とセシリアをボコボコにした挙げ句、一夏に喧嘩を売り、それを買った一夏がアリーナの障壁を破壊して乱入、済し崩し的にラウラVS一夏・シャルルの戦闘に発展、見かねた千冬の仲裁により学年別トーナメントで決着をと言う事に成る。

しかし、話が更に拗れたのはここからで、箒が一夏に交際を申し込むが、その事が学園中に知れ渡り、何処かでねじ曲がったのか、優勝者は一夏と付き合えると言う噂が流れてしまった。

色々と紆余曲折を経て、一夏はシャルルとペアを組んでラウラを打倒しようと言う事になった。

「どこのつまり何時もの一夏氏で御座るな」

「何時もの事なんだ・・・」

オタクが一言で纏めると、シャルルはゲンナリとした風に呟く。

オタクとしては、正直な所を言うとしてシャルルが一夏とペアを組めればと思ひもするが、既に決まっているならば仕方が無く、後はランダムに決められると言うらしいペアに成る人物と如何向きあおうかと悩んだ。

その後の授業も全員が上の空状態であると言う事以外は恙無く進み、放課後にオタクは千冬に呼び出されて職員室に姿を現した。

「拙者のペアが決まったで御座るか？」

「ああ・・・正直言つて貴様のペアを決めるのには非常に苦心した。貴様と組むと聞かされた相手が正気を失いかねんからな」

「オッフwwww手厳しいwwww」

「・・・まあ、私が選んだ者ならば貴様とペアと言われても特に問題は

無いだろう」

「ほほう。織斑女史が言うとは、随分信頼しているご様子」

「まあな」

「それで、拙者のペアは何方で御座ろうか」

「もうそろそろ来るはずだ」

千冬が言うと、職員室のドアが開けられてそのペアの女生徒が入ってきた。

「失礼します。織斑教官、ただ今参りました」

「先生と呼べ・・・ボーデヴィツヒ、貴様のペアはこの豚だ」

「はっ!」

豚と言って話を通じる辺り、物申したい気分を駆られるオタクだが、言っても仕様が無いと半ば諦め混じりに嘆息する。

「よろしく頼むぞ曹長」

「此方こそ少佐殿」

まあ、オタクとしては個人的にはラウラには好感を抱いている節があり、他の女生徒と比べれば遥かにやりやすいかとも思つて、千冬の判断に感謝する。

「では曹長、早速訓練を行う。着いてこい」

非常に軍人らしい、率直で明瞭な物言いのラウラに言われたオタクは、一礼をして職員室を辞し、ラウラの後に続いてアリーナへと向かう。

特に専用のスーツなどを着用しないオタクはダンボールがあればそれだけで事足りる物で、何の準備もせずに廊下を進む。

その道中、オタクの前を歩くラウラがオタクに声を掛けた。

「曹長」

「なんで御座るか?」

「曹長は織斑一夏とは親しかったな」

「それで御座るな」

「・・・手心を加えるか?」

ラウラの言葉に、オタクは迷う事無く口を開いて言葉を発した。
「有り得ないで御座る」

「本当か？」

「少佐殿」

ラウラの確認する様な言葉に対して、オタクは一度言葉を句切り、それから強い意志を込めて言う。

「それは俺に対しても、一夏に対しても酷い侮辱だラウラ・ボーデヴィツヒ少佐。俺は勝負となった以上全力を尽くして勝利を取りに行く。友人だからこそ手を抜くと言う事はしない」

オタクの言葉を聞いたラウラは立ち止まってオタクに振り向き、その眼を見上げて無言で佇み、それから再び前を向くと、歩きながら言った。

「すまなかつた曹長。非を認めて素直に謝罪しよう。お前なら共に戦うに値する兵士だ」

「wwwありがとうで御座るwww」

背丈だけを見れば、まるで親子の様な二人は、共に並び立って進む。目標は共に立ち塞がる敵を倒し、織斑一夏、シャルル・デュノアコンビの打倒、及び優勝である。

今ここに、一学年最強コンビが誕生してしまった。

「で、なんでお前が敵に回ってんだよ小田」

「デュフフwwwサーセンwww」

夕食時、オタクは何時も通りに一夏と夕食を取っている。

オタクは学年別トーナメントと普段の生活は別と考えており、オタクの事を信用したラウラもオタクの意志を尊重して何も言いはしなかった。

しかし、一夏としては思わずにはいられない様で、頭で分かっている、何処か裏切られたような気分になってしまっていた。

「一夏氏は少佐殿・・・ラウラ氏の事は嫌いで御座るか？」

「・・・嫌いって言うか、なんて言うか・・・アイツは鈴とセシリアの事を痛め付けたんだ」

「まあ、一夏氏の言わんとする事も分からなくはないで御座るよ」
「なら」

「だけど、拙者は特に少佐殿には何も悪い感情はないで御座る。その時に現場にいれば分らないで御座るが、少なくとも今の拙者は少佐殿には悪感情はないで御座る。寧ろ好感を持っているで御座る」
「・・・」

「別に、一夏氏にも同じ様に考えろとは言っていないで御座る。人によつて感じ方思い方は違つて御座る。ただ、折角同じ学び舎で学ぶ者同士、ただ憎しみ会うだけでは寂しいではござらんか」
「・・・そうかもな」

まだ、少し納得の行っていない様子の一夏を、オタクは微笑ましく思いながら夕食のラーメンを啜り、一夏も豚カツ定食のカツに手を伸ばした。

「隙ありで御座るwww」

「あつ！テメエ！」

隙を見て一夏のカツを一切れ奪つたオタクに、一夏はお返しとばかりにチャーシューを奪う。

「www」

「・・・何か、馬鹿らしくなつてきた」

そう言つて何時もの通りに食事を終えた二人だが、その後は一夏がもう一度注文をするのをオタクは見逃さなかつた。

「一夏氏、カツ定食だけでは足りなかつたで御座るか？」

「え!? あ、いや、実はシャルルが少し気分悪いみたいでさ」

うどんでも持つて行つてやろうと思つてと続けて言われたオタクは、ならば自分も見舞いに行こうかと言ひ掛けて、口を嚙む。

「それで御座るか。シャルル氏にはお大事にと伝えて欲しいで御座るwww」

気分の悪いのならば、無理に見舞うのも悪いかと思ひ、オタクは遠慮する事にした。

酷いようなら後で別の機会に行けば良いし、直ぐに良くなるなら明日会つて聞けば良いと考えたのだ。

「あ、ああ、伝えておくよ」

それから、オタクは一夏と別れを告げて何時もの階段下の寢床へと向かう。

その途中、ふと喉の渇きを覚えて自販機に寄ったオタクに、背後から声が掛けられた。

「あの」

「？」

聞き慣れない声に戸惑いつつ、オタクが振り向くと、そこにいたのは僅かに見覚えの在る眼鏡を掛けた少女だった。

「……何処かであったで御座ろうか」

「……貴方の同室の者です」

そう言われて漸く思い出す。

初日のあの日以降、一度たりとも近づいていなかった自室の同室者の少女。

「あ……確か、更屋敷……」

「更識です。更識簪」

「オッフwコレは申し訳ないwww」

何時も通りに振る舞うオタクだが、内心では突然の襲来に驚いており、一体何の様なのかと訝しむ。

「それで、一体拙者に何用得御座いますかな？」

オタクが問う。

普段の口調や態度を崩さずに、彼女の現れた意図を探る。

この時、この瞬間に置いて、オタクはこの学園に来てから一番に警戒心を強めており、目の前の少女の一挙手一投足に注視していた。

そんなオタクに対し、少女が口を開く。

「何の用って……本気で聞いているんですか？」

「と言いますと？」

「初日の日から一度も部屋に戻らないのは貴方では無いですか」

少女の言いたい事はオタクが一度も部屋に戻らずに、何処で寝泊まりをしているのかと言う事で、もしも無理をしているのなら気にしないから部屋に戻って来いと言う事だ。

「私だけ部屋を独り占めして、貴方を追いやっているみたいで心苦しいです」

恐らく男性の事が余り得意では無いだろうに、少し震えながら言う少女の健気な様子に、オタクは涙を禁じ得なかった。

「www拙者は大丈夫で御座るよwww立てばドラキユラ、座れば不死鳥、歩く姿はイモータルと自負しているで御座るwww」

冗談めかしてオタクが言葉を返すと、少女が吹き出すのを堪える様に口を覆った。

「くふっ・・・w」

「おろ?・・・」

簪の様子に、何か感じ入る物が有ったオタクはもしやと思つて言葉を続ける。

「更識氏・・・」

「な、何ですか?」

「流派!東方不敗は!」

「!・・・王者の風よ!」

オタクの言葉に簪は一瞬、戸惑うも、直ぐに思い直した様に続く言葉を叫んだ。

それを聞いて、オタクは更に続く言葉を発する。

「全新!」

「系裂!」

「天破侠乱!」

ここまで言い合つて、二人のボルテージが上がり、簪は頬を朱に染めながらもイキイキとして口を開き、オタクもノリノリで叫ぶ。

「見よ!東方は赤く燃えている!!」

賭けだった。

もしも簪がオタクの言葉に乗らず、若しくは元ネタを知らなければただ単に恥を搔くだけだったのだが、オタクは見事に賭けに勝った。

「・・・」

「ハア・・・ハア・・・」

悠然と佇むオタクに対して、簪は息を切らせてオタクを見上げた。

暫く無言で見つめ合う二人だったが、ここで、オタクは更にたたみかける様に再び声を上げる。

「ファイナルフュージョン承認!!」

「っ!・・・了解!ファイナルフュージョン!!プログラム・・・ドライブ!!」

「よっしやあ!!」

またもや乗ってくれ簪に感動すら覚えるオタクは、最後の言葉を掛ける。

「・・・やらないか?」

「・・・うほっ、いい男」

「・・・」

「・・・」

次の瞬間、二人は固い握手を交わした。

大きく音が響く程に互いに掌を打ち合わせてガツチリと握りながら見つめ合う。

そして、オタクは簪に言葉を掛けた。

「今度、マジンガーZ Infinityの鑑賞会をしないか?」

「鋼鉄神ジークも用意しておきます」

「パーフェクトだ簪氏」

「感謝の極み」

その言葉を最後に二人は別々の道へと別れ、オタクは寢床へ、簪は自室へと向かった。

「・・・この学園、割とオタク多く無いか?何か俺のキャラ薄くなってきた希ガス」

自身のアイデンティティクライシスを感じつつ、オタクは眠りに着く。

ほぼ同じタイミングで、自室に戻った簪がベッドに蹲ってバタ足をしているのだが、それを知る者は誰もいない。

第十五話

特に何事も無く時は過ぎ、当日に成って学年別トーナメントの対戦表が発表された。

「一夏氏とは三回戦で当たる様ですな」

「奴が勝ち上がって来られればな」

ぐ都合主義的に一回戦で当たると言う事は無く、約束の戦いは互いに勝ち上がった三回戦目に持ち越され、ラウラは少し不満げにオタクの言葉に応えた。

「デュフフｗｗｗｗ一夏氏ならば勝ち上がるで御座るよｗｗｗｗ」

「何故、言い切れる」

「一夏氏もアレで弱い訳では御座らんからな」

「・・・」

散々に言われる一夏だが、専用機持ちで彼自身も抜群と言える程のセンスを持つており、そんじよそこの相手にはそうそう負ける事も無い。

経験値の少なさと調子に乗りやすいと言う欠点も在るが、そこはシャルルと組む事で緩和され、更に言えば、接近戦オンリーの弱点もペアによつてカバーされている。

客観的に言つて、セシリアと鈴が不在の今の状況では優勝候補筆頭格と言えるだろう。

「まあ良い。奴を叩きのめせるのならば、それに越した事は無い」

自分が負ける等とは微塵も思っていない口ぶりのラウラをオタクは微笑ましく見詰めて、それから対戦表に目を移しながら言う。

「さて、初戦は拙者達の様で御座るｗｗｗｗ大口叩いて置いて負けると言う事が無い様にするで御座るｗｗｗｗ」

何時も通りのオタクに対して、ラウラは言葉を返す。

「我々に敗北は有り得ない」

不貞不貞しくも頼もしい言葉を口にして、ラウラは背を向けてアリーナへと向かう。

オタクもその後が続いて歩き出し、二人揃ってアリーナの控え室へ

と移動した。

「五分で片を着けるぞ」

「イエスマムで御座るwww」

移動の道中、廊下を歩くラウラが振り向かず言葉が発すると、オタクも直ぐさま答えた。

全く似ていない凸凹な二人は、しかし、息はぴったりで廊下を歩き、試合までの一時間を控え室で打ち合わせに費やした。

そして、その時が来た。

「手筈通りに行くぞ」

「www立ち会いは強く、後は流れで御座るなwww」

時間が来た事を告げられた二人がアリーナに出ると、中央に対戦相手の二人の姿が見えた。

打鉄とラファールを纏った対戦相手の二人は一年二組の生徒のペアだったらしく、オタクとラウラが近づくと口を開いて言った。

「良くも鈴さんを酷い目に遭わせてくれたわね」

「専用機持ちだからって私達を舐めない事ね」

オタクとしては若い子が微笑ましい事をやっていると言う風に思っただけで黙っていたのだが、ラウラは違った。

「ふん・・・貴様等の様な雑魚が幾ら集まろうと敵では無い。あの女も所詮は私よりも弱かったと言うだけに過ぎん」

あからさまな挑発の言葉を吐き出すラウラは、実に涼しい顔をしており、それが余計に精神を逆なでて目の前の二人をイラつかせる。

「キレちまったよ・・・表出ろやあ・・・ああん？」

「デメエ・・・ベッコベコにしてやんよ・・・」

明らかに女の子のしている顔では無い二人は、ヤンキー漫画みたいな台詞を言い出した。

そんな二人をみて、ラウラはオタクに向いて言った。

「曹長」

「なんで御座る？」

「五分で片を付けると言ったが訂正だ」

「？」

「二分で終わらせる」

良い笑顔でオタクに言う、それを聞いていた対戦相手の二人は額に青筋を浮かべて吼える。

「やってミロやぐらあ!!」

「・・・てめー・・・ハラワタ引きずり出してその口に突っこんでやっからよオ・・・!!」

「弱い犬ほど良く吠えるとは良く言ったものだ。野蛮人め」

今にも噛み付いてきそうな程に激昂した二組、平静のまま自然体で構えるオタクとラウラ、そんな四人が向かい会うアリーナに試合開始を告げるゴングが鳴った。

「待ってたぜえ!!この時をよお!!」

開始と同時に飛び出したのは打鉄を纏った女生徒だった。

彼女は大振りの刀を振りかざすと一目散にラウラに向かい、その刀を振り下ろす。

「ふん・・・」

しかし、そんなテレフォンパンチを喰らう様なラウラでは無く。

ラウラは最小限の動きで攻撃を躲すと、自身も近接武器の構えて反撃に出る。

「テメエは私が相手だ!この豚あ!!」

ラファールを纏うもう一人は両手にサブマシンガンを展開し、オタクに狙いを付けて引き金を引く。

高速の連射で殺到する弾丸は、しかし、オタクのダンボールを捉える事は出来ずにアリーナの障壁に当たって弾け、その間にオタクはアサルトライフルを取り出しながら高速で地上スレスレを飛ぶ。

「待てや!!豚あ!!」

「ww待たないで御座るよww悔しければ追い付いてみれば良いで御座るww」

「っーぶうたああああ!!」

片や空中で接近戦をするラウラと打鉄、片や地上スレスレで高速の射撃戦を行うオタクとラファール、傍目から見れば、二組が優位に立つ一方的な展開にも見えるが、その実、オタクに対してもラウラに対

しても、二人は先手を取りながらも全く打撃を与える事が出来ていなかった。

「くっ！この豚、逃げるのだけは上手え！」

「デュフフフwwwwそろそろ反撃に出るで御座るよwwww」

戦闘開始から三十秒、逃げてばかりのオタクは眩くと同時に反撃に移る。

「!？」

うつ伏せに近い体勢での水平飛行をしていたオタクは、突如として身を返して仰向けに成り、バツク飛行で追い掛けてきていたラファールに向きあう。

「っ！」

「遅いで御座るwwww」

予想だにしていなかったオタクの行動に、ラファールの反応が一瞬遅れ、それを見逃さなかったオタクは、容赦なく20mm弾を叩き込んだ。

回避行動を取り始めて身体が動くまでの凡そ一秒の間に、三発の20mm弾がラファールの機体の左側を捉え、その衝撃によって動きが鈍る。

「クッソがあああ!!」

思わずと言った風に悪態を吐くラファールを纏った女生徒だが、その悪態が命取りに成ってしまう。

「wwww」

極限の状況下での的確な判断が求められる戦いに置いて、 unnecessary 悪態を吐いた女生徒は、その直後に更に三発の直撃を受けた。

ISとしてオーソドックスな性能のラファールだが、強力な20mm砲弾の直撃は大きな痛手と成り、かなりのシールドエネルギーを消費させられる。

「っ……っ！」

ここに来て、漸く女生徒は己の判断の拙さを思いしり、同時に目の前の相手の巧みさを知った。

全ては余りにも遅く、女生徒が次の手を考えようとした頃には、既

に目の前にオタクが迫っており、アサルトライフルの先端に取り付けられた銃剣の鋒が目に写る。

「・・・凄いな」

「そうだね」

一夏とシャルルの見ている目の前で、今まさに試合終了を告げるアウンスが流れ、一切の被弾も許さなかったオタクとラウラの二人が控え室へと戻って行く。

時間にして2分にも満たない僅かな試合時間は、余りにも隔絶した二人の実力を見せ付けるのに十分な物であり、アリーナには歓声では無く響めきが広がっている。

「正直、タクがあそこまで強いのは予想外だったかな」

「ああ・・・ラウラとはあの時戦ってみて強さは十分分かってたし、小田とも模擬戦はよくやってたけど・・・コレは予想以上だ」

中距離での射撃戦をベースとした戦法をとるオタクの戦い方は、一夏にとっては幾度も苦渋を舐めさせられた物であるが、それでも傾向が分かるのならば希望はあると踏んでいた。

最近ではオタクとの模擬戦でも十分に對抗できていた自信はあったし、シャルルもオタクの戦い方は理解して対策は練っていた。

だが、オタクはその二人の自信と対策をあっさりと上回ってみせたのだ。

「・・・次は俺達の番だ」

「うん、気持ちを切り換えて行こう」

オタク達と戦う以前に負けていては格好も付かない。

一夏は、取り敢えず二人との勝負の事は頭の隅に追いやって、目の前の自分の第一試合に臨むことにする。

自分に言い聞かせるために口を吐いた言葉に、シャルルも前向きに返して立ち上がり、二人は揃って選手の控え室へ向かう。

ISスーツに身を包み、自信の専用機を展開して待機していた二人

は、教師からの開始準備の言葉を受けてアリーナの中央に飛び出した。

「一夏、準備は良い？」

「ああ、何時でも大丈夫だ」

呼吸を合わせて目の前の対戦相手を見据える一夏とシヤルル。

対戦相手は二人とも打鉄を選択しており、分かりやすく近接刀を構えて試合開始の時を待っている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

両者共に緊張感が高まり、アリーナの観戦席が静まり返ると、試合開始のアナウンスが流れた。

「つつああああ!!」

開始と同時に、速攻を掛けたのは一夏だった。

「はあっ!!」

高速で一直線に突っ込んだ一夏は、対面する相手に雪片を上段から振り下ろす。

それに対する女生徒は下段から近接刀を振り上げて迎え撃ち、一夏の雪片を弾いて距離を取る。

「まだまだっ!!」

猪突猛進と言う言葉の通り、一夏は後に引いた相手を追い掛けて、再び上段から雪片を振り下ろし、それに反応して見せた女生徒も応じて激しい剣戟の応酬を演じる。

「っー」

「うおおおおおお!!」

長らく剣道の道からそれていたとは言え、一夏とて、嘗ては一角の実力者として一目を置かれ、幼馴染みによって再び剣を取った者だ。

幾分錆び付きはすれど、身体に染み付いていた動きは徐々に精彩を取り戻し、如実に実力を付けていた。

「くっっ!!」

荒々しくも真っ直ぐで澄んだ剣撃が女生徒と打鉄を襲い、徐々に徐々に動きに着いていけなくなった。

剣の道を志す者として、理不尽さを感じる女生徒は口惜しくも一夏の動きを止める手段として鏢迫り合いを選択し、隙を突いて一夏の懐に飛び込んで雪片に刀を合わせて力を込める。

「良いぜ！ソッチがその気ならっ・・・！」

鏢迫り合いに持ち込まれた一夏は、敢えてそれに受けて立って力を込め、女生徒と打鉄と押し合いを始める。

「く、くうっ!!」

「おおおおお!!」

機体のパワーの差が如実に反映された鏢迫り合いは、一夏の白式が一方的に相手を押し、女生徒は自ら挑んだ押し合いに負けて一方的に圧力に耐えるしか無かった。

「はあっ!!」

この、鏢迫り合いの最中、シャルルの射撃から逃れたもう一人の女生徒は、相棒を救おうと動きだす。

鏢迫り合いに集中している一夏の背後に着いて刀を抜くと、下段に刀を構えながら一夏に迫って急襲し相方の助けに入る。

それが命取りに成るとも知らずに。

「つえあああ!!」

「えっ!!きやあああ!!」

一夏は打鉄が背後から迫るのを察知すると、待っていたとばかりに全力で目の前の相手を押して弾き飛ばし、振り向いて自身に迫る相手に相対する。

「動きが丸見えだ!!」

出力で言えば、IS学園でも屈指の機体である白式を打鉄を相手にして、ただ圧倒される程度で済む筈など無かった。

勢いに乗った打鉄は、操縦者の拙さも相まって、動きを止める事も出来ず、カウンターを受ける事を分かっているながらも何も出来なかった。

一夏は、最初からコレを狙っていたのだ。

「っ！」

「取ったああああ!!」

一夏は零落白夜を発動する。

自身のエネルギーを攻撃に還元して強力な威力を生み出す最強の一撃は、ただの刀で受け止められる物などでは無く。

打鉄は一刀の下に斬り伏せられて、全てのエネルギーを失った。

「くっ……このおおお!!」

相棒の敗北を目の前にして、残るもう一人の女生徒は声を上げて一夏に反撃を試みる。

最早勝敗は決したも同然で、自身に勝利の道は残されていないと言う事は分かっていた。

それでも、自力でこの学園に入って見せたエリートとしての矜持と、今の社会に置ける絶対的な勝者である女としての意識が、せめて一矢、せめて一太刀と身体を突き動かした。

「こんのおおお!!」

恐らくは、今までの経験の中で一番上手く機体を操作できていたと言う認識が、彼女自身に有っただろう。

他の一般の生徒の中でも、かなり上位の部類に入る程に卓越していた事も事実だっただろう。

だが、それでも、今の状況は彼女の目的の完遂のそれを許す事は無かった。

「残念だったね」

彼女の耳に、男性としては高い声がヤケに強く響くと、次の瞬間には全身を衝撃が突き抜けて地面に叩きつけられた。

「っか!?!」

あと一歩、寸での所で一夏に一太刀をと言う所で、シャルルが目の前に現れ、至近距離でショットガンによる射撃を受けたのだ。

「っ！」

アリーナの地面に身体を打ち付け、自信が巻き起こした土煙で視界を遮られた女生徒は、尚も自力で起きて刀を構える。

エネルギーの残量は雀の涙程しか残っておらず、まだ終わっていない

い事が奇跡の様な状況だが、それでも彼女はまだ立っていた。

「まだっ！」

終わっていない。

そう言いたかった彼女は、土煙が晴れると同時に、目の前に突き出された銃口を目にして悟った。

奇跡は二度は起きなかったのだと。

「コレで終わりだよ。よく頑張ったね」

優しく労う様な称賛の言葉は、しかし、とても非情で容赦の無い終わりを告げる言葉だった。

「・・・っ！」

自信を見下ろして銃口を向ける彼は、何と美しい顔立ちだろうか、と、そして、何と残酷な人物だろうか、涙に霞む視界の中で思いながら最後の一撃を受けた。

「何分だ」

「・・・六分程で御座るな」

観戦していたオタクにラウラが尋ねると、オタクは試合終了までに掛かった時間を答える。

「その程度か」

それだけ言うと、ラウラは観戦席を立ってアリーナから出ていってしまっただ。

「・・・」

正直言えば、オタクも概ねラウラと同じ様な感想を抱いている。

言ってしまうえば、一夏とシャルルは、操縦時間も戦闘経験も機体性能も何もかもが勝っているにも関わらず、それだけの時間を掛けてしまっているのだ。

特に、一夏は学園で最も高性能で一番火力の高い機体に乗っているのにも係わらず、その一撃を当てるのに、あの様な罫を張らなければ成らないと言う事を見せ付けてしまっている。

それは、小手先の技術に頼らなければ成らないと言う事に他ならず、ともすれば地力が足りていないと言う事を現していた。

「・・・少佐殿は甘くは無いぞ」

このままではラウラに勝つことは出来ないと言う様に、オタクは一人呟いて、次の試合に目をやった。

第十六話

学年別トーナメントの日程は恙無く進み、午後に入ってから二回戦目が始まると、一夏とシャルルは安定して三回戦に駒を進めた。

オタクとラウラの試合は、二回戦最終試合となり、コレが学年別トーナメントの初日最終試合になる。

注目のコンビの試合とあって、その実力を見てみようと言う生徒は多く、アリーナには一年生のみならず、他学年からも観戦希望者が集まった。

その注目の試合、誰もが開始を今か今かと待ち構えるアリーナでは、全員の視線が中央に向けられており、その視線の先には機体を展開した四人が立っていた。

「・・・箒氏が相手で御座ったか」

「・・・」

アリーナ中央のオタクとラウラ、箒とそのペアの生徒の四人はあまたの視線に晒されながら地上で試合開始の時を待っている。

特に私語などは禁止されておらず、暇を持て余したオタクが話し掛けるが、箒からの返事は無かった。

「曹長」

箒にシカトされてオタクが嘆息しようとした寸前、隣のラウラがオタクに声を掛ける。

「なんで御座るか？」

オタクが相方の少女に応じると、ラウラは箒を指差して尋ねた。

「この女は篠ノ之博士の関係者だそうだな」

「そうらしいで御座る。確か妹君だそうで」

「・・・」

オタクの返答に暫く考え込む様子を見せたラウラは、顔を上げてオタクに命じる。

「曹長、この女はお前に任せる。そっちのもう一人の方が齒ごたえがありそうだ」

「・・・つき、貴様・・・っ！」

ラウラの物言いに、箒は余程腹に据えかねたのか、それまでの無言を破って憎しみの籠もった目でラウラとオタクを睨む。

「少佐殿www正直は美德で御座るが、オブラートに包んで下されwww」

ラウラには別に箒を煽ろうと言う気は無く、ただ単に思った事を素直に言っただけなのだが、オタクは、それを分かっているながらも敢えて箒に対して挑発と取れるようにラウラを窘めた。

オタクの扱うダンボールは御世辞にも高性能とは言い難く、また、オタク自身の技量は優秀な部類だが、それは、実戦経験と過去の訓練、本人の努力故の物であり、単純な才能という観点で見れば、この場の四人の内が一番劣っている。

専用機を持っている事で、他の生徒よりも操縦時間を長く取れると言うアドバンテージが無ければ、オタクの実力というのは然程高い物では無く、現状でも一つの分野に焦点を絞れば、オタクと同程度かそれ以上の能力を持つ同学年の生徒はそう少なくは無いのだ。

「曹長ならば十分に撃破可能だろう？」

「それは否定しないで御座るwww」

「ならば実行しろ」

「アイアイ、マムwww」

オタクは自分の技量と言う物をかなり正確に掴んでいる。

目の前の箒は、ISのセンスではオタクを凌駕し、また、剣道の高い技量と実績も知っており、だからこそ、オタクは決して油断はせず、侮らず、全力で相手を倒す。

その為ならばルール上で禁止されていない事は全で行うし、少しでも有利になると思えば徹底して相手の弱点を突く。

「・・・貴様、私を侮った事を後悔させてやる・・・っ！」

「www侮つてなどいないで御座るよwwwただ、過大にも過小にも評価しないで御座るwww」

「殺す!!」

箒が強い言葉で宣言すると同時に、試合開始がアナウンスで伝えられ、最速の反応で飛び出した箒が居合の要領でオタクに斬り掛かっ

た。

「オツフw」

試合開始と同時に地面を蹴って飛び出した箒の一太刀は、それは見事な一撃だった。

腰だめから横風には振り抜かれた刀身は、一筋の光となり、正に一閃してオタクに襲い掛かった。

巻き藁を前にした居合ならば、間違いなく一刀の下に両断していただろう。

剣道の試合ならば胴の判定で一本になっていだろうか。

繰り出した箒自身も会心の一撃だと自讃するほどの素晴らしい一太刀は、オタクの胴を薙いで大幅にシールドを削る。

「筈だった」

「っ！」

刃がオタクのダンボールを薙ぐ直前、確かにオタクを捉えたと確信した箒の一撃は、オタクが上昇した事で容易く躲かれてしまう。

箒のISでの戦闘経験の少なさ故か、彼女は剣道では有り得ない空に飛ぶと言う回避方法を失念して面食らった表情で、回避された事に戸惑った。

もしも、箒が冷静さを残していれば、こんな事にはならず、もつとじっくりとオタクの動きを見極めながら隙を突いたはずだ。

少なくとも、普段通りであれば刀を振り抜いたままで動きを止める等と言うミスは犯さなかった。

「残心を怠っているで御座るよw w w」

そう言いながらオタクはアサルトライフルの銃口を向けて三点射を見舞う。

回避で飛びながらフルオートで指切りの三点射を行うオタクの射撃の腕前は、即座の照準も反動の制御も見事な物で、三年生の生徒や教師達は声を上げて驚いた。

「っ！」

だが、同じ瞬間に驚くべき事はもう一つ起こっていた。

箒はオタクが引き金を引くと同時に、人間の限界付近の反応で射撃

を躲して見せ、正眼に刀を構えてオタクを見据えたからだ。

「箒氏 W W W 人間じゃねえ W W W」

内心で驚愕するオタクは、決して箒に動揺を悟られない様に、余裕を見せながら箒と同じ地面に降り立ち、油断無くライフルを構えて、銃口と銃剣の鋒を箒に向ける。

「・・・」

「・・・」

「つつえああああ!!」

数秒の無言の後、箒が雄叫びを上げて刀を振り上げてオタクに迫る。

思いつきりの良さと無意識にスラスターを使ったダツシユは、操縦時間の少なさから考えれば称賛に値する物で、コレならば一回戦突破も領ける実力だった。

「W W W」

だが、それで簡単に詰められる様なオタクでは無い。

箒が前に出ると同時にオタクが回避行動を取る。

箒が今まで相手してきた生徒達は真っ直ぐに後へと下がっていたのだが、オタクは他の生徒とは異なり、下がると同時に右に身体をずらし、同時にオタクは二回続けて三点射を見舞った。

「くっ!」

「W W W」

箒は、この反撃にも何とか対応するが完璧とは行かず、二発の直撃を喰らってしまう。

オタクが右に避けたのは箒が刀を上段に構えていたからであるが、それは、剣士が上段の構えを取ると左腕が邪魔になって死角が出来ると言う事を知っていたからである。

「クッソー!」

更に、オタクは箒を中心に右に旋回しながら射撃を浴びせ続ける。

イラだち混じりに悪態を着く箒は、刀を正眼に構え直してオタクからの射撃を回避するが、全てを完璧に回避すると言う訳には行かず、数発の被弾は免れなかった。

「卑怯だぞ!!男らしく戦え!!」

「デユフフフwwそんな馬鹿な事をする訳がないで御座るww卑怯汚いは敗者の戯れ言で御座るww」

このまま行けば、箒の機体はエネルギーの全てを消費して戦闘不能になるだろう。

オタクは下手なリスクなど犯さず、このまま箒を封殺して戦いを終わらせるつもりでいた。

「くっ!」

「デユフフフww」

誰もが勝敗は決したと確信した。

箒は己の未熟さとオタクとの実力の差を思いしり、オタクは油断無く最後の瞬間まで箒を狙い続ける。

だが、一人だけ、この場にはいない一人だけが、このまま終わる事を許さなかった。

「っ・・・!」

突然の事だ。

突然、オタクの射撃が止んだ。

「っ・・・!?!」

射撃が止んだ事に箒は呆然としてオタクを見るが、オタクは慌てて銃を操作する。

マガジンを手動でリリースし、レシーバーを叩いて本体を振り、再びマガジンを挿入してコッキングレバーを動かす。

排莖不良か給弾不良か、はたまた撃鉄不良による弾詰まりかチープアモによる焼き付けか、何にせよオタクは最大の間隙を見せてしまった。

「曹長!!」

「っ・・・!?!」

銃の操作に夢中になりすぎて、ラウラの声が届くまで箒から目を離して注意を怠ってしまう、その一瞬の間に箒の接近を許してしまったのだ。

「はああああ!!」

「ぐおっ!？」

上段から振り下ろされた刀は、オタクの脳天を狙って一閃される。オタクは咄嗟に、手に持っていた銃を両手で頭上に掲げ、銃身の通ったアツパーレシーバー前部で剣撃を受けた。

アサルトライフルはこの一撃で銃身部分まで刃が通り、完全に使用不能になる。

シールドエネルギーもこの攻撃で幾分減ってしまい、オタクはダメージを受けると同時にメインアームを失う事になった。

「つええええええ!!」

箒は一端手を引いて刀をライフルから抜くと、再び上段から斬り付けようと振りかぶる。

その箒の動きを見て、先程同様に防御しようとオタクはライフルを掲げて箒の攻撃に対応するが、それこそが箒の狙いだった。

「甘いっ!!」

「くっ!・・・ぐうううう!!」

箒の面は完全なるフェイクで、振りかぶった刀を一瞬で退き、ガラ空きのオタクの胴に刃を叩きつけた。

「まだまだっ!!」

左から右へと振り抜いた刀を、箒は切り返して逆袈裟に切り上げて更にオタクのエネルギーを削る。

この時点でオタクのエネルギー残量は三分の一を切り、後一撃、強力な攻撃を喰らえばオタクの敗北となる所だ。

「チエストオオオオオオオ!!」

トドメを刺そうとする箒は気合を入れて刀を振り下ろすが、ここで箒は詰めของ甘さを露呈してしまった。

「っ!」

最後の一撃と言わんばかりに気合の入った箒の一撃は、大振りになってしまい、その黄金の隙にオタクは身体を滑り込ませる。

「っらああ!!」

オタクは箒の懐に入って首に手を回して組み付くと、強力な膝蹴りを見舞う。

「くっ！離せ!!」

「はっ!!」

組み付いて箒が抵抗する状態で、オタクは容赦なく膝蹴りを二発食らわせ、更に箒の右手を取ると自分の右腕を脇から肩に絡めてかち上げ、そのまま一本背負いで投げ飛ばして距離を取る。

「ショットガン!!」

無意識の内にオタクは叫びながら格納領域からショットガンを取りだして構える。

ブルパップのオートマチックショットガンは、引き金を引くと同時に最初に装填されているバックショットを撃ち出した。

セレクターはフルオート的位置にあるため、そのまま次弾が撃発される筈なのだが、先程同様に銃が不良を起こして使い物にならない。

「ちいっ!!」

オタクの銃の様子がおかしいと見るや、箒は、再び刀を構えてオタクに肉迫しようと動く。

対するオタクも先程の轍は踏むまいと、手にしていたショットガンを放り棄てて、旧式のライフルを取り出した。

箒とてエネルギーの残量は少なく、攻撃を受ければ敗北は必死の状況であり、両者は互いに後一撃と言う段階でアリーナ中央でにらみ合う。

「・・・」

「・・・」

箒は疑問に思った。

何故、オタクが撃つてこないのかと、もしかして撃てないのではと、そう思った箒はオタクに向けて声を掛ける。

「・・・何のつもりだ」

「気紛れで御座るww」

箒の訝しげな問い掛けに対して、オタクは普段の調子を崩さずに答えながら、右手で掴んだグリップを右の腰に当て左手でハンドガードを掴む。

射撃では無く、近接戦を挑もうと言うオタクの様子に箒はオタクが

撃たないのでは無く撃てないのだと言う確信を得た。

「フン・・・後悔するなよ」

「デュフフフwwwwするわけないで御座るwwww」

銃剣を構えるオタクは堂に入って自信満々としているが、箒に取っては近接戦ならば敵では無かった。

今現在の箒は剣の腕に関して言えば同年代で最強に等しく、多少リーチで劣っていても簡単に遅れを取るような事は無い。

普段の通りのオタクの反応も不安を悟られまいとするブラフだと箒は判断した。

空の戦いはラウラが一方的に相手を追い詰め、猫が鼠をいたぶるが如く一方的に蹂躪している。

「貴様を倒して、もうボーデヴィツヒも倒す。次に進むのは私だ！」

「出来るで御座るかな？」

「私が勝つ!!」

宣言と同時に箒が飛び出し、オタクに斬り掛かる。

銃剣を巧みに操るオタクは、何とか箒の攻撃に耐えるが、素人目に見ても明らかに箒が優勢で、オタクは防戦一方だ。

「はああああ!!」

「ぬっ!?!」

銃剣で箒の攻撃を受け続けるオタクはドンドン押し込まれ、箒が気合を入れられた一撃を放つと、遂には銃剣が耐えきれずに半ばから折れてしまう。

「コレで終わりだ!!」

衝撃で銃を跳ね上げられたオタクは、何とか手は離さずにいたが、その所為で余計に隙が大きくなってしまい、不可避に攻撃を叩きつけようと箒が刀を振り上げた。

刀の刃が迫る中、誰もがオタクの敗北を確信する中、オタクは口角を上げて嗤った。

「計画通り」

「・・・っ!」

オタクの笑顔を見た瞬間、箒は全身が粟立って悪寒を感じる。

次の瞬間、ダンボールの太腿のカバーが開くと、開いたカバーの内側で爆発が起こり、衝撃が箒を遅った。

「カハッ!!」

余りの衝撃で、箒は後に吹き飛ばされて刀を取り落とし、肺の中の空気が全て吐き出された。

「っあ・・・ああー!」

酸欠気味でフラつく頭が、一挙に流れてきた酸素で覚醒すると、I Sのセンサーで拡大表示されたオタクがライフルを構えているのが見える。

「ああ・・・」

観念したように小さく声を漏らした瞬間、箒の胸に20mmの砲弾が撃ち込まれてシールドエネルギーの全てが消費された。

「・・・」

その直後にはラウラも勝負を決めて試合が終了し、ラウラとオタクは控え室に戻り、後には撃破された二人だけが残された。

「すみませぬ少佐殿」

「いや、そんな事より何があつた」

控え室に入るなり、オタクはラウラに頭を下げて謝罪するが、ラウラは直ぐに許して事情を尋ねる。

あの試合中、オタクは二度も銃の故障を起こしているが、ラウラには直ぐに異変に気が付く所が出来た。

「やはり少佐殿は誤魔化せませんか」

「当たり前だ。まあ、私もショットガンで気が付いたのだがな」

「www」

戦闘中に銃身や部品の加熱で動作不良を起こす事は十分に考えられる事であり、ラウラもその件を攻めるつもりは無いのだが、ショットガンに関しては明らかに異常だった。

「曹長は銃の手入れを怠る様な奴では無い。取り出したばかりの銃で

二発目・・・最初の給弾で不良を起こすのも明らかにおかしい」

「分かりますか・・・」

ラウラに言われたオタクは、回収して置いた不良を起こした銃をラウラに見せる。

「このアサルトライフルですが、実は何の不良も起こしておりませぬ」
「何？」

「この通り弾詰まりも焼き付けも起こしておりませぬし、排莖不良も起こしておりませんでした」

「では、何が・・・」

「このアサルトライフルは電動でボルトを動かして、モータ駆動の巻き上げ機でマガジン内の弾薬を給弾する方式で御座る」

「チエーンガンの様な物か」

基本的には外動力で動く為、反動やガス圧を利用する機構は備わっておらず、手動のコッキングは排莖不良時の強制排出と装填を行うために着いている。

撃発不良の場合には電動で動くボルトによって強制的に不発弾薬が排出されるため、考えられる使用不能は焼き付けくらいの物で、他の場合は手動で対応できるのだ。

「今回起こったのは、電動ボルトが動かなくなったので御座るが、ハード面には問題は御座らん」

「と言う事は、ソフト・・・ソフトキルでも受けたのか？」

オタクの説明を聞いたラウラが思い当たる要因を言うが、オタクは首を振って答える。

「いや、箒氏にはその様な装備は見餓えられなかったで御座るし、性格的にも考え辛いで御座る」

「では・・・」

「恐らくハッキングで御座る」

そう言っってショットガンを取り出すと、同じ様にラウラに見せる。

「此方も同じく電動で御座る。初弾は装填済みだったから撃てたので御座るうが、装填機構が死んでいるから二発目は撃てなかったので御座る」

「成る程な・・・しかし、ハッキングとは一体何処の誰が」

「デュフフフｗｗｗｗまあ、世の中には可笑しな人間も居ると言う事で、本日は解散しましょうで御座るｗｗｗｗ」

そう言つて話を閉めると、オタクは待合室を後にした。

早めの夕食を取つたオタクは、一夏達が居ない事に少し寂しさを感じつつ、何時ものベンチに言つて懐から取り出したタバコを啜える。

「・・・あのクソアマあ・・・!」

オタクには分かつていた。

誰が邪魔をしたのか、誰がハッキングを掛けたのか、試合中の時点で知つていた。

「・・・この落とし前・・・如何着けてくれようか・・・」

人前では決して見せない様な憎悪に満ちた表情のオタクは、一本目を吸いきるなり次のタバコを啜えて火を着けた。

人首から貰つたマルボロの最後の一本を、今度はじつくりと吸う。

「散々な試合だつたな」

「んあつ？」

背後から声を掛けられたオタクが振り向くと、そこには、火の着いていないタバコを啜えた千冬がいた。

「火を貸せ」

「・・・」

千冬に言われるままにジッポーを出すオタクは、右手を伸ばして火を点し、そのジッポーの火に千冬が顔を近づけてタバコをに着火する。

「・・・ふう」

「・・・」

「ボーデヴィツヒとは上手くやっている様だな」

「まあ、ぼちぼちと」

「・・・ハッキングの件は、此方でも掴んでいる。お前はあの状況で良くやつたな」

「教師らしく褒めてくれますか・・・」

「まあ・・・」

「……」
「……」

暫しの無言が二人の間に流れる。

火を着けたばかりのタバコが、その半分ほどが燃え尽きるまで、何も言わずに前を見たままできると、千冬が再び口を開く。

「最後のあの攻撃……」

「どうかしたか?」

「あの太腿の奴は何だ?」

「ああ……アレはこの前新しく着けた自己鍛造弾だ。指向性散弾よりも射程が長いし、対装甲能力も高まった」

爆薬レンズによる平面爆轟波とミスナイ・シャルデン効果による爆轟波の集中による圧力で爆発成形侵徹体が形成され、それによつて装甲を貫徹する成形炸薬弾の一種である。

モンロー・ノイマン効果を利用する従来の成形炸薬とは違い、発射される金属ライナーは直径の500倍程度の距離までは十分にエネルギーを保っており、エネルギー効率も高い。

本来は砲弾や爆弾などの弾頭に使用して発射するのだが、今回は太腿に直接収納した状態から至近距離の敵に対してライナーをぶつける形で使用している。

「また、物騒な物を持ってきたな」

「ISは絶対防御（笑）があるから大丈夫でしょう?」

「まあ、そう言う事になっている」

千冬は若干言葉を濁すと、一度紫煙を吸い込んで息を吐き、再び口を開く。

「あの銃は何か狙いがあったのか?まさかリーチだけで選んだわけでは無いだろう」

ダンボールの格納領域にはアサルトライフルはもう一挺格納してあり、一発だけ撃つのならアサルトライフルでも良かった筈だ。

その千冬の疑問に対してオタクは、隠しもせず答える。

「あのライフルはアサルトライフルとは作動方式が違う。あのライフルはガス圧方式で、撃発も手動トリガーの機械撃発な物だね」

「・・・確かに、それならばハッキングの心配は無いか」

「それに、アサルトライフルよりも強力な弾薬を使っているんだ」

ライフルの弾薬が20×110mmUSNなのに対して、アサルトライフルは20×102mmで、威力としては銃身長の関係もあって若干だが、ライフルの方が強力なのである。

初弾の発射が可能なのはショットガンで分かっていたが、より確実に箒を仕留めるために、仕留め損なった場合に次弾を撃てる様にと言う事も考えて、ライフルを選択したのだった。

「明日はこんな事が無い事を祈りたいね・・・」

「・・・友人としては耳が痛いが、出来る限りの事はしよう。貴様は私の生徒なのだからな」

「同じ年の生徒と先生か・・・何かエロいな」

「・・・貴様、生徒に手を出せば犯罪だからな」

「分かっていますよ」

この日は、二人がベンチを離れるのは同時だった。

吸い終えたタバコを携帯灰皿に入れて、ベンチから立ち上がると、

二人は反対方向へと無言で歩き出して、オタクは眠りに着いた。

第十七話

学年別トーナメント二日目、時刻は十三時丁度を数え、一年生第三回戦が行われる第三アリーナは、多くの観戦希望者が集まり、正に満員御礼だ。

その目的こそが、一年生で一番の注目のカード、オタクとラウラVS一夏とシャルルの実質の決勝戦だ。

数多の視線が降り注がれる中、遂に両チームが控え室を飛び出してアリーナ中央へと姿を現した。

6月の太陽が降り注ぎ、耳を劈く程の歓声上がる中を四人は互いの姿を確認すると、アリーナ中央に集まって地上に降り立つ。

「逃げずに良く来たものだ。その意気は褒めてやろう」

出会い頭早々、ラウラが一夏に向かって挑発の言葉を投げ掛ける。

ラウラの言葉に対して、一夏は挑発に乗って怒る様な事は無く、悠々としてラウラに言葉を返す。

「ありがとよ。そんな風に挑発してくるのは俺が怖いからか？」

「面白い事言う。どうやら口だけは良く回る様だな」

目に見えそうな程に火花を散らす二人は、一切視線をずらさずに睨み合い、一触即発の空気を醸し出す。

それに対して、オタクとシャルルは、コレから試合をするのが信じられない程、和やかな雰囲気に対す。

「やあ、タク」

「オッフシャルル氏wwお加減はいかがで御座るか？」

「う、うん、今日は大丈夫だよ。ありがとうね」

「www心配は当たり前で御座るwwwシャルル氏は拙者にとって大事な人で御座るからなwww」

「えっ!？」

「?どうかしたで御座るか?」

「だ、大事な人って・・・本当?」

「もちのろんで御座るwww大事な友人で御座るwww」

「あ、ああ、そう言う・・・」

隣とは雲泥の差の様子の二人は、普段通りの言葉を言葉を交わす。実に対照的な四人だったが、そんな四人に無線が入る。

『聞こえているか。そろそろ時間だ』

千冬のその言葉と同時に、両チームが私語を止め、表情を引き締め、距離を取る。

真剣その物の四人は、さつきまでとは打って変わって無言で試合開始の合図を待った。

その様子が観戦席の生徒達にも伝わったのか、アリーナがしんと静まり返り、誰かが喉を鳴らす音さえも聞き取れそうな程だった。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

コレまでに無い緊張感に、一夏は額に汗が伝わるのを感じた。

一夏が隣を見れば、普段はにこやかな愛嬌のある友人が真剣な表情で前を見据えており、正面を見れば、銀髪隻眼の対戦相手が鋭い眼差しで自分を事を見詰めてきている。

そして、少し視線をズラした先、一夏がもう一人の対戦相手に目を向ければ、普段飄々としているオタクが何時になく真剣な面持ちをしていた。

まるで自分が場違いな場所に来てしまっている様な、周りの人物達が何処か別の場所へと行ってしまったような、そんな不安感と心細さを感じて緊張する一夏は、不意にオタクの顔を見て拭きだした。

「くふっ！・・・」

「如何したの？一夏」

「いや、悪い、ちよつと前の事を思いだして」

「何を思いだしたの？」

シャルルが一夏に尋ねると、一夏は笑顔でシャルルに答える。

「前に酢豚にパイナップルを入れるかどうかの話の小田とした事があって、それで、鈴がその後酢豚を作って来た時に小田がパイナップルが入って無いって言ったたら、鈴が小田に酢豚を投げ付けたんだ」

「それで？」

「いや・・・それで小田の奴が何じやこりやーって叫んで、そしたら、そこを通り掛かった千冬姉が吹き出して、小田をしばいたんだよ」
話はそれだけだった。

特に何が面白いのかも分からない話に首を傾げるシャルルだが、一夏は何故か笑う。

そうして、一夏の緊張が解れると、一夏は再び目の前の相手に視線を向けて集中を高める。

そして、試合開始を告げるブザーが高らかに鳴り響いた。

「おおおおお!!」

ブザーが鳴ると同時に一夏が雪片を上段に構えて飛び出す。

一夏の狙いは勿論の事ラウラで、ラウラの方も待ちかねたと言わんばかりに地面を蹴った。

「・・・」

「・・・」

そんな二人とは対照的に、シャルルとオタクは、試合が始まって入るにも係わらず一步も動かずに黙って見つめ合う。

観戦席のの生徒達が何があったのかと言う風に少しざわめく中、口を開いたのはシャルルだった。

「如何する？・タク」

「それで御座るな・・・」

オタクは勿体ぶったように一度言葉を区切り、空を見上げて息を吐き、それから再びシャルルの方に向けて口を開く。

「拙者、まだシャルル氏には一度も勝てていなかったで御座るな」

「そうだったけ？」

「それで御座るよwwwだから、まあ・・・男の子としては負けたままと言うのも癪に障るで御座るなwww」

「ふくん・・・そう言う物なのかな」

「・・・」

「・・・」

「・・・！」

「っ！」

互いに言葉を交わし、オタクの言葉にシャルルが呟いて、それからまた無言になる。

幾ばくかの沈黙の後、どちらからと言う事も無く、両者は同時に武器を出して右に飛んだ。

向きあつた状態で輪を描くように右に旋回を続け、その間に照準を着けた互いの銃の引き金を引く。

「流石だね！タクの20mmを喰らったら不味いかもね！」

「オッフw拙者のもう少し大きいで御座るよwww」

「それどう言う意味!？」

オタクは何時も通りのアサルトライフルを構え、シャルルはショットガンを二挺取り出して応戦する。

口径30mmのバックショットが装填されたフルオートマチックのショットガンは、オタクの使うものと比べて、コンパクトで取り回しやすく、40連発の多弾装で継戦能力に優れ、発射レートも毎分600発とかなり早い。

「タクって！ライフルの射撃は上手いよね！」

シャルルがオタクに対してショットガンを連射しながら言う。

銃口から吐き出された鉛球の嵐が、オタクのダンボールに目掛けて殺到し、その装甲とシールドエネルギーを削ろうとする。

「ありがとうで御座るwww」

オタクはシャルルの言葉に礼を言いつつも、鉛球の嵐を躲すために機動にブレーキを掛けてオーバーシユートを狙う。

その目論見は上手く行き、数発の鉛球が掠めるだけでオタクはダメージを避ける事が出来た。

しかし、シャルルはそれを呼んでいたかの如く、一気に距離を詰めて来て、至近距離でショットガンの引き金を引く。

「っあああ!!」

大ダメージを免れない様な状況で、オタクは咄嗟に左膝でシャルルの右手のショットガンを蹴り上げ、同時にアサルトライフルのハンドガードでシャルルの左手のショットガンを振り払う。

「ぬっ！」

「はあっ!!」

シャルルは右手の武器を失い、もう片方も銃口を外されて体勢を崩してしまふ。

そこへオタクは、右手でライフルのグリップを握ったまま左手でアッパーハンドガードを掴んで、銃剣をシャルルに向けて突き出した。

「甘いよっ！」

オタクの攻撃に対しても、シャルルは冷静さを失わず、左手にナイフを取り出してオタクの攻撃を受け流し、オタクの腹を右脚で蹴って距離を取った。

「っ！」

反撃から一転して、再び攻撃を加えられる側に回ってしまったオタクは、シャルルの蹴りを食らって体勢を崩すと、直後に更なる衝撃を受ける。

オタクから距離を取ったシャルルが、オタクに向けてショットガンを撃ったのだ。

全く回避行動を取る暇も無かったオタクは、そのまま、三撃程シャルルの銃撃を受けてしまい、エネルギーを大きく削られてしまった。

「きつついな・・・」

何とか銃撃の嵐から抜け出して距離を取ったオタクは、ぼやきながらダメージのチェックを行う。

その間に、シャルルはショットガンのリロードを行い、空いた左手にグレネードランチャーを展開した。

「まだまだ行くよー」

口径60mmの八連発リボルバーグレネードを構えると、シャルルはオタクに向けて連続で発射する。

「ぬおおおお!!」

オタクは砲弾の着弾点から大きく距離を取りながら回避行動を取るが、完全にノーダメージと言う訳には行かず、幾分の破片を受けてエネルギーが更に減少する。

このシャルルによる爆撃の被害というのは、直接的なダメージのみならず、連続した爆発によつて巻き上げられた粉塵が煙幕の効果を果たしてオタクの視界を奪う事にもなり、オタクは神経を研ぎ澄まして次の攻撃に備えた。

「次は何をするつもりだ・・・」

土煙に遮られた状況で、オタクはアサルトライフルを構えながら吹き、行動の予想を立てる。

セオリー通りならば、土煙が晴れて此方の姿が見えると同時にもう一度撃つてくるのが通常だが、そんな見え透いた手をシャルルが使うようには、オタクには思えない。

自分ならばと考えれば、オタクは接近しての攻撃を予想するが、ふと、先程のシャルルの爆撃に違和感を覚える。

「・・・何故、当たらなかつた？」

シャルルほどの腕前ならば、もつと至近距離に着弾し、より大きなダメージを受けるのではと言う考えが浮かび、先程の場面を思い出す。

先程のシャルルの攻撃が自分を狙うと言うよりも、寧ろ敢えて広範囲に広がるように撃った物の様に思えたオタクは、額を冷たい汗が滴るのを感じた。

そして、次の瞬間、目の前に雪片を構える一夏が姿を現した。

「おおおおおおお!!」

「ダニイツ!!」

余りにも予想外な一夏の出現と、攻撃に驚いたオタクは声を上げて感情を顕わにし、しかし、それでも身体が反応して防御に回る。

「つつつ!!」

「はああああああ!!」

振り下ろされた雪片の実刀を銃剣で上手く受け止めたオタクは、地面に膝を着いて歯を食いしばり、圧力を掛けてくる一夏に抵抗する。

「つ・・・!」

罅迫り合いをしているだけで減っていくシールドエネルギーに歯がみして、オタクが行動に出た。

オタクは一夏の圧力に対して一瞬だけ全力で押し返すように力を込めると、直ぐに銃を引いて身を躲し、体勢を崩した一夏に足払いを掛ける。

「うあつ!？」

突如として抵抗を失った一夏は一気に前につんのめり、更に足を払われた事で地面に前のめりに倒れ込む。

一夏は、直ぐさま振り向いて身体を起こそうとするが、そこにはオタクの向けるアサルトライフルの銃口と銃剣の鋒があった。

「っ！」

オタクは、一夏に対して向けた銃の引き金を引き、銃撃を浴びせようとするが、一夏はその体勢のまま後ろ向きに飛び出し、追って飛んでく砲弾を躲しながらオタクから距離を取った。

「ちいっ！」

チャンスを生かし切れなかった事に舌打ちして、オタクはショットガンを左手に展開すると、相棒のラウラの姿を探す。

「少佐殿！」

ラウラは、先程までオタクと戦っていたシャルルから一方的に攻撃を受けていた。

A I Cを展開してシャルルの放つ銃弾を受け止めたかと思えば、それを見たシャルルが直ぐに武器を変え、グレネードを撃ち込込み、近接信管を作動させてラウラにダメージを与えている。

それを見たオタクは直ぐさま動き出し、両手の銃をシャルルに向けて放ちながらラウラの元へと向かい、ラウラを支援した。

「少佐殿！」

「大事な！」

爆風で体勢を崩していたラウラは、オタクが駆けつけて言葉を掛けると、直ぐさま起き上がって言葉を返す。

シャルルはオタクの射撃を受けると攻撃を止めて距離を取り、相棒の一夏と合流を果たした。

「曹長、状況は」

「エネルギー残量は4割、20mmを僅かに消費。少佐殿は？」

「残量7割、左の手刀を失った」

互いの状況の把握を済ませると、シャルル達に銃を向け続けるオタクに、ラウラが言葉を掛ける。

「曹長、客観的に見て此方の方が劣勢だ。敵の戦力を上方修正する」
「了解」

「コレから私はレールカノンで榴弾を放ったら、一気に肉迫する。援護を頼む」

ラウラがオタクに言うのと、オタクは直ぐさま左手のショットガンを収納し、もう一挺のアサルトライフルを取り出して構えた。

「では、行くぞ！」

「アイアイマム！」

宣言通りにラウラが榴弾を放ち、その直後に残った右の手刀を構えて前が出る。

ラウラの放った砲弾は、二人には易々と買わされてしまうが、それによって一瞬だけ、シャルルと一夏の間が出来て、爆炎と土煙で二人の連携を阻害する。

「はあああああ!!」

雄叫びを上げるラウラの背後からは、オタクが二挺のアサルトライフルで援護射撃を行う。

一番危険度が高いと判断したシャルルに優先して制圧射撃を行い、シャルルからのラウラへの攻撃を予防し、ラウラが一夏との戦いに集中できるようにした。

「おつとおつ!!」

シャルルとて、ただ黙って撃たれているだけでは無かった。

オタクに対抗してアサルトライフルを両手に持つと、オタクに向けて打ち返す。

シャルルのアサルトライフルは口径こそ55口径と劣る物の、発射速度では倍程度の速度を持っており、制圧射撃と言う点ではシャルルの方に分が有った。

残りのエネルギーの少ないオタクは、更なるダメージを受けるのを嫌い、シャルルに対しての射撃を続けながらも、回避の為に空に舞っ

た。

「つち！・・・遅い・・・！」

アリーナの障壁のギリギリを反時計回りに飛びながらダンボールの速度の遅さに舌打ちするオタクは、徐々に近づいてくるシャルルに対する対抗策を考える。

そんな、オタクを嘲笑うかの如く、シャルルは右手でアサルトライフルの射撃を続けながら左手にグレネードを展開してオタクの進行方向上に榴弾を撃ち込む。

「おおっ！」

先程同様に一方的に追い詰められるオタクは、時折、背後に迫るシャルルに向かって射撃を行い、牽制して逃げるが、シャルルの方が一枚上手で、その距離は徐々に詰められていき、遂には直ぐ後まで距離を詰められる。

撃てば必中という距離にまでシャルルが近づいた瞬間、オタクは身体を翻してシャルルに向かい合う形で背面飛行の体勢を取った。

「っあー！」

「っ！」

目と目が合い、互いの白目までもが見える距離で、オタクとシャルルは己の銃を構えて引き金を引いた。

直後に銃口から吐き出される熱い鉛と銅の弾丸が、互いの機体を削るかと思う瞬間、オタクはスラスターの出力を下げて速度を落とす。
「!?」

高速で飛行する最中にオタクが速度を落とすと、その相対速度の差が大きくなり、シャルルとオタクは空中で纏れ合うように衝突した。
「捕まえたで御座るよ」

「っ!!」

オタクがシャルルに向かって言った直後、オタクはシャルルの纏うラファール・リヴァイブの左側のウイングを掴み、そこから自身のスラスターを目一杯に噴かせてアリーナの内壁に押し付けた。

「ぬああああ!!」

「くうっ!!」

高速で内壁に押し付けられたシャルルのラファールは、激しく火花を散らせながらガリガリと機体とシールドを削られる。

この時、ラファールと壁との間に強力な摩擦が出現し、速度は徐々に落ちて地面に近づいていく。

そして、遂にオタクの足が地面に近づき掛けた瞬間、オタクは機体の力を最大限に発揮してシャルルを引き落としながら地面に着地してその勢いのままに、シャルルを投げ飛ばした。

「きゃっっ！」

悲鳴を上げるシャルルは、何とかして自身の姿勢を制御しようとするが、そのまま背中から地面に打ち付けられ、地面を削りながらアリーナの内壁に激突する。

「っっっ！」

衝撃に思わず呻くシャルルだが、その直後に自身に向けて飛んでくる4発のミサイルの存在に気付く。

回避しようと身体を動かすシャルルだったが、最初の1発を回避するのみで、後の3発はマトモに直撃し、周囲を土煙と爆煙で包まれて視界を失った。

「シャルっ!!」

一夏が相棒を心配して声を上げ、思わず爆音のした方を向いてしまうが、それは悪手だった。

「余所見している余裕が在るのか？」

「っっっっっ！」

目の前のラウラから一瞬でも気を逸らしてしまったが最後。

一夏が視線を戻すと、目の前にはラウラの繰り出した手刀の鋒が迫って来ており、回避は不可能だった。

「ぐあっ!!」

手刀を受けて後に突き飛ばされた一夏に、更なる追撃で2本のワイヤーブレードが迫る。

「くっっそおおお!!」

持ち前の反射神経で体勢を立て直した一夏は、何とかワイヤーブレードを弾くが、その直後、背後にオタクが現れた。

「隙ありで御座る w w w」

「っ！小田っ!!」

一夏の体勢は雪片を右上に振り上げた状態で、オタクが現れたのは一夏の右後ろ。

この体勢から刀を振って反撃に出る動きなど一夏には到底出来るはずも無く、また、ワイヤーブレードを弾いた直後の身体が伸びきって動きを取れない瞬間だった。

「っ！」

一夏には何も出来なかった。

ただ歯を食いしばってオタクの繰り出す攻撃に備えるしか無く、覚悟した衝撃が直ぐに一夏の右腋を襲った。

「ぐがっ!!」

アサルトライフルの銃剣で右腋を突き刺され、装甲とシールドのエネルギーを削られた。

「っああああ!!」

オタクの攻撃でダメージを負い、それでも身体を反転させてオタクに反撃を掛けようとする一夏に対し、オタクも銃剣を構えて迎え撃つ。

「一夏っ！」

ここでシャルルが一夏を助けようと高速で飛翔し、オタクの背後に迫ってショットガンを構えるが、そのオタクを護るようにラウラが割って入った。

「はああああああ!!」

「おおおおお!!」

オタクは両手のアサルトライフルの銃剣で一夏に応戦し、その背後に迫るシャルルには、ラウラがA I Cを発動して迎え撃った。

至近距離で攻撃を仕掛けようとしたシャルルはラウラのA I Cによつて動きを止められ、その間にオタクは一夏の攻撃を右手で払いながら左手のライフルの銃剣を突き立て、更に一夏の腹を前蹴りして後に押した。

「曹長！」

「アイアイア!!」

シャルルを押し止めていたラウラがオタクに声を掛けると、オタクは心得たとばかりにシャルルの方へと向き直り、それとは反対にラウラが一夏の方を向いて身体を入れ替える。

「タクっ!」

「デユフフフww」

拘束を解かれたシャルルだったが、勢いを失った状態で目の前にオタクを迎える事になり、シャルルが引き金を引く寸前、ダンボールの太腿部分が火を噴いた。

先日の筈との戦いで見せた物と同じ自己鍛造弾は、高速で金属ライナーを打ち出して、シャルルに襲い掛かる。

「うああああっ!!」

一瞬、ほんの一瞬の判断が、明暗を分かつ。

無意識に動いたシャルルの身体は、逃げるためには無く、前に出てオタクに向かう様に動き、その僅かな誤差が、ライナーの直撃を回避する事になった。

「だにいい!!?」

放たれたライナーは、1発がシャルルのガードの為に構えられた右腕を捉えるが、もう1発はそれと避けられた。

タングステンの装甲すらも貫く程の破壊力を持つ自己鍛造弾の金属ライナーを受けたラファールの右腕は、表面の装甲と内部のフレーム、機械部分を完全に破壊してもぎ取られるが、ラファール自体の撃破には至らなかった。

「っ!コレでっ!!」

オタクの攻撃の直後、お返しとばかりにシャルルが声を上げて残りの左腕を突き出して攻撃態勢に入る。

オタクは、この後のシャルルの攻撃方法を知っていた。

極至近距離、から繰り出されるシャルルの持つ最高火力の攻撃は、以前にも受けた事が在ったからだ。

グレー・スケイル、第二世代屈指の破壊力を誇るパイルバンカー。炸薬によつて杭を打ち出し、その衝撃を余すこと無く相手に伝える

最強の物理攻撃であり、相手と接している状態で無くては意味の無い、使い処の難しいその装備は、基本は相手の不意を突くのが一般的だが、全く存在を知らない相手との戦いなどそうそう起こる物ではない。

事前に調査されて知られている事の方が多い現状では、寧ろ、相手に存在を知られていても効果的に運用する方法こそが重要になる。

それは即ち、分かっているにも回避する事の出来ないタイミングで使用すると言う事だ。

「ツツツ!!」

完全に懐に入られたオタクは、アサルトライフルで反撃しようにも近すぎて使えず、こう言う時の為の内蔵兵器は、遂今し方、躲されたばかりだ。

自身の腹部に押し当てられる凶器に、刹那の時の中で敗北を覚悟するが、その構造が目に入り込んだ瞬間、オタクは右手のライフルを手放してシャルルの延ばされた腕を掴んだ。

「なっ!?」

シャルルが驚くと同時にグレー・スケイルが撃発され、そのリボルバーが回転して炸薬に点火される瞬間、リボルバーが動きを止めた。

「ぐおおお・・・!!」

衝撃と傷みに呻くオタクの右手は、確りとシャルルの切り札のシリンダーを掴んでおり、その回転する筈だったシリンダーにダンボールの親指が食い込んで回転を止めている。

「なんて無茶を・・・!」

「リボルバーの構造的な欠陥だ・・・!」

オタクを逃がさない様に、シャルルは半ばからもぎ取られた右腕を伸ばしてオタクの背中に回し、オタクは右手でシャルルの左腕を確りと掴む。

唯一自由になっているオタクの左腕は、ほぼ抱き付く形になっているシャルルに対しては何も出来ず、二人は完全な膠着状態に陥った。

「ここから如何する?」

「そっちこそ・・・後何ができる」

「・・・」

シャルルの挑むような問い掛けに、オタクが同じく挑発を交えて答えると、シャルルは少し黙り込んだ。

その様子に疑問を覚えたオタクは、シャルルに声をかける。

「・・・如何した?」

「いや・・・タクって、普通に喋るとそんな感じなんだなくって」

普段はキャラ作りしていたオタクは、余裕が無くなると素に戻る事が在るが、今回のシャルルとの戦いは、途中からキャラを維持する余裕が無くなってしまい、遂に先程からは素の喋り方をしていた。

「何でキャラ作りなんてしてるの?」

「あんまりそこに突っ込まないでくれ」

互いに如何して良いか分からずに緊張感の欠片もない話をしていった時だった。

「っ!」

「きゃっ!」

突然、一夏が吹き飛ばされてきて、二人にぶつかり、纏れ合いながら三人が土煙に覆われてしまう。

「っく・・・!!」

土煙が晴れたところで、オタクは近くにいるであろう二人に攻撃を加えようと動くが、直ぐに異変に気付いて、その動きを止める。

「一夏!」

オタクにぶつかった一夏の纏う白式は激しく損傷しており、明らかに試合を続行できる状況では無く。

オタクは自主的に試合の中断の判断を下す。

「少佐! 試合は続行不能だ・・・!」

自分の相棒に試合中断を伝えようとしたオタクは、その異常な事態に言葉を失う。

「タクっ!」

「シャルル! 緊急事態だ!!」

「っ!!」

ここに来て、復帰したシャルルも直ぐに異変に気が付いてオタクに

声を掛けるが、オタクの声に更なる異常に気が付いた。

「何だありや……」

眩くオタクの視線の先には、そこに居るはずのラウラが居らず、その代わりにISの様な物を纏った黒い人形が立っていた。

何処か、オタクの知る人物の様なシルエットのその不気味な人形は、右手に人降るの刀を持ち、オタクの方を向いて動かずにただ立っていた。

「……ラウラが……」

「一夏！」

「……ラウラがいきなり……」

意識を取り戻した一夏が、説明する。

「ラウラを倒したと思ったら……いきなり、あの変なのに取り込まれたんだ……」

「大丈夫か？」

「……平気だ……それよりも、アレは俺が何とかする」

ボロボロの機体を引き摺る様にして立ち上がった一夏は、オタクの言葉に答えながら前が出る。

そんな一夏に、シャルルが制止の声を掛ける。

「無茶だよ！そんな状態じゃ……」

「ダメなんだ……アレは……アレだけはダメなんだ……！」

しかし、ここで白式に限界が訪れる。

白式が機体のダメージ過多によって状態の維持が困難になり、自動的に待機状態に戻ってしまう。

「ほら……やっぱり無理だよ」

シャルルが一夏を窘める様に言うが、それでも一夏は諦めずに目の前の謎のISを睨み続けた。

そんな一夏に、オタクが声を掛ける為に口を開く。

「本気か？」

「勿論」

「機体が出せなくてもか？」

「剣が一本あれば一撃で十分だ」

一夏の言葉を聞いて、オタクはシャルルに話し掛ける。

「シャルル」

「・・・何？」

「俺の残りのエネルギーを一夏にバイパスしてくれ。多分出来るだろ？」

「・・・気が乗らないけど」

「頼む・・・」

「・・・はあ」

諦めた様に溜息を吐いてシャルルは、自身の機体からコードを延ばすと、オタクに手渡す。

シャルルからのコードを受け取ったオタクは、そのままダンボールのソケットにコードを差し込み、エネルギーをシャルルに渡した。

「一夏・・・手を出して」

シャルルに言われるままに一夏は右手を差し出し、待機状態の白式にコードを繋げる。

オタクとシャルルの二人の残ったエネルギーが一夏に渡されると、ギリギリで雪片が部分展開できた。

「じゃあ、行つてくる」

「ああ、行つてこい」

「一回きりだから気を付けてね」

「ありがとう」

そう言つて去つて行く一夏の背を見送りながら、シャルルがオタクに話し掛けた。

「なんで行かせようと思つたの？」

「ああ・・・なんて言うか・・・男の子だからかな」

「何それ？」

「分からないか？・・・フランスと日本じゃ、やはり通じないのか？」
「えっ!？」

「・・・まあ、分かるかどうかは分からないが、男の子には根性を見せる時があるんだよ」

「そうなの？」

「ああ」

その後、一夏は謎の人形の攻撃を掻い潜って懐に入り、一刀の下に斬り伏せて、ラウラを救い出した。

「それにしても・・・」

「如何したの？」

「決着は着かなかつたな・・・」

「ああ・・・」

「今度こそ勝てるかと思っただけだな」

「まあ、元気出しなよ。また何時でも相手してあげるから」

「そうか」

そんな会話をしながら、オタクとシャルルはラウラを抱えて近づいてくる一夏を迎え、その後にはアリーナに入ってきた教員に救助された。

この事件を理由に学年別トーナメントは中止となり、一学年最強の座は保留のまま終わった。

第十八話

「曹長」

「オッフwなんで御座るか？」

学年別トーナメント終了から二日経った日曜日、オタクは医務室のベッドで暇を持て余していたラウラの相手をするために彼女に、とあるライトノベルを貸し出していた。

何もする事の無かったラウラは、そのライトノベルを手にとって読み始めるが、暫く読んだ辺りで唐突にオタクに声を掛ける。

同じくライトノベルを読んでいたオタクは、顔を上げてラウラに返事をする、ラウラは手に持っていた本を指差して尋ねた。

「幾つか聞きたいことがあるのだが良いか？」

「w w w 良い御座るよw w w 何で御座るかw w w」

「この部分に書いてある事なのだが、バンカークラスターと言う兵器は、どのような運用思想の下に開発されたのだ？GPS誘導爆弾のバンカーバスターをばらまく事に何の意味があるのか、また、200の地中貫通爆弾を搭載出来るミサイルとは、どのようなミサイルなのだ？」

「それを聞くで御座るかw w w」

「それと、コッチの巻に出てくる拳銃はどう言う素材なのだ？紅茶を掛けただけで熱膨張で不具合を起こす銃器など聞いた事が無い。そして、このメタルイーターと言うアンチマテリアルに関しては素直にM2を使えば済むのに、何故、態々ライフルにしたのだ？」

「やつべw w w 反論出来ねえw w w」

ラウラからの指摘に対して、オタクは暫く考えてから口を開いた。

「ではwまずは、メタルイーターに着いてで御座るが、恐らく重機関銃よりも搬送性に優れ、かつ強力な単発の火力を指したと推測できるで御座る」

「ふむ」

「態々ライフルにしたのはその搬送能力を高めると同時に、M2よりも手に入りやすいと言う事もあると思われ、つまり、コレは民間で手に入る銃器で50口径の機関銃の代替品を目指したと考えるのが自

然で御座る」

「成る程」

「次に、此方のバンカークラスターに着いてで御座るが、コレは作った国を見れば納得がいくはずで御座る」

「何？」

「コレを作ったのは英国で御座る。あの、珍妙な兵器を作る事に定評のある英国で御座る。それだけで説明がつくで御座る」

「確かに。あの国は妙な物ばかりを作る」

正直、ドイツも日本も碌な物を作らない気がするが、当の本人達にはその様な考えは浮かばなかった。

「最後に、この拳銃で御座るが・・・あく・・・恐らく、正規品では無く、自作のデッドコピーと考えるのが自然かと」

「だが、幾ら粗悪品にしてもコレでは一発撃てるかも分からないでは無いが」

「・・・火薬では無く圧縮ガスか何かで弾を撃つ物だったとしか言いようがないで御座るw w w」

「・・・そうか」

非情に苦しい説明だが、ラウラはオタクからの答えを聞いて、それ以上は追求はしなかった。

それから、ラウラは前にオタクから進められたネット小説を読みながら再びオタクに尋ねる。

「曹長」

「今度は何で御座るかw w w」

「この小説なのだが、妙に誤字と脱字が多くは無いか？幾ら無料の投稿作品とは言え、コレは酷すぎるだろう。特にこの十七話は酷すぎると思うが」

「・・・ネットにも色々居るので御座る・・・きつと酔っぱらって書いていたので御座る・・・」

「そうか」

それから暫く、二人は無言で思い思いに暇を潰していた。

そろそろ、西の空が赤く染まり始めると言う時間に差し掛かり、そ

ろそろお暇しようかとオタクが思い始めていた時、医務室の扉が開かれた。

「やあ、ここに居たんだね」

「これはwシャルル氏wwwwこんにちはで御座るwww」

「はい、こんにちは」

入ってきたのはシャルルだった。

何処かに出掛けていたのか、制服では無く私服姿で、もうすぐ夏だと言うのに、妙に厚着をしているようにオタクは感じた。

「シャルル氏、随分と寒がりです御座るな？」

「へっ？」

「今日は中々暑かった筈で御座るが、それでもジャケットを着るとは」

「あ、ああ、うん、そうなんだ。僕って寒がりだし」

シャルルの言葉に、ラウラが反応して口を開く。

「コレで寒いのか？私に取っては少し暑く感じるが」

緯度の高いドイツ出身のラウラは、今日は少し暑く感じられたらしく、シャルルの寒いと言う言葉に驚いた様子だ。

「ほら、フランスってドイツよりも緯度が低いでしょ？その所為じゃ無いかな。それに、僕はフランスでも南の方に住んでたから」

シャルルの言葉に、オタクが更に尋ねる。

「南？暖かいつて事は地中海側か？」

「うん、マルセイユだよ」

「そうか、随分温暖な所の出身なのだな」

ラウラが頷きながら言うと、今度はシャルルがラウラに尋ねた。

「ラウラは何処に居たの？」

シャルルの質問に対して、ラウラは直ぐに答える。

「私の部隊は、ニーダーザクセン州のゼードルフに駐屯している」

ラウラからの返事に、シャルルは今一ピンときておらず、それでも何となく北の方だと言うのは理解した。

それに対して、オタクは少し考えるようにしてから口を開く。

「ザクセン・・・もしや、オルテンブルク旅団で御座るか？」

「ああ、第31空挺旅団だ」

この時、シャルルは内心で何故地名を聞いただけで、直ぐに所属部隊の予想が出来たのだろうかと言う疑問を胸に抱きつつ、二人の話に耳を傾ける。

「空挺で御座るかwww拙者も是非とも行って見たかったで御座るなwww」

「曹長は空挺では無いのか？」

「最近配属が代わって中央即応連隊になったで御座る。その前の3月までは即応集団内の司令部直下だったで御座るwww」

中央即応集団は廃止されて陸上総隊になり、それに伴ってオタクは中央即応連隊に組み込まれた。

現在は連隊内の本部管理中隊に所属している事になっている。

「そうか、二人は軍に居るんだったね」

「厳密には拙者は違うで御座るがwww」

現在、この学園に通う生徒の中で、軍、もしくはそれに類する組織に所属しているのはオタクとラウラの二人だけであり、それ以外の他の専用機持ちは企業や法人に所属している。

「さて・・・」

シャルルが来てから更に話し込んでしまつて、陽が水平線の彼方へとその姿の半分を隠し、東の空に夜の闇が迫り始めている。

オタクは小さく言葉を発しながら立ち上がつて、ベッドの上のラウラに言葉を掛ける。

「拙者はそろそろ、お暇しようと思つて御座るwww」

「あ、じゃあ僕も」

オタクの言葉に続いて、シャルルも立ち上がつてラウラに向く。「そうか」

帰るといふ二人に向かつてラウラは、短く言葉を返す。

「本は置いて行くで御座るwww暇つぶしに使つて下され少佐殿」

「ああ、有り難く借り受けよう。明日には返す」

「お気遣いなさらずwww」

そう言つてオタクはラウラに背を向けると医務室の外に向かう。

「じゃあ、僕も行くね？また明日」

「ああ、教室で会おう」

シャルルもラウラと言葉を交わして直ぐにオタクの後を追ひ、医務室を後にした二人は並んで暗い廊下を歩く。

「何か、タクってラウラと仲が良いね」

「それで御座るなw拙者と仲良くしてくれるなんて、優しいおにやのご様で御座るwww」

「もしかして、タクってモテるの?」

シャルルの放った言葉を聞いて、オタクは足を止めて隣のシャルルに顔を向ける。

「な、何?」

無言で自分の事を見詰めてくるオタクに、シャルルは戸惑いながら声を掛けた。

「シャルル氏」

「な、何かな?」

「wwwそのジョークは無いで御座るwwwもう少し現実味のある冗談の方が面白いで御座るwww」

「あ、あははは。そうかな?」

「それで御座るよwww拙者がモテるなんてwww拙者とお付き合いして下さるおにやのご様は、ツンドラ地帯の奥地にも居ないで御座るwww」

そう言うと、オタクは笑いながら歩き出し、シャルルもその後が続く。

校舎を出ると、寮へと向かおうとするシャルルとは反対に、オタクは駅へと足を向ける。

その事に疑問を感じたシャルルは、オタクに尋ねた。

「何処に行くの?」

「ちよつと野暮用へwww」

「野暮用?」

「デュフフwwwラーメンを食べに行こうかとwww」

「ラーメン!」

オタクが外のラーメン屋に行くと言うと、シャルルは目を輝かせて

食いついた。

「ラーメン屋さんに行くの!？」

「そのつもりで御座るwwwシャルル氏も来るで御座るか？」

「勿論！」

オタクがシャルルに聞くと、シャルルは二つ返事で答える。

ラーメンと聞いてテンションを上げるシャルルは、待ちきれないと言った様子で足早に駅へと向かおうとしてオタクを急かす。

「早く行こう！早く！」

「シャルル氏www落ち着くで御座るwww」

最早、我慢出来ないと言う風にシャルルはオタクの右手を掴んで駅まで引つ張って走り、丁度良く到着していたモノレールに乗り込んだ。

「ラーメン」

余程、ラーメンが楽しみなのか、シャルルは珍しく落ち着き無く身体を揺らして、歌うようにラーメンと呟いた。

「www」

オタクはその様子を微笑ましく思いながら眺め、ラーメンの前に飲みに行こうとしている事を伝えるべきか悩んだ。

そんな二人を乗せたモノレールは本土に到着し、ドアが開くなり、シャルルがオタクの手を引いて駅の外に向かう。

「さあ、早く行こう！」

「ま、待つで御座るシャルル氏」

シャルルはオタクの制止の声を聞くと、渋々立ち止まってオタクに顔を向ける。

「申し訳ないで御座るが、拙者、ラーメンの前に行きたい所があるので御座る」

「行きたいところ？」

オタクに言われて首を傾げるシャルルに、オタクが目的地を告げる。

「居酒屋に行こうと思っているで御座るwww」

と言うと、シャルルは顔を伏せて黙り込んでしまった。

そんなシャルルの様子を見て、オタクは悪い事をしてしまったかと思つて予定を変更しようかと考えるが、直後にシャルルが顔を上げて言った。

「いいね！」

「ふあつ？」

「居酒屋！僕も行ってみたい！」

このシャルルの一言で二人で居酒屋に行く事が決定し、オタクは内心で今日の酒量は自重しようと思つた。

「wwwでは行くで御座るwww」

オタクが向かった居酒屋は、学園に来てから週一程度で通うようになった店で、普段通りにカウンター席に着く。

シャルルもその後が続いて、オタクの隣に座り、用意されたおしぼりで手を拭う。

「タクは何を頼むの？」

「そうで御座るな……」

シャルルに聞かれたオタクは少し考えるようにして、取り敢えず店員を呼ぶ。

「すいませーん」

オタクが声を上げると、店員が直ぐに駆け寄ってきて注文を取る。

「取り敢えず生大一つと……シャルル氏は何を呑むで御座る？」

「じゃあ、リンゴジュースで」

「……で、あ……刺身盛り合わせとアンキモ、鶏唐揚げ……シャルル氏は？」

「え……何にしようかな……」

少し考え込むシャルルは、顔を上げてオタクに言った。

「タクがオススメしてくれるので良いよ？」

シャルルに言われて、オタクは店員に向き直つて注文を続ける。

「天ぷら盛り合わせで」

注文を締めくくると、店員は注文の内容を確認してから、足早に厨房へとオーダーを伝えに行く。

「ここがニホンの居酒屋」

「普通の居酒屋で御座るwww」

感慨深そうに店内を見回すシャルルを、オタクはホッコリして見詰め、その後に運ばれてきたジョッキを受け取った。

ジョッキに並々と注がれたビールをオタクは勢い良く飲み始め、一息に全てを飲み干してしまう。

「生大お代わり！」

直ぐさま店員に声を掛けてお代わりを要求するオタクを、シャルルは啞然として見詰めていた。

「どうしたで御座るか？」

オタクが尋ねる。

声を掛けられたシャルルは少し呆けた様子で、反応を返すのにタイムラグがあった。

「え、あ……いや、凄い勢いだつたなって……」

「wwwいやはやwww最初の一杯は遂www」

笑って頭を掻くオタクの下に、二杯目のビールが運ばれてくる。

同時に、オタクとシャルルの二人の前に小皿に盛られた漬物が置かれた。

「コレは？」

「お通しで御座るw」

「オトシ？」

聞き慣れない言葉にシャルルが首を傾げ、オタクはビールを一口呑んでから説明する。

「居酒屋なんかで酒を頼むと出てくるつまみの事で御座るw」

「タダなの？」

「店によるで御座るwww色々人によって意見はあるで御座るが、拙者は気に入っているで御座るよwww」

「ふくん……お通しか……」

等と話している内に、二人の下に注文していた料理が届く。

「さあ、食べようで御座るwww」

オタクはそう言っただけで唐揚げから食べ始めた。

オタクに促されたシャルルも、なすの天ぷらを箸で持ち上げようと

するが上手く行かない。

「オッフｗｗｗｗシャルル氏ｗｗｗｗまだ、箸には慣れて居なかったで御座るかｗｗｗｗ」

「うん．．．少しずつ練習はしているんだけどね」

少し残念そうに小さく返すシャルルに、オタクは笑いながら返す。

「まあ、追々慣れていけば良いで御座るｗｗｗｗ」

そう言つて、オタクは店員にフォークを持ってくる様に頼むが、突然シャルルがオタクに向かって突拍子もない事を言い出した。

「ねえ、タク」

「なんで御座るか?」

「食べさせてよ」

「．．．ゑ?」

突然何を言い出すのかと思えば、シャルルは自分に食べさせろとオタクに要求して口を開けた。

「．．．」

「ねえ．．．早く来て?」

シャルルに促されたオタクは、何かイケない事をしているような気分になりながら、つゆに漬けたなすの天ぷらをシャルルの口に運ぶ。

「．．．あむ、んふふ．．．はむ」

「．．．」

シャルルは美味しそうに天ぷらを頬張り
笑みを浮かべる。

その様子をオタクは無心で見詰め、近寄ってきていた店員は、目の前に繰り広げられている光景に理解が追いつかず、二人に気が付いていた幾人かの他の客も、妙に犯罪臭のする二人の遣り取りに固唾を飲んだ。

「．．．美味しかったよ．．．タク．．．」

そう言われたオタクは呆然とし、店員の向ける視線に気が付いてフォークを受け取った。

「．．．次からはコレで食べなさい」

「．．．僕はタクでも良いのに．．．」

シャルルに言われたオタクは、必死で自分に言い聞かせる。

目の前に居るのは男で、幾ら女顔で美形で華奢であろうとも男であると必死で言い聞かせた。

「……」

「……如何しました？」

オタクは自分の背後に近づいてきた店員に気が付くと、訝しんで声を掛ける。

オタクに声を掛けられた店員は、オタクの前に焼酎の注がれたコップを置いて言った。

「サービスです」

「はあ……」

「……私、そう言うの嫌いじゃないです」

生返事を返したオタクに、去り際に言いながら店員は離れて行った。

「……」

「如何したの？タク」

「いや……何でも御座らん」

それから、オタクはビールと焼酎を飲み干し、頼んでいた料理をシャルルと分けながら食べ、食べ終わると直ぐに店を出た。

「美味しかったね！」

「そうで御座るなwww」

ここで、オタクはふと思つてシャルルに尋ねた。

「所でシャルル氏」

「何？」

「ラーメンは食べられるので御座るか？」

オタクは、この後にラーメンの一杯二杯食べるのは訳ないのだが、小柄なシャルルは大丈夫なのか気になった。

「うん！僕、こう見えて結構大食いなんだ」

心配ないとシャルルが胸を張って答え、オタクは、ならば大丈夫かと思ひ、目的のラーメン屋に向かう。

「何処のお店に行くの？」

「www店では無いで御座るwww」

「えっ？」

目的のラーメン屋は案外近くにあり、そこは確かに店では無かった。

「わっ・・・コレって屋台でしょ！」

「デュフフwww屋台ラーメンで御座るwww」

テンションが上がったシャルルに笑いかけ、オタクは暖簾を潜って席に着いた。

「ラーメン二杯」

簡単に注文を言うと、屋台の主人の老人が慣れた手付きで麺を茹で始め、丼に湯を注いで温める。

「ここは直ぐに注文するんだね」

「この屋台は醤油ラーメンしかないので御座るからwww」

オタクの注文した二人分のラーメンは直ぐに出来上がり、二人の前に出された。

「いただきます」

「ただで御座るwww」

鶏ガラベースの淡麗醤油スープに、やや縮れた中細麺、半分に割った煮玉子一つ分とチャーシュー三枚、海苔、ネギ、なると、ほうれん草、実々にオーソドックスな、醤油ラーメンと言われて想像するようなラーメンは、素朴ながら味わい深い逸品で、締め一杯には最高だった。

二人は、無言でラーメンを食べ進め、シャルルは使い慣れない箸に苦戦しながらも懸命に麺を啜る。

「ごちそうさまでした！」

結局、二人は何も言わずにラーメンを完食し、シャルルが老人に言葉を掛けると、老人は顔を上げずに右手を挙げて答える。

「美味しかった！」

「それは良かったで御座るwww」

笑顔のシャルルに答え、オタクは時計を見て時刻を確認する。

時刻は九時を過ぎており、オタクは兎も角、シャルルが出歩くには

些か問題のある時間だった。

「そろそろ帰るで御座るwwwこれ以上は拙者が織斑女史にしばかれてしまうで御座るwww」

そう言つてオタクは歩き出し、シャルルも続いて歩く。

二人は並んで駅に向かい、時折、言葉を交わしながらモノレールに乗つて学園の寮に戻った。

「今日はありがとうね」

「拙者で良ければ何時でも付き合つて御座るwwwシャルル氏は拙者の友人で御座るからなwww」

「ありがとう・・・」

オタクの言葉にシャルルが静かに礼を述べると、シャルルは少し俯き加減でオタクに言葉を掛ける。

「ねえ、僕つてタクの友達だよね・・・」

「奇な事をwww勿論で御座るよwww」

「何があつても？」

「何があつてもで御座るwww」

奇妙な事を言い始めたシャルルに、オタクは違和感を覚えながらも、普段通りに答えた。

そんな、オタクにシャルルは、少し寂しそうに笑みを浮かべて言つた。

「ありがとう・・・じゃあ、また明日ね」

「また明日で御座るwww」

そう言つて二人は別れ、オタクは何時もの寢床で横になり、シャルルの別れ際の様子に気がなりながら眠りに着いた。

その翌朝、シャルルは教室に現れなかった。

第十九話

「ここがパリか」

シャンゼリゼ通りの一角で、一夏が辺りを見渡しながら呟いた。その背後からラウラが声を掛ける。

「嫁よ。余りキョロキョロすると笑われるぞ」

「そうか・・・所で良い加減に嫁って呼ぶのは止めないか？」

「そうは行かん」

一夏の要望を一蹴して、ラウラが一夏に行動を説明する。

「先ずは情報収集だ。デュノア本社はパリ北西のセーヌ川沿いにある。先ずはそこに行ってみよう」

「分かった」

一夏はラウラに返事を返して空を見上げる。

何故この2人がフランスのパリにいるのかと言えば、話は二日程遡る事になる。

「シャルがフランスに帰った!?!」

シャルルが教室に来ていない事にクラスがざわめく中で、千冬がシャルルがフランスに帰国したと言った。

いの一番に反応した一夏は、叫びながら立ち上がって身を乗り出す。

「静かにしろ馬鹿者」

千冬の一言を受けた一夏が席に着くと、千冬は少しだけ話すと、本日は実習にするとだけ言い残して職員室へと戻ってしまう。

後に残された生徒達は一齐に話を始め、様々な憶測が飛び交った。そんな中で、ラウラが一夏に近づいて話し掛ける。

「少し良いか」

「何だ？」

「デュノアの事についてだが、気になる情報が入っている」

「・・・」

「曹長も聞いて欲しい」

「おk」

教室では話せないと言う事で3人は場所を移し、一夏の部屋で話す事になった。

「それで少佐殿、話とは？」

「シャルの事で何か知ってるのか？」

「ああ、コレは本国の私の部下から届いた情報なのだが、近々デユノア社に国連からの査察が入る事になっている」

「国連？」

穏やかでは無い話に、オタクの表情が真剣味を帯びて、ラウラの話に集中する。

一夏は状況が良く分かって居なかったが、友人の事とあって、同じようにラウラの話に耳を傾けた。

「何故、デユノアに査察が？」

オタクが尋ねると、ラウラが説明する。

「以前から有った話なのだが、デユノア社が国際テログループに装備の横流しをしていると言う嫌疑があった。当然デユノア側は否定していて、フランス政府もデユノアの擁護をしていた」

「その話なら聞いた事があるので御座るが・・・結局証拠不十分だったのでは？」

「そうだったのだが、状況が変わったのだ」

「と言うと？」

「2ヶ月前、中東で活動中だったイギリス陸軍空挺部隊が大規模な輸送車列を発見、これを強襲した。その結果、車列からは新品のフランス製兵器が多数発見されて、フランス政府が国連及びEUから突き上げを喰らった」

ラウラの説明は更に続く。

フランス政府はテログループ援助への関与を否定、国内の兵器会社の製品輸出先の一覧を提出すると共に、デユノア社の不正な兵器の密輸に関する情報を提供して、政府への追及を躲す様に動き始めた。

当初は、何処の国も見向きもしなかったフランスの悪あがきだったが、事態が大きく変わる出来事が起こってしまった。

「この前の学年別トーナメント決勝戦。我がドイツの違法なシステムの I S への搭載問題が関係してくる」

V T システムを不正に搭載していた事が件の大会で露呈してしまうと、ドイツは各国からの非難を浴びて苦境に立たされてしまう。

そんな時に、兵器密輸問題を早期に解決して終わらせようと言うフランスと、汚点払拭を狙うドイツの思惑が重なってしまった。

フランスはデュノア社を生け贄にする事でそれ以上の追求を逃れ、ドイツは国連の査察を主導すると言う事で手柄を立てて名誉挽回を狙っている。

「恐らく、デュノアが帰国したのもこの件に関わっているのだろう」

フランスとドイツの思惑が重なっただけかと思われたこの件には、更にややこしい裏があった。

それは、I S 委員会と国連の対立問題である。

I S 委員会は国連の下部組織では無く、完全に独立した国際機関なのだが、国連ではこの I S 委員会を国連の下部組織として I S を国連の管理下に置きたいと言う考えが有った。

国連がこの様な考えを持つようになるのも、委員会の杜撰な管理態勢や委員会の憲章の有名無実化等による I S の軍事利用に対する懸念から来ている。

国連は、今回のデュノア社の査察で I S 委員会に対して管理態勢の不備を始めとした委員会の杜撰さ等を追求して、委員会の権限を奪い取り、最終的には国連に取り込もうと画策している。

もつと言うと、この国連内部でも様々な団体や国の思惑が交差しており、デュノア社はありとあらゆる意味で割を食っている様な状態である。

「それで、ラウラは何が言いたいんだ？」

一夏が結論を求めると、ラウラが口許に笑みを浮かべながら言う。

「デュノアを助けたくは無いか？」

「どう言う事だ？」

「簡単な事だ。ドイツはより良い結果を求めている」

「・・・デユノア社一社のスキャンダルよりもフランス政府のスキャンダルの方がドイツに取って都合が良い。と言う訳で御座るな？」

「そう言う事だ。フランスには、ISコアの分配で煮え湯を吞まされた過去もある」

ドイツの保有するコアの数は10個。

それに対して、フランスは倍の20個を保有しており、他のIS委員会加盟国の中で、EUに加盟する国の中で最も保有数が少ないが、これはフランスによる働きかけが大きかった。

特に、ドイツ軍はこのフランスによる工作を大変怨んでおり、ドイツ政府とはまた別の思惑でドイツ軍はフランスの更なるスキャンダルと失脚を狙っている。

「私に協力すればデユノアを助ける事が出来るかも知れないぞ？」

ラウラにそう言われた一夏は、直ぐに結論を出す。

「ああ、シャルが助けられるなら何でもするよ。国の事とか良く分かん無いけど、友達を助けるのに理由なんて要らないだろ」

「そう言ってくれると思っていたぞ」

2人が合意して、シャルル救出作戦を立てる事が決まるが、オタクは領かなかった。

「拙者は少佐殿に協力する訳には行かないで御座る」

「何でだよ!?シャルがどうなっても良いのかよ！」

「さて、嫁よ・・・訳を聞かせてくれ曹長」

オタクに食ってかかる一夏を宥めて、ラウラがオタクに尋ねる。

オタクは、ラウラと一夏を見て答えた。

「拙者は陸上自衛官で御座る。日本の政府に属する人間としては余り勝手な事は出来ないで御座る」

ISと言う兵器を所持した陸上自衛官が他国で活動したとなれば、禁止されている軍事行動とも取られかねず、そうなれば国内での自衛隊への風向きはより強い物になってしまう。

オタクは、ラウラの提案に領くには余りにも責任のある立場に着いていた。

「まあ、曹長はそう言うだろうと思っていた」

「済まないで御座る」

「いや、止めてくれないだけ良い」

この後、ラウラと一夏は部屋を出てフランスを目指し、オタクは教室へと戻った。

「・・・小田も来れば良かったのにな」

残念そうに一夏が呟くと、ラウラが言葉を返す。

「それは無理だろうな・・・曹長には曹長の立場がある。特に日本軍は厳しい立場だと聞いている」

ここには居ない友人の事を想い、肩を落とす一夏だが、背後からのギターの音色に思わず振り返った。

「パリは良いな～wwwパン固いけどwww」

「小田！」

「曹長!?!」

赤いシャツに白いスラックスとジャケット、白いハットを被り黒いネクタイを掛けてギターを弾いてバゲットを頬張る男、明らかに周りのフランス人から不審者を見る目で見詰められている男、オタクの姿が一夏の目に写り込んだ。

「デュフフwww待たせたなwww」

「な、なんでここに?立場があるからって・・・」

「www事情が変わったので御座るwww」

「事情?」

気になる言葉を口にしたオタクにラウラが尋ねると、オタクは答える。

「自衛隊として、IS委員会から権限が奪われるのは面白くないと言う事で、国連の思惑を邪魔しに来たで御座るwww」

日本のISの半分は自衛隊の所屬であり、また、押し付けられたとは言え、IS学園も日本政府の管轄内にある。

もしも、ここで委員会が国連に飲み込まれると、今後の日本国内でのISの管理が自衛隊の手を離れてしまう事になり、そうになると、タダでさえ少ない予算を減額される材料になりかねない。

更に、学園も国連の管理下に移行されてしまい、日本国内に日本の司法の及ばない国連の土地が作られる事になり、日本政府としては決して容認できる様な事では無かった。

「まあ、要するに現状維持が日本的には望ましいので御座るwwwなので、全ての泥をフランス政府に被って貰う為に来たので御座るwww」

「何か・・・大人って汚いな・・・」

「そんな物だ」

ラウラが達観した言葉を吐いた後に、オタクに疑問に思った事を尋ねた。

「所で曹長はどうやって来たんだ？IS所持者が入国すれば直ぐに分かる筈だが」

極秘裏に動く必要の有るオタクだが、普通に入国すればその語気は直ぐにフランス政府の知るところとなり、思ったような活動が出来ないばかりか、何かしらの行動を見せれば、逆に日本がフランスに攻められる立場になってしまう。

ラウラと一夏はドイツの大使館を通じてフランスに入国しており、三日後の国連査察団のドイツからの先遣隊と言う名目で秘密裏に入国した。

この動きはフランス政府及びフランス軍にも伝えられているが、デユノアへの査察だと思っているため監視は非情に緩い。

だが、オタクの場合はその様な方法を取っても、この時期に大使館経由で入っても不信任感を煽るだけで意味など無い。

「デュフフフwwwアレを見るで御座るwww」

そうやってオタクが指を差したのは、近くのカフェに置かれているテレビのニュース映像だ。

「アレは？」

「明日は日本とフランスの首脳会談で御座るwwwその為に総理がフ

ランスに到着した所で御座るwww」

「まさか・・・」

「拙者はここには居るはずの無い人間で御座るwwwそれにしても政府専用機の中は寒かったで御座るwww」

「それって・・・不法入国・・・」

「違うで御座るよwwwタダ箱の中で眠っていたらフランスに来ちゃっただけで御座るwww」

そう言うと、オタクは2人に背を向けて歩き出す。

「何処へ行くのだ？」

「それは秘密で御座るwww取り敢えず着いてきて欲しいで御座るwww」

オタクに言われた2人は黙ってオタクの後に着いて歩き、暫くの間、オタクはシャンゼリゼ通りを進んで凱旋門とエッフェル塔を観光した後、狭い路地に入り込んだ。

「観光はここまでで御座るwww」

「漸くか」

オタクは近くのポストに近づくと、その蓋を開けて中を漁る。

「おい、勝手に人の家のポストを漁るなよ」

「大丈夫で御座るwwwあったwww」

オタクがポストから手を引き抜くと、一通の封筒が掴まれていた。その封筒を開けると中にはカセットテープが一つだけ入っており、疑問符を浮かべる2人を余所に、オタクは何処から取り出したラジカセにカセットをセットして再生ボタンを押した。

『おはようオタク君。さて、今回の任務だが、フランス政府の人身御供にされ掛けているデュノア社を救い、国連の野望を打ち砕く事だ。君としても大事な友人のシャルロット・デュノアを助ける事にも繋がるこの任務は望むところだろう。フランス政府は武器の密輸に関して関与を否定しているが、実の所は幾つかの兵器会社と結託して秘密裏に武器を戦場へと流しており、その目的は、フランス国内の雇用の創出と財政の健全化を目指す事だった。その中心となった会社こそがデュノア社だが、当時デュノア社内部では不審な動きが幾つか見ら

れ、CEOアルベル・デュノアの行動に不自然な点が見られた。恐らく、武器の密輸に反対したアルベル氏をフランス政府から送り込まれた役員達と一部の株主によって御飾りのトップにする事で事が露呈した場合の生け贄にするつもりだったようだ。このままでは、国連とフランス政府の考える通りの結果となり、デュノア社は倒産の憂き目に遭うだろう。何とかして君にはその結末を書き換えて欲しい。厳しい任務になるだろうが頼んだ。例によって、君あるいは君の仲間達に何かあっても当局は一切関知しないからそのつもりで。なお、このテープは自動的に消滅する。健闘を祈る』

直後に、カセットから煙が出てラジカセごと燃えた。

「コレは一体何だ？」

「・・・恐らく人首の悪ふざけだろう・・・」

「ミツ〇ヨン・イン〇ツシブル？」

「いや、ス〇イ大〇戦の方で御座ろう」

若干、年齢層の高そうなネタに戸惑いつつ、3人は今後の行動を決める。

「取り敢えずさっきの話が本当ならばデュノア社は本当の意味での生け贄であり、フランス政府のスキャンダルは計り知れないだろう」

「ドイツ軍としての動きは如何するで御座るか？」

「どうとも言えん・・・恐らくドイツ政府も国連もこの位は掴んでいるだろう」

「じゃあ、なんで本当の事を言わないんだ？」

「真実などどうでも良いのだろうな。ただ自分達の利益を優先して、デュノア社に全てを被せて目的を達成したいだけだろう」

ラウラの言葉を聞いた一夏は、憤りを露わにして拳を固く握る。

そんな一夏を見て、オタクがラウラに問う。

「少佐殿は如何するで御座るか？ 自国利益優先なら態々面倒くさい事をしなくてもよいで御座ろう？」

「そうだな・・・」

オタクの言葉に、ラウラは少し考えてから言葉を発する。

「確かに、曹長の言うとおりでな・・・」

「ラウラ・・・っ!？」

「だが・・・私が命じられたのはフランス政府の弱味を握る事だ」
「www」

「諜報部の連中と外務省の連中の事など知った事では無い。私は私に命じられた任務を遂行するだけだ」

そう宣言して、ラウラは笑った。

「それで御座るかwww」

そう言うと、オタクは路地の外へと顔を向ける。

「では、マルセイユへ行くで御座るwww」

「マルセイユ?」

「本社はパリで御座るが、今は蛻の殻で御座るよwwwアルベル氏はマルセイユにいるで御座る」

「何処からそんな情報を?」

「来る前に追加で貰ったで御座るwww」

そう言って、オタクは歩き出した。

2人も後を追って路地から抜け出し、パリの郊外を目指す。

公共交通機関は使用せずにひたすら歩き、人目に付かないパリ郊外の南西の林の辺りに着いた頃には丁度良く日が落ちていた。

「では、ここからは空を進むで御座るよwww」

「でも、バレないか?」

「流石に直線ではいけないで御座るwww」

「そうだな・・・一度ドーバーに出て海岸沿いに南下した後、ボルドーからスペイン国境付近を横断して地中海に出るのはどうだ?」

「異議無しで御座るwww」

「良く分かんねえけど、それで良いんじゃないか?」

「決まりだな」

それから3人は飛び立った。

日の落ちたフランスを超低空で飛び、西のカーンからドーバーに出た。

「ここからは南下する。高度は20m以下だ!」

「そんなに低く飛ぶのかよ!」

「念には念をで御座るw w w」

非常にサイズの小さいISではあるが、それでもレーダーに探知されるリスクを少しでも抑えるために常識外れな低高度を飛行する。

20mと言うと、アリーナ内での模擬戦ならば低いと言う程では無いのだが、音速に迫る速度で飛行する外の世界では僅かなミスで海面に叩きつけられる高度である。

「それにしても。あのテープはとんでもない間違いをしていたで御座るなw w w」

「
間違い？」

「シャルル氏の事をシャルロットって言っていたで御座るw w w 幾らシャルル氏が可愛くてもアレはひどいで御座るよw w w」

「そ、そうだな」

未だ真実を知らない友人に話すべきか否か迷いながら、一夏は夜の海を飛んだ。

第二十話

フランス南部地中海沿岸、フランス海軍の哨戒網を掻い潜り、空軍のレーダーにも見付からなかった三人は、暗闇の中に街灯りを見付けた。

「見えた！」

「ヨーロッパの灯で御座るwww」

現在の三人の高度は、海面から僅か10mと言う超低空で、速度は陸地に近づいた事も有って時速150km程度まで落としていた。

徐々に近づいてくる陸の灯りを前にして、不意に一夏が言った。

「所で、コレから如何するんだ？」

「デュフ？」

「・・・そう言えば」

ここに来て、三人は思い至った。

この後如何するかを全く決めていない事に、今気が付いたのだ。

「・・・」

「・・・」

「www」

三人の間に嫌な沈黙が降りる。

そうしている間にも陸は近付いてきている。

だが、三人は黙ったままで進み続け、いよいよ上陸と言う時に、オタクが言葉を発した。

「私に良い考えがある」

そう言つて、ラウラと一夏に着いてくる様に言うと、オタクが先頭に立つて速度を上げた。

街灯りに対してやや北にズレながら進み、海岸直前で一気に高度を上げた。

山の稜線を越えない程度にホップアップして、それから急降下を始めた。

ラウラの故郷の魔王の如く、夜のフランスの空を一直線に流れて一際大きな敷地を持つ工場の様な場所へと向かう。

そして、数秒後、オタクは敷地内のほぼ中央の広い道路に降り立った。

「ナイスランディングwww」

ガリガリと言うけたたましい音と共に、足下のアスファルトを削りながら、100m程滑走して止まったオタクは、その直ぐ近くに降りたラウラを確認して、ある事に気が付いた。

「・・・一夏氏がいないで御座るwww」

オタクが言うと、ラウラがそれに答えた。

「嫁なら、この先の建物に突っ込んで行ったぞ」

「オッフwww相変わらず、落ちるのが好きで御座るなwww」

恐らく好きでやっている訳では無いと思うが、兎に角着地が下手な一夏は、何かにつけて物にぶつかったり、地面に激突する事が多い。

「査察はまだ来ていない様だな」

「その様で御座るな・・・」

そう言いつつも、オタクはアサルトライフルとショットガンを取り出して構え、ラウラも手刀を構えて周囲を警戒した。

「・・・曹長」

「・・・なんで御座るか少佐殿」

「気付いているな？」

「勿論・・・どうやら、ここに用が有るのは拙者達だけでは無い様で御座るなwww」

その次の瞬間、二人に対して激しい銃撃が始まった。

「っ！」

「www」

二人は咄嗟に散開して飛び退いて、近くの倉庫らしき建物の物陰に隠れる。

何者かの射撃に対して、直ぐさま火点を割り出したオタクがアサルトライフルで応射するが、襲撃者に打撃を与えた感触は感じられなかった。

「少佐殿は先に行くで御座るwww」

オタクは謎の敵が射撃を止めて状況が膠着すると、直ぐさまラウラ

に声を掛けた。

ラウラに先行する様に進めたのには、一夏を孤立させている現状を嫌い、また、今一状況にマッチしない使いづらいラウラを離脱させる思惑があった。

「大丈夫か？」

先に行くように促すオタクを心配げに尋ねるラウラに対して、自信満々に答えた。

「モウマンタイで御座るよwww」

「・・・頼んだ」

ラウラも、現状で自身が足手纏いになりかねないと言う事に気付いており、僅かながらに口惜しく思いながらも、愚を犯すのを避けてオタクの言に従った。

ラウラからの返事を聞いて、オタクは直ぐさま物陰から身を乗り出して両手の銃の引き金を引いた。

狙いなどは付けずに、敵の射撃の元と思われる地点に制圧射撃を加えて、ラウラの援護をしたのだ。

「今で御座るwww」

「すまない！頼んだぞ！」

ラウラは、オタクに背を向けて夜の闇に向けて飛び込んで行き、それを確認したオタクは、暫くして射撃を止めて再び物陰に隠れた。

「さて・・・敵は何処の何奴だ？」

オタクは冷静に頭を働かせて考える。

先程の射撃からして、敵の数はそうは多くは無く、またそれ程離れてもいないと当たりを付けている。

「国連な訳は無い・・・フランス軍・・・違うな。なら、どっかのテロ屋・・・にしては装備が良い」

思い当たる節は、全て自分で言っただけで否定した。

そのどれもが余りにも可能性が低すぎて、言っただけで自嘲の笑みを浮かべてしまう様な物だった。

『あくあく聞こえるかな？オタクくん』

暗闇の中から何時ぞや聴いたスピーカー越しの女の声が響いてき

て、オタクは眉間に皺を寄せて声を上げた。

「・・・このクソアマ！」

『ぶつぶつそんな乱暴な言葉使いじゃあ女の子にモテないぞオタクくん。あつ・・・そんなの関係無しにモテなかったね〜ごめんごめんww』

「人の笑い方パクってんじゃねえよこの腐れアマ！」

互いに姿を見せない状態で、尚も舌戦は続く。

「この間のハッキングと言いつつ、よっぽど俺の事が嫌いなみたいだな」

『wwww気づいちやつた〜？wwwwそうなんだよね〜束さんは君の事が大嫌いなんだ〜wwww』

「奇遇だな。俺もお前の事が嫌いだよ」

『え〜君と意見が合うなんて気持ち悪く思わず鳥肌が立つちやつたよ〜wwww』

「なら、その皮膚剥いたらどうだ？二度と鳥肌が立たなくて済むぞ？序でに凶器みたいな顔が多少は増しになるだろう」

『wwww私不細工じゃねえ〜しwwww美人さんだし〜wwww』

「自分で自分の事を美人と言う女ほど痛い奴はいねえなwwwwお前友達居ないだろwwww」

『・・・ツチ』

「如何した？凶星突かれて何も言い返せないのか？wwww姉妹揃ってコミュ障ボツチとは流石だなwwww」

『カッチーン・・・今のは流石の束さんも見過ごせないな〜・・・ねえ・・・ちよつと頭冷やそうか？』

次の瞬間、オタクの隠れていた倉庫に極太の光線が直撃して火柱が上がる。

オタクは間一髪ので所で攻撃を回避しており、煌々と輝く火柱の灯りで周囲を確認して、攻撃の主を見付けた。

「この前よりゴツくなってるな・・・」

前回のゴーレムIIと比べて、装甲が強化された機体は更に大きくなっており、両肩のビーム砲は前回の物よりも大型化されていて、威力はさっきの通り格段に上がっている。

右手には大口径の機関砲を持ち、左手には前回同様にチェーンソーが備え付けてある。

『ふっふふくん！前よりも強くなったゴーレムⅡ改だよくんwwww君じゃあ倒すのは無理だねwww』

「・・・やってやるうじゃねえか」

篠ノ之東の言葉に、オタクはあからさまに闘志を燃やした。

この二人、余程相性が悪いのか、互いの言葉の一つ一つに敏感に反応しては相手に対する憎悪と殺意を強めている。

最早、水と油処では無く、濃硝酸と濃塩酸と言える程に不味い組み合わせだ。

『じゃあ、死んじゃえ』

その言葉の後、ゴーレムⅡ改の攻撃が始まった。

周りの物など気にしないと云わんばかりに両肩のビームを放ち、周囲の建物毎オタクを薙ぎ倒そうとする。

「っー」

しかし、オタクはこの砲撃を巧みな回避運動で躲すと、自身も反撃に出る。

「っらあ!!」

取り敢えずアサルトライフルの連射を叩き込んで見るが、前回よりも強化された機体に対して20m砲弾でさえ大した効果は無く、虚しく弾かれるだけだった。

「ツチー」

20mmが弾かれるや否や、オタクは直ぐさまスラスターを噴かして距離を取る。

近づいて攻撃する事も一瞬考えはしたが、前回でさえ大した効果を上げなかったのだから、今回はより慎重に成らざるを得なかった。

『ニヤツハツハ〜！逃がさないよ〜！』

東の声が響くと、ゴーレムは右手の機関砲を構え、直後に強力な砲弾を嵐のように撃ち出してオタクを狙う。

銃口から吐き出される機関砲弾はコンクリートの壁に当たれば風穴を開け、アスファルトの地面に当たれば爆ぜて凹凸を作り、樹木を

掠めれば大きく抉って使い物に成らない燃えるゴミにした。

「30mm位だな・・・M230か？」

オタクは機関砲の種類に当たりを付けつつ、建物を利用して隠れながら距離を離す。

「あのクソアマが馬鹿で助かった・・・」

巧みな運動で東の攻撃から逃れたオタクは、独り言ちて対策を考える。

「残弾はまだ有るが・・・この程度じゃ利きそうに無いな・・・あの感じじゃミサイルも利かんだろうし、自己鍛造弾も口径が足りないな・・・」

最早、万策尽きていると言えるほどに、オタクの武装では持て余す相手だった。

「何か・・・」

そう言い掛けて、オタクはふと自分が隠れている建物の看板を見ると、ある単語が目にとまった。

「・・・実験装備・・・？」

実験装備研究室、それが正しい建物の名前であり、そこは、デュノア社が売り出す新装備の研究と試作を行っている場所だ。

「・・・行けるか？」

と言った次の瞬間、オタクの目の前が爆ぜて、一瞬視界がホワイトアウトする。

「ぬおっ・・・!!」

爆発の衝撃で弾き飛ばされたオタクに対して、巨大な人型の影が近づいてくる。

『みくつけた〜』

「・・・」

『かくれんぼは、もう終わり？なら、次はプロレスごっこかな？』

東の挑発する様な言葉に対して、オタクは身体を起こしながら言い返した。

「・・・へっ・・・どっちもお前が出来そうに無い遊びだ・・・独りぼっちのお前じゃ、出来ない事だなwww」

『・・・まだ、そう言う事が言えるんだ・・・』

オタクの言葉に冷たい言葉を返しながら、束に操られたゴーレムがオタクの右腕を掴み上げて力を込める。

『わたしねく・・・実は、お人形遊びが大好きなんだく・・・』

そう束が言うと、ゴーレムの手に掴まれたダンボールの右腕が軋み始め、形状が変形し始める。

「ぐうううう!!」

右腕を潰される寸前のオタクはそれでも声を上げまいと破を食いしるが、無情にも、ゴーレムの力が更に上がる。

『アハハハハ!! 凄い顔だねくwwwまるで昔見た映画の主人公みたいwww!』

「っ!・・・悪趣味なクソアマめ・・・」

『うくん?何か言ったかな?』

オタクが吐き捨てる様に言うと、束はオタクの手を握る力を強めながら言葉を返した。

「ぐあおおおお!!」

遂に耐えきれなくなつてオタクが叫び声を上げる。

そんなオタクをゴーレムを通して見ていた束は、笑い声を上げてオタクを振り回した。

『アハハハハハ!! やつぱりお人形さんは楽しいねくwww・・・あっ! 思い出したよ! 昔見た映画、ランボーだ!』

束は映画の名前を告げると、同時にオタクを地面に叩きつけた。

「グハッ!!」

アスファルトに叩きつけられて、装甲が音を立てて凹み、完全に破壊された右腕の機械と装甲の中からは血の滲んだ腕が露出している。

「・・・クソつたれ!!」

オタクはこれ程に手ひどくやられていながらも戦意を失わず、残った左手のショットガンを構えてゴーレムに見舞う。

『今のは何? 攻撃のつもりかな?』

超至近距離であるにも関わらず、オタクの放った散弾は、しかし、全く効果は無く。

束の馬鹿にした様な声が響くと、次の瞬間にオタクを強い衝撃と圧迫感が襲う。

「ぐあああ!!」

『そうそう・・・私、お散歩の時に虫けらを踏み潰すのも好きだったんだ』

ゴーレムは地面に仰向けになっていたオタクを踏みつけ、グリグリと地面に押し付けて、潰そうとしてくる。

既にダンボールの真四角のボディは完全にへしゃげて変形してしまい、塗装も剥げて地の鈍い金属の色が見えた。

『ねえ、今どんな気持ち？虫ケラみたいに踏みにじられて、このまま挽肉にされるのは、どんな気持ち？』

意地悪く、悪辣な子供の様にオタクに声を掛けながら更に踏みつける力を強める束に、オタクは苦悶の表情を浮かべながら返す。

「死ぬ、このビッチ!!」

オタクは有らん限りの力を振り絞って叫ぶと、太腿の自己鍛造弾を全弾発射する。

突然の爆発に流石に体勢を崩したゴーレムは、一瞬だけオタクに乗せいていた右脚を上げてしまい、その隙を逃さなかったオタクは死力を振り絞って押し上げた。

「っらあああああ!!」

オタクが立ち上がると同時に、ゴーレムが重々しい音と土煙を立てて地面に倒れる。

「っ!!」

そして、オタクは、一縷の望みを掛けて半壊した実験装備研究室に飛び込んで、当たりを見回した。

「何か・何か無いか!?!」

焦って叫びながら見回すが、そこに有るのは先程のゴーレムの攻撃でスクラップと化した兵器だったものばかりで、使えそうな物が見当たらない。

『残念だったね〜www』

背後から、ゴーレムが起き上がってスピーカー越しの束の声が掛け

られる。

ゴーレムは両肩のビーム砲に紫色の光を集めて砲撃の準備を整えており、もはやオタクの命は風前の灯火だ。

「っ!!」

『ねえ、最後に言い残す事はあるかな？優しい束さんは辞世の句ぐらいは聞いてあげるよwww』

勝利を確信して、束はそんな事を言って嗤う。

それに対して、オタクは暗闇の中で、スクラップから何かを二つ拾い上げて振り向いて笑った。

「獲物を前に舌舐めずりは、三流のやる事だ間抜け」

そう言っただけでオタクは左手で掴んだ物を構えて引き金を引いた。

『っ!?!』

一瞬、青白い稲妻のような光が迸ると、二本のレールの間から眩い一条の光が走り、ゴーレムの胸を貫いた。

『なっ!?!』

束は驚きの声を上げつつも、ゴーレムを後に下がらせてオタクから距離を取り、直ぐにビーム砲を撃ってトドメを誘うとする。

「あめえっ!!」

ゴーレムの両肩のビームが迸る寸前、オタクはスモークを周囲に撒き散らして束を攪乱し、砲撃を躲した。

『っ!?!...隠れても無駄だよ!』

束はミスを犯した。

タダでさえ暗闇の中だと言うのに、更にスモークまで焚かれて視界が無いに等しいにもかかわらず、その中から出ようとも、回避行動を取ろうともせずに機関砲を目撃に撃った。

それは、視界の無い中で相手に居場所を教える様な愚行だった。

「そう言う時は身を隠すんだ!!」

『っ!?!』

オタクは、既にゴーレムの懐に入り込んでいた。

モニターの向こう側の束の視界に忌々しいオタクの姿がアップで映されて、その右手、痛々しい傷だらけの右手に何か大きな物が握ら

れているのが分かった。

「おらああっ!!」

大きな筒状のそれは、恐るべき事にダンボールの機体とほぼ同じサイズであり、オタクがそれをゴーレムに叩きつける様に宛がうと轟音が鳴り響いた。

その轟音と共に、筒の先から大きな杭が撃ち出されてゴーレムの装甲に当たり、装甲を撃ち貫いたばかりか、その奥の機械部分を衝撃で破壊し、反対側の装甲を内側から押し上げて弾き飛ばして吹き飛ばした。

「つつ〜!!!」

使った方のオタクは直ぐにその杭打ち機を取り落として右腕を押しさえて苦悶し、使われた方のゴーレムⅡ改は、機能を全て止めて地面に倒れた。

「・・・首洗って待ってる。この、クソツタレが」

吐き捨てる様に言うオタクに対して、束からの返答は無く、ボロボロの勝者は残骸を踏みつけながら、近づいてくる三つの存在に気が付いて空を見上げた。

第二十一話

オタクは酷く狼狽していた。

普段から余裕を持ったオタクからすれば、異様に珍しく動揺し、身体全身を震わせて平静を失っていた。

「・・・」

オタクが狼狽える理由と云えば、それは、今、オタクの目の前に立っているシャルルの姿が原因だ。

襲ってきたゴーレムⅡ改との戦いを終えて、辛うじて生き残ったオタクの目の前に一夏とラウラ、そしてシャルルが降り立ったのだが、その時にオタクは激しい違和感を覚えた。

何かが変だ。

何かが可笑しい。

オタクの頭の中で、その違和感の正体を探る言葉が反響し、オタクが自身が三人を改めて見回すと、違和感は更に大きくなった。

先ずは一夏を見た。

白式の白亜の機体は、僅かに煤と埃で汚れていて着地の失敗を物語るが、それは何時もの事だ。

次にラウラを見た。

黒を基調としたカラーリングのシュバルツエアレーゲンは、別れる前に見た姿と殆ど変わり無く、何も可笑しな所は無かった。

そして、オタクはシャルルに目を向けた。

オレンジ色をしたラファールリヴァイブのカスタム機、両手にアサルトライフルを握り、コレも普段通りの姿だったが、オタクはシャルルの姿に違和感を覚えていた。

一体、何が可笑しいのかとジツとシャルルを見詰め続けた。

普段通りの機体に、着替える時間が無かったのである。私服姿は、しかし、大きな違和感を覚える要素など無い筈なのだが、やはり何かが可笑しい。

オタクが気付いたのは、肩の出た白いワンピースを着ていると言う事と、ラファールの装甲に押し上げられた胸が女性らしい膨らみを

持っていると言う事だ。

ひたすらに現実逃避をして目の前の異常な事態から目を反らそうとするオタクに対して、シャルルが声を掛けた。

「・・・その・・・大丈夫？」

普段よりも気持ち高めになった様なシャルルの声に、オタクは少し間を置いて答えた。

「だ、大丈夫で御座るよ・・・大丈夫だ。問題は無い・・・大丈夫」

口許は覚えず、視線はフラフラと定まらない。

額に冷や汗を浮かべ、手脚が微かに震えて、言葉にも覇気が無い。

誰がどう見ても大丈夫そうでは無いのだが、余裕が無いのはシャルルも同じ事だった。

「・・・えっと、騙すつもりは・・・いや・・・そんなのは言い訳だね・・・」

シャルルは、言い掛けた言葉を告ぐんで、自嘲するように呟いた。

そして、シャルルはオタクに向けた言った。

「僕・・・いや、私は、女の子なんだ・・・」

その言葉はオタクの中で酷く大きく歪に乱反射を繰り返し、オタクは自分の生きてきた中でも五指に入るほどの衝撃を受けて思考を停止させた。

「本当はシャルロットって言うんだ・・・」

シャルロットと言う名前だと言う自身の友人に、オタクは何と云って返すべきなのか、以前の千冬の言葉を思い出しながら、ただただ友人の姿を霞む眼で見詰め続けた。

「お、小田・・・その・・・シャルを責めないでやってくれ」

一夏がオタクに声を掛けた。

シャルロットを庇うその言葉に、オタクは、そこで初めて彼女の事を責めると言う発想が思い浮かび、そして、それまで思い浮かばなかったと言う自身の思考に気が付くと、一気に冷静さを取り戻した。

「大丈夫で御座るよww拙者はもう大丈夫で御座る」

「タク・・・」

少し心配そうにオタクを見るシャルロットに対して、オタクは笑顔で言った。

「さあ、早く終わらせて帰るで御座るwww拙者、猛烈にラーメンが食べたい気分です御座るwww」

「うん・・・」

「また、一緒に食へに行くで御座るwww」

「うん・・・！」

涙を浮かべるシャルロットに言葉を掛けて、オタクはボロボロの機体を引き摺るようにして立ち上がった。

「随分酷くやられたな」

「デュフフwww名誉の負傷で御座るwww」

一夏に言葉を返して、オタクは辺りの惨状を見回した。

「コレは色々不味いで御座るなwww」

笑いながら言ったオタクに、ラウラが言葉を被せる。

「既にフランス軍も動きを掴んでいる筈だ。このままではデュノアの不利になる」

それだけで無く。

この状況を見付ければオタクの存在や、ドイツ軍の動きも知られる事になり、そうなればフランスは鬼の首を取ったが如く、日本とドイツの両国を激しく追求するだろう。

事実としてオタクをフランスに送り込んだ事やドイツ軍も秘密工作を行っていた訳だから、フランス国内の実態などを完全に棚上げして両国に対する主導権を取る事が出来る。

日本とドイツはフランスに対して反論も何も出来なくなるのだ。

「どうすんだよ・・・このままじゃやばいぞ！」

事態を漸く理解した一夏が狼狽える中、オタクはラウラに顔を向けて話し掛ける。

「少佐殿」

「何だ」

「ISCコア一個でドイツ軍は納得出来ませんか？」

オタクの突然の発言に、ラウラは少し驚きつつも思索して答える。

「・・・少し利が薄いが行けるだろう」

ラウラの返答を聞くや否や、オタクはシャルロットを訪ねる。

「お父上はいらっしやるで御座るか？」

オタクの問い掛けに、シャルロットは直ぐに答える。

「うん。父さんなら家にいるよ？」

「デュフフｗｗｗｗでは、お父上に挨拶に行くとするで御座るｗｗｗｗ」
「えっ!？」

驚いて固まるシャルロットを余所に、オタクはボロボロの機体に鞭を打って大破したゴーレムに近づくと、その機体の中からコアを抜き取り、そして宙に浮かんだ。

オタクに続いてラウラも浮き上がり、二人は揃って夜の空に消えて行く。

一夏も二人に続いて行こうとするが、シャルロットが動こうとしな
いのに気が付いて動きを止める。

「如何したんだ？」

一夏がシャルロットを訪ねると、彼女は俯きがちで一夏に答える。

「僕は、このままオタクの側に居ても良いのかな・・・」

一夏はシャルロットの言葉を聞いて、自信満々で答えた。

「勿論。アイツが細かい事を気にする訳無いだろ」

「そうなのかな・・・?」

「そうだよ。アイツは、シャルを助けるために密入国までしてきたんだぜ?それが今更シャルが女だった位で変わるかよ」

シャルロットはオタクが密入国してきたと言う事を聞いて驚きを
顕わにし、それから今までのオタクを思い出して、頷いて言った。

「そうだね・・・僕が馬鹿だったな・・・もつとオタクを信じれば良かった」

そう言って笑みを受け下手シャルロットは警戒に宙に舞って一夏
に言った。

「さあ、一夏!早く行こう!」

今や待ちきれないと言う様子のシャルロットに、一夏は苦笑してそ
の後をおって空を駆ける。

先に行った友人達が何をしているのかは分からないが、それでも、
可笑しな事には成らないだろうとそう思って闇夜を進んだ。

そして、屋敷に着いて、オタクのいる場所へと辿り着いた一夏は、先程の考えを改めた。

「フンぬっ!!」

「ぬおおおおお!!」

無駄に広い屋敷の一角で、一夏がその部屋に入ると、最初に目に入ったのは半裸で組み合う二人の男の姿だった。

「僕は今、何を見ているんだろう・・・」

光を失った瞳で二人の男を見詰めるシャルロットは、笑顔の消えた顔で呟いた。

「・・・」

ラウラは、無言で全く身動きもせぬままに、男達を見詰め続け、その隣に移動した一夏は、この余りにも混沌とした状況で如何すれば良いのかと頭を抱えた。

「ふんっ!!」

「おおお!!」

三人を余所に組み合う二人は互いに力を込め、相手を持ち上げ、組み伏せ、圧倒しようとする腕に血管を浮かび上がらせている。

片や日に焼けた逞しい巨体と此方長身に程よく鍛えられた色白の男。

二人の勝負は圧倒的に体格で勝る巨体のオタクが優勢の様に見えるが、色白の男、シャルロットの父アルベルも額に汗を浮かべ、見える範囲の身体の全身に血管と筋肉の筋を浮かび上がらせてオタクに対抗している。

「やらせはせん!!やらせはせんぞ!!」

「おおおおお!!」

がっぷり四つ手でオタクに向かうアルベルが叫ぶと、オタクの意表を突いて腰を捻ってオタクを倒そうと動く。

オタクはアルベルの予想外の力に驚き、右脚を上げてバランスを取るが、アルベルは更に圧力を増してオタクを押し込んだ。

「貴様の様なトロールに娘はやらんぞ!!」

アルベルが叫んだ。

力の限りにオタクに向かって叫んでオタクを押しした。
しかし、オタクはそこで持ち堪えた。

「ぬんっ!!」

「ぐおっ!」

持ち上がっていた右脚を強引に地に着けると、逆にアルベールの方が体勢を崩して呻いた。

「話を聞け!!」

オタクは叫びながら強引にアルベールを引き離した。

「落ち着いて話を聞け!!」

アルベールに落ち着くように促すと、アルベールはオタクに向いて言った。

「俺は騙されんぞ！貴様、俺の娘に何をしようと言うのだ!!」

「どうもせん!!」

「嘘だっ!!」

アルベールの一喝に、オタクは気圧されて口を噤んでしまう。

その間に、アルベールがオタクに烈火の如く怒りの言葉を吐き出した。

「魂胆は分かっているぞジャポネーズ!!貴様、言葉巧みに娘を誑かして、娘に破廉恥な事をするつもりだろう!!」

何かを誤解しているのか、オタクに怒鳴り付ける。

「俺は知っているぞ!!貴様の様な醜いトロルの様な奴が、美しい少女をあの手この手で墮落させて、その内ビデオレターを送ってくると!!」

「それは同人誌の話だ!!」

「騙されんぞ!!くっ！殺せ!!と言う美しい女性を陵辱し、最終的にはアへ顔ダブルピースでボテ腹の落書きだらけの汚らしいメス豚にした挙げ句、最後には無惨にも捨て置いて他の女の下に行くのだろう!!ゆ、許さんぞ!!俺の可愛いシャルロットにそんな無体は許さんぞ!!」
奇妙な程に偏ったイメージを持ってオタクを糾弾するアルベールに、オタクは何時ぞやを思い出していた。

「お前ら欧米人はドイツも此奴も・・・」

苦々しく呟くオタクを余所にアルベールは更にヒートアップして言葉を続けた。

「まさか・・・シャルロットのみならず私の炉前だまで・・・!!ならん!ならんぞ!!妻をNTR事は断じて許さんぞ!!」

「勝手に盛り上がるんじゃねえ!!」

「夏○か!?エ○フか!?ア○ゾ○スかあ!!・・・まさか・・・につ○さん○のようなのかあ!!」

「サークル名叫ぶの止める!!マジで止める!!」

「許さん・・・許さんぞ!!」

勝手に自分で行っていて、勝手に怒りを募らせたアルベールは再びオタクに掴み掛かった。

アルベールはオタクの後頭部の辺りを左手で掴むと、容赦なしにオタクの顔面を殴る。

流石のオタクもこのアルベールの攻撃にキレて、同じようにアルベールの顔面を殴り返す。

その後も二人は高山V S ドン・フライ宜しくノーガードで殴り合い、二人とも顔が変形するほどになった頃に崩れ落ちた。

「嫁よ」

そんな二人を無然と眺めていた一夏に、ラウラが声を掛けた。

「何だ?」

「本部とは既に話が付いた。色々と工作も済ませたから、後は帰るだけだ」

「そうか・・・」

この後、何だか締まらない内に一夏はオタクを回収し、後の事後処理を済ませたら学園に戻ると言うシャルロットの言葉を信じて場を去った。

オタクと束が暴れ回った所為で国連の査察団は有用な証拠を発見できずIS委員会を崩すには至らず、また、所属不明のISの侵入を許したフランス政府の不備をデュノア社が追求した事で、世論が動き、済し崩し的にデュノア社は息をつないだ。

ドイツとしても、新たなコアを秘密裏に入手すると共に、火事場泥

棒的にフランスを非難する事でEU内での発言力を維持する事に成功した。

そして、シャルロットはこの一週間後に学園に戻って日常が取り戻された。

尚、アルベールとオタクの顔面は一ヶ月以上も崩壊状態だった。

第二十二話

シャルロット・デュノアが女生徒として学園に戻ってから一週間が経った頃、一夏は深刻な表情でオタクに相談を持ち掛けた。

「悪いな・・・呼び出しちまって」

「www気にしないで御座るwww」

人気の無い屋上のベンチに腰掛けて、一夏がオタクに軽く侘びると、オタクは笑って気にしないと言う。

二人は一夏の用意した缶コーヒーを一口呑んでから話を始めた。

「実は・・・鈴の事なんだけど・・・」

「ほう?」

「最近、鈴の様子がおかしいんだ」

オタクは一夏の口から出た知人の事を思い浮かべながら話を聞く。

「鈴がスマホばかり見っていて、心ここにあらずって感じなんだ・・・」

「スマホで御座るか・・・」

「ああ：鈴の同室の子からも言われたんだけど、夜中もスマホを弄っているそうなんだ」

「夜も・・・何をしているのかは分かっているので御座るか?」

「いや・・・ただ、時々変な笑い方をしているらしい」

要領を得ない話の内容だったが、オタクにはある一つの可能性が頭に浮かんでいた。

それを確かめる為に、オタクは一夏に尋ねた。

「・・・鈴ちゃん、最近コンビニに頻繁に言ったりしていないで御座るか?」

「あく・・・そう言えば・・・クラスメイトの子が日曜日にコンビニから出てくる鈴を見たって言ってたな・・・」

「何を買っていたかは分かるで御座るか?」

「そこまでは・・・小さな袋だったとは言っていたな」

「小さな袋」

オタクはこの時点で鈴の陥っている状況が把握できた。

そして、それは彼女の身を破滅させかねない危険な事だとも分かつ

た。

「どうすりや良いんだ・・・」

頭を抱える一夏に、オタクは肩を叩いて言った。

「取り敢えず本人に会ってみるで御座る」

そう言つて、オタクは一夏を連れて鈴の下へと向かう。

まだ取り返しの付かない事に成っていない事を願いながら、教室へ急いだ。

「居た」

2組の教室の席で、鈴はただ一人黙々とスマホの画面に向かって居た。

イヤホンを着けて画面を見詰め、時折指を動かしては緩んだ表情で笑う。

そんな鈴の様子に、クラスメイト達も異様な物を感じ取つて居るのか、誰一人として彼女に近づこうとはせず、遠巻きに見ているだけだった。

「一体何が・・・」

一夏が眩くのを背に、オタクは真つ直ぐに鈴の下へと向かうと、不意に彼女のスマホを取り上げた。

「ああ!!何すんのよ!!このクソ豚ああ!!」

スマホを奪われた鈴は烈火の如く怒り、オタクに向かつて罵倒しながらオタクが掲げる様に取り上げたスマホを取り返そうとする。

「返しなさいよ!!返せ!!返せ!!返せ!!!」

「鈴!!」

一夏は鬼気迫る鈴の様子に驚きながらも、彼女に声を掛けてオタクに加勢する。

「止めるんだ鈴!落ち着け!!」

「五月蠅い!!」

どうにか彼女を落ち着かせようとする一夏だが、鈴には一夏の声など届いてないらしく、一喝してオタクに向かう。

「早く!早く返せ!!この豚!!挽肉にすんぞゴラあつ!!」

「・・・」

オタクは何と言われようとも黙って鈴のスマホを取られない様に死守する。

「鈴!!」

一夏は遂には暴力を振るおうとする鈴を止めるために、彼女を後から羽交い締めにするが、鈴はそれでも暴れて、ただスマホだけを見詰め続けた。

「クソッ!誰か!手伝ってくれ!!」

一夏が教室の生徒達に呼び掛けると、数人が応じて鈴に近づいて彼女を抑える。

しかし、それでも鈴は暴れて抜け出そうとした。

「何を騒いでいる!」

そこへ、千冬が騒ぎを聞きつけて教室に入ってくる。

「千冬姉!!」

「何だコレは?」

「頼む手伝ってくれ!!」

状況が飲み込めない千冬に、一夏が助けを求めると、千冬は困惑しながらも鈴を抑えている一夏に加勢して、鈴を取り抑えた。

「キエエエエエエエエエ!!!」

千冬に取り抑えられて暫くすると、鈴は奇声を上げて痙攣し、そのまま失神してしまった。

「鈴っ!?!」

「な、何なんだ・・・」

一夏は鈴を心配して呼び掛け、千冬は啞然として呟いた。

「やはりで御座ったか・・・」

オタクは自分の推測が当たっていた事にしみじみとして呟き、そんなオタクに千冬が話し掛ける。

「一体何があったのか説明しろ」

そう言われて、オタクは千冬に鈴の持っていたスマホを渡して言った。

「ソシヤゲで御座る」

ソシヤゲ、ソーシャルゲームの省略で、この言葉が使われる場合は、殆どがスマホ専用のゲームアプリである。

嘗て、スペースインベーダーが登場した当時はゲームとは大型の筐体の物を指して居たが、後にゲームは進化してファミリーコンピュータが登場し、その後、セガ○ターン、プレ○ステー○ヨン、任○堂64等の往年のベストセラーを経て、遂にはXB○X○oneやP○4と言った最新ハードにまで進化した。

ゲームは時代を経てプラットフォームを変え、パソコンが進歩してからはパソコン専用のゲームが開発され、インターネットが普及してくるとインターネットゲームが流行した。

そして、スマートフォンが世に出ると、当然の如くスマホゲームやゲームアプリが登場し、スマホゲームは爆発的に流行した。

だが、その影では、とんでもない問題が発生していた。

「それが課金で御座る」

「課金？」

「スマホゲームの殆どは、基本無料と謳いながら、実態はユーザーから金を搾取するために有ると言っても過言ではないで御座る」

「そうなのか？」

教室での騒ぎから一夏、千冬、オタクの三人は医務室に場所を移し鈴も、ベッドの上に横たわって寝息を立てている。

目を瞑って深く眠る鈴は、その目の周りに黒く深い隈を作っており、頬も僅かに瘦けていた。

そんな彼女の横で、オタクは千冬と一夏に今回の一件の原因で有るスマホとスマホゲームの説明をしている。

「恐らく鈴ちゃんは課金兵に成ってしまったので御座る」

「課金兵？」

疑問符を浮かべる一夏に、オタクはスマホの画面を突き付けて言う。

「鈴ちゃんがやっていたのは、このスマホ専用ゲーム……ドキッ！私

の夢の王子様！イケメンだらけの学園天国。で御座る」

「何なんだ、その頭の痛くなるタイトルは・・・」

疲れた様に、千冬は額に右掌を当てて言った。

「このゲームは主人公の女の子がイケメンだらけの学校で、理想の王子様を見付けると言うストーリーで、特徴的なのは攻略対象の多さで御座る」

「何人居るんだ？」

「軽く100人はいるで御座るが、その全てが重厚なシナリオと人気声優のフルボイス仕様で、様々なタイプのキャラクターで幅広い層を取り込んでいるで御座る」

そう言って、オタクは少しスマホを操作すると、スマホから音声が出る。

『お前の事しか、俺には見えないんだ』

「俺!?!」

「一夏か!?!」

スマホから流れた音声は一夏の声で、非常に甘い台詞を吐き出した。

それに驚いて一夏と千冬が声を上げるが、オタクは説明をする。

「この鈴ちゃん攻略していたキャラクターは、一夏氏と非常に声が似ているので御座る・・・そして、鈴ちゃんは、このゲームのこのキャラの事を知り、攻略のために課金兵に成ってしまったので御座る」

「さっきから言っている課金兵って何だ？」

一夏の問い掛けに対して、オタクは目を伏せて、苦しげに説明する。

「課金兵・・・いや・・・鈴ちゃんは既に廃課金兵の領域に達しているで御座るな・・・」

「廃課金兵?」

「射幸心を煽られ正常な金銭感覚が麻痺してしまい、Sレアを見ると体が勝手に動いてしまう悲しきDummy Boy・・・毎月の課金額は5万コインを超える。コンプガチャを安いと思いは始める危険な精神状態・・・それが廃課金兵」

「真耶?」

医務室の扉を開けて、山田真耶が廃課金兵の説明をしながら入ってくる。

そんな彼女に、オタクは何かを感じ取って言った。

「真耶氏も・・・？」

「・・・はい・・・私は、嘗て廃課金兵と言われていました」

「一体何処で多々買って？」

「・・・プロデューサーでした・・・」

「・・・真耶氏もで御座ったか・・・」

「小田君も？」

「国外追放を受けた身で御座る」

「そうでしたか・・・」

妙亜通じ合い方をする二人に、千冬が割り込んでオタクに声を掛ける。

「それでだ・・・この社会不適合者になりかけの小娘を如何したら更生出来る」

「かなりの荒療治になるで御座るが・・・」

「構わん。あらゆる手段を実施しろ」

この千冬の一言により、一夏とオタクによる鈴の更生作戦が開始された。

その第一段階として、同室の生徒の協力の下、買いだめされていた課金カードを全て没収した。

カードは千冬の預かりとなり、鈴には一夏とオタク、そしてクラスメイト達による24時間体制での監視が行われる。

「ここまでする必要があるのか？」

一夏の疑問に対して、この作戦を主導するオタクは淡々と答える。

「絶対に必要で御座る。鈴ちゃんは今、瀬戸際にいるで御座る」

「瀬戸際？」

「人として生きていくか、それとも、獣として人外の道を歩くかの瀬戸際で御座る・・・もしも、今、放置すれば確実に道を踏み外してレッドシオルダーに成ってしまうで御座る」

レッドシオルダー、家計簿が常に赤字で収支グラフが常に右肩下が

「出るまでとしか言い様が無いで御座る・・・それに、ステージも進めるにはゲージを消費して進めなければ成らないで御座るが、このゲージは時間経過で回復するタイプで、大体一日で二度満タンに成る程度で御座る。それに対してステージ攻略には今のレベルでゲージ4本分位が必要で御座る。鈴ちゃんは課金でゲージを回復していたように御座る」

「それって、幾ら金が有っても足りないんじゃないや・・・」

「正にその通りで御座る・・・このゲームは現代のソシャゲ界における負の面の集大成と言うべきゲームで、人から金を巻き上げるためだけに存在している様な物で御座る・・・これ程悪質なのは拙者も初めて御座る」

ここに至って、漸く事態の深刻さを完全に理解できた一夏は、幼馴染みを心配そうに見詰めた。

「課金」

一夏の心配を余所に、鈴の症状は悪化の一途を辿るばかりで、放課後に気分転換に一夏がアリーナでの自主練に誘うと虚ろな目で頷いて力無く歩き出した。

そして、アリーナでは、鈴は観戦席に座ってラウラとシャルロットの格闘訓練を見学していた。

「・・・」

「かなり参っているで御座るな・・・」

「何か可哀想になってきたぞ・・・」

「駄目で御座る・・・ここまで来て油断すれば取り返しの付かない事になるで御座る・・・」

小声で話す二人を余所に、鈴はアリーナでの訓練を眺めて、ボソリと呟く。

「課金・・・」

シャルロットがナイフを取り出し、ラウラも手刀を構えて二人の近接戦の訓練が激しさを増すと、両者の刃が打ち合わされるのに合わせて鈴も呟く。

「課金・・・課金・・・課金」

「おい・・・鈴の奴、金属音が課金で聞こえてるぞ・・・」

「コレは・・・」

オタクは、鈴の症状が予想以上に酷いものだど気が付くと、鈴に近づいてこの場から移動させようとした。

だが、それは一足遅かった。

「鈴ちゃん、移動仕様で御座・・・」

「課金!!」

息なり鈴は起ち上がって叫ぶと、甲龍を展開して暴れ出した。

「白式!!」

オタクが鈴の衝撃砲でミンチにされる寸前、一夏が白式を展開してオタクを庇うと、直ぐに鈴から距離を取った。

「大丈夫か?」

「何とか大丈夫で御座るよ・・・それよりも」

鈴は正気を失った様に唸り声を上げ、周囲の物を手当たり次第に破壊してアリーナを飛び出してしまう。

「一夏氏は早く鈴ちゃんを止めに行くで御座る。拙者は避難誘導をするで御座る」

一夏は何も言わずに鈴を追って飛び出した。

第二十三話

実の所、鈴は別に正気を失ってなどいなかった。

確かにゲームにドハマリした挙げ句大量にカードを買い漁って課金しまくったのも事実だが、一度気を失った辺りで正気には戻っており、一夏の言っている事も確りと聞いていた。

だが、更生のために一夏が常に側に居ると言う非常に都合の良い状況に鈴は歓喜して、更に長い時間一夏と過ごしたいと思った。

その結果、鈴は正気を失った振りをして一夏の心配を利用した。要するに三味線弾いているのである。

「鈴！眼を覚ましてくれ!!」

真剣な表情で自分に呼び掛ける一夏を間近で見ると鈴の頭は沸騰しそうなほどに興奮した。

（ふおっ！ふおおおおおおおおおおおおおおおお!!!キタキタキタ!!!
キタコレッー!!!）

「鈴っ!!」

もっと呼んで欲しい。

もっと自分の事を想って欲しい。

もっと自分の近くにいて欲しい。

そんな思いが鈴を狂わせ、一夏を独占しようという欲望を掻き立てて鈴を突き動かした。

「カードを超越しなさいよ!!なあっ!!持ってるんだろカードをおお!!なあ!!」（ハアハアハア!!いいよおお!!一夏の真面目な顔良いよおお!!）

鈴の欲望に塗れた頭脳は、出来る限り一夏の思考を自分に向けようと全力を振り絞り、絶妙な力の配分で一夏に負けず勝たずの距離感を保ち続けた。

そうする事で一夏の真面目で端正な表情を間近に見続けたいと言う、鈴の爛れた思考故の事だった。

「くそっ！如何すれば鈴は元に戻るんだ!!」

「課金課金課金課金課金課金課金課金課金課金課金課金課金!!」（はあああ

ああああああ!!!一夏が!!一夏が私の事をおおおお!!!おほおお
おとおお!!!)

今この瞬間、鈴は幸福の絶頂に立っていた。

愛する男に最も想われていると言う自負と、その男とこれ程までに
近づく事が出来ていると言う事実が鈴の脳髓から快樂物質を多量に
分泌させた。

「一夏あ!!」

しかし、そんな鈴の至福の邪魔をする者が現れた。

「シャル!!来てくれたのか!!」

「うん。タクに言われたんだ」

シャルロットの到着により、鈴は戦力的な劣勢に立たされた。

だが、本人に取ってはそんな事はほんの些細な事でしか無かった。

「ふしゅうううううう!!」(なによなによ!!一夏の奴!!あんな
ポツと出の子にデレデレしてえ!!!)

男だと思っていれば実は女で、しかも一夏と暫く同室で過ごした拳
げ句、オタクを除けば一番中が良いと言われるシャルロットに鈴は強
い敵意を抱いた。

最も栄冠に近い位置にいる女、最も一夏から信頼されている異性、
スタイル、容姿、性格、実力、何もかもが他の女性陣とは比べるべく
も無く高く纏まった最強の敵。

シャルロットは鈴にとっては一夏を勝ち取る上で最も大きな障害
だった。

「行くよ一夏!」

「おう!」

「コロスコロスコロスコロス!!!」

鈴は攻撃の対象を一夏からシャルロットに移す。

一夏との触れあいよりも大敵の排除を鈴は優先したのだ。

「はあああああ!!」

甲龍は衝撃砲と青竜刀を基本装備とした近中距での格闘戦主体の
機体で、中遠距離での射撃戦を基本にするラファールとの相性はそれ
程良くない。

距離を取り続けようとする射撃主体のラファールに対して、甲龍は衝撃砲で応戦しつつ距離を詰めて接近戦に持ち込むのがセオリーになるが、シャルロット程の腕前なら、そう易々と近寄らせるような事は無いだろう。

しかし、幾らかスタムされているとは言ってもラファールは第二世代の量産機であり、単純なスペックでは甲龍に対して一枚劣る。

機体のスペック事態は甲龍が勝るのだから、そのスペックでゴリ押せばシャルロットのラファールに無理矢理近づくと言うのも無理な話では無く、また、鈴とて国家代表の候補生に上がる程度の実力はあ
るのだ。

機体の性能で勝るのならば多少の実力差を覆す事も難しくは無い。

「潰す潰す潰す潰す潰す!!!」(潰す潰す潰す潰す潰す!!!)

叫びながら、シャルロットに対して衝撃砲を連射する。

久し振りに言動と思考が一致した瞬間だ。

「っー」

鈴の砲撃は当たりこそしなかった物の、周囲に着弾してシャルロットの動きを制限し、更には巻き起こった土煙が煙幕の役目も買った。

この僅かな隙に乗じて、鈴は双天牙月を振りかざして一気にシャルロットに詰め寄った。

「シャルっ!!!」

一夏が叫ぶ。

しかし、無情にもシャルロットに鈴の攻撃に対応する様な猶予は無く、精々、持っている銃をかざして衝撃に備えるしか無かった。

「きゃああああ!!!」

衝撃は予想以上に大きく強かった。

ショットガンをかざして何とか受けようとしたシャルロットだったが、鈴の振り下ろした青竜刀はその守りを容易く打ち破り、ラファールの障壁に大きな打撃を与えて、シャルロットを吹き飛ばした。

「まだまだあ!!」

完全に体勢を崩したシャルロットに、更に鈴が追撃を掛ける。

「させるか!!」

一夏は、シャルロットを助けるために鈴に向けて斬り掛かるが、その程度で止まる鈴ではなかった。

「甘いわあっ!!」

一夏の振るう雪片が鈴に届くよりも先に、鈴は、一夏に衝撃砲の砲口を向けて放った。

「ぐあっ!!」

予備動作も兆候も無い不可視の砲撃は、鈴に近付こうとした一夏を容易く叩き落とし、邪魔する者の居なくなつた鈴はそのままシャルロットに迫る。

「っ!」

あと一步、あと、ほんの僅かな距離に迫った鈴は、突如としてシャルロットから離れるように後に跳んだ。

その次の瞬間には、鈴がいた付近の地面が爆せて小さいながらもクレーターが出来ている。

『済まない外した様だ』

「ラウラか!」

果たしてどの様なメカニズムなのか、鈴は動物的な勘でラウラの砲撃を寸で躲し、分が悪いと見て一旦その場を離れた。

その隙にラウラがシャルロットと一夏に合流し、ラウラにシャルロットが礼を述べた。

「ありがとうラウラ」

「いや、此方こそ遅れてすまない。装備の換装に手間取った」

直前の訓練の為に装備を降ろしていたラウラは、その装備の換装のためにシャルロットに遅れて到着した。

「小田は?」

一夏はここには来ていないもう一人の姿を探してラウラに尋ねた。「曹長はオルコットを呼びに行くと言っていた。同人誌の読み比べをしているから少し遅れるかも知れないと言っていた」

このラウラの言葉の通り、オタクは友人の貴腐人達との寄り合いに参加していたセシリアの説得に時間が掛かっていた。

「つて事は三人で相手しなきゃいけないって事か」

正直に言えば、一夏は鈴がこれ程厄介な相手になるとは思っており、シャルロットもラウラも、何処か彼女を見くびっている節があった。

だが、今この段に置いて、三人は鈴の実力に対する考えを修正せざるを得なかった。

彼女は間違いなく強敵として今の三人に立ちはだかっている。

「取り敢えず鈴を探そう。このままじゃ鈴が職員室に突っ込みまう」

そう言った一夏の言葉に二人は頷き、三人は間隔を空けた逆三角形を作って鈴を探す。

前衛を一夏とシャルロットが務め、ラウラが後方から火力支援を行う体勢で動き、微かな痕跡も逃すまいと一夏は神経を研ぎ澄ませた。

「何処だ・・・何処に居るんだ・・・!」

そう呟きながら校舎の角に近付いた瞬間、一夏の右側の校舎の壁が爆ぜて鈴が姿を現した。

「なにっ!？」

突然の事に一夏の身体が硬直し、また、跳んできたコンクリートの破片が一夏の動きを阻害し、それを狙い澄ましたかの様に鈴が青竜刀で斬り付ける。

「っぐおおおお!!」

持ち前の反射神経の良さ故に、何とか雪片で受ける事が出来た一夏だったが、そのまま鏢迫り合いに入ると、勢いと力の差で押し切られてしまう。

地面に背中を着けて雪片を構える一夏は尚も圧力を増す鈴に何とか抵抗を試みるが、如何せん体勢が悪く身体を動かす事もままならなかった。

「一夏っ!!」

一番最初のに反応したのはシャルロットだった。

彼女は、鈴が姿を現した時点で手に持っていたショットガンを構えるが引き金を引く事は出来なかった。

何故ならば、鈴と一夏が余りにも密着しすぎており、このまま撃てば一夏にも当たってしまう。

シャルロットは味方への誤射を恐れて撃つことが出来なかった。

そして、それはラウラも同じだった。

彼女の強力なレールキャノンでは、間違いなく一夏にも被害を与えてしまうため支援が出来ないでいた。

(ふおおおおおおおおお!!! 一夏あっ!! 一夏がこんなに近くにいいいいいい!!!)

「クソっ!! 正気に戻れ鈴!!」

(ハアハアハア、一夏の真面目な表情!! 一夏の焦った表情!! 良い!! ベネ!! デイ・モールトベネ!!!)

鈴は敢えてそれ以上は圧さなかった。

圧倒的に優位に立ちながらも、決して一夏を完全に制圧する様な事はせず、普段は見られない一夏の表情を間近で舐め回すように視姦した。

そんな、鈴に取つての至福は何時までも続くわけでは無かった。

「一夏!」

「嫁え!!」

一拍遅れながらも、シャルロットとラウラが近づいてきて鈴を取り抑えようとする。

それを察知した鈴は直ぐに体勢を入れ替えて一夏を引き起こした。

「うおっ!!」

「なあ!!」

一夏を引き起こした鈴はその勢いを利用して、迫ってくるラウラに一夏をぶつけると、直ぐにシャルロットに向いた。

「チエストオオオオオオオ!!!」

近接を得意とする鈴に自分から近づいていたシャルロットはまたしても、鈴の得意な土俵での戦いを強いられる。

「くっ!!」

凄まじい力で振るわれた双天牙月は、シャルロットの格闘能力では防ぎようは無く、申し訳程度に構えられたナイフも容易くへし折られ

て、再びシャルロットは衝撃を受ける事になった。

「きゃあああ!!」

「シャル!!」

「もう一度おおおお!!」

鈴がシャルロットに追撃を掛ける。

一撃一撃が重い鈴の攻撃をこれ以上受ければ、シャルロットは戦闘不能に陥る可能性が高く、しかし、この場で鈴の攻撃を防ぐ術も躲す余地も助ける方法も無かった。

「っ!!」

シャルロットは衝撃に備えて身を固め、目を瞑った。

「・・・?」

しかし、幾ら時間が経ってもシャルロットを襲うはずの衝撃は無く、恐る恐る目を開いた。

「・・・タク・・・?」

「私は豚では無い」

シャルロットの呟きは直ぐに否定された。

そして、シャルロットは自身を助けた人物の正しい名前を呼ぶ。

「箒?」

彼女の言った通り、シャルロットを助けたのは打鉄を纏った箒だった。

箒は刀を構えて鈴と鏢迫り合いをしながら言う。

「豚に頼まれてな・・・奴の言う事を聞くのは癪に障るが、こうなってはそうも言ってはいらねん」

そう言うのと、箒は目の前の鈴に向かって叫ぶ。

「おい! 鳳! 貴様好い加減にしろ!! 依ってたかってチャホヤされるからと言って甘えるな!!」

「ああああん!!」

箒は鈴を弾いて距離を離すと、更に続けて言う。

「好い加減に下手な芝居は止めろ。お前は端から正気のままだろうが!」

「ええっ!!」

一夏の驚く声を余所に、鈴は箒に向かって言い返ししながら斬り掛かる。

「だったら何だって言うのよ!!」

「人の厚意を食い物にする様な事はするなど言っているんだ!!」

箒も鈴の言葉に真つ向から返して切り結んだ。

重厚な青竜刀の一撃を流れる様に受け流すと、返す刀で反撃に転じる。

「アンタに何が分かるって言うのよ!!何時も何時も一夏の近くにおいて!!私の気持ちなんてこれっぽっちも分からないクセに!!」

鈴も、箒からの剣戟を巧みな機体操作でいなし、再び嵐の様な連撃で箒を圧倒しようとするが、それに対しても箒は刀で受けて流す。

「知った事か!!人の気持ちなど言われても分からないわ!!」

互いに言葉をぶつけ合いながら手にした刀を振るい、激しい心情を吐き出す。

「アンタ達は何時も一夏の近くにおいて!!何時も一夏と楽しそうにして!!私だって一夏と一緒に居たいわよ!!」

「それはお互い様だ!!お前の方こそ私の知らない一夏を知っている!!私も一夏と一緒に学校に通いたかったぞ!!」

「アンタが勝手にいなくなっただんでしょうが!!」

「アレは姉さんの所為だ!!私は望んでいない!!」

「関係ないわよ!!」

他の三人をそっちのけにして、鈴と箒の戦いは激しさを増しながら、最早、二人の個人的な対立の様相を呈し、鈴も周りの事など一切考えずに目の前の箒に食ってかかる。

一体如何したものと二人を黙って見詰めるしか無かった三人の後から、新たな人物が現れた。

「あつー!」

「千冬姉!」

誰有ろう、名実共に人類最強を叫ばれる人物、本物の霊長類最強の織斑千冬が現れたのだ。

「間に合ったで御座るな」

「タク！」

千冬に続いて、オタクも現れて三人に並ぶ。

「セシリアは如何したんだ？」

「オルコット氏は結局連れて来れなかったで御座るwww遅すぎたんだ腐ってやがるwww」

「どう言う事だ？」

「分からないなら知らない方が良いで御座るよ……」

などと話している内に争う二人に対して千冬が声を掛ける。

「好い加減にやめんか馬鹿共」

普段ならばこの一言で即座に動きを止めるのだが、今回ばかりは違っていた。

「五月蠅い!!」

「口出ししないで!!」

周りの見えていない二人はあろう事か、千冬に対して恐ろしい口調で言い返してしまった。

「あつ……」

「あくあ……」

ほぼ同時に一夏とオタクが声を上げて目を覆い、その直後には、重々しい打撃音が二つ続けて響いた。

「御願いでいるんじや無い。命令だ」

静かに、しかし重々しい迫力を伴って千冬が再び口にすると、地面に倒れた二人は黙って機体を解除した。

「流石世界最強……素手でISを倒すとは」

「チフユ・チフユ」

一夏とオタクが静かに呟くと同時に、この事件は静かに終わりを迎えた。

全員が反省文の提出を言い渡され、鈴は追加で千冬による対面の面談と指導が行われ、オタクは顔面に胴回し回転蹴り喰らった。

第二十四話

「俺・・・強くなりたいんだ」

唐突に、一夏は友人であるオタクに告げた。

「強く・・・で御座るか？」

「ああ・・・この前の鈴の件で思いしつたんだ。俺はマダマダ弱い」

「まあ、強くないのは確かで御座るな」

「・・・頼む！お前しか居ないんだ！」

「（・▽・）イイよ！」

「ありがとう小田！」

こうしてオタクによる一夏の訓練が始まった。

「・・・今の顔文字みたいなのどうやって発音したんだ」

と言うわけで、二人は何時もの如くアリーナに来たわけだが、二人とも機体は出していない。

「なあ、なんでISを出さないんだ？」

ISのトレーニングなのにISを出していない事に疑問を投げ掛ける一夏に、オタクが答える。

「それなので御座るが、一夏氏の弱点は・・・まあ・・・詰めが甘いか操縦技術が低いとか・・・色々あるで御座るが」

「ああ・・・」

「そう言う小手先の事よりも先ずは意識を変えた方が良いで御座る」
「意識？」

「それで御座る。と言うわけで、先ずは拙者に続いて欲しいで御座る」
「お、おう」

一夏は恐る恐るとオタクの言葉に頷き、オタクが肩幅に足を開くと一夏も足を開く。

そして、オタクは大きく息を吸った。

「俺って天才だく!!」

「っ!?俺って天才だ〜!!」

「俺ってストロングだぜ〜!!」

「お、俺ってストロングだぜ〜!!」

「最後に・・・俺ってバカだ〜!!」

「俺ってバカだ・・・って何なんだよ!!巫山戯てんじやねえか!!」

憤る一夏に対してオタクは落ち着いて宥める。

「落ち着くで御座る。巫山戯てないで御座るよ」

「本当かよ」

「ハッキリ言つて一夏氏に拙者が訓練すると言つても、やれる事がないで御座る」

「まあ・・・そうか」

「一夏氏は基本的にノリと勢いで突つ走るタイプで御座るが、拙者はどちらかと言うと理詰めのタイプで御座る」

「そうだな」

「それに一夏氏は近接オンリーで拙者は射撃主体・・・タイプの真逆に近いので御座る。戦い方がそもそも違うので御座るから技術的な部分も教えようが無いので御座る」

「それは分かったけど・・・じゃあ、アレは何なんだよ」

「ある人の名言を引用するで御座るが、イメージするのは常に最強の自分で御座る」

「最強の自分・・・」

「結局はイメージが大事なので御座る。あの三つの言葉は自分は天才だ。自分はストロングだ。と言つて自分に自信を持たせる為の言葉なので御座る」

「最後のバカだつて言うのは?」

「一夏氏は調子に乗りすぎてしまう事があるので御座るから、それを戒める為の言葉で御座る」

「成る程な・・・最後に一つ聞いても良いか?」

「何で御座るか?」

「柔道〇物語だろ」

「・・・」

一夏はオタクに別れを告げてアリーナを後にした。

次に一夏が尋ねたのは、自慢の世界最強の姉の下だった。

「と言うわけで千冬姉。俺、強くなりたいんだ」

確かに、強くなるという言葉一夏の目的からすればこれどうってつけの
人材は居ないだろう。

「ふむ・・・まあ、良いだろう」

「本当か!？」

「本当だ。たまには姉らしい事もしてやろう」

珍しく分かりやすく弟の手助けをすると宣言した千冬は、直ぐさま
一夏を伴ってアリーナに移動した。

「いいか一夏、戦いの基本は接近戦だ」

「お、おう」

「そして、接近戦に置いては足腰は非常に重要だ」

「あ、ああ」

「地味な鍛錬こそ一番の近道になる」

「ああ・・・それは良いけど千冬姉」

「なんだ」

「コレはどう言う・・・」

千冬に疑問を投げ掛けた一夏は、どう言う訳か上半身裸で、空気椅子
子をさせられている。

足は肩幅に開き、膝を九十度に曲げ、腰を落として上体は地面と垂
直にする。

正直言つて非常に辛いこの姿勢を取らせるのも中々酷いが、それを
実行する一夏も中々姉に染められている。

「言っただろう足腰を鍛えると」

「まあ・・・この体勢はかなり利くけど・・・」

「と言うわけで・・・一夏」

「ん?」

「その上体で両手を前に伸ばせ」

「こうか？」

「そのままの姿勢を維持している」

そう言うと、千冬は何処から取り出したのか、一夏の両太腿と両肩、そして頭の上に茶碗を置き、そこに熱湯を注ぐ。

「ちよっ!!？」

「動くな。動けば熱湯を被るぞ」

「ええ!!？」

更に千冬は、一夏の尻の下に極太の線香を置いて火を付けた。

「線香が燃え尽きるまでそのままでいろ」

実に厳しい言葉を投げ掛ける千冬に、一夏は尋ねる。

「なあ・・・千冬・・・姉・・・」

「どうした」

「コレって・・・拳だよな・・・」

「・・・」

「なあ・・・酔○だろ・・・?」

「黙って続けろ」

この数分後、一夏は尻と両手両脚と頭に軽く火傷を負い、火炙りの準備をしていた姉の魔の手から脱した。

「まったく・・・小田と言い千冬姉と言い・・・考える事が脂ぎったオツサンみたいなんだよ」

若干芸風の似てきた感のある二人に対する不満をぼやきつつ、一夏は次の伝の人物の下に顔を出した。

「と言うわけだ。頼めないか?・・・ラウラ」

「ふむ・・・」

ドイツの特殊部隊所属のラウラならばと思って彼女の下を訪れた一夏は、早速頼み込む。

「よし。良いだろう。私が鍛えてやる」

「本当か!?ありがとうラウラ!」

こうして三人目の教官を手に入れた一夏は、ラウラと手を取り合つて三度アリーナに現れた。

そして、一夏はラウラによってアリーナを走らされる。

「このクズめつ!!トロトロと走るんじゃないっ!!」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

一夏は最初はランニングと聞いて、まあ、基本だよなと思いつつ応じるのだが、どう言う訳か、息なり丸太を手渡され、その丸太を抱えて延々と走らされていた。

しかも、そこにはラウラの口から発せられる罵倒と言うおまけまで付いていた。

「まったく、なんたるザマだ!貴様は最低のうじ虫だっ!ダニだっ!この宇宙でもっとも劣つた生き物だっ!!」

「ちよっ・・・ラウラあ・・・」

弱々しい一夏の呼び掛けなど聞こえていないかの様に、ラウラは更に続ける。

「いいか、くそ虫っ!私の楽しみは貴様が苦しむ顔を見る事だ!!じじいの●●●●みたいにひいひい言いおつて、みっともないと思わんのか、この●●●●の●め!!●●●●が●●●●たいなら、この場で●●●●を●●●●つてみる! ●●●●持ちの●●●●っ!!」

何ともオゲレッツな言葉を可愛らしい小さな口から覇気だすラウラの姿は、一定の層に需要がありそうで、一夏もうっかりと何かに目覚めてしまいそうになった。

「危なかった・・・何かに目覚める所だった」

寸での所でラウラの下から脱柵もとい脱走した一夏は、最早嫌な予感がしつつ四人目の下に赴いた。

「・・・今度は大丈夫な筈だ」

そう自分に言い聞かせて、一夏はその人物の居る筈の場所の扉を叩

いた。

「なあ、箒……俺に……」

一夏の言葉はそこで途切れてしまった。

「今日は風が騒がしいな……」

「……」

剣道部の活動場所である同情の中央で、箒は一人呟いている。

「でも……この風少し泣いています」

「……」

「違うな……何かが違うな……」

「……」

一夏は、そつと扉を閉じた。

箒には一夏の存在は気付かれなかった様で、中からは箒の独り言以外には何も聞こえない。

そつと道場の扉から離れた一夏は、ふと空を見上げる。

「……俺は何も見てなかった」

まるで自分に言い聞かせるようにして、一夏は呟きながら背を向けて歩き出す。

そして、真つ直ぐに前を向いて言う。

「……よし。次に行こう」

「……」

夕暮れ時、一夏は一人黄昏れていた。

あの後、一夏は知り合いの下を渡り歩いては何らかの問題に直面して期待を大幅に外れる事態に遭遇した。

「……何だったんだろう」

先ずセシリアを尋ねてみた。

知り合いの中では一番操縦時間が長く、理路整然としている彼女ならば確りと教えてくれると思っていた。

だが、その期待はもろくも崩れ去った。

セシリアの私室を尋ねた一夏が見たのは、薄暗い部屋の中で蠢く、セシリアと幾人かの女生徒だった何かで、彼女達は一夏の存在に気が付くなり、不思議な言葉を呟きながら一夏に迫ってきたのだ。

「・・・アレは怖かった・・・何か知らないけど怖かった・・・バイオハザードみたいだった」

そんなわけで、恐怖に脅える一夏はセシリアの下から逃げ出し、次の人物を訪ねた。

その次の人物が鈴だった。

だが、そこにおいても一夏の目的は達せられなかった。

「鈴も怖かった・・・」

鈴の部屋では、廃人の様になってゲーム画面に向かう彼女を見た。

何を言っても力無い声しか返ってこず、何とか話を聞いてもらおうとして肩を掴んで向かせると、そこには暗く澱んだ双眸があった。

『泰山府君其我也』

ただその言葉を返して鈴はゲームに戻って行った。

「なんて言ってるのか分かんなかったけど・・・怖かった」

さて、あと一人、一夏が頼ることが出来る人物が残っていた。

一夏も、何故最初から訪ねなかつたのかと思うほど頼りになる人物なのだが、その期待は矢張り挫かれてしまった。

「シャルまで・・・」

シャルロットはただ、太陽に向かって片手を伸ばして佇むだけだった。

その姿を見た一夏は、言い知れぬ恐怖を感じて退散した。

「・・・なんで皆・・・」

ここに来て、一夏は不審に思う。

今日は、何故だか友人知人が不可解な行動を繰り返していて、まるで別人のようだと感じた。

オタクは確かに普段は巫山戯た様な風だが、困っていれば真面目に助けてくれる。

千冬にしても、普段ならあんなに簡単に一夏を訓練すると言う事も考え辛い。

ラウラも、箒も、セシリアも、鈴も、シャルロットも、余りにも行動が不可解すぎる。

そして、一夏は思い至った。

「そうか・・・夢だコレは」

「・・・」

朝日が一夏の顔に刺さる。

最低の気分で朝を迎えた一夏は、さっきまでの夢の内容を鮮明に思い出して、夢で有った事に安堵した。

「良かった・・・」

一夏は汗でべた付く気持ちの悪い身体で布団から抜け出し、シャワーを浴びる。

今日は土曜日、奇しくも夢と同じように友人に特訓を頼もうとしていた。

「大丈夫だよな」

そうして一夏は朝食を取る際にオタクに特訓を願い出て承諾を得て、そして、アリーナの中央でオタクの言葉を聞いた。

「では、拙者の後に続くで御座る」

「おう」

「俺って天才だく!!」

「へっ!？」

『いかがだったでしょうか？一夏くんは、あの後どうなってしまうのか、果たして何処までが夢だったのでしょうか？それは、誰にも分からない事でしょう。それでは、次に奇妙な世界の扉を開けてしまうのは、あなたかも知れません』

第二十五話

「諸君、私は御飯が大好きだ」

オタクが口を開いた。

場にいる全員が息を呑むほどに言い知れぬ迫力をたたえて、オタクが言葉を紡ぎ出した。

そしてその言葉は更に続く。

誰もオタクを止める事は出来なかった。

「諸君！私は御飯が好きだ！」

「諸君！私は御飯が大好きだ！」

「・・・っ！」

オタクの声色が僅かに変わる。

嬉々満面の声は、まるで悪魔の声のように耳の奥の鼓膜を震わせ、無意識にからだを強張らせた。

「白飯が好きだ」

「玄米が好きだ」

「麦飯が好きだ」

「五穀米が好きだ」

「古代米が好きだ」

「炊き込み御飯が好きだ」

「混ぜ御飯が好きだ」

「おかゆが好きだ」

「インディカ米が好きだ！」

羅列する言葉は何故か込めに関するものであるが、それでも、誰も言葉を発する事無く、ただオタクの声に意識を向け続けた。

「平原で、街道で、塹壕で、草原で、凍土で、砂漠で、海上で、空中で、泥中で、湿原で」

「この世の中で食べることの出来るありとあらゆる御飯が大好きだ」

オタクは一拍置いた。

それまでの流れを一度断ち切り、ゆっくりと静かに息を吸い込んでから、そして口を開いた

「整然と列べられた釜の蓋を開け、湯気を上げる炊きたての御飯が好きだ」

「釜から巻き上がった湯気が、覗き込んだ自分の顔を覆う時など心が躍る！」

つい先日、不思議の扉を開けたばかりの一夏は、オタクの言葉を聞いて、その情景を思い浮かべた。

そして、それは確かに心の躍る瞬間では無いかと納得し、自身の腹の虫が蠢くのを自覚した。

「定食屋の出す特盛りの山の様な白飯が、無謀な挑戦者を撃破するのが好きだ」

「歓声を上げて挑戦メニューに挑み掛かったバカが、大量の白米を前にして薙ぎ倒された時など胸が空くような気持ちだった」

尚、言っている本人は確りと完食する模様。

「轡を並べた体育会系の集団が、恒例の早食い大会で店を蹂躪するのが好きだ」

「恐慌状態の新入部員が、息絶え絶えになってお櫃の飯を何度も何度もかき込む様など感動すら覚える」

「小食過ぎる後輩達を気絶するまで食わせ続ける様など、もうたまらない！」

「泣き叫ぶ店員達が、私の振り上げた掌と共に、金切り声を上げるホルスタッフの注文に、バタバタと薙ぎ倒されるのも最高だ！」

一夏は思い出す。

以前にオタクと共に入ったファミレスで、オタクの度重なる注文に疲弊する店員の様を思い出す。

昼前に入ったのにもかかわらず、厨房はフル稼働だった。

「哀れな商店街が、雑多な大盛りメニューで健気にも話題作りをしているのを、友人の特科施設普通科を連れて区画毎食い尽くしてやった時など、絶頂を覚える！」

想像に難くない。

下手な大盛りメニューでは余り話題にならず、その上、採算も取れずに返って損するだけである。

そんな所に、腹を空かせた獣の群れが入ればどうなるのか、余りにも容易に想像が着く。

「炊きすぎた御飯で滅茶苦茶になるのが好きだ」

「必死に食べるはずだった御飯が、時間が経ってカピカピになって行く様は、とてもとても悲しいものだ・・・」

オタクは顔を伏せ、目尻と眉を提げて悲しみの表情を見せる。

その顔は、まるで嘗て本当にあった事を想いだしているかのようだ。

「店の無茶ぶりの物量に押し潰されて降参するのが好きだ」

「ゲボを堪えて害虫の様に地ベタを這い回るのは屈辱の極みだ・・・っ！」

オタクの顔に深く歪な皺が刻まれる。

そこから、オタクは、今度は問い掛けるように、一夏達に向かって言う。

「諸君、私は食事を地獄のような食事を望んでいる」

一体地獄のような食事とは何なのか、それを突っ込む物は誰も居ない。

それを良いことに、オタクは続けて言う。

「諸君、私に付き従うクラスメイト諸君、君達は何を望んでいる？更なる食事を望むか？情け容赦の無い糞のような食事を望むか？鉄風雷火の限りを尽くし、三千世界の全てを食い尽くす嵐のような闘争を望むか？」

その瞬間、一夏は思わず立ち上がったて叫んでしまった。

「クリーク!!」

「よ、嫁!?!」

一夏の凶行に真っ先に反応したのはラウラだった。

それもその筈だ、突然立ち上がった科と思つたら、戦争と叫ぶのだから、ドイツ人であるラウラが驚かない筈が無い。

その上、タブーとされている右手を真っ直ぐに掲げるナチス式の敬礼までやっているのだから、ラウラのみならず、欧州出身のセシリアとシャルロットも面食らった。

それでも、一夏は続けた。

「クリーク!!クリーク!!クリーク!!」

そんな一夏を見て、オタクは口許を歪めて微笑みながら言った。

「よろしい。ならばクリーー「いい加減にせんか馬鹿者!!」」

その瞬間、今まさに、オタクの脳天に、満身の力を込めた握り拳が振り下ろされた。

「全く、貴様は最近は大人数になつたかと思つていたが・・・何をやってる」

「う(づ)づ(づ)づ(づ)・・・!!」

まるで催眠術から解かれた様に、オタクが倒れると同時に、生徒が一斉に溜息を吐いて身体から力を抜いた。

「織斑!!」

「はい!!」

「貴様も同罪だ!この馬鹿者め!!」

頭を抑えて転げ回るオタクと同様に、一夏も、直ぐにその後を追う事に成った。

千冬の振り下ろした拳は、一夏とオタクの二人を確実に仕留め、二人は揃って床を転げて埃まみれになる。

「まったく貴様は、良くもまあ、そこまで巫山戯られる」

「デュフフフフワワサーセンワワ」

さて、この男、オタクがここまでテンションが上がっているのには訳がある。

それは、今日の授業が家庭科の調理実習だからだ。

「デュフフフフワワ楽しんで御座るワワ」

「・・・」

未来のIS操縦者を育む学園とは言え、一応日本の高等学校で行われるカリキュラムは最低限実施する事になっており、家庭科もその例に漏れに。

だが、この学園に来る様な生徒と言えば、大概は運動なり勉学なりに心血を注いできたエリートばかりで、もっと言うのならば、普通科目重視の進学校出身者が殆どである。

その為、趣味でも無い限り、料理を得意とする生徒は非常に少ない。「ハッキリ言おう・・・私も人の事を言えた物では無いが、料理は覚えがおかないと後悔する」

珍しく語気を弱く生徒に向かって語りかける千冬は、何か、過去の苦い経験を思い出している様だ。

「千冬姉・・・」

「何があつたので御座るかwww?」

「・・・実は、千冬姉・・・昔、電子レンジでゆで卵作ろうとしたんだ」

「おっふ・・・それは・・・」

「あの時は凄かった・・・」

気になる人は水蒸気爆発で調べてみよう。

「・・・と言うわけで、本日は山田先生の指導の下で授業を行う」

そう言うと千冬は下がり、エプロンの良く似合う山田真耶が授業の説明を始める。

「えーと、本日作るものですが、欧米出身の生徒も多いので、洋食をメインにしたいと思います」

本日のメニューは、仔牛の煮込み、ペパロニのピザ、猪のステーキである。

「真耶氏・・・」

「何です?」

何処かで聞いた事のあるメニューに、オタクは珍しく目眩を覚えるが、他の生徒達是对して不思議には思わなかった。

唯一疑問を抱かれたのは、何故猪なのかと言う点だが、近年のジビエブームを考えると、奇抜と言うほどでは無いらしい。

「猪なんて初めてだな」

「それで御座るな・・・」

果たして突っ込むべきか否か、オタクは激しく迷いながら授業に挑んだ。

「それでは始めます」

真耶の宣言と共に始まった調理実習は、割と恙無く進み、途中、何処かの班がピザのトッピングにジャーマンソーセージを使ったり、仔

牛の煮込みに蜂蜜を入れていたり、オタクの処理能力を大幅に超える事態に発展していた。

その結果、オタクは考えるのを止めた。

「www」

「曹長」

「www、www」

「曹長!」

「悪いなラウラ、小田は死ぬほど疲れてるんだ」

「そうか・・・では嫁で良い」

「なんだ?」

思考停止して食器を洗うだけの機械になったオタクを余所に、ラウラは一夏に何か相談を始めるようだ。

再び一人になって草を生やし続ける、オタクに新たに声が掛けられた。

「ねえタク」

「www」

「タク?」

「www」

「もう・・・」

シャルロットは、呼び掛けても応じないオタクに業を煮やし、思い掛けない行動に出た。

「えい!」

可愛らしいかけ声と共に、シャルロットは、一度オタクの頭を殴ってみた。

「・・・はっ!拙者は一体・・・」

「この手に限るね」

漸く再起動したオタクは僅かに頭に痛みが残るのを感じた。

しかし、それは恐らく千冬に殴られた時のせいだろうと決め付けると、自分に呼び掛けているシャルロットに応じる。

「何か様で御座るか?デユノア氏」

「う、うん・・・その、ちよつと味を見て欲しくて・・・」

「いいで御座るよwww」

快く、シャルロットの頼みを聞いたオタクは、早速シャルロットの班で作っていた仔牛の煮込みを味見してみる。

「仔牛の煮込みが死ぬほど食いたかったんだよwww」

「半年も真面な御飯を食べてなかったんだね」

悲報、シャルロット・デユノア、ニコ厨の可能性浮上のお報せ。

「では・・・頂きます」

「うん。お上がりよ」

味は言うまでも無いが、敢えて言うのならばオタクには評価A以上を与える権限が無いと言う事だ。

この日の午前中の授業は調理実習だけで終わり、午後からは普通授業だけだった。

何のことは無い普通の日常を過ごして、それから一夏達は放課後の自主トレを始める。

本来ならば、オタクもそこに混じるのだが、今は、オタクのダンボールが修理中のため参加できず、暇を持て余している。

「・・・如何すっかな」

何時ものベンチで黄昏れているオタクは、ふと口許が寂しくなつて懐に手を伸ばす。

買ったばかりのラッキーストライクを取りだして封を開けると、一本を抜いて口にくわえる。

そして、愛用のジッポーを取り出そうと懐を探っていると、横から火の着いたマツチが差し出された。

「?・・・悪いな。助かる」

一瞬、不思議に思うが、オタクは一言返してからタバコに火を着けた。

「ありがとう」

『いいや、どういたしまして』

「・・・ふう」

『良い吸いっぷりだな』

「ああ・・・アンタ誰だ？」

漸く、オタクは隣に座っていた人物に尋ねた。

何気なく、反応していたが、相手は日本語を喋ってはいない。

オタクが尋ねると、隣の人物は自身もタバコを取り出して口にくわえて火を着けた。

「クラリツサ・ハルフオーフ大尉、ドイツ連邦陸軍特殊作戦師団第31空挺旅団シュバルツェハーゼ所属だ」

「日本国陸上自衛隊陸上総隊中央即応連隊所属、小田宅陸曹長であります」

堅苦しい挨拶を交わしては居るが、二人ともベンチに座って背をもたれ、口にタバコを啣えている。

「・・・で、大尉殿は何しに来たので御座るか」

「私に対してキヤラ付けは必要か？」

「いや、何となく・・・で御座る」

相当なグダグダ加減の二人が、真面に話を始めるのは、この数分後に啣えていたタバコを吸い終わる頃だった。

第二十六話

『オタ曹長聞こえるか』

「聞こえているで御座るよ大尉殿」

『此方も感度良好だ。今回の協力に感謝するぞ曹長』

「デユフフ構わないで御座るよwww拙者も楽しんでいるで御座る
www」

『そう言つて貰えれば助かる』

無線機越しにクラリツサと遣り取りをするオタクは、寮の一夏の私室の前に来ていた。

「では、コレから入るで御座る」

『了解した』

そう言つてオタクがドアノブを掴んで捻るが、扉は開かない。

「鍵が掛かっているで御座る」

当然と言えば当然である。

今日日、田舎の岩手の山奥の家にすら鍵は掛けられているのだから、学園内とは言え、寧ろ鍵が掛けられていない事の方が異常である。

『き、期待させておいて・・・この仕打ちは何ですの!?!』

「およっ」

突如として、無線機から聞いた事のある何処かの戦隊長の様な声が聞こえてきた。

「そこにセシリア氏がいるで御座るか?」

『ああ・・・と言うより』

『曹長』

「少佐殿?」

『何故ここにクラリツサが居るのは分からんが、取り合えず主立った者は全員居る』

「一夏氏はほつといつて良いので御座るか?」

オタクが尋ねると、再び無線の向こうの声が変わつて答えが返つてくる。

『一夏なら今は織斑先生に掴まつてるよ』

「おつふwwwデユノアしまでwww」

花澤ボイスを耳にダイレクトに伝えられたオタクは、余りお見せできない類いの動きを見せているが、彼女達には伝わっていない。

「じゃあ・・・コレから鍵を開けるで御座る」

『じゃあ・・・コレから鍵を開けるで御座る』

「頼んだオタ曹長」

場面は変わり、食堂の一角で何時ものメンバー十クラリツサが無線機を操作して、オタクからの報告を待つ。

その間に、ラウラがクラリツサに尋ねる。

「何故クラリツサが居るのだ？」

「実は陸上自衛隊と欧州軍との合同演習の企画が我がドイツ陸軍で持ち上がっていています。今回はその事前視察と自衛隊側との連絡のために随行してきました」

「自衛隊と演習だと？」

「はい。今後、陸上自衛隊が活発に海外での活動を増やす事になれば、欧州NATOとの協調が必要不可欠となります」

「そうだろうな」

「しかし、自衛隊は米軍などとの訓練は活発ですが、特に陸上自衛隊と欧州軍の連携不足が以前から指摘されていました」

「確かにな」

「そこで、今回ドイツ陸軍が中心となって陸上自衛隊との連携強化を発案、これにフランス軍とイギリス軍が賛同して日本に打診、陸上自衛隊側もコミュニケーション不足を感じていたようで、中々に好感触でした」

『対テロ戦闘に関して一日の長がある欧州のノウハウを学ぶ機会はとても貴重で御座るからな、単純な連携強化と言うよりも、相互にノウハウの吸収したいと言うのも理由の一つで御座ろうな』

クラリツサとラウラの話し合いに、オタクが割り込んで補足してく

る。

「開いたのか？」

箒がオタクに尋ねた。

『www箒氏もで御座るかwww開いたで御座るよwww』

一体どうやって開けたのかと言う疑問が全員の頭に浮かぶが、今は気にしない事にした。

『では、入るで御座る』

全員が唾を呑み込んだ。

それから暫く無言が続き、好い加減に反応が無い事に業を煮やした鈴が、無線を取って呼び掛ける。

「ちよつと！何か言いなさいよ！」

「そうですわ！早く何か情報を！」

『・・・』

二人の呼び掛けの後にも聞こえてくるのは僅かなノイズだけだった。

何か有ったのか、失敗したのかと思いかけたその時、漸く無線からオタクの声が聞こえた。

『・・・すまなかつたで御座る。少し不測の事態があつた物で』

「不測の事態？大丈夫なのか曹長」

『大丈夫だ問題ない』

「なら良いが・・・」

ラウラがオタクの身を按じて声を掛けると、問題が無いと言う返答が返ってきた。

そんな、二人の遣り取りを聞いていたシャルロットが、割り込むように呼び掛ける。

「それで、部屋の中の様子はどう？」

『えーと、綺麗に片づいてるので御座るな。男鰥とは思えないで御座る』

オタクの答えが返ってくると、箒と鈴が納得する様に声を出す。

「アイツは昔から掃除片付けが好きだったからな」

「ホント、女子よりも女子力が高いというか」

「あははは、昔っから何だね一夏は」

思わず昔話に花が咲きそうになるが、ここでクラリツサがオタクに向かつて命じる。

「ではオタ曹長、先ずはベッドの下を探ってみてくれ」

『了解で御座るwww』

ベッドの下、そのワードが出た瞬間に全員の意識が無線機のスピーカーに集中する。

そこにナニが有るのか、誰もが固唾を吞んでオタクの報告を待った。

「どうだ？何かあるかオタ曹長」

『えくと・・・おっ!』

反応があった。

「何だ!?ナニが有った!?!」

「言いなさい!早く言いなさい!」

一番に飛び付いたのは箒と鈴だった。

若干、必死すぎて痛々しい感じもするが、当の本人達は気にしている余裕など無く、他の者も、何だかんだで気になっていた。

『えく、先ずは・・・』

「先ずは?」

『イ○チ5月号』

「バ○キ○5月号?何だそれは?」

バ○○チとは言わずと知れたバイク雑誌、主にアメリカンバイク系の情報雑誌である。

『中々渋い趣味で御座るが、確か休刊の筈で御座る』

「そうなの?」

『確か2017年で休刊した筈で御座る。拙者も学生時代に愛読していたで御座る』

「他には無いのですか?」

『えく・・・』

また暫く待つと、再びオタクが声を出した。

『メ○ズ○ン○この春を逃すな、最新最前線トレンド。後は、月○ニユ○タ○プ』

「何か統一感が無いな」

「一夏もフアツションとか興味あるんだね・・・タクはそういうの興味ないの?」

『余りないで御座るな・・・主にスーツ以外はワークパンツかカーゴパンツしか着ないで御座る』

「それだけ?」

『一応チエツクのシャツとGパンも持っているので御座るよ』

中々、アレなオタクの私服事情が分かった所で、更なる情報が齎される。

『およ?奥に何か?』

その瞬間乙女達が色めき立った。

「コレまでの普通?な雑誌の更に奥に有ると言うことは、もしかするとお宝かもしれない。」

そんな期待感を膨らませてオタクからの報告を待った。

『取れたで御座る』

「なんて書いてあるのだ?曹長」

「えく・・・薔○族・・・」

「「「「多?」」」」

「ブフツ!」

オタクのやや震えた声が返ってくると、クラリツサが鼻血を吹き出し、残りの五人が呆気に取られた顔をさらした。

「ば、○薔族?」

『・・・1987年2月号で御座るな・・・』

「87年2月号・・・だと?」

興奮した様子のクラリツサの鼻からは、出てはいけない量の血潮が吹き出している。

しかし、五人にとってそんな事は些末な問題だった。

「薔薇○って・・・あの」

「・・・ゲイ雑誌だな・・・」

「ふ・・・古いのだから・・・最新の物じゃ無いから・・・」

鈴の精一杯の自分に対する言い訳を余所に、オタクから更なる報告

が上がる。

『言い辛いで御座るが・・・最新号もあつたで御座る・・・』

沈黙が降り立った。

「・・・」

「つ、次に行こう」

「そ、そうね・・・見なかった事にしましょう」

「ですわね・・・」

「だな」

「曹長・・・その本を戻して次に行つてくれ」

『了解・・・拙者はどう言う顔をすれば良いのか・・・』

全員見て見ぬ振りをすると言う事で落ち着いて、それから暫くしてからオタクからベッドの下にはこれ以上は何も無いと言う報告が入った。

ここに来て、彼女達は何処を捜せば良いのかと言う疑問に直面し、頭を悩ませた末にシャルロットが妙案を思い付いてオタクに頼む。

「タク？」

『何で御座るか？』

「タクなら何処に隠すの？その・・・エッチな本って」

『・・・』

再び無線の連絡が途絶えた。

同性ならば分かるのでは無いかと言う質問は、ともすればオタクの隠し場所も露呈する危険の孕んだ遠回しなオタクへの攻撃であり、オタクは自分の隠し場所を露呈することを多いに恐れた。

「・・・なにも言いませんわね」

「ちよつと攻めた質問だったんじゃない？」

「よく考えれば、あの豚の秘密を明かせと言っている様な物だしな」

「まあ、アイツの事なんて興味ないけどね」

「・・・」

『・・・見付けたで御座る』

漸く、オタクから再びの報告が入る。

その報告に早速飛び付いたのがセシリアだった。

「それで！どんな本が有ったのですか!？」

『あく・・・えく・・・先ずは』

「先ずは？」

『二〇元ドーム〇ガジ〇とコミ〇ク〇ン〇ア〇が何冊かと・・・コミックL〇もあつたで御座る』

〇ミツ〇L〇、その名前が出た瞬間に、セシリアの前身が総毛立った。

「〇ミ〇ク・・・L〇・・・ですか?」

『そうで御座る。L〇で御座る』

「なに?そのL〇って?」

「何かの省略か?」

この場に置いて、L〇に反応したのはセシリアと鼻血を垂らして倒れているクラリツサの二人だけだ。

他の四人は何の事なのか分からない様子で、疑問符を浮かべる。

「曹長、L〇とは何なのだ?」

戦慄した。

セシリアは咄嗟にラウラの耳を塞いでオタクに向かって叫んだ。

「ダメですわよ!言っではいけませんわ!」

『・・・了解で御座る』

今、この場に置いて優位に立っているのはラウラと鈴の二人だ。

本人達が気付いていないだけで、この二人は現状で最も目的に近い存在になってしまった。

それはL〇がある特殊な形質の趣向を持った人物を対象にした漫画雑誌だからに他ならない。

その形質に当てはまるのがこの二人なのだから、知られる訳にはいかなかった。

「ほ、他に何か無いんですの!」

『・・・見付けたで御座る』

再びの発見報告に場が色めき立った。

『えく・・・娘〇Y〇E、わ〇い、後は・・・おっ!』

「如何したの?」

『同人誌を見つけたで御座る』

「同人誌！」

クラリツサが起き上がった。

『コレは・・・』

「何ですか？一体何が有ったのですかタク曹長！」

『いや・・・何冊か有ったで御座るが・・・』

「何なんだ一体！ハッキリしろ！」

『・・・オン○ビ○』

「はっ？何よ？カ○ナ○ス？」

『・・・これ以上は止めよう』

突然、オタクが割とマジなトーンで中止を宣言する。

余りに意味不明な事態だったが、不思議と誰もオタクには逆らわなかった。

『コレで終わりだ』

「・・・」

「取り合えず、ある程度の傾向は見えた・・・のか？」

箒が疑問を口にする中、シャルロットが無線機に向かって話し掛ける。

「と、所でタクは、その・・・どう言うのを読むの？」

『デュノア氏』

「な、何？」

『・・・いや、一夏氏にばかり恥は掻かせられんで御座るな・・・』

オタクは一瞬、逡巡して、無線越しに重々しく口を開いた。

『メジャーどころでは、う○ん○、に○う○房、漸○ラ○ダー辺りで御座る・・・後は○トン、極○色、ぐ○ら○号、ク○ビ○ガー等も愛読しているで御座る。割と一夏氏とは近い趣味で御座るな』

かなり赤裸々に質問に答えたオタクは、それ以上何か言われる前に無線のスイッチを切ってしまい、そこで交信は終了した。

「・・・コレで良いのか？」

ベッドの上に広げられた一夏の愛読書を眺めながら、オタクが言った。

「部屋に入ってアンタが居た時は・・・随分面食らったぞ？」

振り向かず声掛けするオタクに対して、その背後の人物が言葉を返す。

「あら、私には巫山戯たキャラ作りはしなくて良いの？」

「・・・生憎と・・・赤旗の下に居る奴とは仲良くしたくないもんでね。職業柄」

「随分嫌われた物ね・・・まあ、貴方の職業なら仕方が無いかな・・・曹長さん」

「何故、こんな事を？幾ら間抜けなチエーカー崩れでも、こんなアホな事は普通はしないぞ」

「・・・知る必要の無い事よ」

オタクの言葉に、背後の声の主が少し不機嫌そうに応えた。

その反応を聞いて、オタクは更に煽る。

「如何した？本当の事を言われてムカついたか？自分の感情も制御できないとは・・・随分と質の落ちた物だな」

「・・・」

室温が氷点下まで降下したと錯覚する程に、冷淡な雰囲気を出してオタクの背後の人物が無言で睨む。

「・・・貴方の腹を切り開いて見れば、臭いまで豚と同じ臭いがしそうですね」

「流石は同志のお気に入り、言う事が違うな」

「・・・」

「・・・」

互いに無言で、片や背を向け、片やその背を睨んで佇んだ。

「なあ」

「何かしら」

「好い加減に服着たらどうだ？強がってないで」

「・・・何のことかしら？私は服を着ているわ。ただ馬鹿には見えない

「だけよ」

「・・・」

「ミスを確認しよう・・・な？予想してなかったんだろ？一夏の部屋で、全裸で踊り回っていたら人が入ってくるなんて予想しなかったんだろ？」

「・・・」

「何時までも若い娘が肌を晒すものじゃ無い。好い加減に失敗を認め、服を着なさい。布仏本音さん」

第二十七話

「はあく疲れた……まったく、千冬姉め、何の証拠もなく二時間も説教しやがって……」

姉による折檻にくたびれた一夏は、ぼやきながら自室に入るなり、さっさとシャワールームに入る。

余程疲れていたのか、惨状と言うほか無い有様のベッドルームには一切目をくれず、何も異変に気が付く事も無くシャワーを浴びる。

そして、普段は鳥の行水の一夏には珍しく、十五分程経つてから漸くシャワールームから出てくると、腰にタオルを巻いた状態でベッドに向かった。

「スゲー疲れた……」

良く見れば一夏の目の周りは微妙に窪んで黒く隈が出ている。

この後、この疲労も何もかもが吹き飛ぶような事が起きる。

と言うよりも既に起きている。

「ん？」

一夏は見てしまった。

自分のベッドの上に広げられた自分の秘蔵のコレクションを見ってしまった。

「えっ？」

余りのことに一夏は一瞬気を失った様に硬直し、混乱する頭でベッドに広げられた本の中から一冊を手にとった。

「えええええ？」

紛れもなく自分の物だと断言できるその本が、何故ベッドの上に、それも、一冊だけではなく隠されていた筈の物が全て晒し出されて居るのか、一夏は余りの事態に困惑して声を上げることしか出来なかった。

その行動が、本人の明暗を分けるとも知らずに。

「入るぞ」

唐突に、一夏の背後で扉が開かれて姉である千冬が入ってくる。

「伝え忘れていた事が……」

「・・・千冬姉？」

言葉を掛けながら一夏に近づく千冬に、一夏の首が錆び付いたようにゆっくりと向く。

そして、千冬は、その優れた観察力を駆使して一夏の手にある物を確認し、それからベッドの上に散乱している物を認識した。

「ち、千冬姉・・・違うんだ。コレは違うんだ」

「ほう・・・説明して見ろ」

一夏は本能的に悟っていた。

この姉に対しては如何なる弁明も通じず、釈明は完全なる無駄である。

しかし、それでも一夏は口を開く。

無駄と分かっているても、無謀と悟っているても、一夏は目の前の偉大なる姉に立ち向かうしか無かった。

「・・・千冬姉。コレは」

「コレは？」

「・・・忍者の仕業なんだ」

「ハイクを詠め」

「アイエエエエエエエエエエ!!」

慈悲は無い。

「一夏君すまない・・・」

何処からか聞こえてきた断末魔の叫びを聞いたオタクは、空に向かって一礼して侘びた。

恐らくは今頃、一夏は姉による折檻の第二ラウンドを受けている事だろう。

その原因を自分が作ってしまったて事は間違いのない事であり、年下の友人に対しては申し訳ない気持ちで一杯だった。

「さ、着いたわ」

そんなオタクの心中を知ってか知らずか、本音がある一室の前で立

ち止まってオタクに告げる。

「今更だが、何時もみたいには喋らないんだな」

「当たり前でしょ。あんな馬鹿みたいな喋り方をする人間が実在するわけが無いじゃ無い」

「お、おう」

「入るわよ」

オタクが面食らって居るのを尻目に、本音は扉を叩いて室内へと入る。

「失礼します。小田宅を連れてきました」

あの衝撃の邂逅から暫くして、オタクは本音の案内によって生徒会室に連れて来られた。

「ほら、貴方も入りなさい」

本音に促されて、続いて生徒会室に入室するオタク。

だが、その室内に入ったオタクは再び面食らうことになる。

「初めましてかしら？良く来たわね」

短めの髪に小柄な身体の女生徒に迎え入れられたオタクは、取り敢えず会釈をする。

「そんな挨拶なんてしなくても大丈夫よ」

「・・・」

言われるまま、オタクは顔を上げた。

「初めまして小田宅さん」

「・・・」

「？」

「・・・一つ聞いても良いか？」

「何かしら？」

「この部屋のインテリアは・・・君の趣味か？」

「ええそうよ。素敵でしょ？」

生徒会室の室内は凡そ八畳ほどで、部屋の中には高級感溢れる執務机が奥に一つ備えられ、その前に向かい合うようにデスクが置かれている。

そこまでは普通の生徒会室と行った風な内装で、執務机の左側には

校旗が立てられているのも実にそれらしい。

だが、それ以外の物が明らかに異質さを醸し出している。

「ここは何時からソ連になったんだ・・・」

まず、目を引くのは執務机の直ぐ後に飾られた巨大な書記長の肖像画だ。

ヨシフ・ヴィツサリオノヴィチエ・ジヨガシヴィリの威風堂々たるご尊顔が描かれた縦2 m横1・5 m程もある巨大な肖像画だ。

そして、更に良く見回してみると、部屋の右側の壁には他の歴代書記長の肖像画も飾られて降り、校旗の隣にも赤旗が立てられている。

「人類史上最も偉大な方よ」

そう言い放つ生徒会長の目は酷く澱んでいるように、オタクには見ええた。

「まあ、座りなさい」

「いや・・・遠慮させて貰いたい。と言うか早く帰りしたい」

「良いから、ゆっくりしていきなさい」

「いや、えんry」

「座りなさい」

「いや」

「跪きなさい」

幾ら行っても座ろうとしないオタクに対して、段々と彼女の態度も高圧的な物に変じていく。

「・・・いやry」

「跪け！」

「・・・」

オタクは無言でその場で跪いた。

「改めて自己紹介をしましょう。私がこのIS学園の生徒会長。更識楯無よ。よろしくね」

「・・・」

「さて・・・貴方とは何時かお話をしなければいけないと思っていた所だったのよっ」

「・・・」

「まあ、取り敢えずお茶でも呑んで落ち着きましょうか・・・虚、用意を御願い」

「Dax」

「ん？なんて？」

それまで、楯無の背後に控えていた女生徒が、随分と厳めしい声色で一言答える。

思わずオタクが尋ねると本音が答えた。

「ロシア語ではいつて意味の言葉よ」

「いや、それは分かるが、何故ロシア語？」

「お嬢様の趣味」

行っている間に、オタクと楯無の前に紅茶が出された。

「ロシアンティーって奴か・・・」

「ええ、お茶は良い物を用意させているわ」

そう言っつて、楯無はジャムをスプーンですくってカップに落とす。

その様子を見ながら、オタクはスプーンでジャムをすくうと、そのまま口に運んで舐めた。

「何その飲み方？」

本音がオタクの飲み方を怪訝な眼で見つめると、オタクは何の不思議も無い様に答える。

「ロシアンティーだろ？」

「ジャムは紅茶に溶く物でしょう？」

「それはウクライナかポーランドのやり方だ」

通常、ロシアンティーと呼ばれる飲み方は、濃いめに煮出した紅茶をジャムを直になめながら呑むのが基本的な方法で有り、日本において広まっているジャムを溶かす飲み方はロシアでは余りやる人はいない。

主にウクライナやポーランドではこのジャムを溶かす方法で呑む人が居るそうだが、ロシアンティーと言うからには、やはりロシアで親しまれている方法を踏襲すべきだろう。

「日本では濃い紅茶が出る事も少ないから、まあ、この紅茶は濃いし、出し方は全く間違っていないな」

「じゃあ、お嬢様だけが間違ってたって事？」

「有り体に言えば」

「・・・」

オタクと本音の会話を聞いている楯無は、スプーンをカップに入れたままの姿勢で固まり、肩が小刻みに震えている。

少し俯きがちで分かりづらいが、顔も少し紅くなって頬が膨れている。

「まあ、お茶はその人の好きな方法で楽しむのが良いのでは無いかかな？」

と、楯無をフォローしている風な事を言うが、オタクの顔は物凄イドヤ顔で楯無を煽りに煽っている。

「ん？んん？」

「で・・・」

「何だって？聞こえないなあ？」

「出てけえ!!」

一体何のために連れて来られたのか、僅か五分ほどの滞在時間で、オタクは部屋の主の手によって追い出された。

「wwwwwwはwww素で草が生えるwww」

『何なのよあの男!!幾ら何でもあんなドヤ顔でえ!!』

『お、落ち着いて下さい!!お嬢様!!』

『五月蠅い五月蠅い五月蠅い!!』

部屋の中からは楯無と虚の遣り取りが聞こえてくる。

その声をBGMにして、生徒会室から本音が静かに出て来てオタクの隣の床に座り込んだ。

「まだ口着けて無いけど・・・お茶呑む？」

「・・・貰うわ」

「何か大変そうだな」

「・・・」

「あの生徒会長。かなりミーハーだろ」

「分かる？」

「書記長の肖像画にレーニンが混じってた。それとイワシコが入って

いるのにマレンコフが入ってなかった」

「・・・やっぱり気付いた？」

「教科書見れば直ぐに気が付くだろう。あの感じからすると、ブ〇ク〇辺りを見たな」

「正解。ちよつと前までは十三課に嵌まっていたわ」

そう言つて、本音は一息に紅茶を飲み干し、て立ち上がった。

「そろそろ姉さんを助けてくるわ」

「ガンバ」

「・・・フライハイ？」

その言葉を最後に、本音は生徒会室に入つていった。

「今頃一夏君はどうなっている事やら・・・後でラーメンでも奢ろう」

そう呟いてオタクもその場所を後にした。

第二十八話

狭い一室でオタクと一夏が無言で向きあい、一夏がオタクに呼び掛ける。

「……」

「……小田」

「……」

一夏の呼び掛けに対してオタクは何も答えず、ただ、気まずそうに視線を逸らした。

そんなオタクの態度に、苛立ちを募らせて言葉を紡ぐ。

「如何してこんなっ……!」

「すまないでござる……」

「っ!!」

絞り出すようなオタクの謝罪の言葉に、一夏は剣呑な目付きで詰め寄って胸倉を掴んだ。

「……すまない」

「クソッ……!」

再度のオタクの謝罪に、一夏はやるせなさを押し殺す事が出来ずに吐き捨てる。

そんな一夏に対しても、オタクは何も声を掛けることが出来なかった。

「こんな事って有るかよ……っ!こんな……」

一夏は酷く悲しんでいた。

最初に怒りを覚え、無感情が湧き出し、憎み怨み絶望し、有る瞬間を過ぎた所で楽になるが、それから強い悲哀が津波のように押し寄せ溢れた。

「俺がっ!俺が何をしたって言うんだよ!!なんでこんな事に成るんだよ!!……チクショウ……」

項垂れながら慟哭を撒き散らす一夏の事をオタクは見ていられないと言う気持ちで目を反らしたくなる。

しかし、それは出来ない事だった。

一夏が嘆くその理由が自身にあるからこそ、オタクはそれ以上、無様で恥知らずな事は出来なかった。

「・・・もう終わったんだ」

オタクは思わず慰めようとして声を掛けた。

しかし、そのオタクの言葉に一夏が直ぐに反応する。

「まだ終わっちゃいない!!何も!!・・・俺に取っちゃ続いたままなんだ!!」

「・・・」

「護るために戦った!けど護れなかった!そしてやつと次の日になってみれば、教室ではクラスメイト達が妙な視線を向けてきた。変態だ性倒錯者だってな!!」

一夏の叫びは尚も続く。

「アイツらにそんな事を言う資格があるのか!?誰一人男がどう言う物かも知らないで!俺を責める資格があるのか!!」

「・・・誰にも辛いことはある。慣れろ」

「あんたはな!!俺は違う!!」

オタクの下手な慰めなど何の意味も成さなかった。

より燃え上がった一夏の思いが、更に弾けてオタクに叩きつけられる。

「中学の頃の男子達には仁義があった。仲間も居た。互いに助け合っていた・・・だけどここには何も無い!!」

「・・・」

「アッチじゃエロ本も手に入った!ビデオも借りられた!100万再生の動画だって自由に再生できた!!それがここに来てみればグラビア誌も視られやしない」

先程までの勢いは何処へやら、一夏は急にトーンダウンして床に尻餅を着くように座り込んだ。

顔を伏せて、手で目許を多いながら涙ながらに言葉を続ける。

「惨めすぎる・・・こんな・・・みんなどこへ行った・・・?畜生、何処へ・・・」

「・・・」

オタクは黙って一夏を見下ろした。

そして、静かに一夏の肩に右手をそえた。

そえられた右手に、一夏は継り付くように手を重ね、そしてオタクを見上げながら口を開く。

「バ○キ○を覚えているか？アレのお陰で友人とウマが合って、ピンナップとか好きなバイクの話を良くしていた。赤いY○M○H○のドラ○グ○ターでビンビンに飛ばそうって……」

赤いド○スタは如何だろうかと思いつつ、取り敢えずオタクは頷いて見せた。

そんなオタクに一夏は更に続ける。

「あの日、シャワーから上がったら千冬姉が入ってきて『コレは何だ』って言ってきたんだ。俺は抵抗したんだけど何も出来なかった。俺が意識を失っている間に千冬姉が爆発したんだ」

「……」

「本のページがバラバラになって俺の身体に降り注いだんだ！何とかしようとしたけど何ページか無くなってどうにも成らなかった！俺は泣きながら、家へ帰りたい。PCのHDDの中身を覗きてえよ！って」

その場面を想像すると、余りの惨状に身震いがして、涙が出てくる思い出、オタクは話を聞き続けた。

「無くなったページを探したけど見付からなかった……その光景が、一週間も前の事なのに毎晩夢に見る。夢か現実か、ここが何処かさえ分からなくなる。そんな事がもう一週間も続いている……もう、どうにもならない」

「一夏氏」

「助けてくれ……」

「……まだだ」

「え？」

「まだ諦めるには早すぎる」

オタクの言葉に、一夏は呆気に取られたように見上げたまま固まった。

そんな一夏にオタクは尚も続けて口にする。

「このまま諦めて頂垂れるには、拙者達は若すぎるで御座る」

「なにを・・・」

「喪った悲しみは計り知れない・・・でも、また手に入れば良い。何
度でも諦めずに挑戦すれば良いので御座る」

「だけど・・・もう時間が」

現在時刻午後四時三十分頃、コンビニから成人向け雑誌が消えて早
二年余り、オタクの言わんとする事を実践に移すには余りにも障害が
多かった。

「なら・・・なら、一夏氏は諦めるので御座るか？」

「っ!!」

「テキサス大学アメリカンフットボールコーチ、ダレル・ロイヤルは
言った」

「・・・」

「フィールドで戦う誰もが、必ず一度や二度屈辱を味わわされるだろ
う。打ちのめされたことがない選手など存在しない。ただ一流の選
手は、あらゆる努力を払い速やかに立ち上がろうとする。並の選手は
少しばかり立ち上がるのが遅い。そして敗者は、いつまでもグラウン
ドに横たわったままである」

「・・・それって」

「一夏氏はどれで御座るか？」

最早、一夏の腹は決まった。

決心した男の顔で立ち上がって、オタクを正面から見詰めた。

そして、言った。

「やろう。ああ、やってやろう。千冬姉に男の意地を・・・魂を見せて
やろう」

「www言い表情で御座るよ一夏氏」

二人の行動は決まってしまえば早かった。

即座に部屋を飛び出して寮の外を目指す。

廊下を疾風の様に走り抜ける最中、一夏がオタクに尋ねた。

「それで、何処に行くんだ？」

「取り敢えず駅に行くで御座る！」

学園内にはコンビニなどは無く。

そう言った買い物をするには学園から出なければならぬ。

唯一の学園からの脱出手段はモノレールであり、その為には駅に行かなければならぬ。

「確かあっち側の駅前にはコンビニがあつた筈で御座る！」

「コンビニー！」

所謂コンビニ本の入手方法として、多くの男子達に取って最も手軽な方法がコンビニでの購入である。

勿論、制服で購入すると言う愚策は犯さない。

成るべく大人っぽい服装で、仲間内の中で一番の老け顔の者に行かせるのだが、その際に

店員が若い女性だと高確率でトラウマを作る事になる。

「拙者が買えば誰にも文句は言われないで御座るよ！」

オタクは男子高校生ではあるが、年齢は二十五歳で在る。

成人向け雑誌を買つても何の問題も無い。

オタクと一夏は息を弾ませて駅へと走つた。

「無い……だと……っ!？」

モノレールで揺られる事数分、本土の駅に着いた二人がコンビニに入つて、奥の本棚を見ると、そこには求めていた物は無かつた。

「ど、どう言う事で御座るか……」

「そう言えば……」

全国のコンビニに先だつた大手チェーンの発表により、全国の全てのコンビニエンスストアは、成人雑誌の取り扱ひの停止を表明。

これにより、オタク達の目論見は崩れ、世の数割の男性は膝を屈する事態へと発展した。

「こ、こんな事つてえ……!」

「まだで御座る……」

地面に手を着いて慟哭する一夏に、オタクが声を掛けた。

「まだ終わっていないで御座る」

「っ!？」

「コンビニでの取り扱いが終わったのなら・・・書店に行けば良いので御座る」

その言葉に、一夏は直ぐに反応して立ち上がった。

「近くの書店は確か・・・!」

一夏の瞳に希望の光が宿り、力が漲ってくる。

だが、神は時として余りにも残酷な運命を突き付けてくる。

「何処へ行くこうと言うんだ」

一瞬、ほんの一瞬で一夏の希望は刈り取られ、オタクのは絶望の淵に叩き落とされた。

「ち、千冬姉・・・」

「何故ここに」

一夏の姉にして世界最強の女、織斑千冬が二人の前に立ちはだかった。

「お前達の行動など簡単に想像が着く。・・・全く馬鹿なことをしでかしてくれる」

「・・・」

「今なら説教だけで許してやろう。さっさと学園に帰れ」

有無を言わさぬ迫力を纏う千冬の恫喝に、一夏の心が折れそうになり、思わず頷いて従ってしまいそうになる。

しかし、その直前で一夏は思い出して留まった。

姉の今までの理不尽な行動に、どれ程苦しめられてきたか、コレまでの苦汁辛酸を一夏は鮮明に思い出し、人生で始めて姉に反旗を翻した。

「・・・ほう」

下げかけた頭を戻して、真っ直ぐに見返してくる一夏の眼を見て、千冬は感心した様な声を出して挑発的に睨み返す。

その千冬の眼光を受けて尚、一夏は真っ直ぐに受けて立って気迫を見せた。

「……」

「……」

何時の間にかにオタクが消えた通りの一角で、二人の姉弟は睨み合
い、独特の雰囲気を作成した。

「……っ！」

形勢は圧倒的に一夏の不利だ。

ただにらみ合うだけなのにもかかわらず、一夏の額には大粒の汗の
雫が浮かんで流れ落ちる。

一夏は早くも姉に立ち向かった事を後悔し、何処かへと逃げた友人
を怨んだ。

「……あきらめろ」

千冬が一言一夏に言葉を掛けた。

一夏は直ぐにでも膝を屈してしまいそうになる。

だが、そこに、一夏の直ぐ側に一台のタクシーが現れて扉が開いた。

「乗るで御座る!!」

「っ！小田!!」

一夏は直ぐにオタクの言葉に反応して飛び乗った。

「出せ!!」

オタクが運転手に向かって叫ぶ。

「OK!Rock, n, roll!!」

小粋な音楽と共に、黄色いアメ車のタクシーがタイヤから白煙を巻
き上げて走り出した。

「逃がすか!!」

しかし、流石の千冬だった。

咄嗟に走り出した車に飛び付いてトランクに掴まり、車体の後部か
ら一夏を睨む。

「覚悟しろ」

気のせいかな千冬の眼が赤く光ったように感じた一夏は、オタクに懇
願する。

「どうにかしてくれ!!」

「運転手さん!!」

オタクが運転手に叫ぶと、その直後に車がドリフトして後部に居た千冬を振り下ろす。

普通ならば重傷を負う所なのだが、千冬が普通の人間と同じな筈など無く、全くの無傷で立ち上がって走って追い掛け始めた。

ヒールがアスファルトに突き刺さっている様に見えるのは、通行人の気のせいである。

「ターミネーターの様だ・・・」

「H A H A H A!! ありやスゲえや! なんだい!? あの女は!! 未来から来たロボットかい!?!」

妙にハイテンションなアフロのドライバーが笑いながらバックミラーを覗いて叫ぶと、すかさずオタクが返す。

「似たようなもんだ!! 違いと言えばシユワちゃんじゃないところだけだ!!」

「F o o o o o o o o o o o o o!!」

「段々、千冬姉が人間離れしてきたな」

一夏は自身の姉の規格外さを改めて思いしり、そして友人の破天荒さも確認した。

流石の千冬も、高速で走る車に走って追い付くのは無理だったようで、五分も経った頃にはバックミラーから姿を消した。

「振り切ったか・・・」

「身体の一部とか着いてないで御座るか?」

「俺の姉を何だと・・・有り得そうだ」

「お前の姉ちゃんスゲえな!! アメリカ軍にも勝てるんじゃないか!?!」

グツタリとシートにもたれる一夏は、ドライバーの言葉に内心で同意して、この後の事を考える。

結局の所、目的を達して学園に帰ろうとも、そこにはあの人類最強が待っているわけで、如何であろうとも結果は決まっていた。

「このまま何処か遠くに逃げてしまいたい・・・」

「・・・織斑女史が逃がすでも?」

「・・・」

この後、最終的に学園へと帰った二人は、待ち構えていた千冬に

よって折檻を受けた。

しかし、後日、一夏は友人の五反田弾からの支援物資を受け取る事に成功し、より嚴重に保管した。

第二十九話

さる水曜日の放課後、数日後に臨海学校を控えたある日、より具体的に言うに次話辺りに臨海学校編を控えたある日の事、一夏は自主練をしていた。

親友のオタクのダンボールが破損した事によってオタクと訓練をしなくなつて久しく、この日は一夏の他にラウラ、シャルロット、セシリアの欧州組の3人と合同での訓練と相成り、3人と1人ずつの模擬戦で全敗を喫していた。

今までの訓練はアリーナで行っていたのだが、この日は千冬の許可を得て訓練用の模擬市街で訓練を行っていた。

この模擬市街地は学園のある島の西側の外れに存在する、より実践的な訓練を行うための施設で、通常は高学年になってから使用する。

しかし、ここ最近、学園に入学してからと言うもの一夏は事ある毎に戦闘に巻き込まれており、ラウラの進言でこの模擬市街地での訓練をする事になった。

こう言った事情は千冬を初めとした教職員も理解しての事で、丁度訓練場の使用の予定も無く。

誰も使っていないためすんなりと使用の許可が下りた。

そんな普段とは全く違う新鮮な環境での訓練を一頻り終えて、一夏は項垂れて呟く。

「・・・全然勝てなかった」

3人との模擬戦で、一夏は何の良いところも見せられないままに終わってしまった。

最初のセシリアとの戦いでは建造物が乱立したフィールドに一夏は全く対応出来ず、そのまま機動力を奪われた状態でセシリアの巧みなショットアンドムーブに翻弄された。

その次のシャルロットとの戦いでは少し感覚を掴んだのか、何度か接近戦に持ち込むことは出来たのだが、閉鎖空間でのショットガンの威力をまざまざと見せ付けられる結果になり、敢えなく敗北。

最後のラウラとの戦いに至っては近接格闘で完封負けと言う、本人

にとつてかなり情け無い結果に終わってしまう。

「まあ、仕方ないかな？コレばかりは慣れが必要だから」

シャルロットから慰めの言葉を掛けられる一夏だが、それを頭で理解しようとしても中々飲み込めずにいる。

自分の実力不足は甘んじて受け容れるしか無いのだが、こうも完敗してしまうと彼我の実力差を分かっているとしても如何しても落ち込んでしまう。

一夏の為にフォローすると、そもそも市街地での近接戦闘など一朝一夕で身につくものでは無く、センス云々よりも反復訓練による徹底した理論に基づいた動きが求められ、ハッキリ言えば代表候補生や軍人でも訓練していなければほぼ同じ結果になる。

素人に息なり市街地戦闘をやれと言うのは土台無理な話だった。

寧ろ一夏はシャルロットに接近戦を挑めた時点でかなり善戦した方と言えるだろう。

「そもそも、一夏さんの白式はCQBには向いていませんわ」

「そうなのか？」

「ああ、向いているかどうかで言えば向いていないな」

白式のコンセプトは、高い高性能と加減速による機動と一撃必殺の零落白夜を組み合わせた一撃離脱を基本とし、広く開けた場所で飛び回りながら、敵の隙を見て懐に飛び込んで一撃を見舞うスタイルだ。

それに対して市街地での戦闘は余計に動き回らず静かに行動し、基本的に攻撃をする側の方が不利な状況になる事が多く、武器の取り回しも最新かつ最小最短の物求められる。

また、敵の位置が判明していない場合が殆どの為、索敵と戦闘を交互、若しくは同時にこなす必要も有る。

白式は市街地での戦闘に何一つコンセプトがあつていないのである。

それに対してラウラのレーゲンは、手刀やワイヤーブレードなど近中距離で柔軟に応用の利く装備で、レールカノンも爆発系の砲弾は相性が良い。

セシリアのティアーズは高機動で飛び回りながらの長距離の射撃戦で、実はこの中で一番市街地戦に向いていない機体なのだが、そこは操縦時間と経験、一夏の性格を把握した巧みな戦術が上手く噛み合った。

そして、シャルロットのラファールは装備から機体のスタイルから全てにおいて市街地戦に適した機体で、コレでシャルロット本人が市街地戦の訓練をもっと積んでいければ、それこそ手も足も無いだろう。

個人的にラファールやレーゲンの装備やコンセプトを見てみると単純に特殊部隊様の歩兵装備の発展系を見ている様な気がして、こちら辺は最近のフランスの事情を良く反映している様に思える。

ブルー・ティアーズの方はハッキリ言って地上戦力と戦うのに余り向いていない様に思えてならず、寧ろ戦闘機などの航空機との戦闘の方が向いている様に感じるが、ISの装備全般に言える事として武器の射程と威力が余りにも不足している。

白式はそもそも兵器として論外も良いところだ。

「なんて言うか、一夏は動きが分かりやすいんだと思うよ？」

「分かりやすい？」

「うん・・・一つ一つの動作が大きいのもそうだけど、姿が見えていない時も、余計な動きとか音とかが多いから、簡単に分かるんだよ」

「そうなのか？」

「ああ、嫁は不用意に身体を動かすすぎているな。そして、その度に何処かしらにぶつかるから直ぐに分かる」

「ですわね。その割には周囲の地形に対して意識が疎かになりすぎていますわ。周りを見ないで避け様とするから、簡単に動きを制御されてしまうのです」

「・・・ああ」

ハッキリ言っただろそだった。

全く良い所が無かったために、3人からの指摘には一切のフォローが無く。

そこに反論の余地も無く。

しかし、即座に実行するのは非常に困難だった。

「はあ・・・難しいな・・・」

「まあ、そうだろうね」

「そうだな」

3人も今すぐに一夏が市街地戦に対応するとは一切考えていなかった。

普通に考えれば一夏が積極的に市街地戦を行わなければいけない状況と言うのも考えづらい。

今の一夏に求められているのは、敵に襲われた際に早急にその場を離れ味方と合流して、自身の安全を確保する事である。

最悪の場合、戦闘を放棄して上空に逃げればある程度対抗が可能なのだから、無理して市街地戦に習熟する必要も無いのだ。

今回は、市街地戦の感覚を肌を感じる事が目的だったのだから、その意味では目的は達せられたと言っても良いだろう。

「そう言えば・・・」

「如何したの？」

ふと、一夏が疑問を口にする。

「小田は如何なんだろうな」

「え？」

一夏の呟きにいち早くシャルロットが反応して聞きかえす。

「どう言う事？」

「いや、アイツ自衛官じゃん。そう言う訓練もすんのかなって思ってた」

最近の陸上自衛隊の訓練は、野外、野山での訓練よりもゲリコマ対策として市街地戦闘の訓練の比重が大きくなっている。

そんな中でのオタクの能力はどんな物なのかと言う、一夏の疑問は至極もつともな物だ。

「一般に自衛隊の能力は高いと聞くが・・・曹長がどの程度の訓練を受けているのかは想像出来んな」

「あの豚はわたくし達の想像の外にいらっしやいますから」

結局の所、一夏達の出した結論としてはある程度は市街地でも戦え

るのだろうか、実際の能力は未知数と言う程度の物に落ち着いた。

実際、オタクはコレまでにアリーナ以外の場所、特に建物の建っている様な場所での実戦経験が有るのだから一夏よりはマシだろうとは皆思っているが、その場面を見た事が有るわけでは無いため、やはり正確には把握できていない。

「二度、小田ともやってみてえな」

一夏がそんな事を口にした直後、セシリアが何に反応した。

「っ!?!何か来ます!!」

ブルー・ティアーズは長距離の射撃が主体の機体だけあって、センサー類が一番充実した機体だった。

その充実したセンサー、電子装備が近付いてくる何者かの反応を検知した。

そのセシリアの言葉に他の3人は一斉に跳び上がって周囲を警戒する。

そして、セシリアが接近してくる何かの方を注視すると、その視線の先の空に何かが高速で跳び上がり、一際高い建物の上に降り立った。

「あ、アレは?」

「デュフフフwwww指揮者一、人型三、タンクもどき三・・・じゃないで御座るwww」

非常に特徴的な独特の角張ったシルエット、まるで箱を重ね合わせ積み上げた様な、小学生の夏の工作に提出されていそうな、そんな見た目の機体が4人の眼に映り込んだ。

「ダン・・・ボール?」

一夏が呟くと、ラウラが続いて声を上げた。

「いや・・・僅かに違うようだ」

「カスタムと書いてありますわね」

コレまでのダンボールとは僅かにだが異なる点があった。

全体的に装甲部分が多くなった他に、今までは露出していた顔部分にも箱が被せられている。

「色もグレーになってるね」

「良く見ると前よりもディテールが凝ってるな」

総評して、基本的には色違いのダンボールと言う結論に落ち着いた4人は、改めてオタクを見上げた。

「デュフフフwwww先ずは挨拶で御座るwwww」

そう言いながらオタクが武器を展開すると、いち早くセシリアが動いた。

「たった一機でっ！」

直ぐ様スターライトを構えたセシリアは、オタクに狙いを付けて引き金を引いた。

「オッフwwww」

そのセシリアからの射撃を、オタクは僅かな動きで躲すと同時に後退って建物の後に飛び降りる。

「任せろ。落下なら予測できる」

次に行動を起こしたのがラウラだ。

ラウラはレールカノンの照準を合わせると、オタクの降下速度を予測して狙う。

「そこだ！」

叫び声と共に、ラウラのレールカノンが火を噴いて砲弾を撃ち出した。

「やりましたの?」

放たれた砲弾は予測通りにオタクの直ぐ目の前のビルの壁に着弾し、そのまま壁の破片毎オタクを吹き飛ばす筈だった。

「デュフフフwwww道を作ってくれてありがとうで御座るwwww」

砲弾の直撃の直前、オタクは一瞬だけスラストを噴かして難を逃れ、砲撃によって作り出された風穴から歩きでて、皮肉を込めた台詞を投げた。

「わたくしとラウラさんが手玉に取られた」

「・・・間違いない。曹長はエースだ」

「wwww」

既にオタクの両手には武器が展開されている。

オタクはその内の片方、左手のその武器を構えてセシリアに向けて

引き金を引いた。

「ガトリングか！」

一夏が叫ぶのが速かったか、毎分6000発の発射速度で吐き出される50口径の機銃弾がセシリアの目の前の道に雨の様に叩きつけられて土煙を巻き上げた。

「っ！前が！」

煙幕代わりに広がった土煙でセシリアの視界が奪われた。

セシリアは嘗ての経験を許に煙幕で視界を奪われた後の攻撃を警戒する。

オタクの接近を警戒してスターライトを構え、確りと眼を凝らし、強化された探知センサーに木を配る。

近くに居る。

その事は間違いないと確信して、土煙に覆われた視界の中で神経を研ぎ澄ませた。

「っ!？」

不意に、セシリアの左側から物音がしたように感じた。

反射的に首を物音の方に向けた時、その瞬間にセシリアの意識に僅かな空白が出来てしまっていた。

その事に自身が気が付いた時にはもう遅かった。

「しまっ!？」

攻撃は右からだった。

土煙を弾く様にしてオタクのダンボールが姿を現すとセシリアの握っていたスターライトを破壊した。

一瞬にして武器を失い無防備になったセシリアに、更にオタクが追撃でシヨルダータックルを見舞うと、セシリアは近くの建物の壁に叩きつけられる。

「っっのお!!」

セシリアも研鑽を積んだ。

怒りや混乱を起こす前に、直ぐに冷静に身体を起こしてビットの内の一機を切り離して反撃に転じた。

一機のブルー・ティアーズが光線を放つと、その光線は何に遮られ

る事無く虚空を突き進んでいった。

「ええっ?」

オタクの姿がセシリアには見当たらない。

一瞬の思考の空白の後に、セシリアは直ぐ側に居た人物を思い出す。

「っ!一夏さっ!」

慌てて後を振り向くと、白式を纏った一夏がオタクに蹴り倒されて踏み付けられている。

「デュフフフwww」

オタクのダンボールの手には、今までにオタクの使った事の無かった剣が逆手に握られている。

一夏もタダ何もせずによられまいとして抵抗しようとするが、雪片を握る右腕が踏み付けられていて反撃が出来ない。

「一夏あ!!」

このままオタクの剣が一夏に振り下ろされると言う瞬間、シャルロットが一夏の名を呼びながら急行してサブマシンガンを構える。

その姿を見たオタクは直ぐに回避行動に移り、後方に飛び去りながらガトリングで牽制した。

「助かった」

起き上がってシャルロットに礼を言う一夏に、シャルロットは手を振って答えるとセシリアに言った。

「セシリア、タクの位置を特定してラウラに伝えて」

「分かりましたわ」

シャルロットからの要請にセシリアは否も無く答えると行動に移る。

「・・・ラウラさん!豚の位置を送りますわ!撃つて下さい!」

「了解だ!!」

セシリアからの砲撃の諸元を受けて、ラウラがレールカノンによる砲撃をオタクに浴びせる様に放った。

土煙の巻き上がる着弾地点が回り込むように徐々に一夏達の方へと近寄ってくる。

そして、歩道橋に砲撃が命中して一際大きな土煙が上がると共に橋が落ちて轟音が響いた。

誰もが、あの砲撃と歩道橋の瓦礫にオタクが押し潰されたと確信した。

この後掘り出すのかと、助け出すのが面倒臭い何故こんな事を等と思いついに頭で考えた。

だが、その考えは直ぐに雲散霧消した。

「っ！」

「なあっ?」

凄まじい地響きとスラスタ―そ噴かす音と共に、崩れた歩道橋が動いて押し上げられ始めた。

そして、そのまま歩道橋が一夏の目の前に押し倒されて、土煙の中からオタクのダンボールが姿を現す。

「脅えろ!! 疎めえ!! I Sの性能を引き出せないまま死んで行けえwww!!」

一夏の頬に大粒の汗の雫が伝って流れ落ちる。

「護つたら負けだ!! うおおおおおおお!!」

オタクの尋常ならざる迫力に3人が気圧されて固まる中、一夏が自身に気合いを入れるように叫びながら斬り掛かる。

「デュフフフwww」

不敵に笑うオタクは単純な一夏の攻撃を最小の動きで躲して後退ると、ガトリングを構えた。

「っ!!」

「一夏!! 下がって!!」

すんでの所で、ガトリングから吐き出された機銃弾の雨を躲した一夏に変わり今度はシャルロットが躍り出る。

そんなシャルロットに薙ぎ払う様にガトリングで射撃を加えると、シャルロットは上空に跳び上がって回避する。

そしてそのまま背後の建物に背中を着けて無理矢理ブレーキをかけると、今度は降下しながら両手のサブマシンガンの引き金を引いた。

「倍返しだよ!!」

「倍返しですわ!!」

シャルロットが撃つと同時に、セシリアも四機のビットを飛ばして一緒にオタクに射撃を浴びせる。

2人は互いに射線をカバーして、オタクが左右どちらに避けても良い様に撃つたが、しかし、オタクは微動だにせず、2人の射撃は全てが全くオタクに掠る事無く地面を抉った。

「www見た目は派手で御座るがwww一夏氏がガラ空きで御座る!!」

再びガトリングを一夏に向けたオタクは躊躇無く一夏に機銃弾を浴びせようとした。

「嫁え!!」

しかし、オタクの思惑は外れ、咄嗟に間に入ったラウラによって一夏に当たるはずだった機銃弾は全て防がれる。

「www」

この時、オタクは非常に楽しんでいた。

完全にあのシーンの再現になっている事は、オタクは狙いこそのした物の、他の4人は全く知らない事であり、それで尚、再現が叶った事に歓喜せざるを得なかった。

「小田あ!!」

一夏は雪片を両手で構えてオタクに向かった。

比較的広い通路故に、限定的ながら白式的能力を生かす事の出来る状況を見極めた一夏のセンスは流石と言わざるを得ず、オタクはガトリングでこの攻撃を受けるしか無かった。

「ぬうっ!!」

銃身が剥き出しのガトリングにはオタク特有の銃剣などは着いておらず、当然そんな状態で攻撃を受ければ一撃で使用不能になる。

オタクはそれを瞬時に判断してガトリングを放棄した。

態々格納領域の戻すよりもパージしてしまった方が隙が少なく済むと考え、オタクはガトリングを手放すと同時に右手の剣で斬り掛かる。

刃渡りは120cm程の西洋風の湾曲した刀は所謂サーベルの形式を取っており、片手で構えて素早く振るうのに最適だ。

一夏の雪片を初めとして、長大に成りがちな剣タイプの近接武器としては、オタクのサーベルは長すぎず短すぎない、実に合理的な形状をしている。

「くっ!!」

片手持ちでかつ小回りの利くサーベルの連続した斬撃は、一夏の予想以上に重く響いて反撃の手を封じ込める。

一夏は正直な所を言えば、剣の戦いになればオタクよりも自分の方が圧倒的に強いと言う自信を持っていた。

それは曲がりなりにも剣の道を歩んだ事による自負と、学園に来てからの経験に裏打ちされた確かな物だった。

だが、今のこの状況に置いて、その自信は呆気なく崩された。

「一夏さんが圧されていますわ」

意外そうにセシリアが呟くとラウラが反応する。

「別に不思議でも無いだろう」

「？」

ラウラの言葉にシャルロットも首を傾げて、視線を送る。

「今まで銃剣で近接戦をこなしていたのだ。それが剣になったからと言って変わるわけでは無い」

実際、今までの戦いでもオタクは箒や鈴などと銃剣で渡り合い、近接戦や格闘を披露する場面は幾つかあった。

案外、基本が出来ているオタクに取って剣を使った戦いも別段苦手な事でも何でも無かったのだ。

因みに、コレを書いている作者は段々オタクが強くなりすぎている様な気がして、やり過ぎた感が出ている。

「相変わらず反射神経が良いで御座るなwww」

「くっ!」

オタクと一夏の距離が近すぎる所為で3人が援護を出来ないのに分かっていて、オタクは更に攻め手を強める。

そのオタクの攻撃に持ち前の反射神経と運動センスを以て凌ぐ一

夏は、段々とジリ貧になりつつある。

「次はこうで御座る！」

一瞬、オタクが動きを止めたかと思うと、オタクは持っていたサーベルを無造作に放った。

「っ!!」

一夏は放り投げられたサーベルに意識を向けてしまい、慌ててオタクの方に向くが、そこには既にオタクの姿は無く。

それから左右に視線を向けてもやはりダンボールの機影は見当たらなかった。

「デュフフフwwww眼の良さが命取りで御座るwwww」

声がした瞬間、一夏が見上げるように声の方に顔を向けると、オタクの手にアサルトライフルが握られているのが見えた。

一夏も見慣れた何時もの銃剣が取り付けられたライフルだ。

「勝ったぞ!!」

「楽しかったで御座るwwww」

「千冬姉に言われたんなら言ってくれば・・・」

「デュフフフwwwwサーセンwwww」

一夏がオタクによって撃破された後、残りの3人にはオタクの口から事情が説明された。

丁度、修理と改修が済んだダンボールをオタクが受領して学園に帰ってきた時、千冬から一夏の訓練に乱入するように命じられたのだ。

「この前の件の反省文をチャラにすると言われたで御座る」

「また何かしたの？」

シャルロットが尋ねると一夏がバツの悪そうに顔を背け、オタクはただただ笑うだけだった。

「さて、拙者の目的も終わった事で御座るし、作者のやりたい事も大体終わったで御座るなwwww」

「曹長は一体何を言ってるんだ？」

「さあ・・・」

「小田はたまに訳の分からない事を言うんだ。気にするな」

「第三の壁ですわね」

この中で唯一セシリアだけがオタクの言葉の意味を理解出来ていた。

そんな4人の言葉を尻目にしてオタクが次回予告を始める。

「千冬の手を逃れたオタクを待っていたのは、また地獄だった。おふぎけの後に辿り着いた理想と現実。無能作者が書こうとした水着の話。海と空、ラブとコメとをコンクリートミキサーにかけてブチまけた。ここは恐らく伊豆の某所。次回「臨海」。次話もオタクと地獄に付き合ってもらおう」

「今、妙に渋い良い声が出てなかったか？」

「銀〇万〇さんの声だね」

「サ〇ザーですわね」

「ギ〇ン・〇ビだな」

「この前は千冬姉に人間辞めてるって言ったけど、小田も大概、人類を卒業してるな」

しみじみと呟くと一夏の胸中でオタクに対する謎が深まりつつ、次回は臨海学校である。

第三十話

臨海学校の日がやって来た。

朝早くから一年生の生徒達は学園の正面に集合し、現れた大型バスに乗り込んで出発する。

若干眠気の残る一夏は、ふとオタクは何処かと思つて空席の自身の隣から周囲へと視線を見回した。

「？」

しかし、何処を見回してもオタクの姿は無い。

一クラス毎にバスに乗り込んだのだから他のバスにと言う事も考えにくく、一夏は姉に向けて質問を飛ばす。

「千冬姉！小田が居ないぞ？」

「織斑先生と呼べ。・・・アイツなら現地で合流する」

千冬の明快な答えに、今度はシャルロットが反応する。

「如何してタクだけ？」

「アイツの見た目を見れば分かるだろう」

「そんな！幾らタクの見た目が悪くて、千と千尋に出て来そうだからってあんまりです！」

千冬から帰ってきた言葉に対して、シャルロットは抗議の声を上げた。

お前も随分な事を言っていると一夏は思いつつ、まあ、あの身体じゃ乗るところは無いかと納得しながら千冬の言葉に耳を傾けた。

「・・・単純にデカすぎて乗れないだけだ」

「・・・」

そう千冬が静かに返すと、シャルロットはゆっくりと顔を伏せて黙る。

「シャルロット・・・」

「言わないで・・・」

「・・・」

隣に座るラウラの言葉を遮りながら、シャルロットは顔を覆つて耳まで赤くなつた顔を隠した。

「あの豚は自力で移動すると言っている。・・・縛り上げてトランクに詰めようとしたが逃げられてしまった」

「どいつもこいつも酷えと一夏は心の中で思いながら、微睡みの中で瞼を閉じた。」

「あらピエールったら、こんなところでそんなものをまるだしにして」

何時の間にか眠りに着いていた一夏は、聞いた事のある歌声で眼を覚ます。

「・・・ん？」

カラオケマシンで歌っているのがシャルロットだと気が付いた一夏だが、聞いている内にその歌詞のひどさに頭痛がしてきた。

「これ・・・ピエールとカトリーヌか」

良い色だのぶつといだの固いだのと続く、カトリーヌ役のシャルロットとピエール役のラウラの掛け合いは、あくまでもフランスパンを歌った物であり、決して卑猥な物では無い。

仰向けが普通のやつだとかイツたとか、恥ずかしげも無く歌う二人に逆に聞いている方が恥ずかしくなってくるが、あくまでもフランスパンの歌である。

「ねえ・・・この歌って」

「間違いなく・・・」

何人かの耳年増な思春期真っ盛りの生徒が、変な邪推をするが、あくまでもフランスパンの歌である。

そうして歌が終わったかと思うと、次の歌が始まった。

誰も歌わないならとラウラが入れまくった結果、目的地に着くまでの間、ラウラとシャルロットの独壇場になり、最後の曲の勝手に侵略が終わった頃、漸く目的の旅館に着いた。

「・・・なあ、ラウラ」

「ん？如何した嫁」

「あの選曲は・・・」

「アレか？アレはクラリツサに教わった日本の曲だ。それと曹長にも幾つか教わった」

「そうか・・・」

取り敢えず、オタクが来たら顔面を殴っておこう。

そう心に固く誓いつつ、一夏は海に繰り出した。

旅館の直ぐ近くの海は、それはそれは青く輝いていた。

ダイビングアニメが伊豆を舞台にするのが多いのも納得の美しさである。（作者は伊豆には行った事は有りません）

生徒達は皆はしゃいで年相応に騒ぎ、一夏を前にした水着コンテストやビーチバレー大会に発展するが、一向にオタクは現れない。

「・・・遅いな小田」

結局、その後もオタクが姿を見せることは無く。

一夏達は浜を離れて旅館に戻った。

旅館に戻ると風呂と食事だと生徒達はやはり元気にはしゃぐが、そんな彼女達の声を掻き消すようにエンジン音が響いた。

「なに？」

「なんだ？」

一体何事かと思つて一夏達が道路の方に視線を向けると、一代のトラックが現れて旅館の駐車場に入る。

トラックは一度駐車場を回るようにして方向を変えると、大型車両の駐車スペースに一度切り返ししながら綺麗に駐車した。

「デュフフフｗｗｗｗ待たせたな！」

何かと思つて生徒達が集まる中、ドアを開けて運転席から降りて来たのは、一夏の友人のオタクだった。

「小田あ!？」

一夏が驚いて声を上げると、オタクは運転席を閉めて近寄つて来た一夏に向く。

「いやはやｗｗｗｗ遅くなったで御座るｗｗｗｗ」

「いや、遅くなったって・・・てか、このトラックはなんだ？」

「デュフフフｗｗｗｗ実は拙者が昔お世話になった社長に仕事を頼まれ

てしまいましたwwww」

「・・・」

「漸く到着したか豚」

「wwww織斑女史wwwwただ今到着したで御座るwwww」

「遅刻扱いだ馬鹿者」

色々と聞きたい事が有るのだが、取り敢えず一夏はシャルロットとラウラ、セシリアの欧州組が物珍しそうに眺めているトラックの事を聞いた。

「あのトラックは？」

「アレは社長の会社の物で御座るよwwww」

「・・・アレって」

「デュフフフwwww所謂デコトラで御座るwwww」

大きくせり出したキャデラック型のフロントバンパーにやや控え目のバイザー、シツクに決めた黒い車体、全体的な電飾は控え目ながらシートキャリアには大きく朝日を模した様な電工パネルが掲げられている。

大型のウィングコンテナには鮮やかな色使いの歌舞伎絵が描かれ、迫力の有る書体の一番星の文字が躍る。

「社長の車両で御座るよwwww」

三菱扶桑のスーパーグレートをベースに、26L520馬力V型10気筒のエンジンに載せ替えたカスタム車両。

マフラーは態々高い位置に伸ばした煙突形のダブルマフラーで、エンジンの拭かせば迫力満点のサウンドと共に黒煙を高々と噴き上げる。

ありとあらゆる意味で持ち主の社長の趣味が光る逸品だ。

「あの社長は何時也无茶ばかり言うで御座るwwww川越で車両を受領して荷受けが気仙沼で送り先が京都を半日はキツかったで御座るwwww」

グーグルマップの最短距離で17時間掛かる道程である。

「詳しくは分からないけど、凄く無茶そうなのは分かるな・・・」

「弟さんの二人目の出産祝いで入り用と言っていたで御座るwwww元

川越市長の割に金欠なのはあの人らしいで御座るなwww

本人はキャデラック乗りで弟はシルビア乗りで嫁は元ヤン暴走族らしい。

「まあ、合流できて良かったよ・・・俺一人で肩身が狭かったんだ」

「遅れてすまなかつたで御座るwwwそれで、ご飯はのコツエイルで御座るか?」

「丁度飯の時間だよ」

「それは重畳www」

丸半日一切何も口にしていないオタクは、空腹が限界に達しており、さっさと食事にしようと言わんばかりに一夏の肩を抱いて旅館へと向かった。

「はあく食ったで御座るwww」

「・・・スゲえ」

オタクが満足そうに声を上げ、一夏が感嘆の声を上げる。

「・・・まるで豚のようだ」

「はえ〜・・・凄い食欲だったね〜」

一体どれ程胃に流し込んだのか、空になったお櫃の山を見ながらクラスメイトが声を漏らした。

「デュフフwww食べ過ぎたで御座るwww」

さて、食事も済んで風呂にも入って夜も更けたとなれば、やることは一つだけで有る。

「つはあく・・・生き返るなあ〜」

晩酌である。

オタクと千冬は揃って一夏の居なくなつた部屋で晩酌を始めた。

「良い飲みっぷりで御座るwwwさき、もう一杯www」

「すまん」

日頃の疲れや鬱憤が溜まっていたのか、千冬はオタクの進めるままに酌を受けて、ビールを煽る。

かなりペースが速く、何だかんだと三十分ほどで二人とも2Lはビールを胃に流し込んでいる。

並の人間ならば好い加減に酔いが回り始める頃合いである。

「・・・そろそろコイツでは物足りなくなってきたな」

「wwwそれwnwらw良い物があるで御座るwww」

そう言つてオタクが取り出したのが、吞兵衛の友達、ロシア人御用達のウオツカである。

「ささ、グイッとー」

通常はショットグラスで飲む物を、オタクはそのままジョッキに注ぎ始める。

恐ろしいのは千冬も全く止めたりせず注がれるままに受ける。

そうして、千冬のジョッキがウオツカで満たされると、オタクも自分のジョッキにウオツカを注いだ。

一応記すが、間違つてもウオツカはジョッキである飲み物ではありません。

ウオツカを呑むときはショットグラスで楽しく煽りましょう。

「それではwww杯を乾すと書いて！」

「乾杯と読むー！」

本日何度か目の乾杯をしてジョッキの中身を煽る二人は、見事に酔っぱらつて明日訪れる地獄の事など、完全に忘れていた。

そんな二人の飲み会場と化した部屋の扉が引き開けられた。

「www一夏氏www枕投げは終わったで御座るかwww」

「・・・うん？一夏か・・・お前も来い！」

「完全に出来上がつてやがる・・・」

眩きながら、一夏は言われるままに二人の側によつて座つた。

「www一夏氏は何を呑むで御座るかwww？」

「いかなぞ・・・一夏は未成年だ・・・アルコールはいかなぞ・・・」

「それじゃ烏龍茶で」

「www分かつたwwwで御座るwww」

一夏のリクエストに応えて、オタクが茶色い液体の注がれたジョッキを一夏に渡した。

「さあw w w 一気に呑むで御座るw w w」

「・・・？」

何か気になりつつ、一夏はジョッキの飲み物を一気に煽り、中身を三分の一程呑んだ所で咽せて吐き出した。

「グホッ！・・・ガハッ！・・・一体・・・なんだこりや・・・っ！」

「w w w 地元の大学生に教わった烏龍茶で御座るw w w」

「はっはっはっ!!なんだ一夏。茶も飲めないのか!どれ・・・お前は水でも呑んでいろ」

そう言いながら、今度は千冬が一夏に透明の液体の注がれたグラスを差し出した。

「・・・」

千冬から渡されるままにグラスを受け取った一夏は、怪訝な表情でテーブルに置くと、オタクのライターを取り出してコップの口に近づけて火を着けた。

「おい・・・」

水であれば火が着くはずの無いその透明の液体は、あろう事か青白い炎がグラスの口からたっえいる。

「なんで火が着くんだ？」

「w w w 可燃性なんで御座ろうw w w 色は水だから大丈夫で御座るよw w w」

「火が着く時点で大部分がアルコールだ!!お前らは色でしか飲み物が判別できないのか!!」

「w w w」

「ハッハッハッ！」

最早、千冬もキャラ崩壊著しい程にアルコールに溺れてしまっている。

一夏も、先程呑んだ烏龍茶(酒)の所為で酔いが回り、誰も止める物の居なくなつた室内はカオスの権化と化した二人によって混沌の度合いを増して夜が更けていった。

第三十一話

「くあつゝ・・・！」

朝、旅館の心地よい布団から起き出した一夏は大きな欠伸をしながら廊下を歩く。

昨晚のオタクと千冬の呑みに巻き込まれながらも、何とか二日酔いにはならず起きる事が出来た。

眼を覚まして部屋を見回した時の惨状は筆舌にし難く、思わず伯父になるのももう少し先が良いな、などと現実逃避をしていたのだが、取り敢えず制服に着替えて外に出た。

「・・・」

未だボンヤリと思考の定まらない頭で、朝風呂でも浴びようか、そんな事を考えながら歩いていると、視界の端に幼馴染みの姿が写り込む。

「ん？ 箒？」

本人曰くファースト幼馴染みの篠ノ之箒は、庭の一カ所にしゃがみ込んで何かを見詰めている。

一体何かを思いつつ、一夏は箒の側に近寄って声を掛けた。

「おはよう箒・・・何やってんだ？」

「ああ・・・」

気のない返事を返す箒は、一夏に視線の先を見るように促す。

「ん？」

促されるままに一夏がみると、地面からうさぎの耳のような物が生えていた。

「コレって・・・」

「・・・ふんっ」

一夏が何かを言う前に、箒はきびすを返して何処かへと去ってしまふ。

「・・・」

後に残された一夏は、一人地面に埋没しているウサ耳を見詰めて頭を悩ませた。

「如何したのですか？一夏さん」

悩みに悩む一夏に、今度はセシリアが現れて背後から声を掛けた。

「ああ・・・ちよつとな」

何と言って良いのかと一夏が困惑していると、突如として地面が揺れ出した。

「っ!？」

驚いて一夏が飛び退いた瞬間、空から巨大な人參が降って来て、そのまま地面に着弾する。

着地の瞬間には轟音と共に土煙が巻き上がり、一夏もセシリアも何事かと身構えた。

この時点で一夏は大変に嫌な予感がしていて、逃げ出したい気持ちで一杯だった。

そんな一夏の気持ちを無視するように、視界が晴れると人參の一部に亀裂が入り、光と共に何かが飛び出してきた。

「やつはろー！ひっさしぶりだね！いっくん！」

「つつあく・・・」

やはりと言うか何と言うか、完全に自身の予想通りの人物の登場に、一夏は思わず額を抑えながら変な声を出した。

そして、現れた人物をマジマジと見詰めて、一夏は吐き出すように名前を呼ぶ。

「束さん・・・」

「えっ?」

一夏の告げた名前を聞いて、セシリアが驚きを隠さずに声を出した。

今、目の前に居る人物こそ、インフィニット・ストラトスを作り出し、世界に混沌を齎した張本人。

人類史上における希代の天災。

世界一可愛い人物。

永遠の17歳。

白い悪魔。

呼び名は様々あれど、現在は世界的指名手配犯である。

「東博士・・・」

「一体何しに来たんだよ東さん」

驚くセシリアを余所に、一夏は淡々と東に用件を尋ねる。

「ん〜？」

「？」

「いや〜、何となく箒ちゃんとかーちゃんに会いたくなくなったただよ
？」

「・・・相変わらずですね」

「東さんは何時でも東さんだからね〜」

そう言うなり、東はさつきと千冬に会うために旅館の中に入って
く。

「全く・・・」

自分に止められる筈も無いと、一夏は去って行く背中を見送った。

しかし、そこで何か一つ見落としている様な、何か起こりそうな嫌
な予感に見舞われた。

「・・・」

「い、一夏さん」

「ん？ああ、セシリア。如何した？」

「い、いえ・・・何だかとても疲れてしまいましたわ」

セシリアに取って、始めて目の前に現れた東と言う一人の天災は、
直に会話もせず目も合わせていないにも関わらず、全身の気力を奪わ
れる程に何かを感じさせる人物だった。

ただ、セシリアは未だ気が付いて居ないが、東の目にはセシリアは
一切映り込んでおらず、彼女にとっては石ころ程度の存在感しか感じ
ていない。

篠ノ之東と言う人物は自信の興味の有るもの意外にはとことん無
頓着であり、要するに一夏と千冬と箒以外の人物は皆等しく無意味無
価値なのである。

そう言う意味では東は世界一平等な人物と言えるだろう。

「ん？」

ふと、一夏の中に芽生えた違和感の様な物が大きくなる。

何かを見落としている。

それが一体何なのか、それはセシリアに言われて、内心で東の考えや思考をトレースしたときに、より大きく成った。

そして、その末に、一夏は今朝の自分が目を覚ました瞬間から今までの記憶を辿った瞬間、全てのピースがはまり込んだ。

「っ!!」

一夏は走り出した。

東は千冬に会いに来たと言っていた。

東が千冬の現在地を知らない筈は無く、彼女は最短距離で千冬の眠る部屋に向かうだろう。

だが、そこには今、千冬だけが眠って居るのではない。

「不味い!!」

一夏と千冬の宿泊する部屋には、昨日の夜に酔い潰れてそのまま眠ってしまったオタクが居る。

未だ起きずに眠り続けている二人が居る。

その光景を見た瞬間に東が何をするのかは、想像に難くない。

一夏は己の友人の身を護るために一心に走って部屋に向かった。

「東さん!!」

一夏の眼に東の姿が映った。

東は既に二人が眠る部屋の障子戸に手を掛けている。

一か八か、一夏は東に向かって呼び掛けた。

「ん? いっくん? 如何したの?」

「い、いや・・・その」

辛うじて東は一夏の呼び掛けに応じて振り向いた。

何とか一夏は間に合うことが出来たのだ。

「いや、姉さんはまだ寝てるから」

「え〜大丈夫だよ。私とちーちゃんの間だもん。何なら一緒に寝ちやえば良いんだよ」

その千冬が今、別の人物と一緒に寝ている等と、口が裂けても言える筈も無く、一夏は自身の灰色の脳細胞をフル回転させて東を止めようとした。

「お、俺と寝よう!!」

一夏は訳も分からず馬鹿げた事を口走った。

「……もう。しょうが無いな一夏君は」

束は満更でも無い様子だ。

混乱の余りにとんでもない事を口走ったと、後悔した一夏だが、その直後の束から発せられる色香に気圧されて、訂正も何も出来なくなつて身体を硬直させた。

「じゃあ、一夏君も一緒に寝ようか」

当社比で普段よりも80パーセント程湿った声を発する束に、一夏は凶らずも興奮してしまった。

それは、例えるならば思春期突入直後の小学生時代に、隣に住んでいる優しく美人のお姉さんに優しくされて、からかい混じりに一緒にお風呂に入った時などに感じる淡い初恋の時の始めて感じる性的欲求の様な物か、若しくは、幼い頃から一緒に遊び回った同い年の幼馴染みが、高校生くらいになった時に始めて見せる女性らしさを垣間見てしまった瞬間の様な、僅かな背徳感の入り混じった感覚だ。

一夏はシスコンでお姉ちゃん大好きな高校生だが、属性的には姉属性は余り入っていない。

どちらかと言うと、属性として姉が好きと言うよりも、千冬個人に対して思慕と僅かな恋慕を抱いていると言うのが正しい。

それが、ここに来て、垣間見てしまった束の女としての視線と声と雰囲気、完全に呑まれてしまっていた。

「それじゃ……早くしよ?」

最早、一夏には何も出来ない。

ただ、この目の前の魅力的な女性に従うことしか出来ない。

このままでは、この作品の一夏のヒロインが完全に束に決定してしまふ。

このままでは、一夏の青い果実がもぎ取られて他のヒロインズの惨敗が決定してしまう。

コレまでの血で血を洗う一夏争奪戦が、新たに出現した束と言うジョーカーに寄つてひっくり返されてしまふ。

もしも、そうなればヒロインズは第一次世界大戦の後のヴェルサイユ条約を締結した各国代表の様な様相を呈するだろう。

ただ一人勝利を手にした束に敗北した負け犬と成る。

「じゃあ、開けるよ」

そう言つて束が障子に手を掛けた瞬間、扉が内側から開け放たれた。

「・・・おう。一夏氏・・・水を一杯頼めるで御座るか」

オタクが顔を出した。

浴衣が開けた姿はほぼ半裸状態で、ボサボサの髪が何時も以上に乱れて荒み、髭が僅かに伸びている。

真つ青な顔で力無く一夏に水を頼むオタクは、その有様を見るだけで、昨夜の様子が手に取るように知れる物だ。

「なっ・・・」

「小田・・・っ！」

皮肉な事だ。

一夏は自身が助けようとした人物に寄つて助けられ、その結果、当初の目的を達する事が出来なかつたのだ。

「な・・・な、なんで君が・・・」

「・・・？」

目の前に居る女性が誰かも分からないオタクは、疑問符を浮かべながら、取り出したタバコを啜えて火を着けた。

「・・・どちら様で御座ろうか・・・何処かで聞いたような声の気も・・・」

コレは束にも予想が着かなかつた。

何故にこの世で最も大好きな人物の部屋から、この世で最も大嫌いな人物が現れるのか。

余りの出来事に、束も自分の目的を一瞬失念するほどに驚愕した。だが、この後に束は更に驚く事になる。

「んっ・・・もう、朝か・・・」

オタクの後から、今度は千冬までもが顔を覗かせた。

髪は乱れ目は半開きで口に火の着いていないタバコを啜え、乱れた浴衣の胸元に右手を差し入れて帯に掛け、左手で頭を掻いている。

普段の様子からは考えられない程にだらしない姿だ。

「ちー……ちゃん？」

「うん？……束か？」

「な、なんでその男と……？」

「ああ……一夏……水を持って来い……」

千冬は未だに寝惚けているのか、身体が水分を欲するのに忠実に従って一夏に水を持ってくるように求める。

「……っ」

「？」

ただ口を開けて言葉を失っている束の様子に疑問を感じつつ、千冬はタバコの火を探す。

「おい貴様……火を寄越せ」

しかし、浴衣を着ているのにライターなどを持っている筈も無く、仕方なしに一番近くの火元に求めた。

「仕方が無いで御座るな」

「ん……」

「んなっ!？」

オタクと千冬はタバコの先端を合わせて繋げると、器用に千冬のタバコに火を着けた。

「ちーちゃん……何してるの」

「うん？火を着けただけだ……」

と言うところで、漸く頭が覚醒してきた千冬は、何処から火を着けたかを深く考えた。

「……おい」

「なんで御座るか？」

「何故貴様がここに居る」

「……そう言えば」

互いに何故一緒に寝ていたのかと言う当たり前の事に漸く疑問を感じ、千冬の目に何時も通りの陰しさが取り戻された。

「何故貴様がこの部屋で寝ている!!」

火を噴かんばかりに怒りを顕わにする千冬は今の自分の姿なども

一切顧みる事無く、オタクの胸倉を掴んで怒鳴り付けた。

「ち、千冬姉！前！前！」

「ちーちゃん！！前隠して！！」

慌てて千冬の浴衣を直そうと擦る束と一夏だが、そんな事はどうでも良いと言わんばかりに、千冬は更にオタクを締め上げながら持ち上げて怒鳴る。

「またか!?またなのか貴様は!!」

「ちよつと待って!!またって何!?前にも有ったの!?!」

千冬の発した言葉に束が過敏に反応した。

「千冬姉!!良いから着替えて!!」

「織斑先生だ！馬鹿者!!」

「どう言う事なの！ちーちゃん!!前にもって・・・まさか!!」

こつとも騒いでいれば当然の事ながら、周囲にもその音が聞こえるわけで、四人の組んずほぐれつとした騒ぎには何時の間にか野次馬が集まって、その様子を覗っている。

「www」

締め上げられながらも、一番冷静に状況を整理していたオタクは、取り敢えず千冬の方を見ないようにして、束と一夏の声を聞きつつ現実逃避する様に笑った。

「www訳が分からないよwww」

「小田!!現実逃避しないで戻ってきてくれえ!!」

旅館中に一夏の悲痛な叫びが木霊した。

第三十二話

「それで・・・どう言う事なのかな?・・・かな?」

光を無くした目で、束が千冬に詰め寄って尋ねる。

それに対して千冬は、束とは眼を合わせずにそっぽを向いたまま返す。

「別に・・・何でも無い。ただ単に・・・」

「単に?」

「・・・」

千冬は実にバツの悪そうに束からの追求を受ける。

一方のオタクは、一夏からの視線に晒されていた。

「・・・」

「・・・」

「・・・なあ」

「なんで御座るか・・・?」

オタクの頬を汗が伝う。

普段には無い一夏の迫力に、何度となく圧倒してきたオタクが気圧されたのだ。

「なあ・・・小田」

「・・・なんで御座ろうか」

二人の間に緊張が走る。

「小田・・・」

「・・・っ」

「千冬姉を・・・」

余りの緊張感に、オタクのみならず、周囲で見ている生徒達までもが固唾を呑む。

「千冬姉を・・・よろしく頼む」

「ちよっ!」

「一夏あ!!何を言っている!!」

一夏の突然の発言に、束と千冬が直ちに反応して一夏に向いた。しかし、それでも一夏は言葉を続ける。

「千冬姉はこんなんだから……だから、嫁の貰い手が居ないとずっと心配だったんだ」

「一夏あ……!!」

「男っ気は無いし、休みの日は映画見ながらビール飲んでるだけだし……実質、中身はオヤジみたいな感じで……弟として心配なんだ」

「……千冬先生って……そんななんだ」

「……実質オヤジって」

「……幻滅しました……那珂ちゃんのファンを止めます」

一夏のカミングアウトに、周囲の野次馬生徒が口々に呟く。

「っ……」

痛々しい視線に、流石の千冬もたじろいだ。

そんな中で、一夏は更に続けて言う。

「もしかしたら……もしかしたら、将来は千冬姉の世話をして、歳を取っていくのかも知れないって……そう思っていたんだ」

割と悲壮な表情の一夏に対して、千冬も何も言えなくなった。

「でも……小田が千冬姉と結婚してくれたら安心できる。そうしたら。

俺も肩の荷が下りる」

「一夏氏……」

「頼む……！小田。千冬姉を……千冬姉を頼むぞ！」

最早、場を支配するのは東でも千冬でも、或いはオタクでも無い。心からの言葉を吐き出す一夏こそが、今のこの場所の全てを支配していると言っても過言では無かった。

「……」

誰もが一夏の言葉を聞いて、意を唱える事が出来なかった。

ただ1人を除いて。

「……納得いかない」

東は、ただ1人だけ不機嫌そうに一夏の話を聞いていた。

千冬ですら一夏の言葉には何も言えずに黙っていたのに、東だけは、自信の我を通して言い放った。

「幾らいつくんでも、ちーちゃんをそんな豚に任せるとか許せないよ」

「束……」

「束さん……」

「許さないよ……豚にちーちゃんは渡さない。ちーちゃんも……
そして、いっくんも私の物だから。2人ともずっと私の側に居る物だ
から」

束の闇は深く、そして熱い。

正に不退転と言うに相応しい覚悟を持って、束は一夏と千冬の2人
を自身の物であると言う言葉を吐き出した。

その覚悟の重さは、他の者には理解の及ばない者では有ったが、誰
もが束の言葉を必定する事が出来ない。

それ程の迫力を醸し出して、束は言葉を紡いだ。

「いっくんが何て言っても、ちーちゃんは豚には渡さない。その豚
は……いや、どんな物でも私以外はちーちゃんの為にも、いっくん
の為にもならない」

「束……」

「ちーちゃんといっくんは……私が幸せにする」

千冬ですら、束の名を呟く以外には何も言えなかった。

それ程に、束の言葉と、眼と、そして何よりも風格が、彼女の全て
を雄弁に現していた。

「気に入らないで御座るな」

「っ!」

だが、束がしたように、オタクもまた、束の言葉を完全に否定して、
真っ向から向かい合う。

普段の巫山戯た雰囲気を抑えた。

成熟された風格をたたえて、オタクは束を否定する。

「要約すれば、それは自分の玩具を取られたくないと言う……言っ
てしまえば、幼稚な我が儘だな」

「っ!」

「結局の所、お前は徹頭から徹尾まで、自分の事ばかりの、実に身勝手
極まる人間と言う事だ」

「何を……」

「織斑千冬さんを幸せにする？一夏君を幸せにする？……笑わせるな」
オタクは、束を鋭い眼光で射貫いた。

「2人は、お前如きに護られるほど弱くない。お前を頼るほど柔でも無い。お前の方こそ、2人に依存して、2人に頼って……世紀の天才が聞いて呆れる」

「なにを言って……」

「お前はただの大人になれない餓鬼だ！周りが大人になるのを許せない子供だ！そうやって人の脚を引っ張る事しか出来ない。哀れな赤児だ!!」

「っ!!」

束の表情が歪む。

「わ、私に向かつて……この天才の束さんに向かつて……」

「天才は確かに偉大な発明をしてきた。だが、人類が天才を必要とした事は無い！天才と言うだけで全てが許された事も無ければ、凡才と言う事で誹られる事も無い！ただの独り善がりな、独りぼっちのお前が人類に認められる事は永劫に有り得はしない!!」

「っ!!」

きっぱりと言い放たれたオタクの言葉に、束は形相で睨みながら、その目を暗く澱ませる。

だが、オタクはそんな束を憐れみの情を持つて見詰め、そのオタクの眼が束には殊更に気に触り、不倶戴天の天敵を睨んで黙る。

「人は何れ成長し、大人になる。お前にも何時か、その時が来る。車の後ろの席で眠るのでは無い……後の誰かを按じながらハンドルを握る時が来る。その時が来るまで、人の邪魔をしてはいけない」

「……っ」

諭すようなオタクの言葉は、しかし、束の耳には痛く、煩わしい説教を聞き入れるほどの余裕は彼女には無かった。

「……束さんの邪魔をするのなら……何時か必ず……っ!!」

怨嗟の言葉を呟いて、束は身を翻して消えていった。

野次馬の誰もが彼女を止める事は無く、一夏も千冬もオタクも、そして、箒でさえも、無言のまま、去りゆく背中を見送った。

「・・・一夏氏」

「何だ？」

オタクは束の背を見送ってから、今度は一夏に向いた。

「拙者と千冬女史とは、ただの知人友人の範疇で御座るよwww恐らく、今生で二つの糸が交わり合う事はないで御座る」

「・・・」

「きつと・・・拙者の糸は、何処まで行っても、ただ一本だけが伸びるだけで御座るwwwそこに交差する糸はあれど、紡がれる糸はないで御座るよwww」

自分の人生は、ただ自分だけの物になる。

この先も独り生きていく。

そう言つて、オタクは寂しく笑った。

「さあwww朝食で御座るwww旅館の朝食は楽しみで御座るwww」

普段通りの筈のオタクの言動が、何処か寂しげに思えてならない一夏だったが、その事を指摘する事は出来なかった。

「・・・そうだな。楽しみだな。今日のメシは何だろうな」

一夏には、この年上の友人に掛ける言葉は無い。

励ます事も叱咤する事も出来ずに笑って朝食の話をするしか無かった。

それは、一夏には未だオタクの過去を知る事が出来ず、またオタクの未来に干渉できる様な経験も無いからだ。

「・・・」

何時の日か、この計り知れない友人と、真の意味で通じ合い、無二の仲となれる日を祈り夢想する事しか、今は出来ない。

「・・・何時か」

「・・・」

束は、何処かの場所で独り膝を抱えていた。

オタクに言われた言葉を反芻して、暗い瞳でせせら笑って、呟いた。
「許さないよ・・・小田宅」

束の脳裏に、オタクの名前が刻み込まれた。

自分の愛する物しか刻み込まれて来なかった束の頭脳に、記憶の中に、始めてそれ以外の人名が刻まれたのだ。

愛による物では無い。

憎悪を代名する存在が、始めて彼女の中に染みこんで定着した。

「小田宅・・・!!」

初めての事だ。

彼女の感情に、愛と楽と意外の感情の表現が現れたのは、初めての事だ。

二つの感情以外の全てを無で表現していた彼女に、始めて怒りと言う感情が湧き、オタクの存在は、その言葉は、凶らずも彼女をほんの僅かに人間に近づけた。

オタクは、史上で唯一の篠ノ之束と言う天災の天敵と言う存在に成ったのだ。

「殺してやる・・・」

束は笑った。

笑いながら心中を言葉にした。

「完膚なきまでに・・・完全に殺して・・・滅ぼして・・・消し去ってやる」

それは甘美な響きで、脳髓が痺れる様な快楽の感覚だった。

初めての憎悪の感情は、束が今までに感じた事の無い甘い刺激となつて全身を巡り、神経と筋肉が痙攣して頬が緩んだ。

「ふふふ・・・」

自然と笑いがこぼれ、だらしなく開いた口から唾液が流れ、目尻に涙が溜まる。

「ハハハはハハハはアハハハはハハハはハハハはは!!」

最早、束は戻れない。

初めての快感に頭が支配され、身体が忘れられぬオーガズムをひたすらに求め続けて、オタクに対する想いを募らせた。

第三十三話

「www」

夏真つ盛りと言う風な青空と太陽の下で、オタクは海を眺めて一人笑う。

「・・・何やってんだ俺は」

誰も居ないのにキャラを作り続ける事に、虚しさを感じたオタクが独り言ちる。

何となく、ここ最近ペースが速くなってきたタバコでも嘔かそうかと懐に手を差し伸べるが、そこで気が付いて動きを止める。

「置いてきたんだっただ・・・」

別に吸ってても美味しいもんでも無いのだが、ただ何となく口許が寂しく感じて、何となく手元に無い事がムカついてストレスになる。

スツカリとニコチン中毒になった物だと、自身の無意識の思考を、オタクは笑った。

「www・・・はあ」

太陽が照り付けて、肌にジワリと汗の雫が浮いて出てくる。

時折そよぐ海風が、濡れた肌を撫で付けて、その感覚が心地良く身体のほてりを冷ます。

「・・・」

何をするでも無く、ただただ手持ち無沙汰なオタクは暇を持て余していた。

「・・・はあ」

今更、十も年下の学生達に混じってはしゃいで回るほど子供には成れず、かと言って、ニヒルに大人ぶった様な態度で青春の風景を眺める様な余裕も無い。

この臨海学校でやるべき事が何一つ無いオタクは、ただただ暇を持て余し続けた。

「・・・」

こうして一人になって黄昏れていると、オタクの脳は勝手に過去の事を回想し始める。

学園に入学した事、夜間の高校に入り直そうとした事、幾つもの仕事をこなしてきた事、自衛官を辞した事、同期と必死になって三年間取り組んでいた事、どれか一つを切り取っても今のオタクにはなり得ない数々の思い出が、オタクの脳裏を巡る。

「よう．．．久し振りだな」

不意にオタクは背後から声を掛けられた。

声の主が誰なのかは、オタクは直ぐに分かった。

「．．．」

だからこそ、オタクは振り向かず、声の主の方を向こうとはしない。

「おい。無視すんなよ」

「．．．」

再度、声を掛けられてもオタクは応じない。

そうしていると声の主がオタクの直ぐ側まで近寄ってきて無理矢理に振り向かせた。

「久し振りだな小田」

「．．．ああ、久し振りだ．．．平内」

平内とオタクに呼ばれた男は、中肉中背で肌は程良く日焼けしていて、髪型は短く刈り込まれたスポーツ刈りだ。

「この間は随分と無茶苦茶をしてくれたな」

「．．．フランスの事か？」

「当然だろ？．．．あの件は中々に事後の後片付けが手間だった」

「元々はお前らに言われた事だ．．．自業自得だろ」

「俺としては、もう少し穏便なのを期待していたんだがな」

海を眺めたままで、二人は言葉を交わす。

雰囲気から、オタクと平内が旧知の仲である事は間違いの無い事なのだが、オタクの平内に対する言葉には、端々に棘があった。

「．．．で、何のようだ？」

オタクが鋭い声色で平内に問い掛ける。

「．．．何の事だ？俺はただ．．．」

「友達に会いに来たなんて、お前らしくも無い気色の悪い事は言うな

よ」

「・・・まあ、そうだな」

二人の間に沈黙が流れる。

遠くからはオタクの同級生達の笑い声が届いてくる。

「今・・・この海の向こうにはジェラルド・R・フォードが居る」

「?・・・アメリカ海軍の空母か・・・それが如何した?」

そこまで口にしたオタクは、何位かに気が付いて更に言う。

「ちよつと待て・・・ジェラルドは第三艦隊の所属じゃ無かったか?」

「ああ、序でに言えばロナルドは横須賀に停泊中だ」

航空母艦ジェラルド・R・フォードの現在の所属は第三艦隊であり、担当地域は東太平洋及び北太平洋であり、カリフォルニア州サンディアゴを母港としている。

第三艦隊の空母は第七艦隊や第五艦隊などの空母とローテーションで交代して任務に就くのだが、現在の所、ロナルド・レーガンが第七艦隊での任務に就いたままであり、通常、余程の事が無い限りは一つの任務地域に二隻の空母が存在することは無い。

「・・・何が起こってる」

オタクが問い詰めるように平内に剣呑な視線を向けた。

「この前・・・ニュースで見たかも知れないが、アメリカの大統領が北朝鮮と交渉に入ると言ってなかったか?」

「・・・ああ、言ってたな。今度で何回目だ?」

「4回目だ」

「それが何の関係がある」

「今、あの大統領の支持率は過去最低だそうだ」

「それで?」

「・・・ここで北朝鮮との融和、南北朝鮮戦争の終結、核兵器の放棄の確約、この辺りを取り付けられたとしたら?」

「・・・危機を脱せられるてことか?だが、それには」

「交渉材料が足りないか?」

オタクは無言で頷いて答える。

普通に考えれば当たり前前の事であり、コレが本当に普通のことなら

ば、話はそれだけで終わる。

大統領がまた無駄な事をやらかして世間をザワつかせ、そうして選挙で負ける。

ただそれだけの筈だ。

しかし、ここで平内はとんでもない事を口にする。

「じゃあ、もしも材料があるとしたら？」

「どう言う事だ？」

「あの大統領は遂にジョーカーを引き当てたんだよ」

そう言うと、平内は懐からレジユメを取り出して手渡した。

「・・・良いのか？」

「ああ、お前も大いに関わる事だ」

「・・・」

気になる事を言われたオタクは、不承不承と中身を確認する。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「どうだ？」

「・・・コレは本当の事なのか？」

「そう言うと思ったよ」

レジユメの内容は三枚の書類と一枚の写真だった。

写真に移っていたのは、アメリカ陸軍の高官と北朝鮮の高官が握手をしている瞬間だった。

「アメリカは秘密裏に北朝鮮に対して支援を行い。その見返りとして、北朝鮮の核開発の表向きの停止と廃棄を行う」

「・・・」

「その後、アメリカと北朝鮮は平和条約を締結し、テレビの生放送で平壤での署名と握手をする様子を放送する・・・その後は、段階的に北朝鮮に対する制裁を解除して行き、大統領は支持率を回復する。そう言う流れだそうだ」

「・・・本気なのか」

「ああ・・・少なくとも大統領閣下殿はそのつもりらしい」

「信じられん……」

「そのレジユメ……もつと良く見ると良いぞ。特に一番最後の奴」
オタクは平内の言葉に従ってレジユメの最後のページに目を走らせる。

「コレは……目録か？」

目録の内容は、重油、軽油、ガソリン、鉄、レアメタル等の戦略物資に始まり、その他にも米や麦などの穀類、肉類、野菜、砂糖、珈琲等の食糧や嗜好品、更にはウランやプルトニウムなどの核物質などが羅列していた。

「……コレは！」

「気が付いたか」

「ISコア……？」

「大盤振る舞いで二つも贈るそうだ」

オタクの全身から汗が噴き出る。

暑さの所為では無い。

身体が震えるほどの寒気に襲われながら、オタクは滝の様に汗を流した。

「ど、何処から」

何処からコアを出すのか。

その問い掛けに、平内が口を開く。

「お前……学園の襲撃事件の後で、コアがどうなったか分かるか？」

そう言われては、オタクは全ての察しが付いてしまう。

「まさか……」

「ナンバー外の存在しないコア……その利用価値は計り知れない物だ。それをあの国が見逃す訳無いだろ？」

「……」

「……先月の初め、コアの保管されていた研究所が襲撃を受けた」

「……」

「現地で警備に付いていたCRRは応戦したが、最終的にはコア二つを奪取された」

「怪我人は？」

「軽傷者が数名だけで、死者重傷者は一人も居ない」

実に怪しいとしか言いようのない死傷者数に加えて、更に平内は続ける。

「襲撃は物の30分ほどで終了。現地の警備部隊は現状報告のみで、その後の追跡等は行わず、何一つ証拠も何も見付からないと言う事で、早々に捜査は終了。日本政府はこの事については何の発表も無く、直後に日本領海から一隻の不審な大型の潜水艦が離脱した」

「・・・答えはもう出てる様なもんだろ」

「まあな」

二人は暫し無言で浜辺の騒ぎ声を聞く。

「空母にコアを？」

「そう睨んでる」

簡潔な質問に対する簡潔な答え。

オタクは頭を抱えたい衝動に駆られた。

そんなオタクに、平内は更に話を続ける。

「コレは大統領とその身内の国防長官と國務長官の三人で決めた事らしいが、当然、CIAは黙っちゃいない」

「動くのか？」

「シナリオは決まってる」

アメリカ海軍の空母でコアを輸送、その名目は大規模な軍事演習となる。

この演習期間中に極秘に北朝鮮高官に合流し、コア二つを受け渡す。

CIAはこの軍主導の動きを妨害するために内部の協力を通じて極秘作戦を展開する。

「内容は？」

「演習中のアメリカ海軍空母が攻撃され、演習は中止となり、どさくさでコアは紛失、この不祥事を理由として何人かのお偉いさんの首が飛ぶって寸法だそうだ」

「何処が担当する」

「第七艦隊及び海兵隊がCIAに協力する」

「・・・」

「作戦は間違はなく成功するだろう。あの大統領は嫌われ者だし。国民はそろそろ新しい大統領を欲しているからな」

「なんでこんなに詳しいんだ？」

「ウチも案外いい線行ってるって事だよ」

そう言つて笑う平内に対してオタクは冷たい視線で見詰める。

「小金井が何で俺にそんな色々と情報を出す」

「そりゃ、お前に仕事があるかも知れないからだよ」

「と言うと？」

「篠ノ之束」

「っ！」

「俺らが知らないとでも？」

「・・・いや、予想以上にやるみたいだな」

「暗部とか言うアマチュアとは違うよ・・・俺達としては、あの天災が何かしでかすと睨んでいる」

「そう思うか？」

「・・・ほれ」

平内が再び懐からレジユメを取り出して手渡した。

オタクはそれを受け取つて目を通す。

「コレは？」

「情報本部の掴んだ情報だ。コレによると最近米海軍の最新鋭試験ⅠSに幾つかのハッキングが試みられた形跡がある」

「シルバリオ・ゴスペル・・・銀色の福音か」

「カンパニーはこのハッキングを利用して、ジェラルド襲撃をこのゴスペルの所為にするつもりだ」

オタクは、無言で水平線に視線を向ける。

「操縦者はどうなる」

「・・・不幸な事件だ」

暗に操縦者の身体生命は勘定に入っていないと言われて、オタクは眉をひそめる。

「優秀で美しいテストパイロットの死亡、暴かれる陰謀・・・彼女の家

族に贈られる名誉勲章。世論は急速に大統領の退任を求める方向に動くだろう」

まるで何処かで聞いた事のある様な、綺麗な陰謀の裏話。

胸くその悪い話を聞かされたオタクは、気を紛らわせようと胸元を探ってタバコを探す。

しかし、そこにタバコは無い。

虚しい感じつつ、オタクはダラリと手を下げる。

「幾ら天災でもスタンドアローンの機体には干渉は出来ないだろう。既にゴスペルにはカンパニーの職員からのコンタクトがあつた筈だ」

「・・・こんな事が許されて良いのか」

「・・・コレが国を護るって事なんだろ・・・多分な」

オタクの呟きに答えた平内の表情は、冷たくも何処か悲壮で苦しげな物だった。

「今から・・・」

「？」

「日本政府のとある筋から I S 学園に要請が出される。暴走中の I S の阻止、及び撃墜の要請だ」

「それは・・・」

「勿論、コレでやられるとは誰も考えていない。暴走中の I S は学園生徒の阻止を振り切り、日本近海を航行中の空母、ジェラルド・R・フォードに攻撃、最終的には I S は海上に墜落し、パイロットは遺体となって発見される」

「・・・」

「お前は如何する？」

「・・・本当に意地の悪い。最低のクソ野郎だお前は」

「ありがとう」

平内はそう言い返してオタクから離れていく。

そして、オタクが海に目を向けると紅白の二機が水平線の彼方へ向けて飛び出していった。

人生で最大の岐路に立たされたオタクは、ただ黙って自分の愛機を呼び出した。

第三十四話

オタクの愛機であるダンボールは、元々第一世代の技術実証機と言う側面を持って開発された機体だ。

その技術は現在において使用される自衛隊の装備に生かされている。

非常に強固な複合装甲と単純な平面系を貼り合わせた構造、奇をてらった様な無駄もデザイン性も一切を排除した実に自衛隊らしい外観となっているが、一番自衛隊らしい部分としては、その助長性だろう。

非常に大きく取られた助長性は、後発の装備資機材の導入にも問題なく対応しており、それ故に、オタクは学園に来てから数々の装備を換装して戦ってきた。

だが、それでもダンボールは第一世代なのだ。

「一夏っ!!」

ダンボールは御世辞にも高機動とは言い難い機体だ。

幾ら直ぐに追い掛けたと言えども、学園最速の白式には追い付くことは出来なかった。

そして、漸くオタクが現場に到着したとき、そこでは紅に身を包む箒が悲痛な悲鳴を上げて、白に染まる一夏が黒煙を噴いて墜ちていく瞬間だった。

「っ!!」

オタクは一挙に加速した。

有らん限りの出力を振り絞って、墜ちる一夏に追い付いた。

「一夏!!」

海面に叩きつけられる寸前、オタクは何とか間に合って一夏と白式を引き上げる事に成功する。

そして、オタクは一夏に向かって呼び掛ける。

だが、一夏からの反応は何も返らず、力無くグツタリとしているだけだ。

「っ!!篠ノ之!!」

「イヤアアアアアアアアアア!!」

篠ノ之箒は、最悪を想像した。

それは、一瞬で箒の脳裏を駆け巡り、全ての思考がその一点に染まってしまう。

その瞬間、箒は思考も行動も放棄してしまった。

「クソツ!!」

吐き捨てながら、オタクは一夏を担いだ状態で箒に近寄る。

だが、この時はオタクも気が動転していて、彼らしくないミスを犯していた。

「・・・」

敵はまだ去ってはいない。

彼等はまだ戦場に居る。

「篠ノ之箒!!確り・・・!!」

オタクの言葉は福音によって掻き消された。

その死を告げる福音は強い殺意を込めて羽となって殺到する。

それは、正に墮落した人類に裁きを下す天使その物だった。

「っ!!篠ノ之!!」

オタクは、一夏を担いだ状態でありながら、見事な操作技術でシルバー・ベルでの攻撃を掻い潜る事が出来た。

だが、完全に動きを止めていた箒が、攻撃を躲すことなど出来るはずも無い。

ただ、幸運だった事と言えば、それは箒の纏う機体が非常に高性能であった事と、不自然なまでに攻撃の密度が薄かった事だろう。

結果として、箒は数発が掠めただけで事なきを得ており、その掠めた衝撃で気を取り直した。

「っ!!一夏!!」

「一夏は無事だ!!まだ死んでない!!」

我に返った箒は直ぐさま一夏とオタクの側に寄った。

「一夏！一夏！！」

「落ち着け！！」

気を取り直して尚、箒は錯乱して一心に一夏を求め続ける。

「このっ！！」

オタクは最後の手段に出た。

余りにも錯乱して仕様が無い箒を、右脚で蹴り付けて強引に静かにさせる。

「黙れ！！一夏はまだ死んでいない！！この先はお前次第だ！！」

「っ！！」

「良く聞け。一夏を助けたければ先ずは冷静になれ」

「冷静に……」

「そうだ……機体のダメージを把握しろ」

「紅椿は……問題ない」

「なら、此奴を引き取ってくれ」

箒の機体、紅椿に異常が無いと聞いて、オタクは直ぐさま一夏と白式を押し付ける。

「直ぐに撤退しろ」

「何っ!？」

「無駄な問答は必要ない。今すぐに一夏を連れて撤退しろ。手遅れになる前にだ」

「……!」

箒は、恐らくは今の今までオタクの事を侮っていただろう。

確かに一度戦った時は箒は負けはしたが、それでも箒はオタクの事を侮っていた。

それは実力云々では無く、容姿や、普段の生活態度などを見て、だらしない男らしくない適当な人間だろうと見下していたのだ。

ISの勝負で無ければ負けはしない。

あの勝負は実力では無い。

卑怯な事をしなければ勝てないのなら、それ程の実力では無い。

そう言う風に思っていた。

だが、この瞬間、オタクの真剣で剣呑な雰囲気と言葉に、箒はコレ

まで悔っていた男に完全に気圧されて、従うと言う事意外の選択肢を
思い浮かべる事が出来なかった。

「早く行け!!」

「っ!!」

箒はオタクの櫓に従った。

オタクに背を向けて最速で飛び去った。

そして、後にはオタクと、シルバリオ・ゴスペルだけが残された。

「・・・」

ゴスペルは身動き一つ取らずにオタクと箒の遣り取りを眺めてい
た。

「・・・おい」

「・・・」

「コレはパイロットに向けて言う事じゃないと断っておく。俺がコレ
から言うのは、そのセンサーの向こうでニタニタしてるクソウサギに
対してだ」

「・・・」

「・・・その内ぶっ殺してやるよ。見てろよ。人間の意地と今生を見せ
てやるよ」

「・・・」

なんの反応も返ってこない。

その事こそが、篠ノ之束がオタクの言葉を聞いていたと言う証拠だ
とオタクは確信する。

「ゴスペルのアビエーターさん・・・あく日本語じゃ通じないか・・・」

「・・・」

『私は日本国の自衛隊に所属いたしております。貴官におかれまして
は、この度は大変に遺憾な事と存じ上げ、お悔やみを申し上げます』
「・・・!」

『残念ながら、小官には貴官をお助けいたします能力は無く、我が身の
無力を呪う次第で御座いますが、ただ。一心に、全力を傾けて、任務
を遂行いたします』

「・・・」

『任務と言えば、我が自衛隊の最上の使命は人名の救助に他なりません。どうか、貴官の無事をお祈りいたします』

そう言つてオタクは装備を展開する。

右手にガトリングを、左手には剣を取り出してゴスペルに相対する。

さつきはあんな事を言っていたが、オタクには、全く勝つ自信というのは無かった。

「・・・」

「・・・」

恐らく、オタクは逃げることは出来なかつただろう。

箒と一夏の撤退の時間を稼ぐと言う事もあるが、何よりも束が逃げるのを許さなかつた。

実の所、束はアメリカと日本の思惑を看破していた。

そして、現時点でシルバリオ・ゴスペルの完全な掌握にも成功している。

それはオタクも気が付いている事で、オタクは今この瞬間に、唯一、政府の思惑を達せられる立場にいた。

オタクは逃げる事が出来ない。

何故ならば、オタクは政府に属す人間で、旧友から聞かされた話は、完全に母国に対して利になる事だったからだ。

「www草しかwww生えねえwww」

そして、オタクは飛び出した。

箒の向かったのは逆の方に飛び出した。

その背中に甕のようなゴスペルを引き連れたまま。

「・・・」

箒は無事に帰還出来た。

近くの病院の駐車場に直に着地して一夏を病院に預け、そして直ぐ

さま向かってきた千冬に全ての報告を済ませた。

報告は淡々としていて、それを受けた千冬も表情一つ崩さずに最後まで聞いて去って行った。

「……っー」

箒に掛けられる言葉は、どれもこれもが優しく温かい言葉で、その事が一層に箒を苦しめる。

いつそ罵ってくれれば、詰ってくれれば、責めてくれれば、どれ程良い事か、そう思いながら箒は静かに涙を流す。

「……まだここに居たか」

千冬が箒に声を掛けた。

「一夏は山は越えたようだ……後は安静にしていれば大丈夫だろう」

「……」

「……お前の考えている事は分かる。だが、私はお前の求めている言葉をくれてやるつもりは無い」

「っ!？」

箒は、千冬 of 言葉を聞いて驚いて顔を上げる。

しかし、箒は直ぐに顔を下げて俯いた。

そんな箒に千冬が更に声を掛ける。

「どうせ、お前は責められたい。罵られたいと思っているのだろうが……私はそんな事はせんぞ」

「……何故、ですか？」

箒は尋ねた。

それに対して千冬は直ぐに答える。

「お前が許せないからだ」

そう言われて、箒は千冬の顔を見上げた。

「……」

千冬の顔は普段通りの仏頂面だった。

普段通りの、きわめて平常の表情だった。

だが、箒には別な風に見える。

まるでなんの感情も無い仮面を見ている様な表情で、その眼の奥の怒りを必死に押し止めている様に見えた。

否、それはそう見えたのでは無く、間違いなくそうだったのだ。

「……」

「……」

千冬は間違いなく怒りを覚えていた。

この世に唯一存在する自身の肉親を危機にさらされて、千冬はコレまでに無い程に怒っていたのだ。

だが、それでもその怒りを身のうちに留めておくのは、彼女が教師であり大人だからこそだろう。

千冬に取って、一夏は弟であり生徒であるが、箒もまた自身に取っての生徒であり、古くからの友人の妹であるのだ。

千冬は、間違いなく怒りを覚えながら、自身の立場と、箒との関係から怒りに身を任せるわけには行かなかった。

「……ここで、お前を罵倒してみて、これ以上甘やかせる程、私は甘くは無いぞ。篠ノ之箒」

「……」

「ここで立ち上がるか……それともそこに寝転がったままで居るか……そこが分かれ目だ」

「……」

そう言って千冬は箒に背を向けた。

そのまま去るのかと箒が思うっていると、千冬が何かを口にすする。

「……あの豚だが」

「……」

「まだ、帰ってきていない」

「えっ!？」

「反応も何も無い」

「……それは」

「最悪も想定した方が良さだろうな……まあ、あの豚に限っては有り得んだろうな」

それだけ言っていると今度は千冬は立ち去った。

「……」

オタクが戻らないと聞いて、箒は直ぐに死を思い浮かべた。

それに対して千冬は問題は無いだろうと言い切った。

何故、その様に思えたのか、箒にはそれが気になった。

そして、顔を上げたままで惚けていると、騒がしい足音が近づいてきた。

「アンター！こんな所に居たの!？」

「・・・凰」

「ちよつと来なさい！」

鈴は強引に箒を立たせた。

「ちよつ！なんだ!!」

「アンタも手伝いなさい」

「何を！」

箒が声を上げると、鈴は一旦脚を止めて振り向くと、箒の胸倉を掴んで言った。

「一夏の敵討ちよ!!文句あんの!!？」

第三十五話

「状況を説明する」

鈴に連れられた筈が砂浜に着くと、そこでは既にラウラとシャルロット、セシリアが待つており、全員が揃ったのを確認してラウラが口を開いた。

「我が軍の得た情報によれば、目標、シルバリオ・ゴスペルは現在、伊豆半島沖合の日本の経済水域内に浮遊中だ」

「浮遊？移動はしていないのか？」

「詳しい理由は不明だが、ゴスペルは確かに静止している」

当初、筈達が伝えられていた情報ではゴスペルは日本本土に向けて移動中だった筈なのだが、現在は停止していると聞いて、全員が不可解に思う。

ラウラ自身も何か腑に落ちない事を抱えつつも、更に情報を共有するため言葉が続ける。

「ゴスペルが現在の位置に着いたのは今から二時間前の事だが、その前に激しい戦闘の反応が感知された」

「……」

「恐らくは曹長との戦闘だろうが……気になる情報が入っている」

「気になる情報？」

シャルロットが首を傾げてラウラに尋ねた。

「……確定情報では無いが、当該の海域にアメリカの空母が接近していたと言う情報が在る」

「アメリカの空母……まさか」

セシリアは何かに気が付いたように呟く。

そのセシリアの反応を見て、ラウラも更に続ける。

「当局では、この空母が最新鋭のジェラルド・R・フォードでは無いかと見ている」

「やはりそうですの？」

「確かな事は言えない」

ラウラが付け加えると、セシリアが口を開いて自分の情報を提供し

始める。

「・・・コレはオフレコですが・・・本国から米国内での動きが伝えられてましたわ」

「情報だと?」

「・・・アメリカが北朝鮮との融和を図っている。その交渉の手土産に I S のコアを提供すると言う情報が御座います」

このセシリアの話に全員が驚愕を顕わにする。

それに対して、セシリアが更に続けた。

「余り詳しい事は分かりませんが、S I S は今回の事を N S A によるものと断定し、C I A と協力する旨を通達、状況に応じて S B S の I S 対応班に出動を掛けるとわたくしの所にも情報が来ていましたの」

「・・・その後は?」

「それ以上はわかりませんわ・・・ただ」

「大使館筋の情報で、横須賀のロナルド・レーガンが出港したと言う情報と、厚木、岩国基地から航空隊の離陸も確認されております」

厚木基地、岩国基地は第七艦隊の所属航空団、第五空母航空団のベースであり、レーガンの出港と両基地の航空隊の出撃は、ともすれば戦闘態勢とも取られる。

「離陸した部隊の詳しい規模は分かりませんが、随分慌ただしいと言う事は分かっていますわ」

彼女達も馬鹿では無いし、ずぶの素人でも無い。

何が起きているのと言う確信に迫る様な事までは分からないにしても、何かが起きていると言う事は分かるし、それに関与していく事に成る予感と言うのもしていた。

「じゃあ、次はアタシの番ね」

そう言うて次に口を開いたのは鈴だった。

「アタシの所にはあんまり話は来てないけど」

そう前置きした上で、話を始める。

「コレはウチの党の軍からなんだけど、航空自衛隊の活動に不自然な部分が出ているって言われたわ」

「不自然?」

箒が首を傾げた。

この中で唯一、軍や政府との関わりの薄い箒には、特になんの情報も降りていなかったが、それでも自国の武装組織の事となれば興味が惹かれるのは当たり前前の事だ。

その自分の国の国防組織に不自然な動きが在れば尚更だった。

「ゴスペルの事は軍でもある程度は掴んでいるわ。ただ、それに対して航空自衛隊がなんのアクションも起こしていないのが不自然って話よ」

鈴の言う事も尤もだ。

世界屈指、先進国でもトップレベルの訓練と装備を兼ね備え、年間飛行時間においても相当な物を持った航空自衛隊。

その恐ろしさを最も肌身に感じているであろう中国の、その筋の間は、今回の一件で自衛隊がなんのリアクションを見せない事に不信感を募らせている。

「普通は自分の国に不審な飛行体が近づいてるって成ったら、スクランブルがすつ飛んでくのが当たり前前の筈なのに、よりにもよって自衛隊が何もしないなんて、考えられないわよね」

「・・・確かに不自然だな」

「ですわね」

そもそも、学生風情に対応の依頼が出る事が一番不自然な事だった。

通常なら、間違いなく航空自衛隊のスクランブル機が直ちに飛んでいく自体にも関わらず、学生に対応の依頼を出した上に、自衛隊が何もしないというのは、余りにも可笑しい状況だ。

幾ら相手がISとは言え、それでも航空自衛隊が何もしないなど有り得ない。

彼等は例え勝ち目のない状況であっても、それが己の職務ならば全力で任務に臨む。

例え、相手が巨大な破壊神だろうと、光の巨人だろうと、何が相手であろうとも全力で任務を遂行する。

その自衛隊が何もしないと言うのは、軍事音痴気味な筈でも腑に落ちない事だ。

「で、ここからはもう少し突っ込んだ・・・込み入った話なんだけど」
鈴は更に前置きして話す。

「韓国軍からの提供情報で、海上自衛隊の方で動きが活発になってい
るって言うのよ」

「海上自衛隊？」

鈴は一度頷いてから、更に話を続けた。

「呉の港から護衛艦かがと護衛艦隊の出港が確認されたの」
「かが？」

「そう。それと、新田原基地から多数のF-35の離陸も確認されて
いるのも付け加えておくわね」

「それって・・・」

一番に気が付いたのはシャルロットだった。

シャルロットの反応を見て、鈴は静かに言う。

「・・・ウチの国のさる機関は以前から海上自衛隊の能力について既に
空母の運用能力があると見なしていて・・・一時期に騒がれていたH
DDの空母化はただの憶測では無いと判断していたの」

「それは・・・わたくしの国でもある程度は予想はしていましたわ・・・
でも」

「確証が得られない。少なくとも今まではな」

横須賀の第七艦隊の出撃、次いで第四護衛隊群の出港、各航空基地
からの部隊の離陸、余りにもタイミングが合いすぎた。

「・・・」

実は彼女達の下に齎されていない情報として、この時、三沢、松島
の航空自衛隊基地でも動きがあった。

三沢基地所属の航空隊所属パイロットに緊急の招集が掛けられ、ス
克蘭ブルを除く部隊に出撃の準備が言い渡されていた。

松島では救難団の出動準備と、小松から部隊が一時的に移動してき
て準備を進めている。

今回、自衛隊はゴスペルに対して全力での対処を選択しており、こ

これは白騎士事件へのリベンジとも言えた。

「タクはどうなったの？」

シャルロットが言葉を発した。

一夏と箒の聞きに現れた友人の安否を按じて尋ねたのだが、ラウラから齎された言葉は、決して芳しいものではない。

「・・・曹長は、行方不明だ」

「・・・」

「何故、あの場に曹長がいたのかも気になるところだが、分かっているのは曹長がゴスペルと戦闘を開始した後、約4時間に渡って激しい戦闘が繰り広げられた事と、曹長がゴスペルを日本から引き離そうと動いていた事だけだ」

「・・・そう」

「この辺りの自衛隊の動きは全く掴めん。この国の諜報も侮れない物だ」

オタクは安否不明、一夏は意識不明、状況は詳細不明、何もかもが分からない事ばかりだった。

「作戦は」

暗雲立ち込める中、箒が口を開いて尋ねる。

「国や他の動きはどうでも良い。一番はどうやって一夏の仇を取るか・・・それだけだ」

箒の言葉に、全員が同意を示して頷いた。

彼女達の知られざる作戦は、こうして始まった。

時は遡って、一夏が箒によって病院に運び込まれたその時、オタクは直ぐ後にゴスペルを引き連れた状態でジェラルド・R・フォード率いる空母打撃群の真っ只中に突っ込んだ。

「Foooooooooooo!!! nice landing!!!」

空母の甲板のど真ん中に着艦しながら、オタクは何処かの大統領の様に叫んだ。

着艦された方の空母は溜まったものではなく、耐熱甲板の表面をガリガリと削られた挙げ句、直後にゴスペルによる多数のエネルギー弾が着弾する。

「H A H A H A!!! Sweet Baby!!!」

20を優に超えて殺到する殺意の塊を、オタクは事もなさげに躲しながら物言わぬAIに向かって挑発する。

内心では冷や汗物のオタクは、せめて表面上は何時も通りにと思っ
て、必死に顔色を隠していたのだ。

「ハッ!!穴あきチーズにしてやるよ!!」

そう言ってオタクは頭上のゴスペルにガトリングの銃口を向ける。

ガトリングは、オタクの意志に従って数百の鉛球を吐き出し、目標を削り取ろうとする。

だが、ゴスペルも直ぐに攻撃を躲して反撃に移ろうと動く。

しかし、そのゴスペルの動きを阻害し、オタクの戦いを支援する事が起こる。

「・・・!!」

ゴスペルが再びの攻撃に移ろうとした瞬間に、周囲の駆逐艦から多数の艦対空ミサイルが撃ち出され、その全てが浮遊しているゴスペルに集中した。

流星にコレだけの攻撃を受けながらオタクを狙うと言う事はゴスペルにも叶わず、ゴスペルは、攻撃を避けるために一気に高度を落として空母の甲板上に降り立った。

「コレで条件は同じだ」

「・・・」

オタクは、右手にはガトリングを展開したまま、左手に新たに近未来的な見た目のライフルを展開して構える。

「さあて・・・」

「・・・」

睨み合う両者は、まるで息を整えるように静かに相対した。

「ファックしてやるぜ!!ベイベー!!」

珍しく、オタクが先手を取って動き出す。

基本的に受け身の姿勢で後手必殺を信条とするオタクは、今回ばかりは先手必勝を選択する。

だが、その判断に何らかな合理性が働いた訳では無かった。

この時、オタクは明らかに平常心を失っていた。

自分を見失い、平静を失い、間違いなく浮き足立って拙速に行動を取ってしまう。

それは、明らかなミスだった。

「オラア!!」

らしくない叫び声を上げて、オタクは一挙に前に出てガトリングの引き金を引く。

五十口径の機関銃弾をばら撒きながら近接する。

「・・・」

それに対してゴスペルの方は、オタクとは逆に後に下がりながら殺到する弾丸を回避する。

シルバリオ・ゴスペルは、広域の攻撃に関しては非常に強力な装備を有しているのだが、その反面、閉鎖空間における近接戦闘に対応した装備は乏しかった。

奇しくも、この時のオタクのミスは、ともすれば決して悪手とは言えない物で、有る意味の最適解とも言える物だった。

コレが、冷静さを保ったままで取った行動ならば、良かったのだが、オタクは間違いなく冷静では無かった。

ただ、我武者羅に突っ込んだだけの結果でしか無い。

「っ!!」

オタクの動きは完全に読まれていた。

一瞬、ゴスペルは右にフェイントを入れると、オタクのガトリングの銃口を誘導し、直ぐにスラスターを噴かして逆方向へと跳んだ。

重量があり、かつ反動の大きなガトリングはコレまでのライフルなどとは違い、明らかにオタクの反応を鈍らせている。

「クッソ!!」

悪態を吐きながら、オタクは必死になってガトリングの銃口をゴスペルに合わせようとした。

だが、一度躲されてしまえば、逆にゴスペルの動きにオタクの方が翻弄される様になってしまい、傍から見ればただ右往左往している様にしか見えない。

「・・・」

一連の動きの中で、ゴスペルが遂に完全にオタクの背後を取った。

「っ!!!」

ISに乗り始めて以来、妨害も何も無い状況で完全な隙を晒したのは、恐らくコレが初めてだろう。

「・・・」

ゴスペルはオタクに向かってシルバー・ベルを放った。

回避不可能、防御不可能の最悪の状況でオタクは至近距離での攻撃を受ける。

吸い込まれる様に殺到するエネルギー弾は、何に阻まれる事も無くオタクの背中に命中し、爆発と衝撃波でそのまま甲板上の端から端まで吹き飛ばした。

「ぐおおおおお!!」

艦首付近に居たオタクは、アイランドの近くに駐機していた戦闘機に衝突して漸く止まる。

F-18は右側のインテークに突き刺さったダンボールによって大破し、タンク内の燃料が漏れ出て大爆発を起こす。

幸いなことに、ホーネットにはなんのミサイルも爆弾も搭載されてはおらず、最低限の燃料がタンクに残されているだけだった。

ガソリンほど揮発性の高くない航空燃料だが、それでも大量に流出した所に破損した機体から火花が大量に飛べば、どうなるかはお察しだ。

「・・・」

甲板上で燃え上がる機体の残骸にゴスペルがゆつくりと近付いていく。

その様子を甲板に残されていた作業員や兵士達が固唾を呑んで見守る。

本来ならば彼等は早急に消火活動を始めたところなのだが、状況

が状況なだけに誰も手が出せない。

乗艦する海兵隊員も手を出し倦ねている。

流石に命知らずで知られる彼等も、特殊装備無しでの対IS戦闘には躊躇するらしく、また、オタクの存在がより判断を鈍らせる原因でもあった。

「・・・」

ゴスペルはある程度の所で立ち止まった。

立ち止まって無機質な眼で燃え盛る残骸を見詰める。

「・・・!!」

「くたばれええ!!」

一瞬、ゴスペルの判断がオタクのそれに勝った。

ゴスペルが身を躲したその刹那の間の後に、青白く光る光弾が通過した。

「避けられたか」

オタクの左手、新たに取り出していたライフルの銃口が赤く焼けている。

「えげつない威力だな・・・」

「・・・」

「まあ、今は使いりや十分か!!」

オタクがライフルの銃口をゴスペルに向けた。

ゴスペルは直ぐに動き出して回避行動を取るが、オタクのライフルは今までとは全く異なる変化を見せた。

露出した銃口部分が赤く変色し、陽炎の様に銃口付近の空間が揺らめいて青白く光る。

「っ!!」

そして、再び青白い光弾が放たれた。

飛び出した光弾は、寸での所でゴスペルに躲されて甲板に当たるだけだったが、着弾した甲板の一部が融解して大きく抉れる。

「・・・」

純国産試作プラズマライフル、防衛省の研究者達が限られた予算を遣り繰りして捻出した雀の涙で研究開発した試作装備である。

試作故に熱対策や強度、連射性能何度に難があるが、威力に関しては折り紙付きだ。

「ガトリングは・・・ダメか」

オタクの右手には銃身の拉げたガトリングの残骸が握られている。

「・・・」

ゴスペルの反応は早かった。

先の二度の射撃でライフルにチャージが必要な事を既に学習し、更にガトリングが使用不能な事を確認する。

オタクに反撃の手が尽きたと判断するや、ゴスペルは直ぐにオタクに肉迫した。

一直線に飛んでオタクを一挙に叩きのめそうと動くが、それに対してオタクは持ち前の冷静さを持って対処する。

「っ!!」

近づきながら放ってくるエネルギー弾を持ち前の装甲で受けたオタクは、衝撃に怯みながらも、常にゴスペルを睨み続ける。

そして、ゴスペルは手が届くほどにオタクのダンボールに近づくと、至近距離でエネルギー弾を放とうとする。

流石にこの距離で攻撃を受ければ、ダンボールの複合装甲も一溜まりも無い。

ゴスペルはこれまでの戦闘からダンボールの詳細なスペックを測ったのだ。

「!!」

ゴスペルの攻撃は、一切遮られること無くダンボールに直撃した。

30余りのエネルギー弾がダンボールを襲い、その装甲を貫いてシールドを大きく削る。

そう、ゴスペルは間違いなく予想した。
だが、その予想が覆される。

ゴスペルの攻撃は間違いなく直撃した。
爆発が起こり、衝撃波が広がった。

「・・・!」

煙が立ち込める中で、ゴスペルは確かに確認した。

添おう甲の表面が拉げ、焼け焦げて穴が開いた見窄らしい姿のダンボールを確かに認識した。

そして、その姿は煙が晴れば一層良く確認できる。

ゴスペルは敵が完全に沈黙したのだと判断する。

「・・・キャストオフ」

オタクが呟いた。

次の瞬間、ダンボールの装甲が音を立てて崩れて足下に落ちていく。

「ポケ戦を見ておくべきだったなw」

ライフルのチャージは既に完了している。

ゴスペルのシステムは、有り得ない状況に悲鳴を上げる。

大量のバグがゴスペルのシステムを浸食し、一時的にその動きの全てを阻害してしまった。

その余りにも大きな隙は、オタクが銃口を向けて引き金を引くのに十分すぎるほどの時間だ。

「・・・!!」

システムが復旧した瞬間、ゴスペルは強力なプラズマの光弾を叩きつけられた。

耐熱甲板すらも融解させる程の熱量を持ったエネルギーの塊は、一撃でゴスペルの全てのエネルギーをむしり取り、行動不能に陥らせる。

「・・・我々の勝利だ!」

さて、通常であれば、コレで全てが終わりとなる。

勝った!臨海学校編完!とでも言つて、次回から通常の日常に戻るだけなのだが、コレで終わりのな訳が無かった。

『逃げて!!』

自由を取り戻したゴスペルの操縦者が警告を発した。

「再起動だ?!?」

何処かの傭兵の駆る白い閃光の様に、ゴスペルが再び動き出す。

ゴスペルを中心に強大なエネルギーが集中して、光球を形成すると、最早、オタクは逃げる暇を失う。

その次の瞬間、空母の甲板を焼き尽くすほどの収束されたエネルギーが解放された。

こうして、オタクは行方不明になる。

一夏が集中治療室に運び込まれた30分後の事だった。

第三十六話

雨が降り出してきた。

大粒の雨粒が荒れる海原に叩きつけられて爆ぜる。

ラウラを先頭にして、少女達は激しい豪雨の暗闇の中を突き進む。

「朗報だ！自衛隊が作戦を延期したぞー！」

ラウラが背後の仲間達に叫んだ。

「何が在ったのよ!？」

「雨の影響だ！自衛隊はナーバスに成っている！我がドイツからも大使館を通じて交渉を試みたが功を奏した様だ！」

世界最強の兵器と呼ばれるISに対して、自衛隊は実態以上に恐れを抱いている節がある。

それは、件の白騎士事件においての損害と、失敗した際に受けうる損害による世論からの批判を嫌と言うほど分かっているからだ。

自衛隊は、作戦において絶対の自信を持っているとは言い難く、それ故に、少しでも作戦の成功率を上げるために天候の不順を問題視したのだ。

現場の各部隊は士気旺盛にしてこの作戦実行の見送りに不満を覚えた物で、泣く泣く延期を命じた統合幕僚監部も再三にわたって延期の撤回を防衛省及び内閣に具申している。

しかし、内閣では今後の野党からの突き上げや市民団体からの抗議を恐れており、慎重な態度を取る官房長官が早期の作戦決行に強固に反対していた。

これらの事態は、正に少女達にとっては天佑だった。

「わたくしはそろそろ別れますわー！」

セシリアが集団から離脱した。

当初、火力支援を担う予定だったのはラウラなのだが、準備時間の少なさと戦闘地域に強固な地盤を持つ射撃位置が無いことから、代わりにセシリアが長距離からの狙撃支援に着く事に成った。

セシリアの抜けた四人は、それぞれ、ラウラと鈴、箒とシャルロットの二組のツーマンセルに分かれてゴスペルに挑む。

「そろそろだー！」

ラウラが叫んだ。

声を聞いた三人に緊張が走り、各々、武器を確りと握って瞬間に備える。

ゴスペルは強い。

それは一度戦った筈は勿論の事、オタクを退けた事からも他の者も確りと認識している事だ。

特に、シャルロットは人一倍ゴスペルに対する敵愾心を燃やしており、普段は使用しない様な重装の兵装を背面に二つ背負っている程で、その表情も険しく、眉間に深い皺を寄せている。

「・・・タク」

シャルロットは小さく呟きながら、右手に握るライフルを見た。

普段使う小口径のサブマシンガンやアサルトライフルとは比べ物に成らない25mmの強力なそれは、フランス製装備で固める彼女には珍しく、アメリカ製の物だ。

「見えた・・・！」

筈が声を上げて発見の第一報を伝える。

この中で最も高性能な筈の駆る紅椿のセンサーが、最も早く目標を捉えたのだ。

『此方でも確認しましたわ』

次いでセシリアが発見を報告し、その情報を全機にデータリンクで送る。

「・・・！」

弾かれたように、シャルロットがマーカーで示されたゴスペルを睨んだ。

「ゴスペルウウウウ!!!」

遂にシャルロットの我慢が限界を向かえ、彼女は咆哮を上げてゴスペルに突進した。

「シャルロット!!」

突然のシャルロットの暴挙にラウラが驚いて静止の声を上げるが、シャルロットは静止の声を振り切って最高速度で目標に向かった。

「タクの仇!!」

初撃、シャルロットは普段ならば残しておくはずの切り札であるグレー・スケールを一番最初に出してきた。

「!!」

ゴスペルはこの一番最初のシャルロットの攻撃に対して、直撃の寸前に成って漸く反応を示した。

直撃の寸前、持ち前の高機動でゴスペルが回避行動を取ろうとした刹那、シャルロットはスラスターを噴かして更に追い続ける。

「逃がさないよ!!」

上方へ逃げようとするゴスペルに対して、シャルロットも同じ様に瞬時に上昇しつつ、アツパー気味に左の掌底を放つ。

一瞬、ほんの一瞬の運動の中で、シャルロットの動きのそれがゴスペルの判断を上回った。

それは、心を燃え滾らせながらも尚、努めて頭の冷静さを保ち続けたシャルロットの思考の賜であり、反応して漸く判断を下したゴスペルに対する僅かなアドバンテージだった。

「!!」

「っああああ!!」

ゴスペルとラファールが空中で激しく激突する。

金属と金属の打つかり擦れ合う嫌な音が大きく響くと、次の瞬間には撃発音と共に杭が撃ち出されてゴスペルの機体がくの字に折れ曲がって打ち上げられた。

「まだまだ!!」

シャルロットは追撃の手を弛めない。

右手に握っていたライフルを構えると、ゴスペルに向けて銃口を向けて引き金を引く。

「っー」

これまでの装備とは、正に雲泥の差としか言い様の無い強烈な反動がシャルロットを襲う。

シャルロットの使ってきた銃器の殆どはブルパップ方式であり、全身で包み込む様に構えるため反動を文字道理全身で押さえ込む様に

受ける事が出来る。

だが、今回装備してきた25mmライフルはオーソドックスなストリートストックにピストルグリップの構成で、反動はほぼ肩だけで受ける様な形に成る。

この勝手の違いと習熟度の不足は、実戦においては致命的だった。

「!!」

反動と照準に一瞬だけシャルロットが戸惑ってしまおうと、その僅かな隙にゴスペルは一気に加速してシャルロットから距離を取る。

「っ！逃がすか!!」

ゴスペルの加速と機動力は凄まじく、瞬きほどの間に確りと安全圏にまで移動して見せた。

シャルロットは、無駄だと頭で理解しても尚、やるせない気持ちを打つける様にゴスペルに銃口を向けて引き金を引き続けた。

しかし、放たれた砲弾は、虚しく夜の闇の中に吸い込まれて行くばかりで、決して目標を捉える事は無かった。

「・・・」

一方のゴスペルは、回避行動を取りつつシャルロットから距離を取ると、その間に状況を判断した。

ゴスペルに搭載された広範囲を索敵する為のセンサー類が、周囲の敵性戦力の位置を把握し、得られる情報から機体と操縦者を特定する。

ゴスペルのAIが下した周囲の敵は全部で四機、シャルロットのラファールの他、鈴の甲龍と箒の紅椿までは完全に認識したが、ラウラのレーゲンに関しては機体と操縦者の情報を掴むことは出来なかった。

これは、ラウラが特殊部隊所属と言う、非常に秘匿性の高い彼女の所属故に、データベースには載っていないと言うのが理由だ。

シャルロットのラファールと鈴の甲龍に関しては、どちらもデータベースに上方があり、また両パイロットに関して、フランスと中国の公式な情報として発表されている為に直ぐに判断が付いた。

箒に関して、先の戦闘によって得られた自身の情報から判断した

物だ。

「・・・」

背後にシャルロットからの射撃を感知しつつ、ゴスペルはその脅威度を問題ないレベルと判断して、本格的な反攻に移る。

「！」

速度はともかくとして、ゆったりとした軌道を描いて飛行していたゴスペルは、一挙に鋭角の軌道で方向を転換する。

方向転換と同時にゴスペルは翼を広げて、攻撃態勢に入ると、直ぐさま射撃を始めた。

「っ?!ちよっ?!なんでコツチにくんのよ!!」

ゴスペルが最初に攻撃目標に選定したのは鈴だった。

ゴスペルは現状において、未知数のラウラと脅威度の低い箒を無視して、判明している中で最も脅威度の高い鈴を早期に撃破する事を決めたのだ。

「クソツ!!」

高速で飛翔するゴスペルの射弾を、鈴は悪態を吐きながら回避した。

広域攻撃を目的としたシルバー・ベルは非常に強力な面制圧力を持つ反面、精密な攻撃には御世辞にも向いているとは言い難く、また距離もあつたために回避の為の間隔が開いてしまった。

だが、それはゴスペルも承知の事だ。

「!!」

鈴が回避行動に一瞬の隙を取られると、ゴスペルは一気に距離を詰めて白兵戦の構えを取った。

「舐めてくれるじゃ無い・・・」

鈴は小さく呟いて口許に笑みを浮かべた。

白く輝く犬歯を光らせて、ギラつく眼光を敵に向けて、そしてそれから、下腹に力を込めて雨粒の叩きつける中で吼えた。

「来いやあああ!!」

鈴は一連の戦闘と情報からゴスペルは近接戦は不得手と心得ていた。

そのゴスペルからの近接戦の誘いは、近接戦ならば代表にも負けな
いとすら自負する彼女に取って酷い侮辱であり、激昂してゴスペルの
誘いに乗った。

「!!」

初手、ゴスペルが繰り出したのは右手の貫手だった。

「っ！」

速度の乗ったゴスペルの貫手は鈴の意表を突くには充分な物で、
一瞬だけ鈴の反応が遅れる。

「らあっ!!」

だが、鈴は直ぐに頭を切り替えて身体を半身にして貫手を躲し、そ
れと共にゴスペルの懐に入って左半身全身で叩きつける様に打撃を
加える。

「!?!」

ゴンっと言う鈍い音と共にゴスペルは激しい衝撃に見舞われるが、
しかし、鈴はそのゴスペルに追撃を仕掛ける事は出来なかった。

「つつつつ!!」

鈴は叩きつけた自身の左の腋を抑えて苦悶の表情を浮かべている。
見れば、彼女の機体の左脇腹付近の装甲に四本の指が突き刺さった
後が残っていた。

「クソッ……!」

衝突の瞬間、鈴が左半身を叩きつけると同時に、ゴスペルも反撃に
出ている

ゴスペルは、自身に向かってくる鈴のタックルを躲せないと判断す
ると、相打ち狙いで鈴の衝突に遭わせて左手で貫手を見舞っていたの
だ。

結果的に鈴は自身の勢いも合わせた強力なカウンターを受ける事
に成り、そのダメージは数字上の物よりも遥かに強烈な物だった。

「つつえああああ!!」

鈴は気合いを入れてゴスペルに斬り掛かる。

最早、悔りは無い。

鈴は、全身全霊を込めてゴスペルに挑み掛かる。

接近戦ならば有利であると言う自負を棄てて、格段に上位の相手に挑む心持ちで攻撃に出た。

全身の筋肉に力を込めて一挙に締め上げ、それから力を抜いて弛緩させると、連結させた双天牙月を上段から振り下ろした。

勢いに乗り、それでいて程良く肩の力の抜けた素晴らし斬撃は、しかし、ゴスペルを捉える事は無く、最小の動きで躲かれて空を斬る。「ッフー」

しかし、それは鈴も分かっていた。

鋭く吐いた息と共に、今度は刀を振り上げて二撃目に移り、それが躲されれば今度は横薙ぎにと言う風に、鈴は流れる様な動きでゴスペルに連撃を掛ける。

ともすれば舞っているかの様な動きは、初めて学園に来た頃から考えれば遥かに洗練された物となり、それは、彼女の鍛錬を現す鏡と言える。

「破ッ!!!」

打ち合いの八合目、気合いを込めた声と共に左から叩き付ける様な一撃を放つ。

両手で握る青竜刀は、全身の力を確りと乗せてゴスペルに襲い掛かり、その威力たるは成る程と言わせしめる迫力がある。

「!!」

それに対してのゴスペルは、コレを躲すのでは無く敢えて受けて見せた。

「っ!?!」

正に達人もかくやと言うべき鋭さを持った貫手は、その指先を正確に双天牙月の刃に合わせて受ける。

その妙技に、鈴はただただ驚愕する他無かった。

一瞬、驚愕する鈴の身体が硬直したコンマ一秒程の僅かな隙を、ゴスペルのAIは見逃しはしない。

「!!」

ゴスペルは、鈴の腹に鋭い蹴りを見舞う。

「っああああ!!」

衝撃と共に吹き飛ばされた鈴に対して、ゴスペルが更に追い打ちを掛け様とするが、フォローに入ったラウラによって阻まれる。

「!!」

ラウラは鈴とゴスペルの間に入ってAICを展開しようとして手をかざす。

その動きに反応して、ゴスペルは直ぐに距離を取った。

「・・・」

情報が少ないからこそ、ゴスペルのAIは不確実性の高い行動を嫌い、追撃を諦めた。

その動きをラウラは確りと見ていた。

「嵐！カバーしろ!!」

言い放って直ぐ、ラウラは飛び出してゴスペルに向かった。

「っ！しょうが無いわね!!」

鈴はラウラに言われた通り、衝撃砲を連射してサポートに入る。

「!!」

弾体の見えない衝撃砲はゴスペルのAIを持ってしても軌道予測は難しく、数発の被弾を許してしまう。

明確な直撃弾を許すと言う事は無かったが、それでも掠めた衝撃でゴスペルは体勢を崩してしまう。

「ハアツ!!」

そこへ間髪入れずにラウラが手刀を振りかざして接近する。

「!!」

ラウラは体勢を崩したゴスペルに手刀の突きを見舞うが、ゴスペルも不安定な体勢ながら貫手で応じる。

「っ！」

ゴスペルとラウラ。

互いの右手が交差し、擦れ合って火花を散らすと眼前で鋒が止まる。

互いの手が交差した状態で動きを止めると、ラウラが肘を折ってゴスペルの腕を払い、今度は左腕を振るってゴスペルの首を狙った。

「ハッ!!」

この手刀の一撃にも、ゴスペルは直ぐさま反応を見せる。

「!!」

自身の右側から迫る手刀の突きに対して、ゴスペルは上体を左に逸らす様にして躲し、カウンター気味の左突きを返した。

「・・・っ」

ラウラは、迫る貫手を開いている右腕でガードする。

空手の受けの要領で左側に逸らし、今度は左手の手刀の突きで逆襲に移る。

「!!」

しかし、ゴスペルはそのラウラの突きを上体を後ろに反らせて躲した。

「っ!!」

ゴスペルがラウラの攻撃を躲した瞬間、ラウラが右手を伸ばしてゴスペルに向ける。

ここが好機とばかりに、ラウラはゴスペルの一瞬の隙を突いてAIを発動し様と言う素振りを見せる。

その動きを見逃さないゴスペルは、身体を反らした上体から後方に宙返りする要領で距離を取る。

その瞬間、ラウラは思わずと言う風に口角を上げた。

「ちえすとおおおお!!」

ゴスペルが回避行動を取って移動した先で、箒は右手に握った空裂を気合いと共に一閃する。

「!?!」

ゴスペルは最後まで攻撃を回避しようとして動き続けるが、事ここに至っては最早、どの様な動きを取ろうとも回避は間に合わない。

「!!」

回避が間に合わないかと判断するや、ゴスペルは最後の足掻きと右側のウイング・スラスターをガードに使う。

一瞬、空裂の刃が機械の翼の表面に打つかって火花が散ると、その後、まるで豆腐でも切り裂くかの様に刃が滑る。

「つええああああ!!」

「!!?」

刀を振り抜いて直ぐ、箒はその場から後へと飛び去る。昼間の様な奢りも高ぶりも無く、箒は本来の集中を見せて確りと残心を取る。

この一撃に、ゴスペルのAIは箒に対する評価を情報に修正し、また、全体的に相対する敵に対しての戦闘評価を高脅威と変更した。

「・・・」

「まだまだ!!」

箒は動こうとしないゴスペルに対して、もう一度接近して斬り掛かる。

両手で確りと空裂を握り、上段から一直線に振り下ろした。

「!!」

真つ直ぐな箒の面を、ゴスペルは首だけを反らして躲す。

それは箒も織り込み済みの事で、直ぐさま返す刀で下段からの切り上げ、袈裟の振り下ろしと連続して攻撃を仕掛けた。

しかし、ゴスペルはそれらの攻撃を難なく躲すと、今度は自身の右手を振って突きを繰り出した。

「・・・」

鋭く素早い突きは、箒の首を狙って放たれるが、箒もまたその攻撃を危なげなく躲し、その直ぐ後にカウンターに刀の柄の石突きでゴスペルに撃ち込んだ。

「!!」

通常の剣道には無い動きにゴスペルは、敢えて受けて見せてから自分で後に飛んで衝撃を殺す。

「ハッ!!」

そこに、箒は空裂を振るって二撃、衝撃波を飛ばした。

「!!」

これに応じて、ゴスペルは残った左側の翼を動かして、エネルギー弾を放った。

放たれた光弾は二つの斬撃と打つかって相殺され、爆ぜたエネルギーの塊が雨粒を吹き飛ばして一瞬だけ雨が止まる。

「っ!!」

爆発の衝撃が箒を襲い、一瞬、彼女が隙を生む。

「!!」

それを見逃すような甘さはゴスペルには無く、直ぐさま追撃にゴスペルが接近して右手を振り抜いた。

「させないわよ!!」

無防備な箒をゴスペルの貫手が襲う寸前、今度は鈴が現れて青竜刀を振るう。

鈴は双天牙月を下から振り上げてゴスペルの手を弾き上げる。

「!!」

「そこだああああ!!」

鈴の背後から箒が雨月を抜き放って突きを繰り出す。

「!!」

雨月の鋒から一条の光線が放たれ、その光線がゴスペルの腋を穿つ。

流石にコレには溜まらずゴスペルも二人から距離を取るが、その先では、ラウラが待ち構えている。

「シッ!!」

突き出された手刀をゴスペルは躲し、そのまま横を擦り抜ける。

「逃がさないよ」

ラウラの横を通り抜けた瞬間、待っていましたとばかりにシャルロットが現れてライフルを構えた。

「!!」

ゴスペルはシャルロットが銃口を向けてくるのを確認して、即座に回避行動を取る。

バレルロールの軌道を取って照準から逃れようと動き、そのまま海面スレスレまで降下したゴスペルは、ラウラ達の方を見上げようと動く。

メインカメラでより正確に相手を捉えようと下のだが、次の瞬間、海面が爆発して海水が巻き上げられて視界を全て潰された。

「!？」

更に二度、三度と海面が爆発してその度にゴスペルのセンサーがフラッシュする。

この爆発の正体は、ラウラがレールカノンで榴弾を海に向けて撃ち込んだ事による物で、ゴスペルの目を奪う事が目的だった。

「!!」

ゴスペルは混乱した。

余りにも想定外な自体に、AIの思考に過負荷が掛かり、その結果、ゴスペルは数秒の間、完全に動きを止めてしまう。

『頂きましたわ』

ゴスペルは最初から一つのミスを犯していた。

ゴスペルは敵の数を四機と判断していたのだが、探知圏外のセシリアの存在を予測できなかったのは、最大のミスだった。

「!!」

そのセシリアからの長距離狙撃は、暗闇と悪天候の中であるにも関わらず確りと標的を捉え、左側のウイング・スラスターを撃ち抜いた。

「!!」

予想外な、余りにも予想外な苦戦に、ゴスペルのAIは更に負荷が掛かった。

それは混乱などと言うレベルを通り越して、最早、恐怖と言い換えても良いのかも知れない。

本来ならば、決して経験する事の無い感情に支配されたゴスペルは、それはまるで初めて戦場に得た新兵の様に狂乱して、一番に視界に捉えたラウラに向かって遮二無二突っ込んだ。

「!!」

「!!」

ラウラは、この状態に成った相手に対しての動きを良く心得ていた。

冷静に此方に向かうゴスペルを見据えて、ラウラは右手を真っ直ぐに伸ばして掌を広げる。

「!!」

AIC展開の予兆であるその動きは、ゴスペルもメインカメラで捉

えていた。

だが、混乱したゴスペルのAIは先の二度の動きからラウラの動きをただのフェイントか虚偽威しだと判断して、そのまま一直線に突進する。

右手を構えて勢いそのままにラウラの眉間目掛けて貫手を放つ。

「・・・！」

ゴスペルは最初の敵を撃破したと予め判断を下す。

だが、現実には、撃破判定を下した筈の相手を撃破する事は出来ず、それどころか動きを完全に止められて無防備を敵の真つ正面で晒す。

「!?!?!」

!!ゴスペルの眼前にシュヴァルツエア・レーゲンのレールカノンの砲口が向けられた。

「コレで終わりだ」

そして、闇夜の中に砲声が響き渡った。

まるでゴングの様に良く響いて空気を震わせて、何時の間にかに空が晴れ渡って月が夜の海を照らした。

第三十七話

沈んで行く。

破壊されたゴスペルが、破片と共に夜風の闇の底に墜ちて沈む。

「・・・」

雨が止み、雲も散った夜空には月だけが輝いて四人を照らしていた。

それぞれ大いに傷付いた機体で留まり、息も荒く戦いの余韻に浸る。

全てが終わったのだと、そうラウラが確信して背を向けた瞬間、静かの海に浮かぶ月を割って一条の光線が襲いかかった。

「ラウラっ!!」

「っ!」

俯瞰して見ていたシャルロットが声を上げた。

ラウラは咄嗟に身体を捻りながら頭から降下する。

光線はラウラを捉えようとするが、一瞬の判断が明暗を分け、僅かにレーゲンの右肩を掠めながら

雲の無い夜空に消えて行く。

「!!」

海面に光の影が映りだして波立った。

水面が荒れ狂いながら持ち上がり、その中から銀色に光るゴスペルが姿を現す。

「再起動だど?!有り得るのか?!こんなISが!」

海面上に浮かんだままで動かないゴスペルを前に、箒が思わず声を荒げた。

ここにオタクが居れば思わず反応してしまいそんな台詞を発して、動揺を顕わに眼下のゴスペルを睨む。

「・・・第二ラウンドって訳ね」

一筋、頬に大粒の汗が流れ落ちる鈴は、静かに言いながら双天牙月を握り直す。

「大丈夫?ラウラ」

「問題ない」

降下した後、ラウラは海面スレスレを飛んで距離を取り、それからシャルロットの直ぐ近くに移動した。

そんなラウラにシャルロットが心配そうに声を掛けるが、ラウラはゴスペルから視線を外さずに返す。

「・・・姿が変わっているな」

「セカンドシフト・・・だね」

静かに佇むゴスペルの姿は先程までとは、一見すれば別の物と見紛う物だ。

全体的に装甲に覆われた箇所が増え、機体のサイズも一回りか二回り大きく成り、IS特有の大きく特徴的な脚部は、むしろ小さく細く変貌し、特にその足先は剣の如く鋭く薄く成っている。

腕も短く成って全身の形状の比率が人間に近づき、指先は長く鋭い。

そして一番に目を引くのは大きな翼だ。

機械的な風貌から一転して、今のゴスペルの背中には天使の様な巨大な四枚の翼が輝いており、まるで本物の翼の様な柔らかく揺れ動く。

「・・・」

四人が固唾を呑んで眼下に浮かぶゴスペルを眺める中、ゴスペルもまた身動き一つせずに佇む。

一瞬、もしかすれば暴走が解けたのかとも思えたが、しかし、漂う緊張感がその淡い期待を否定する。

『避けて下さいませ』

不意に、セシリアから通信が入る。

そして、その次の瞬間、ラウラの背後からゴスペルに向けて光線が二条突き進んだ。

「!!」

直撃の寸前、ゴスペルは顔を上げて反応を示すが、回避しようとは一切せずにセシリアからの攻撃を受ける。

「っ!?!」

多少なりともダメージはあるかと、ラウラは期待して結果を待ったが、その期待はもろくも打ち砕かれてしまう。

セシリアの放った光線は、ゴスペルに命中する直前に、何か見えな
い壁にでも阻まれるかの様に弾かれて進路を変えた。

AICの様には止めるのでも無く、装甲の様に受けて阻むのでも無く、その軌道を曲げられて光線を無力化したのだ。

「アンチ・ビーム・シールド……」

シャルロットが戦慄に震えながら呟く。

対光学兵器障壁、各国の軍や研究機関が研究しながらも、未だ実用段階にある物は一つとして存在していない最強の盾。

レーザーやビームと言った光学兵器やエネルギー兵器が開発されて以降、各国ではその研究が進められており、ISでの運用から今後は通常兵器への搭載が見込まれている。

そうなるや否やの事として、ビーム兵器やレーザー兵器に対する備えと言う物を考え出すが、今の所、光学エネルギー兵器に対する防御方法はこれまでと同じく装甲防御に頼った物と成っている。

だが、日進月歩の光学エネルギー兵器は将来的には実弾兵器を圧倒する破壊力や貫通力を備えると考えられており、そうなれば、今後、物理的な装甲では防ぐのが難しく成る。

単純装甲を厚くすれば強力に成っていく光学兵器にも対抗は出来るかも知れないが、兵器に搭載できる装甲には限りがあり、将来の強力な光学エネルギー兵器に対抗可能な軽量の装甲、若しくは防御方法を欲している。

そして、その答えが今、目の前に存在していた。

「……果たして、我々の矛は、未来の盾にどれ程通用するのか」

ラウラはそう呟いて自嘲する。

セシリアのスターライトはISに搭載されるビーム兵器としては強力な部類に入るが、それをいとも容易く防いで見せたゴスペルは正に脅威だ。

「!!」

次の瞬間、ゴスペルが大きく翼を広げて飛び立った。

一瞬にして、ゴスペルは高度を上げてラウラ達を飛び越して上昇していく。

「っ!？」

ゴスペルの加速力と速度に、ラウラは舌を巻き、それから直ぐに追いつく。

当然、シャルロットと鈴、箒もゴスペルを追って上昇するが、それでも誰一人として追いつくことは出来ない。

「!!」

ゴスペルがラウラ達の方を振り向いた。

「っ!!」

ラウラは直ぐに右に逸れて回避行動を取る。

ラウラの判断は実に正しく、回避した次の瞬間には、同じ場所を光線が通過して行った。

「!!」

ゴスペルはラウラが回避したと見るや、今度は一気に急降下する。

「くっ!!」

ゴスペルの機動に着いて行く事が出来ずに置いて行かれる形で擦れ違うラウラは、小さく呻きながら追尾を試みるが、そうしている間にも、ゴスペルは更に加速してラウラとの距離を離し、そして、箒に襲い掛かった。

「!!」

箒に攻撃を仕掛けたゴスペルは、先程までと同じく右の貫手を繰り出した。

「っ!!はああ!!」

箒はゴスペルの早さに驚きを顕わにし、しかし、直ぐに切り換えて空裂を構えて応じる。

そして、空裂の刃とゴスペルの指先が激突すると、箒に凄まじい圧力が掛かる。

「っ!!ぐう!!」

刀と指の鏝迫り合いは、互いに火花を散らしながらもゴスペルが優勢で圧倒する。

「っは!!」

一瞬、箒はゴスペルからの圧に屈する様に下がると、直ぐに刀をズラしてゴスペルを受け流した。

「!!」

「ハアッ!!」

ほんの一瞬でゴスペルと体勢を入れ替えた箒は、空裂を上段から振り下ろして攻撃に転じる。

「!!」

これに対して、ゴスペルは僅かに期待を浮き上がらせながら右手をスクリューブローの要領で捻らせて貫手で返す。

振り下ろされる空裂に敢えて向かう事で打点をずらし、空裂の刃の右側に掠める様にし右手を打ち上げる。

「っ!?!」

箒の振り下ろした空裂は、ゴスペルを捉える前に右手で弾かれ、逆は無防備の状態で突きを見舞われる。

眼前に迫るゴスペルの指先に箒は咄嗟に首を左に動かして躲すしか無かった。

「くっ!!」

「!!」

攻撃を寸でで躲されたと見るや、ゴスペルは直ぐに腕を抜いて、左手で追撃に移る。

「くっ!」

箒は呻きながら刀を振り、何とか突きを弾いて躲す。

さつきまでよりも更に冴え渡るゴスペルの妙技の前に、箒は舌を巻かざるをえなかった。

「ハアアア!!」

箒がゴスペルの攻撃に対して防戦一方と成る中、その隙に乗じて鈴が背後から襲い掛かる。

「貫ったああ!!」

双天牙月を確りと構えた鈴は、一気にゴスペルの背後から横風ぎに振り抜く。

実に気持ちの良い胸の空く様なフルスイングは、気が付いていた筈も、放った鈴も決まったと確信した。

「!!」

だが、ゴスペルはそんな二人の考えを裏切る様に、背後から迫る青竜刀の刃を左手で受け止めて見せた。

「っ！なっ!？」

盾で防ぐなり、武器で受けるなり、拳で弾くなり、そう言った事ならば鈴もある程度は予想が着いていた事だ。

だが、事もあろうにゴスペルは防ぐのでも受けるのでも弾くのも無く、左手の指で挟んで止めたのだ。

コレには流石に驚きを隠す事は出来なかった。

「ぐっ!!こっおのおおおお!!」

双天牙月を止められた鈴は、叫びを上げて渾身の力を込める。

まるで万力にでも絞められているかの如く、ゴスペルに止められた刃はビクともせず、押す事も引く事もままならない。

「嵐!!そのまま動くな!!」

ゴスペルの意識が鈴に向いた。

これぞ好機とばかりに今度は筈がゴスペルに襲い掛かる。

「ちえすとおおお!!」

勢いの乗った筈の一撃は、自身に取っても会心の一撃だった。

「!!」

しかし、ゴスペルは筈の一撃すらも右手だけで受け止めて見せる。

「ぐっ!!っぬう!!」

「ああああああ!!」

鈴と筈は渾身の力を振り絞ってゴスペルに対抗しようとするが、その二人の力を持ってしても尚、ゴスペルは押し返して優位に立ち続けている。

「っつああああ!!」

筈は更に力を込めて空裂を押し付けようとする。

スペック上、最も出力のある紅椿が全力を発揮する事が出来るならば、今のゴスペルにも充分に対抗が出来る筈だ。

だが、箒の操縦者としての技量が全力の発揮を妨げる。

「ぐうう!!」

箒は姉によって託された愛機の力を十全に使ってやれない事が歯痒くて溜まらない。

嘗て、これ程までに自分の思い通りに成らない事は、経験として一度も無かった。

力を尽くして、それでも届かずに居るのでは無く。

力を尽くす事すらも許されず、追い続ける事も出来ない。

これ以上の屈辱は無い。

「糞がああああ!!」

鈴もまた出来る限りの力を振るう。

全身全霊を掛けて目の前の敵に対抗しようとする。

しかし、目の前の敵は余りにも強大すぎた。

「ぐきぐきぐきぐき!!」

歯を食いしばって、機体の持てるほぼ全ての力を出して要るにも関わらず、ゴスペルは全く動じずに抑え続ける。

技量ならば、成長で追い付く事も出来ただろう。

経験の差ならば、創意工夫と言った物で補えただろう。

だが、コレはただただ単純な機体のスペックと言う、個人では如何ともする事は出来ない事だった。

だが、この二人の攻撃は決して無駄では無かった。

今、この瞬間にゴスペルは完全に足を止めてしまっている。

それは、彼女にとっては絶好のチャンスだ。

「二人とも避ける!!」

ゴスペルの真正面からラウラがレールカノンを放った。

動きを完全に止めた状態の避ける術のないゴスペルは、ラウラの砲撃が直撃するのに抵抗など一切出来ない。

「っ!!」

「ぬっ!!」

直撃の寸前、鈴と箒は手にしている刀から抑える力が抜けるのを感じた。

その直後には爆発が起きて、爆風に二人は後に飛ばされる。

「まだまだ!!」

ラウラの砲撃の後、更にシャルロットが25mmを撃ち込む。

曳光弾の混じった機関砲弾は、夜の闇の中に赤い光の流星群を生み出して、爆煙の中に吸い込まれて消えていく。

その間、鈴と箒は距離を取って二人の攻撃を見守っていた。

普通のISが相手ならば、コレだけで十分に倒しきれただろうが、この場の全員がこの程度では無理だと確信していた。

「!!」

その四人の期待に答えるかの如く、射撃の止んだ煙の中から白銀に輝く卵形の球体が姿を現した。

その球体は、見ればゴスペルが自分の翼で護るように包み込んだ体勢のようで、ゆつくりと翼を広げると、

ゴスペルの本体が姿を現す。

「嘘でしょ……」

「無傷……か……」

信じられない事に、レールカノンの榴弾と多数の25mm砲弾を受けても、ゴスペルには傷一つ付いていない。

まるで悪夢でも見ているかのような光景に、ラウラも珍しく動揺してゴスペルを見詰める。

「……」

本当に信じられない光景だった。

コレは悪い夢なのだと、直ぐに覚めて欲しいと全員が思った。

レーザーをねじ曲げられ、近接戦で圧倒され、榴弾も徹甲弾も通用せず、何もかもが圧倒的な程に負けている。

何一つ勝てる要素が存在しない。

存在その物が反則だった。

「……」

ゴスペルは何もしてこない。

ただ呆然としているだけの四人に対して、何もせずに、興味を失った様に見向きもせずに明後日の方を向いている。

最早、ゴスペルに取っては四人は脅威ですら無く、取るに足らない木石の様な物でしか無い。

「何なのよ……一体何なのよ!!アレは!!」

鈴は激昂した。

目の前に理不尽に対して声を荒げて吼えた。

「諦めないわよ……!私は!!絶対に諦めないわよ!!!」

鈴は再びゴスペルに向かった。

双天牙月を構えてゴスペルに向かって突っ込んで行く。

「鈴!!」

「止せ!凰!!」

突然の鈴の蛮行に、シャルロットとラウラが静止の声を上げた。

「ぬえりやああああ!!!」

右上段に双天牙月を構えてゴスペルに斬り掛かる。

何時も通り、訓練通りの全力を込めた一撃で斬り掛かる。

向かってくる鈴に対して、ゴスペルは迎撃の構えを取る事すらしなかった。

「……」

ただ振り下ろされる青竜刀を右手で弾いて、それから小蠅でも払う様に翼で打って鈴を退けた。

「っ!!」

だが、それでも鈴は諦めなかった。

諦めずに青竜刀を振り続けて、ゴスペルに向かい続ける。

そして、その度にゴスペルに簡単にあしらわれても払われるが、それでも諦めずに挑み続けた。

「凰……もう……無駄だ……」

箒は力無く鈴を止める言葉を放つ。

「五月蠅い!!」

だがそれでも鈴は双天牙月を振り続ける。

「鈴……」

「……」

「五月蠅い!!五月蠅い五月蠅い!!」

呼び掛けるシャルロットの言葉も聞かずに攻撃の手を弛めない。

「諦めてらんないのよ!!この程度で!!」

「・・・」

「止まってらんないのよ!!こんな所で!!」

「・・・」

「負けてらんないのよ!!こんな奴にいいいいいい!!」

叫びながら振り続けた双天牙月を真横からフルスイングして、それを受け止められても決して力は抜かない。

「勝てない位で諦めてたら・・・何も出来なくなんのよ!!アイツの隣に居られなくなんのよ!!私が!!自分を許せなく成るのよ!!ここで諦めたら、アイツの隣で笑ってられ無く成るのよ!!ヘラヘラしてる自分にムカつくのよ!!」

「っ!?!」

「私はねえ!!アイツの事が本気で好きなのよ!!だから、簡単に諦めて!!泣いてんのが!!大っ嫌いなのおお!!」

鈴は吼えながら、牙を剥きながら、目を一杯に見開きながら、ゴスペルに挑み続けていた。

抑えられた双天牙月は全く動く気配は無い。

それでも諦めずに押し続けた。

そこにあるのは、ただひたすらに意地だけだった。

「良く言いましたわ!」

不意を付くようにセシリアの声が響くと同時にゴスペルにレーザーが放たれた。

「先程は弾かれましたが、それなら近づいて撃つだけの事」

スターライトの物の他にビットから放たれた物を含めた五条の光線がゴスペルに向かって突き進む。

そして、その全てがゴスペル本体に当たる事無く、弾いて流される。「わたくしも、決して諦めませんわ!」

セシリアは更に射撃を続けるが、そのどれもが一撃たりとも掠りもしない。

それでもセシリアは引き金を引き続けた。

「絶対に、絶対に、絶対に、絶対に諦めませんわ！」

表情を歪め、髪を乱して、優雅さの欠片もない姿でも諦めずに撃ち続けた。

「わたくしが負けたと思うまで、負けではありませんわ！だから、わたくしは絶対に負けません!!」

レーザーがダメならばと、ミサイルを撃ち込んでみるが、それも一切効果を上げない。

それでも全く諦めずに撃ち続ける。

ライフルの銃口が熱で赤く焼けてしまっても、それでもセシリアは全く諦めようとはしなかった。

「わたくしは誇りある英国の淑女として、最期まで意地を張って見せますわ!!」

猛々しく、しかしその姿は何とも美しい。

「……不可能と言う文字は愚か者の辞書に存在する」

「何？」

不意に、シャルロットが呟いた言葉にラウラが反応する。

「僕はまだ愚か者には成りたくないかな……まあ、さつきまでなりかけだったんだけどね」

「……」

「でも、まだ間に合うよね」

シャルロットの問い掛けの様な言葉に、ラウラは一度上を見上げてから口を開く。

「真に価値無きは、自らを無価値と思う者……」

そう言葉にして、ラウラはシャルロットに顔を向けて笑みを浮かべた。

「ドイツ軍人として後退の二字は有り得んな」

そうして、また二人が戦いに身を投じた。

一度は挫けた二人は、再び起ち上がって、そして立ち向かって行く。

限りなく無駄に近いと知りながらも、それでも二人は先の二人の後に続いて攻撃に参加する。

そんな姿を筈は、ただただ見詰めている事しか出来ないでいた。

「・・・」

箒とて、一度は武に邁進し、道を歩いてきたと言う自負はある。その思いは、今も尚、彼女の中で燻り続けていて、あの四人と共に戦えと叫んでいる。

だが、箒は指一つ、眉一つ動かす事が出来ないでいた。

「・・・無駄だ」

嘗て歩いてきた道が無駄だったと、捧げてきた思いが汚れてしまっていたのだと、そう気が付いたあの時から、箒は一歩たりとも進む事が出来ないでいる。

自分の全てが泡沫の物だったのだと悟ってしまった。

絶望的なまでの虚無感を味わってしまった。

故に、箒の身体は拒否してしまう。

もう一度歩き出す事を拒否してしまう。

更なる絶望を知る事を恐れて、再び空虚を味わう事を恐れて、全身全霊が拒否してしまう。

「・・・」

だからこそ、箒は一夏に惹かれていた。

恋い焦がれて、憧れて、追い求めて、そして妬んだ。

決して変わる事無く、澄み渡った清流の如く、何物にも染められずに、自由で、真っ直ぐで、輝き続けていた。

箒は変貌してしまった自身に失望し、変貌しない一夏に憧憬を抱いき、自分の持つ事の出来なかつた物を持っている一夏に強く引き寄せられた。

もう一度、自分も戻れるかも知れないと言う、微かな希望胸に抱いて一夏を欲した。

そして、箒は気付いてしまった。

あの時、力を手に入れた自分は何も学ばなかつたのだと言う事を、一夏への愛の全てが醜い欲望と自己愛から来るものだと、気が付いてしまった。

故に、箒は動く事が出来ない。

今一度、自身に失望してしまったから。

三度目の絶望の味を恐れてしまったから。

これ以上、自分に失望して自分が傷付きたく無いから。

「つつう!!」

「くっ!!」

「うあ!!」

「っ!!」

四人がゴスペルに容易く弾き飛ばされた。

「・・・」

何とも滑稽で無駄な足掻きをしたものだと言は嗤う。

「・・・いや・・・滑稽なのは私か・・・」

顔を伏せた言は、今度は自分を嗤う。

「・・・」

言の手から空裂がスルリと抜けて海へと落ちて行く。

虚無に支配されて戦う意味を失ってしまった言には、刀を握っている事が出来なくなってしまった。

せめて、嘗て剣の道に進んだ者として、これ以上は刀を汚さぬ様にと言は嗤う。

空っぽの抜け殻に成ってしまった。

言の恋が今、二度目の終わりを告げた。

「落とし物だぞ?言」

だから言ノ言は、三度、織斑一夏に恋をした。

第三十八話

「ここは・・・?」

織斑一夏は一人呟いた。

彼が眼を覚ました時、そこは病院のベッドの上などでは無く、何も無い何処までも続く青空と、空を映した鏡の様な世界だった。

「何なんだ?ここは」

少し不安になつて、もう一度呟いてみるが、一夏の言葉は深い蒼の世界に吸い込まれるだけで、応えは何も返つてこない。

非常に幻想的で素晴らしい景色の筈の世界は、その実、寂しく切ない様に一夏には思えてならなかった。

「・・・」

手持ち無沙汰に、グルリと周囲を見回してみた一夏は、その目に写る景色が何処を見ても同じ蒼の世界である事を確かめると落胆する。

そうして、溜息でも吐こうかと息を一口吸い込んだ瞬間、不意に一陣の風が吹いて一夏を背後から押した。

「っ・・・」

二秒か三秒ほどの風が吹き止んだ頃、一夏は恐る恐ると背後を振り返る。

「・・・アンタは」

「・・・」

振り返った一夏の目の前には、一人の甲冑を纏った女性が立っていた。

「アンタが白騎士なのか?」

「・・・」

荒く不鮮明な写真や画像で何度か目にした事の有るその姿は、目の前の人物の纏うISのそれと酷似しており、一夏はそれが白騎士なのだと言う確信を持った。

「・・・」

「・・・」

一夏と白騎士、二人は暫し無言で見つめ合う。

見つめ合うと言つても、一夏よりも幾分高い目線の白騎士は顔をバ
イザーで隠している為に本当に一夏を見ているのかは定かでは無く。
一見すれば、ただ一夏が物言わない甲冑を見上げているかの様だ。

「……」

「……」

「……って言うか」

不意に一夏が口を開いた。

「千冬姉だろ」

「っ!？」

一夏はその甲冑の正体が自身の姉だと確信を持って呼び掛ける。

「何やってんだ？そんな格好で」

「違うっ!」

「いや……千冬姉だろ……声もまんまだし」

「っ!!」

否定しようとする白騎士が声を上げると、一夏は更に追撃で織斑千
冬本人だろうと詰め寄る。

事実、本当に織斑千冬本人なのだから、本人は面食らった。

「そんなんで隠せると思つてんのか？千冬姉」

「ち、違うぞ！私は織斑某とは無関係だ!」

「いや……それ無理有りすぎるって」

何となく、一夏は元々からそうなのでは無いかと言う疑問は持つて
いた。

だが、ここに来て、実際に目の前に来て見てみると、その疑問は確
信に変わる。

「千冬姉……俺が千冬姉を見間違える訳無いだろ?」

「……む」

一夏にとつて千冬とは、この世の中で唯一にして無二の肉親であ
る。

ただ一人の血を分けた家族であり、自身がこの世で最も信頼し憧れ
ている人物なのだ。

その千冬を見紛う事は有り得ない事だった。

「・・・一体どう言う事情が有るのかは・・・まあ、何となく察しが付くけど、今は気にしないでおくとして」

「・・・」

「・・・千冬姉は自分が何をやったのかはちゃんと分かっているんだよな?」

「・・・」

白騎士は何も答えなかった。

領きもせず、身動きもせず、何の反応も示さない。

そんな白騎士を、一夏は暫く眺めて溜息を吐いて言った。

「・・・これ以上は何も言わないよ。千冬姉がお天道様に顔向けできない様な事はするはずが無いからな」

「っ!」

一夏は完全なる信頼を姉に向けて笑う。

その一夏の言葉と笑顔に一切答える事の無い白騎士は、その手が僅かに震えていた。

「で・・・何やってんだ?千冬姉?」

「・・・私は織斑千冬では無い」

「分かったよ。じゃあ・・・白騎士さんか?」

「・・・そう呼べ」

漸く話がまとまり掛けた矢先、二人の下に新たな人影が近づく。

「デュフフフｗｗｗｗお久し振りで御座るｗｗｗｗ一夏氏ｗｗｗｗ」

「小田!」

この場に居るはずの無い豚の姿が有った。

「ｗｗｗｗ」

「小田・・・と言うか久し振りって?」

「いやはやｗｗｗｗ何となく一月半ぶりくらいな気がしてｗｗｗｗ」

「?・・・昨日の今日だろう?何を言っているんだ?」

「デュフフフｗｗｗｗ一夏氏にはまだ分からない世界の真実があるので御座るよｗｗｗｗ」

等と意味の不明な事を言って二人を困惑させるオタクは、しかし、何故ここに居るのかと言う疑問には全く答えていない。

「それで・・・貴様は何故ここに居る」

「wwwそろそろシリアス展開が続いていたで御座るからなwwwこの小説がコメディを目指しているのを忘れないためにwww」

「また訳の分からん事を」

「www・・・まあ、マジレスすると、拙者はここに居てここに居ないので御座る」

「どう言う事なんだ？」

少し真面目なトーンになったオタクに、一夏が更に疑問を打つける。

「・・・多分、拙者の本体は今は、現実の世界で戦っている筈で御座る」
「現実？」

「そう・・・ここは現実ではない。ここは、一夏氏の精神の中の世界：：要するにここは一夏氏の夢の中だったんだよ！」

「二な、何だつてー!!!」

「い、今どっからか声が!？」

「相変わらず訳の分からん・・・」

某ノストラダムスのストーカーの様なポーズでオタクが言葉を放つと、何処からともなく驚愕の音が響く。

一夏はその現象に驚いて辺りを見回し、白騎士は呆れた様に溜息を吐いた。

「じゃあ、この風景は？」

一夏は辺りの風景を見回してオタクに尋ねた。

「ここは恐らくウユニ塩湖で御座ろう」

「ウユニ塩湖？」

「南米のボリビアに存在する塩原の事だ。ボリビア中央西部、アルティプラーノにある塩の大地、標高約3,700m、南北約100km、東西約250km、面積約10,582平方kmの広大な塩の固まり。現地での本来の呼び名はトゥヌパ塩原であり、これはウユニを麓に有する山、トゥヌパ山に由来する。塩原の中央付近で周りを見渡すと、視界の限り真っ白の平地であり寒冷な気候もあって、雪原の直中にあるような錯覚を起こす」

「以上、ウィキペディアよりw w w」
「成る程」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ここに来て、三人とも黙り込んでしまう。

ここが夢で、場所がウユニ塩湖で、現実の世界がピンチなのは分かっているのだが、解決方法が全く浮かばないのだ。

「如何すれば良いんだ？」

「それは分からないで御座るなw w w」

「如何して？」

「ここは夢の中・・・詰まり拙者もまた、一夏氏の見ている夢幻に過ぎないので御座る」

「即ち、私達はお前のイメージする私達としてここに居る。お前の分からない事は私達にも分からない」

「小説の中のキャラクターが作者以上に頭が良くなる事が出来ないのと同じで御座るなw w w」

非常に耳に痛い補足を付け加えて、オタクは嗤う。

「何だよそれ・・・」

「w w w」

ガツクリと項垂れる一夏を、オタクは指差して嗤う。

一夏のイメージの為か、若干性格が悪い様だ。

「一夏」

千冬が一夏に声を掛けた。

千冬の方は、若干イメージが美化されており、僅かに優しくなっている。

「何だよ千冬姉」

「お前は・・・後悔はしていないか？」

「は？」

「お前は望まないままに学園へ来た。その事にお前は思うところは無いのか？」

千冬に問われて、一夏は少し考える様な素振りを見せて、それから答えた。

「後悔は・・・無いって言ったら嘘になる」
「・・・」

「けど・・・けど、今は楽しいよ。千冬姉が居て、箒が居て・・・小田や皆が居て・・・大変なことも有るけど、こんな楽しい生活は他では出来ないよ」

「・・・そうか」

一夏の応えを聞いて、姉弟は暫し無言で視線を交わす。

「俺・・・行かなくちゃ」

「そうか・・・」

一夏は眼光鋭く空を睥む。

最早、ここでこうして、のんびりなどしては居られない。

今、外の現実で戦う友達の下に、行かなければならないのだと、一夏の心は炎の如く燃え上がる。

「一夏氏も立派になったで御座るなwww」

「そりや・・・まあな」

「まあ・・・拙者は所詮は一夏氏の想像でしか無いので御座るが・・・それでも、現実の拙者も、今の一夏氏を見れば同じ様に思うはずで御座る」

「小田・・・」

「あと、くれぐれも投稿が遅いとか、時間が掛かった割に文字数が少ないとか、キャラが少しブレてるとか、あんまり凹みそうな事は言わないで欲しいで御座るwww」

「何だよそれ・・・」

「一夏氏にも何時か分かる時がくるで御座るよ」

「・・・」

それから一夏は自然と瞼を閉じた。

何の気なしに、何の違和感も無く、そうすれば夢から覚めると言う確信を持って瞳を閉じた。

「・・・知らない天井だ」

目が覚めて一夏は眩く。

「何を馬鹿な事を言っている」

そんな一夏に、聞き慣れた声が掛けられた。

「千冬姉」

「織斑先生だ。馬鹿者」

何時も通り、公私を別けると言う千冬の言葉に一夏は笑みを浮かべる。

「なあ、千冬姉」

「織斑先生だと言っているだろう・・・で、何だ？」

「千冬姉って、白騎士なのか？」

「・・・！」

一夏の問い掛けに千冬は何も答えなかった。

だが、珍しく信条を露わにしまった千冬表情を見て、一夏は納得して言った。

「答えなくて良いよ・・・誰にも言わない」

「・・・」

「けど・・・あんまり弟に心配掛けないでくれよ」

「・・・」

「って言う訳で・・・コレから千冬姉に心配と迷惑を掛けるけど・・・」

「コレでお相子な？」

「っ・・・馬鹿者め」

千冬の返しを聞いて、一夏はベッドから抜け出した。

それから止めもしない千冬に目もくれずに病室を抜け出していった。

「・・・全く馬鹿者め」

一人残った千冬は、自嘲する様に眩いて一夏の温もりの残るベッドに腰掛ける。

嬉しい様な、しかし、何処か寂しい様な、そんな複雑な心境を現し

て窓から空を見上げた。

第三十九話

夜の海の上空の闇の中で、一夏は不敵に笑って友人達の前に現れた。

「落とし物だぞ? 箒」

「そう言つて箒に空裂を差し出した。」

悪戯っぽいような笑顔で、一番の幼馴染みに刀を手渡す。

「一夏……」

箒は自然と涙を流した。

無事でいた事に涙した。

「一夏!!」

一夏の直ぐ側に鈴が飛んできた。

セシリアも、ラウラも、シャルロットも、皆一様に一夏の復帰を喜んで笑顔を見せる。

「待たせたな」

「待たせすぎよ! バカア……!」

「悪い」

片目を閉じて鈴に謝りながら、一夏はシルバリオ・ゴスペルに意識を向けた。

「……まあ、男としては、負けっぱなしじゃ居られないだろ?」

精悍な男らしい顔付きでゴスペルを見上げるその横顔に、思わず鈴も箒も見とれて惚ける。

「……」

白銀の余りにも美しい死の天使を前に、一夏は畏れもせずに見詰め続ける。

「行くぜ?」

挑むような仕草で宣言すると同時に、一夏は一気にゴスペルに向かって飛び掛かる。

一瞬でトップスピードにまで加速して、雪片二型を構える。

「……!」

ゴスペルは一夏が動き出すのとはほぼ同時に、迎え撃つ構えを取つ

た。

自身に向かってくる一夏に対して、ゴスペルは雨霰の如くに光の雨を浴びせる。

「っ！」

一瞬、一夏は逡巡する。

が、直ぐに迷いを斬り捨てて真っ直ぐにゴスペルへと向かった。

弾丸の嵐の中を突き進み、最小の動きで敵の攻撃を躲し続け、肉弾の届く所を目指す。

「・・・！」

ゴスペルのAIが一夏の判断を見て驚愕した。

何の策も無い我武者羅な突進に、一瞬だけ硬直した。

それを見た一夏が不敵に笑う。

「つつああ!!」

ほんの一瞬、ほんの僅かな、瞬きほどの間だった。

瞬時加速で一気に距離を詰めた一夏は気合いと共に雪片を一閃させた。

「!!」

だが、ただで一刀を受けるほど、ゴスペルも甘くは無い。

一瞬のフリーズから脱すると、直ぐに右の手刀を振るって雪片の刀身を弾いて流し、それから左手で返しの貫手を放つ。

「っ！」

ゴスペルの貫手に対する一夏の反応は的確だった。

ほぼノータイムでゴスペルの貫手を雪片で受け流し、そこからゴスペルの懐に入り込んで雪片の柄の頭を胸に突き込んだ。

「ったああ!!」

「!!」

ダメージとしては大した物では無い。

だが、この戦闘に入ってはじめて、ゴスペルは無防備のまままで攻撃を受けた。

ゴスペルは、目の前の一夏に対して警戒を最大限に引き上げた。

「・・・」

一夏も一連の攻防からゴスペルの大まかな実力を感じ取った。その上で、一夏はゴスペルに対してのその強さを認めつつも、ラウラ達ほどには過剰に恐れは抱かない。

何故ならば、一夏にとつて、強力な相手、格上の相手と戦うというのは、何時だつて当たり前の事だつたからだ。

学園に入ってから、学園に入る前から、一夏には目標がある。

自分の目の前の道の遙か彼方を進むその背中を何時かは追い抜くと言う、細やかながら果てしない夢を追い掛けている。

敵は常に自身を超える強者ばかり、対する自分は何時だつて力不足。

そんな一夏だからこそ、圧倒的な相手に対しても一分も恐れも気負いもしない。

「はあっ!!」

刀を手元に引いて、担ぐ様な体勢から、一挙に斬り掛かる。

一夏らしく真っ直ぐで迷いの無い剣は、迎え撃つゴスペルの指先と打つかり合つて火花を散らした。

ゴスペルの両の貫手に対して一刀のみの一夏は手数では劣る。

にもかかわらず、一夏はゴスペルを圧倒して優位に立っていた。

その様子を眺める四人はただただ驚くばかりだ。

「何故・・・一夏がアレほどに」

一番信じられないのは箒だろう。

箒でさえ、片手間のゴスペルとの撃ち合いに打ち負けたと言うのに、それでも一夏は余裕を持ってゴスペルの打ち合いを制しつつある。

箒は開いた口も塞がらないと言う風に呆然とするしかなかった。

「っ!!」

一夏の頬を汗が伝う。

一夏自身、平静を保とうとしていたが、しかし、その実、見た目以上に消耗している。

一夏は手数と攻撃の精度で勝る相手との打ち合いに対して、必死の思いで食らい付き、無理をしても攻撃に出続けている。

箒がゴスペルの手刀、貫手を受けていなそうとしていたのに対して、一夏は無理矢理に先手を打ち続けて相手の攻撃の出足を潰し続ける。

「くっ!!」

言うは易いが、しかし、実行するとなれば生半可な事では無い。

だが、一夏は分かっているのだ。

格上に対して守りに回ってもただジリ貧になるだけだと、コレまでの経験で熟知している。

そして、一夏にとつて、打ち合う事、相手の出足を潰す事、それが出来ている時点で普段から想定している相手よりも格段に劣る相手なのだ。

「うおおおおお!!」

一夏は更に攻勢を強めた。

この程度の相手に勝てなければ、一生掛かっても追い付かない。

ゴスペルと戦う最中に、一夏はその先の相手に意識を向け始めたのだ。

そこに幻想するのは、常に最強だった姉の姿。

世界最強の背中を追い続け、その背の頼もしさと速さに己の未熟さを確認する。

一夏にとつて、本当に挑むべきは何時だって、目の前の相手ではなく、常に先を行く背中だった。

「!？」

ゴスペルのシステムに負荷が掛かる。

言語化する事も出来ず、データにもグラフにも表す事の出来ない正体不明のバグがシステムに圧を掛け始めた。

「!・・・?」

蓄積され始めたバグが、一瞬、ゴスペルの動きにラグを発生させる。その刹那の瞬間を一夏は見逃さない。

「っ!・・・そこだあああ!!」

胸を狙った一夏の突きは、硬直から解けた直後

のゴスペルには完全に対処する事は出来なかった。

「!!」

闘いが始まって初めて、ゴスペルに対しての有効打が決まった。

「もう一丁!!」

突きを放った姿勢から、直ぐに刀をひいて、今度は右からの横殴りの一撃を放つ。

「!!」

しかし、流石に、コレにはゴスペルも対応して見せて、一夏の一撃は素気なく左手で弾かれる。

「チツ!!」

攻撃が弾かれるや、一夏は、直ぐにゴスペルから身体一個分引いて体勢を立て直した。

対するゴスペルも、不用意に追い掛けはせず、様子を見る様に一夏を睨む。

「スゴい・・・」

シャルロットが思わずと言う風に言葉を漏らす。

「・・・」

その隣で同意する様にラウラが一夏を眺めて頷く。

二人とも決して一夏を侮っていた訳では無い。

客観的に自身と一夏の強さの差と言う物を判定して、その上でゴスペルの強さには敵わないと判断していた。

その筈なのに、一夏は、厳に目の前でゴスペルと互角の戦いを見せている。

それは、本当に驚くべき事で有り、一瞬、ラウラは本当に本物の一夏なのかと疑った程である。

「っ!!」

ゴスペルが動き出した。

一瞬で間を詰めたゴスペルからの鋭い手刀に、一夏も直ぐさま反応して刀で弾く。

一度の瞬きの間に幾度も繰り出される両者の剣と拳に、一度は加勢するかと考えたラウラ達は、直ぐにその考えを棄てた。

「っ!!」

ゴスペルに一呼吸置かせたのは一夏のミスだった。

それまで先手を取り続けた一夏は、一度互いに動きを止めてしまった所為で、ゴスペルに先手を譲ってしまった。

「くっ！」

辛うじて、雪片を振るってゴスペルの攻撃を防ぐ一夏だが、その旗色が徐々に悪くなり始める。

防戦に回った瞬間に、一夏の反撃の目を潰されて技量で勝るゴスペルに圧倒され始めたのだ。

「クソッ!!」

苛つき紛れの言葉を吐きながら、一夏は現状を打開する案を考える。

だが、怒濤の勢いのゴスペルの連撃が、一夏の思考を著しく阻害して、手を動かそうとする一夏を妨害した。

「っ!!しまっ!!」

一瞬だった。

ゴスペルが胸を狙った右の貫手を放った瞬間、一夏はガードのために刀を構える。

だが、その動きはゴスペルの狙う所で、直ぐに手を引いて今度は一夏の顔面に左の貫手を出してきた。

フェイントに掛かった一夏には、ガードは間に合わず、最後の足掻きに一夏は首を振って見せた。

「!!」

一夏の眼前にゴスペルの指先が迫るが、次の瞬間に、激しい衝突音と共にゴスペルが弾き飛ばされた。

「大丈夫!一夏!」

「鈴!」

一夏を救ったのは鈴だった。

「助かったよ」

札を言いながら一夏は鈴によって弾き飛ばされたゴスペルに向き直る。

「アンタ、身体大丈夫なの?」

一夏と同じように、青竜刀を構えた鈴が言った。

「実はガタガタなんだ」

笑いながら一夏が答えると、鈴はゴスペルから視線を外さずに返す。

「なら、病人は寝てなさい!!よっ!!」

言いながら、鈴がゴスペルに突っ込む。

上段から振り下ろした一撃は、しかし、容易くゴスペルに受け止められ、ゴスペルはそんな鈴に直ぐに反撃に出ようとする。

「この程度!!屁でも無いさ!!」

だが、鈴の後から一夏が現れてゴスペルの攻撃を弾いた。

「なら泣き言言ってんじゃ無いわよ!!」

直ぐさま鈴が一夏に合わせてゴスペルに再び双天牙月を振るった。

横風の一撃を、ゴスペルは後に宙返りするように躲して見せるが、

再び鈴の姿を捉えた時、そこにもう一人の姿が無い。

「もうちよつと優しくしても良いだろ!!」

次の瞬間、ゴスペルを背後からの一撃が襲った。

「!!?」

あの一瞬でゴスペルの背後に移動していた一夏が、後から斬り付けたのだ。

これには、ゴスペルも反応できず、ほぼ無防備で一夏の雪片の一撃を受けた。

「帰ったら優しくしてやるわよ」

「そうかい・・・なら、無事に帰らないとな」

一夏と鈴が並んで刀を構えた。

「!!」

相対するゴスペルは、鈴に対する戦力評価を書き直す。

明らかにさつきまでの鈴の動きとは違っている。ゴスペルは判断するが、しかし、何故、いきなり見違えるほどに強化されのか、ゴスペルには分からない。

「行くぞ!!」

再び一夏と鈴がゴスペルに向かう。

「!!」

二人の接近を嫌ったゴスペルは、直ぐさま対応策を講じる。背中の翼を広げると、二人に集中してシルバー・ベルの射撃を見舞った。

「っー」

「んのお!!」

出鼻を挫かれた二人は、直ぐに回避行動を取ろうとするが余りにも間が無かった。

「ツハア!!」

直撃の直前、一夏は咄嗟に鈴を護ろうと前に躍り出た。

自分の身を楯にしても鈴を護ろうとした咄嗟の行動は、しかし、無駄に終わる。

「嫁よ、大事ないか?」

寸での所でラウラが一夏とシルバー・ベルのエネルギー弾の弾幕の間に身体を滑り込ませ、右手を掲げてA I Cを発動させた。

「・・・ああ! ありがとう」

接近を防いだゴスペルの目論見は中った。

だが、この場に居るのは一夏達だけでは無い。

「っえあああああ!!」

箒がゴスペルの頭上から斬り掛かる。

「!!」

意図していなかった頭上からの強襲は、ゴスペルのシステムに負荷を掛ける。

その負荷によって鈍ったゴスペルは、僅かに遅れて反応して右手で攻撃を防ぐが、箒はそれが狙いだった。

「そこだあああああ!!」

気合いを込めた叫びと共に、箒は左手で雨月を抜き放って二撃目を見舞った。

「!!」

ゴスペルは一瞬身を引いてこの攻撃を躲すと、今度は自分から手刀を繰り出して箒に反撃に出る。

「そこお!!」

だが、箒も然る者。

先程までの一夏の戦い方を見て学習した箒は、繰り出そうとしたゴスペルの手刀を空裂で潰し、更に雨月を上段から振り下ろす。

「!？」

やはり、鈴同様にさつきよりも動きの良い箒に、ゴスペルは再び戦力評価を書き直しながら振り下ろされる刀を右の手刀で受ける。

手刀と刀が打つかって火花が散り、ゴスペルの動きが僅かに鈍る。

「はあっ!!」

一撃を受け止められた箒は、そこで動きを止めずにゴスペルに蹴りを見舞う。

「!!」

予想外の箒からの蹴りに、ゴスペルは咄嗟にスラスタを噴かして躲し、そのまま距離を取ろうとした。

「逃がさないよ」

ゴスペルが箒から逃げ様とすると、今度はシャルロットがゴスペルに向かってライフルで牽制する。

夜空を切り裂く25mmの砲弾は、ゴスペルの眼前を通って闇に溶ける。

それと同時にゴスペルは直ぐに反転して軌道を変更する。

だが、それはシャルロットに取って思いう壺だ。

「計画通り」

シャルロットは、剣呑な目付きで口許を歪ませ、顔に似合わない邪悪な笑みを浮かべる。

それと同時に、背中のコンテナを解放した。

金属製の縦長のコンテナが開くと、中から表れたのは、剥き出しのジェットエンジンだった。

「それじゃ・・・逝くよっ」

甲高い音と共にエンジンが始動すると、青白い炎がノズルから噴き出してラファールを強引に加速させる。

「っ!!」

凄まじいGがシャルロットの身体を襲った。

ISの機能によって軽減されて尚、体重の何倍もの重力が彼女の身体を押し潰して意識を奪おうとする。

その極限の中にあっても、シャルロットは笑みを浮かべていた。

「!!」

ゴスペルは危険を感じた。

AIが恐怖を感じた。

それと同時に最高速度で夜空に飛び出した。

音を超えた速度で星の海の中を飛び回って、シャルロットを振り切りろうとした。

しかし、背後から迫るジェットの甲高い音は、徐々に近付いている。

その事実が、ゴスペルを心底恐怖させる。

「逃がさないって・・・言ったよね?」

仄暗い微笑みを讃えたシャルロットの両手には、何時の間にか手斧が握られている。

「何故、フランス人って言うか知ってる?」

シャルロットから逃れる為にゴスペルは急降下して海面ギリギリに向かう。

「元々フランス人はフランク人って言うんだよ?」

だが、二発のターボファンエンジンで加速したラファールは容易くゴスペルに追い付いてしまう。

「!?!」

今度はゴスペルは上昇し、フェイントを織り交ぜながらきりもみ飛行を試す。

「じゃあ・・・なんでフランク人って言うのかは分かるかな?かな?」

それでも、シャルロットは完全にゴスペルの背後を取り続けた。

「答えは・・・フランクスカを使うからだよ!」

そして、シャルロットは背後からゴスペルの翼にフランクスカを叩き付けた。

「!!!」

「っ!僕は!!本当に!!怒って!!るんだから!!ね!!!」

深々とめり込んだフランキスカを左手で掴んで支えにして、シャルロットは怨嗟の言葉を叫びながら右手のフランキスカを振るい続ける。

「シルバリオ・ゴスペルなんて、大層な名前で!!君にはレクイエムがお似合いだよ!!!」

まるで雀り取るように、シャルロットはゴスペルの背中の翼の内の一つを破壊した。

「シャル!!」

シャルロットに掴まれた状態で跳ぶゴスペルの前に、一夏が出た。

「一夏あ!!」

シャルロットは、一夏に気が付くと直ぐに、ゴスペルの機体を掴んで、そのままエンジンを噴かして一夏の方へと無理矢理向かわせる。

「逝くよ!!一夏!!」

「来い!!!」

一夏は雪片を構えた。

姉と同じ最強の刃を剥き出しにして、超音速で向かってくる目標を狙った。

「っ!!」

シャルロットがゴスペルを放して離脱すると、そのまま体勢を崩したゴスペルと一夏が交差する。

交差する刹那、一夏は刀を振るってゴスペルの胸を刃で撫でる。

零落白夜による絶大なダメージがゴスペルのAIをクラッシュさせ、そのまま海面に叩き付けられると水切りの様に海面でバウンドして、操縦者の保護機構が作動する。

「・・・」

考えられる限りで最大のダメージを与えた。

何だかんだで、一夏の方も消耗が激しく、最後の零落白夜の使用でエネルギーはほぼゼロに近い。

また、かなり無茶な事をしたシャルロットのラファールも、機体全体にかなりのダメージを負っており、他の面子もエネルギーはギリギリだ。

「・・・頼むからお約束は無しで頼むぞ」

一夏が冗談めかして呟いた瞬間、一番ダメージの少ないセシリアが一夏の側に寄って口を開く。

「やりましたの？」

第四十話

セシリアが回復呪文を唱える十分ほど前、横田基地内の病院の一室をある男が尋ねていた。

病室には女性が一人ベッドに寝かせられていて、その女性は、人の気配に気付いたのか、眼を覚まして上体を起こす。

「・・・貴方は？」

病室の主である女性は、暗い部屋の中に佇む

一人の見慣れない日本人に声を掛けた。

「貴女の同盟国の人間ですよ。Miss ファイルズ」

「噂に聞くナカノスクールの人・・・かしら？」

女性、ナターシャ・ファイルズの問い掛けに対して、訪問者は苦笑して答える。

「その名前は少し古い。・・・まあ、同盟国の誼で名前だけでも名乗りましょう」

「不躰な人ね」

不満げなナターシャに男は告げる。

「私は平内と申します」

「ヒラナイ？」

ナターシャは今自分が何処に居るのかは正確には把握していなかったが、何となくは分かっていた。

状況から察して、日本国内の米軍病院の何処か、恐らくは横田当たりだろうと考えていた。

それ故に、目の前の男が何故居るのが分からない。

もつと言えば、海軍の人間も誰も居ない事が気掛かりで成らなかった。

そんな彼女の疑念に答える様に、平内はアルカイツクスマイルを浮かべて口を開く。

「疑問は有るだろうが・・・まあ、アレだ」

「？」

「知る必要の無い事って奴だ。アンタの立場なら分かるだろう？」

そう言うと、ナターシヤは短く嘆息する。

「何時から私は、クライムサスペンスの登場人物になったのかしら・・・」

「残念。現実是非情で有る。ってね」

平内は、嗤いながら頷いて見せて、ナターシヤに近づいて行って、ベッドの側の椅子に腰掛けた。

それから、黒いバッグから紙束を取り出して読み上げる。

「ナターシヤ・ファイルズ。階級は中尉、アメリカ海軍航空隊IS実証部隊所属、シルバリオ・ゴスペルのパイロット・・・」

「アビエイターよ」

「失礼」

ナターシヤの指摘に、平内は苦笑して訂正する。

「ゴスペルのアビエイター。出身はアイオワ州デモイン、母親は実業家、父親は上院議員。ハイスクール卒業後にアナポリスに入校、その後はパイロットを志す。ミス・アナポリス三年連続受賞、チアリーダーディングのキャプテンを二年務め、本格的に部隊配属後は美人過ぎる戦闘機乗りとして雑誌の表紙を飾る。過去には嘉手納、横田、三沢にも配属経験有り。去年からISのテスト操縦者になる」

「・・・それで？」

「まあ・・・何というか、絵に描いた様なエリート様って感じだな。・・・将来は大統領選にでも出るのかい？」

「それは私の決める事じゃ無いでしょう？」

平内の嫌味に答えて、ナターシヤは目の前の日本人を睨んだ。

「そんなに見詰めないでくれ。照れちまうよ」

「下手なジョークは言わないでちょうだい」

「・・・アメリカ人はジョークが好きって聞いたんだがな」

残念そうな風にして口を尖らせた平内は、手にしていた紙の束をカバンにしまつて、ナターシヤを正面から見据える。

「中尉」

「何かしら？」

「あそこで何が有った」

「あそこ？」

「・・・何故中尉がここに居る」

「どう言う・・・」

雰囲気の変わった平内は、ナターシヤをやや避難げに追求して、質問を浴びせ掛けた。

「・・・何故君がここに居るのにゴスペルが動き続けている。一体、何が有ったんだ？」

「・・・」

ナターシヤは一瞬眼を伏せた。

それから、窓の外に顔を向けて、暫し夜空を見上げる。

それから意を決した様に口を開く。

「マスターチーフに助けられたわ」

「マスター・・・曹長か・・・て事は、小田が？」

「オタって言う名前なのかしら？」

マスターチーフ、より正確にはMaster Chief Petty Officerと言い、正確な日本語訳は最先任上級曹長となる。

某宇宙的なヒーローの事では無い。

と言うか、オタクの階級は曹長なので、英語訳はSergeant Majorとなり、マスターチーフは誤りで有る。

「詳しい事は私にも分からないわ。・・・ただ、あの子が彼を気に入ったからかもしれないわね」

「気に入った？」

平内は首を傾げた。

知識としてISと言う物は理解しているつもりだったが、しかし、本当の所の細かいニュアンスにまでは理解が及んでいない。

平内を始め、殆どの人間に取ってはISと言うのは、単なるパワードスーツの延長でしか無いのだ。

「あの戦闘の時・・・あの子のコアが異常に反応を示した」

「反応？」

「ええ・・・何と言うか・・・子供が初恋の男の子に会った時みたいな

感じかしら」

「余計に分からん」

「・・・そうかも知れないわね」

ナターシャは他人には分からないだろうと、少し寂しそうに笑う。

「まあ良い・・・それで、小田は何処に居るんだ？アイツだけまだ見付かってないんだ。空母の中は探し尽くしたし、何らなら海保に出動要請を出さなきゃ行けないんでね」

「・・・あの子・・・シルバリオ・ゴスペルは何処に居るの？」

「ああ？・・・まだ太平洋上だ」

「そう・・・ならそこに居るわ」

「どう言う・・・」

平内には嫌な予感がしてきていた。

ナターシャの言わんとしている事の意味が、理解できてしまったのに、それを拒もうと必死に頭を巡らせる。

だがそんな平内の努力を吹き飛ばす言葉が、ナターシャの口から放たれた。

「今、あの子の操縦をしているのは、オタ曹長よ」

「デユフフフｗｗｗｗ」

不敵に笑ってみせるオタクは、視界に迫る二発のミサイルを見て確信した。

「どうにもｗｗｗｗ何ねえｗｗｗｗ」

自分の意志では全く機体を操る事は出来ない。

全てはゴスペルに搭載されたAIがコントロールしており、オタクはただ何も出来ずに操り人形になるしか無かった。

「てか・・・なんでこんな事に？」

実を言うと、オタクの意識が戻ったのはつい先程の事だ。

丁度一夏によってゴスペルが撃墜された後、そこで漸く意識の戻ったオタクは、自分がどう言う状況にあるのかも分からないままに沈ん

で行く機体を浮かび上がらせた。

そして、目の前に一夏とセシリアの姿を見付けた瞬間、年の離れた友人達に呼び掛けようとしたのも束の間に、自分がロックされた事を告げるアラートが鳴ったのだ。

その時は、瞬時に回避行動をと思つて右に飛ぼうとしたのだが、そんな自身の意志を無視する様に、機体は急上昇して一気に加速した。この段階で漸く、自由が利かない事と自身がゴスペルを纏っている事に気が付いた。

「www笑うしかねえやwww」

諦めたように笑うオタクは、それでも懸命に機体をコントロールしようとして藻掻く。

だが、そんなオタクの抵抗を嘲笑うかの様に、ゴスペルは自由気ままに夜空を切り裂いて飛翔した。

「つてか・・・今のミサイルは？」

疑問に思つた事を口にする、視界の中にHUDが表示された。

「AAM4？」

99式空対空誘導弾。

国産の中距離空対空ミサイルの事で、ニッポンの面妖な技術者達の創造性と技術の粋を集めて造られた変態ミサイルである。

「コレは・・・平内の言っていた奴か？」

オタクは友人の平内の言っていた事を思いだして、現状を想像する。

現在、暴走状態にあるゴスペルに対して、自衛隊は出動を決定し、行動を開始していた。

三沢基地の302飛行隊と松島に移動していた303飛行隊が出撃し、現在はF-15装備の303飛行隊がゴスペルに対しての初撃を放った所だ。

自衛隊側の作戦としては、303のF-15が攻撃を行った後、302がF-35のステルスを生かして接近、両隊による波状攻撃を実施してゴスペルに高度制限を掛ける。

その後、海上自衛隊の護衛艦かがを飛び立った戦闘機隊による攻撃

を実施し、航空と海上の飛行隊の連携でゴスペルを低空に縫い付けつつ護衛艦隊の方へと誘導、最後は護衛艦からも速射砲と艦対空ミサイルによる集中攻撃で撃破を狙う。

そして、ゴスペルは順調に自衛隊の戦略に嵌まりつつあった。

「っ!!」

ゴスペルの機動は素晴らしいの一言に尽きる。

恐らくは前IS中でも最高峰の機動力だろう。

だが、そのゴスペルの機動力を持ってしても、複数方向から飛んでくるミサイルを避けきる事は出来なかった。

「くっ!!」

ゴスペルの白銀の装甲が直撃するミサイルで黒く煤けて、衝撃でパーツが弾き飛ばされる。

「・・・最強の兵器かwwwこの程度で最強かwww」

オタクは自嘲した。

ゴスペルのAIは必死になってミサイルの発射母機を特定しようとした。

だが、100km以上も離れた彼方を、音速に近い速度で飛び回る戦闘機を捉える能力は、ゴスペルにも、ましてや他のISにも備えられて居るものでは無かった。

世界最強の兵器を名乗ってきたインフィニット・ストラトスと言う人形は、いざ実際に戦ってみれば、たった一機の旧世代の戦闘機すらも捕捉する事も叶わないでいる。

「俺の言った事は正しかったな・・・」

嘗てクラスメイト達に向けて放った一言は、今、自分自身が纏った状態で証明されようとしていた。

その事をオタクは嗤った。

『ピンポンパンポン！やあやあ！ブタ君元気になっているかな？』

無常感に包まれていたオタクに声が掛けられた。

「ツチ・・・」

『どうやら元気ないみたいだね〜！いや〜！愉快愉快!!』

篠ノ之束は、オタクが危機に陥っている事に対して愉快だとのた

まった。

その事がオタクの神経を逆なでて、酷く不快にさせる。

「何の用だよ・・・」

『いや〜！最後に君に面白い事を教えてあげようと思ってね』

何かと問えば、東は実に嬉しそうに答える。

『実を言うとな〜東さんの目的は最初から君の抹殺だったんだよ！』

「あん？」

『兼ねてから君の事が邪魔で邪魔で仕方が無くてね〜。このために態々アメリカの大統領さんの思考誘導までしたんだよ！どう？凄いでしょ』

「・・・マジかよ」

とんでもない事を言い出す東に、オタクは戦慄して言葉を漏らす。

その反応が気に入ったのか、東は更に得意げになって言う。

『安心してね！君が死んだ後は東さんが責任を持って、君に関わった人達をデリートしてあげるから！』

「は？」

『東さんの理想の世界には君みたいな害虫は要らないからね！君に関わりがあるならそれも同じ害虫だもんね！』

オタクは東の言っている事を理解するのが億劫になった。

東は自分の理想の世界を造ると言っている。

自分に従わない者、自分追いにそぐわない者、自分の気に入らない者、その全てを消し去って自分の理想郷を造ると言っている。

そんな狂人の言葉を聞いて、オタクの中にふつつつと怒りが湧いてくる。

『君の所為でいっくんも箒ちゃんも変に成っちゃったし、チーちゃんも汚されちゃったし。皆を元通りにしなきゃいけないから大変だよ』

この瞬間に、オタクは真の意味で篠ノ之東と言う天災を理解してしまった。

この天災にとって自分以外の全ての物事は取るに足らない事であり、愛していると言って憚らない人物達も、それは愛用の玩具を指して言っているのと変わりが無いのだと。

束は、何の矛盾も無く、無意識の内に自分の事を神の様に考えているのだ。

それを分かってしまったオタクは、人生で感じた事の無い程の怒りを覚えた。

「巫山戯るな!! 貴様は人を!! 世界を何だと思ってるんだ!!」

『何を言ってるのかな? 束さんにとってはそんなのどうでも良いんだよ? コレだから理解力の無いゴミは』

「お前は!! お前は子供だ!! 人形の手足をもいで遊ぶ子供と同じだ!!」

こんな女に世界は滅茶苦茶にされたのかと、そう思うとオタクの身の内に怒りと無念が込み上げて止まらない。

オタクは思ったのだ。

篠ノ之束を野放しにしてはいけない。

生かしておいて良い存在では無い。

存在その物を許してはいけない。

コレは生存競争なのだと思感する。

人類と篠ノ之束と言う天災の、存亡を掛けた戦いなのだ、オタクの本能が感じた。

『何だか束さん疲れちゃった・・・君みたいに頭が悪いのと話した所為だね』

「貴様っ!!」

『じゃあね〜』

それを最後に通信が一方的に切られた。

「くっ!!」

その直後にゴスペルにミサイルが直撃した。

「クッソ!!」

オタクは怒りと遣る瀬なさを感じて、懸命に機体をコントロールしようとする。

だが、どれだけ無理矢理に身体を動かそうとしても、ゴスペルは全く言う事を聞かない。

「っ!!」

オタクは無い頭を振り絞って考える。

その内にある疑問が浮かぶ。

今、自分がゴスペルを纏っているなら、ダンボールはどうなっているのかと言う事だ。

「・・・か八か」

コレがダメなら諦めるしか無いと考えて、オタクは最後の賭に出る。

「強制停止!!」

オタクは望みを託してISの強制停止を実行する。

とどのつまり、待機モードに移行させる為の強制命令を出した。

「うおっ!!」

オタクは賭けに勝った。

展開されていたシルバリオ・ゴスペルが解除されて、オタクは生身のままで夜空に放り出された。

この時一番驚いたのは、攻撃していた自衛隊のパイロット達である。

目標のゴスペルが突如としてレーダー上から影も形も無くなってしまったのだから、かなり驚いた。

ステルス機能も何も無いと聞かされていたが故に、パイロット達は不測の事態を恐れて空域を離脱する方向で動き出す。

その結果、オタクは本当に誰も居ない夜空に一人でノーロープバンジーを決める事に成った。

「うおおおおおおお!!!」

この時のオタクの心境は、第一に寒い、第二に痛い、第三に怖いので、オタクは空気の壁が身体を殴り付けられながら極寒に震えて、何時海面に叩き付けられるかと言う恐怖に耐えた。

そんな状況で、オタクは懸命に時間を数える。

自衛隊のレーダーから逃れるには、直ぐにISを展開するわけには行かず。

海面ギリギリで展開するしか無い。

その海面までの到達時間を懸命に数え続けた。

早すぎれば、再び攻撃に晒され、遅ければ海の藻屑と消える。

「っ!!動けえええ!!」

叫ぶと同時に、オタクは自身の愛機を呼び出す。

身体が光に包まれて、身体を打つ空気の壁が取り払われると、直ぐにオタクの身体を浮遊感が支配する。

「っ……!」

閉じていた瞼を開けば、ISの機能によって明るく写し出された視界が、直ぐ足下の海面に気付かせる。

「……」

一先ず命は助かった。

そう安堵するオタクは、直ぐに緊張感に襲われた。

果たして機体は言う事を聞いてくれるのかと、オタクの背中を冷や汗が伝う。

「……」

意を決したオタクは右手を前に出してみる。

そうすると、オタクの思った様に右手が動き、それからオタクは愛用のライフルを格納領域から取り出す。

「成功……か?」

機体は完全に制御下に有った。

AIはシャットダウンされ、煤けてボロボロに成った白銀の天使は、完全にオタクの意志通りに動いている。

この瞬間に、ありとあらゆる情報が錯綜し、思想や思惑の交差した福音事件は終息した。

そう感じたオタクは安堵の溜息を漏らして、それから通信回線を開く。

「一夏氏www拙者wwwオタクで御座るwww」

四十一話

臨海学校が途中で終わり、生徒達は学園に戻ってきていた。

シルバリオ・ゴスペルとの戦闘によって、愛機を損傷させた四人娘はそれぞれの機体の修復に専念し、箒は箒で、突然渡された紅椿の検査のために専門機関に赴いた。

一夏は戦闘が終わって浜に降り立った直後に気を失ってしまい、今は一時帰宅で実家にて養生中だ。

中心的な生徒を欠いた一年生は意気消沈のまま各々の部屋で待機していた。

「さて・・・色々話を聞かせて貰うぞブタ」

「www三ヶ月ぶりでの仕打ちwww」

「何を訳の分からない事を言っている」

「いやwwwこつちの話で御座るwww・・・作者失踪で終わりと鷹を括っていたらこの様だよ・・・」

「何か言ったか？」

「何でもないで御座るwww」

学園の生徒指導室にて、オタクと千冬は向かい合って座っている。

相変わらずの巫山戯た態度に、好い加減になれてきた千冬が軽く流し、本題に入る。

「貴様の機体の事だ」

「・・・」

「アレは一体何だ？」

千冬の言うオタクの機体とは、ダンボールとゴスペルが融合して出来上がったしまった物の事だ。

あの一件でダンボールとシルバリオ・ゴスペルは完全に融合して離れなく成ってしまい。

今現在は修理の為に防衛省の技術研究部に預けられている。

「お前が、何故あのタイミングで介入できたのかに着いては聞かない
でおいでやろう」

「それは助かる」

「此方としては確認したいのは一点だけだ。．．．お前は敵か？」
鋭い目でオタクを睨む千冬は、全身から殺気を漲らせながら尋ねた。

それに対するオタクは、真剣な面持ちで答える。

「敵では無い。少なくともこの学園の無い」

オタクが答えた暫く後、千冬が殺気を解いて、軽く息を吐きながら背もたれに体重を預けた。

「ならこれ以上聞くことは無い」

「www」

室内の緊張感が霧散して穏やかな雰囲気の流れると、オタクは立ち上がった。

「もう良いか？」

「ああ、構わん」

それだけの遣り取りで、オタクは千冬に背を向けて扉に近づく。

「小田」

千冬がノブに手を掛けたオタクに声を掛ける。

「良く帰ってきた」

「．．．」

一瞬、オタクは言葉を詰まらせ、それから振り向いて言った。

「拙者、不可能を可能にする男で御座るからwww」

そう言って、オタクは部屋を後にした。

残された千冬は、懐を探ってタバコを取り出し、一本を口にくわえかけて止める。

「．．．ふん」

タバコを懐に戻した千冬は、オタクと同じ様に扉を開けた。

「如何するかな．．．」

自宅療養中の一夏は、久方ぶりの自室で一人唸る。

既に体調は万全と言える状態で、家中の掃除も洗濯も終わらせた一

夏は、暇を持って余している。

「何処かに出掛けるか・・・いや、それはちよつとな」

一応療養と言う名目で帰宅している以上、不用意な外出は憚られる。

かと言つて、やる事も無く唸るばかりで寝転がっているままなのも性には合わず。

一夏は何も無い休日の過ごし方に頭を悩ませ続けていた。

そんな時だった。

「ん？誰か来たか？」

家の玄関の辺りが俄に騒がしくなるのを感じると、直ぐにチャイムが鳴らされる。

「誰だ？」

直ぐに玄関へ降りた一夏が扉を開けると、直ぐにその正体を思い知る。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーンwww」

「小田！」

今時の若者には通じづらいかと思えばそうでもない言葉と共に、巨体の友人が一夏を尋ねてきた。

「暇を持って余している様で御座るなwww一夏氏www」

「あ、ああ・・・まあ、暇だったな・・・お前は大丈夫なのか？」

「？何がで御座るか？」

「・・・いや、それなら良いんだ」

一応オタクの身を按じた一夏に対して当の本人は何処吹く風で応じ、一夏はその様子に小さく笑った。

「で、何の用なんだ？」

「www一夏氏が暇していると思ひましてなwww拙者が遊びにwww誘おうとwww」

「・・・何か凄く久し振りな気がするけど・・・取り敢えずムカつくからその話し方は止めてくれ」

「wwwサーセンwww」

全く反省した様子が無いオタクに、一夏は諦めた様に溜息を吐い

て、それから軽く準備を済ませて家を出る。

携帯と財布と家の鍵をポケットに捻じ込んで、オタクに尋ねる。

「遊ぶって言っても・・・如何するんだ？」

「キャンプに行くで御座るwww」

「キャンプ?・・・でも道具は?」

「もう用意が出来ているで御座るwww」

心配そうな一夏に、オタクは玄関前に止めた車を指した。

「アレは・・・」

「www拙者の愛車で御座るwww」

太陽を浴びて輝く真つ赤なボディのその車は、天然の革張りのシートに高級感のあるステアリングが、惜しげも無く晒されたオープンカーで、国内では珍しい左ハンドルだ。

「コレって・・・キャデラック?」

「wwwキャディーはお好き?結構、ますます好きになりますよwww」

そう言つてオタクが運転席に乗り込むと、鍵を回してエンジンに火を入れる。

「どうです?余裕の音だ。馬力が違いますよ」

「・・・」

一夏は静かに助手席に乗り込んで車の中を見回す。

「良くこんな車があったな・・・」

「憧れの76年型エルドラドで御座るwww」

軽く半世紀も前の骨董品は、しかし、以外の程に軽快にエンジン音を響かせている。

「じゃあ行くで御座るよwww」

そう言つてオタクがアクセルを踏み込んだ次の瞬間、一夏は車では経験した事の無い急激なGを体感する。

「ちよつ!まつ!・・・!!」

「www(機嫌だあ!!コイツは!!)」

若干ハイになったオタクは、更にアクセルを踏み込んで加速させる。

「一体どうなって!!」

一夏は知らなかった。

このアメリカンヴェンテージカーが、外見だけなのを、エンジンから足回りまで丸々取り替えて、600馬力のV8エンジンを乗せた頭の悪い車だと。